

市原市^{ご りょう だい}五霊台遺跡

1 9 9 8

細 田 哲 平

東 日 本 建 設 株 式 会 社

財団法人 市原市文化財センター

序 文

市原市は、房総半島のほぼ中央にあって、恵まれた自然環境のもと、古来より人々の生活の舞台となっておりました。上総国分僧寺・尼寺や王賜銘鉄剣を出土した稲荷台一号墳をはじめとして、神門古墳群、姉崎古墳群等、全国的に著名な遺跡が数多くあります。

一方、現代の市原市は首都圏への利便性から、宅地造成等大小様々な開発が行われてきました。バブル経済の崩壊により、開発のスピードがペースダウンした観は拭えませんが、いずれは活発化してくると思います。

今回、ここに報告しますのは、民間事業者の宅地造成に先行して、平成8年度に発掘調査を実施した市の北西部の椎津地区にあります、五霊台遺跡の調査成果です。東京湾に面した台地上にあるこの遺跡からは、縄文土器をはじめとして、古墳時代、奈良・平安時代、中世と様々な時代の遺構や遺物が検出されました。椎津には市原市の代表的な中世城郭である椎津城跡がありますが、今回の調査では、城に伴う堀の一部が見つかっております。約3,000㎡という限られた範囲の調査でしたが、椎津の歴史、ひいては市原市の歴史を理解する上で貴重な成果と考えております。

本報告は、あくまで歴史を考えるための材料を提供するものです。多くの方々に活用していただき歴史のひとこまに加えていただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書の刊行に至るまで種々ご指導・ご協力いただいた千葉県教育委員会、市原市教育委員会、細田哲平氏、東日本建設株式会社にお礼申し上げますとともに、発掘調査や整理作業に携われた調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成10年3月

財団法人 市原市文化財センター

理事長 白 鳥 一 夫

例 言

1. 本書は、千葉県市原市椎津字五霊台662他の五霊台遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は細田哲平による宅地造成に先行して実施した、椎津662、663における第1次調査と、東日本建設株式会社による宅地造成に先行して実施した椎津660-1の一部と同660-4の一部における第2次調査（五霊台(B)遺跡）の調査成果を、市原市教育委員会の指導により、統合して報告するものである。
3. 調査は、各事業者の委託により、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもとに、財団法人 市原市文化財センターが行った。
4. 調査対象面積は、第1次調査が2,977㎡、第2次調査は162㎡である。
5. 発掘調査、整理作業は下記の通り行った。

第1次調査 平成8年7月8日～10月21日 担当 高橋 康男、北見一弘
第2次調査 平成9年1月9日～1月24日 担当 高橋 康男
整理・報告書刊行 平成9年1月25日～平成10年3月31日
6. 本書の執筆・編集は高橋が担当した。
7. 本書に使用した方位は座標北である。
8. 本書に掲載した挿図の縮尺は、住居跡は1/60、土坑は1/30、その他の遺構は適宜である。遺物は甕・甗等は1/4、その他は1/3を原則とした。住居平面図の1点鎖線は硬化面範囲である。
9. 本書に掲載した地図は国土地理院発行1/25,000地形図「姉崎」、市原市基本図「F-7」（1/2500）である。
10. 本書の作成にあたっては、多くの方々の協力を得た。遺物実測－鶴岡英一、牧野光隆、小橋健司、郡司真由美、遺物撮影－蜂屋孝之、自然遺物分析－忍澤成視。古墳時代前期の土器については、大村 直から多くの教示を得た。
11. 土器観察表および巻末の土錘計測値表において（ ）表記のものは現存値である。
12. 土器容量の計測は、完形あるいは残存の度合いが高い甕・壺等を適宜選択するにとどまった。計測方法については、実測図を基に高さ1cmの円柱を積み重ねて合算する方法をとった。

本文目次

序 文

例 言

1. 遺跡の位置と環境	1
2. 調査の概要	6
3. 調査した遺構と遺物	6
(1) 縄文時代	6
(2) 古墳時代前期	9
(3) 古 墳	47
(4) 円筒埴輪	58
(5) 古墳時代後期～平安時代	59
(6) 中 世	75
(7) その他の遺物	86
(8) 五霊台遺跡出土の自然遺物	88
4. まとめ	92

挿 図 目 次

第1図 五霊台遺跡位置図	2
第2図 五霊台遺跡と周辺の遺跡	4
第3図 五霊台遺跡周辺地形図	5
第4図 五霊台遺跡全体図	7
第5図 縄文土器実測図	9
第6図 055住居跡実測図	10
第7図 055住居跡出土土器実測図	11
第8図 055住居跡出土土器実測図(2)	12
第9図 055出土土錘	12
第10図 032住居跡実測図	14
第11図 032出土土器実測図	15
第12図 032出土土器拓影	16
第13図 032出土土錘・鉄製品	16
第14図 024・031住居跡実測図・024出土遺物実測図	18
第15図 031出土土器実測図	19
第16図 050住居跡実測図	19
第17図 002住居跡実測図	20
第18図 023住居跡実測図	21
第19図 023出土土器実測図	22

第20図	023出土土錘・鉄器・管玉	23
第21図	006住居跡実測図	24
第22図	017住居跡実測図	25
第23図	018住居跡実測図	26
第24図	015住居跡実測図	28
第25図	026住居跡実測図	29
第26図	026出土土錘	30
第27図	027・028住居跡実測図	30
第28図	047・057住居実測図	31
第29図	048住居跡実測図	32
第30図	053住居跡実測図	34
第31図	051住居跡実測図	35
第32図	019住居跡実測図	36
第33図	019出土遺物実測図	37
第34図	054住居跡実測図	38
第35図	021住居跡実測図	39
第36図	056住居跡実測図	40
第37図	029・030住居跡実測図	41
第38図	030出土土器実測図	42
第39図	030出土土錘・石器	42
第40図	004住居跡実測図	43
第41図	005住居跡実測図	43
第42図	005出土遺物実測図	44
第43図	020住居跡実測図	45
第44図	040住居跡実測図	45
第45図	040出土土器実測図	46
第46図	037住居跡実測図	46
第47図	060土坑実測図	46
第48図	060出土遺物実測図	46
第49図	036円墳周溝土層断面	47
第50図	033円墳・036円墳実測図	48
第51図	036出土遺物実測図	49
第52図	036出土土錘実測図	50
第53図	036出土鉄製品	50
第54図	001円墳実測図	51
第55図	001出土遺物実測図	52
第56図	001出土遺物実測図(2)	53
第57図	001出土土錘実測図	54

第58図	044円墳・058土坑実測図	55
第59図	045円墳実測図	56
第60図	044・058出土遺物実測図	57
第61図	045出土遺物実測図	57
第62図	円筒埴輪実測図	58
第63図	012住居跡実測図	60
第64図	012出土遺物実測図	61
第65図	012出土土器拓影	62
第66図	016住居跡実測図	63
第67図	003住居跡実測図	64
第68図	046住居跡実測図	66
第69図	014住居跡実測図	67
第70図	052住居跡実測図	68
第71図	052出土土錘・石製品	68
第72図	007出土遺物実測図	69
第73図	007・008住居跡実測図	70
第74図	009・010住居跡実測図	71
第75図	049住居跡実測図	72
第76図	011住居跡実測図	74
第77図	中世土壌墓実測図	75
第78図	025方形竪穴状遺構実測図	76
第79図	025出土土錘実測図	77
第80図	034溝・035溝実測図	78
第81図	034出土遺物実測図	79
第82図	034土層断面	80
第83図	034出土土錘実測図	80
第84図	035出土土錘	80
第85図	043ピット群実測図	81
第86図	059堀跡実測図	82
第87図	059土層断面	82
第88図	059出土遺物実測図	82
第89図	2次調査区（セ-240）全体図	83
第90図	240-001堀縦断模式図	83
第91図	240-001A-A'土層断面	84
第92図	2次調査区出土遺物	84
第93図	240-002土坑実測図	85
第94図	240-003・004土坑実測図	85
第95図	表採遺物実測図	87

第96図	表採遺物拓影	87
第97図	確認調査出土遺物	87
第98図	確認調査グリッド配置図	87

表 目 次

第1表	五霊台遺跡出土貝類一覧表	89
第2表	ハマグリ殻長計測表	89
第3表	土錘計測値一覧表	95

写真図版目次

図版1	1次調査区と椎津城主郭 1次調査区と2次調査区
図版2	023住居跡 024住居跡 031住居跡 030住居跡 029住居跡 002住居跡
図版3	026住居跡 027・028住居跡 021住居跡 020住居跡 019住居跡 015住居跡 018住居跡
図版4	002住居跡 003住居跡 055住居跡 051住居跡 032住居跡 050住居跡
図版5	054住居跡 047-057住居跡 056住居跡 048住居跡 060土坑 052・053住居跡 037住居跡 036円墳
図版6	036円墳 001円墳 045円墳 044円墳 012住居跡
図版7	003住居跡 016住居跡 007住居跡 052住居跡 014住居跡 046住居跡
図版8	049住居跡 009・010住居跡 011住居跡 025方形竪穴状遺構 039土墳墓 042土墳墓 038土墳墓 034溝 043ピット群
図版9	059堀跡 2次調査区
図版10	遺構出土遺物(1)(023、024)
図版11	遺構出土遺物(2)(032、053)
図版12	遺構出土遺物(3)(055)
図版13	遺構出土遺物(4)(004、005、050、051、056、054)
図版14	遺構出土遺物(5)(015、017、030、060、048)
図版15	遺構出土遺物(6)(018、047、028、006、026)
図版16	遺構出土遺物(7)(019、021、002)
図版17	遺構出土遺物(8)(012)
図版18	遺構出土遺物(9)(012、052、003、046)
図版19	遺構出土遺物(10)(014、007、049)
図版20	遺構出土遺物および表採遺物(001、036、034、025)
図版21	円筒埴輪・須恵器 中世陶器
図版22	玉類 鉄製品 手捏ね土器 鏡 土製品 石製品 石器 土錘
図版23	縄文土器 拓影遺物
図版24	拓影遺物 土師器

1. 遺跡の位置と環境（第1図～第3図）

五霊台遺跡は、市原市椎津字五霊台662地に所在する。東京湾を見下ろす、手のひら状にのびた、標高約30mの台地の付け根に近い部分にあたる。北方200mには、市原市の代表的な中世城郭の一つである、椎津城跡の主郭があり、本遺跡についても、椎津城跡の一角を占めると考えられている。ここでは、付近一帯の歴史的環境についておもに遺跡の分布等からふれておきたい。

市原市を南北に貫流する養老川の左岸はかつては上海上国と称され、のち律令期には、海上郡とされた。上海上国造の本貫とされるのが、姉崎地区であって、姉崎古墳群がその奥津城とされている。姉崎古墳群成立以前の状況について若干触れることから始める。姉崎、椎津地区における発掘調査の事例は、市の北部に比べて少ないとはいえる。それでも姉崎古墳群周辺では、数次にわたり発掘調査が実施されており、おぼろげながら動向が明らかになりつつある。発掘調査は、台地上と沖積地上で行われているが、最近の沖積地上の調査例からみると、現在も継続的に調査が実施されている姉崎妙経寺遺跡において、縄文時代中期の住居跡、貝塚が検出されている。旧海岸線に近いところから、漁労との関連で捉えられるであろう。住居跡の検出は一軒にとどまり集落の検出にはいたっていない。同じく上野合遺跡では、後期、晩期の土器が比較的まとまって出土しているが、遺構の検出はない。貝塚については、姉崎神社東方の姉崎台貝塚の存在が知られており、かつて発掘調査が実施されたことがあるが、詳細は不明である。

弥生時代に関しては台地上での調査例にほぼ限られる。姉崎東原遺跡において、中期宮ノ台式期の集落が認められている。また、五霊台遺跡の北東約500mに位置する椎津茶ノ木遺跡（以下では大字名を省略して単に「茶ノ木遺跡」とする）においても同時期の集落が検出されている。毛尻遺跡では弥生時代後期の方形周溝墓群が検出されており、同遺跡に隣接する六孫王原遺跡においても同時期の方形周溝墓群が検出されている。なお、環濠集落は検出されていない。

古墳時代については、釈迦山古墳、姉崎天神山古墳が前期古墳と位置付けられている。また、さきに触れた姉崎東原遺跡においては前方後方墳が検出されている。同時期の集落としては、六孫王原遺跡で比較的まとまった成果が得られている。姉崎古墳群の首長墓は、その後二子塚古墳、山王山古墳、原一号墳、鶴窪古墳、六孫王原古墳と断続的に築造されている。椎津地区においては、外郭古墳、稲荷山古墳の存在が知られている。外郭古墳については、椎津城築城に際して大きな改変を受けたと言われ、かつて周辺から出土した円筒埴輪は同古墳に伴うと見られている。稲荷山古墳は石枕を出土したと伝えられる。茶ノ木遺跡の調査に際し、周溝の一部が調査されたが詳細は不明である。妙経寺遺跡では、五世紀代から円墳群の形成が認められる。茶ノ木遺跡において、集落の営みがもっとも活発になるのは、この頃と考えられている。なお、ここまで姉崎地区と椎津地区を養老川下流域左岸として一律に述べてきたが、椎津川左岸と右岸という形で分けることも必要かもしれない。

律令時代、当地域は上総国海上郡に属するところとなった。海上郡衙の推定地は姉崎東方約5kmにある小折地区が、その地名より推定されているが、現在までのところ、数度にわたる発掘調査にもかかわらず、確証を得るには至っていない。この郡衙推定地の西方には、今富廃寺がある。山田寺系および上総国分寺と同様の瓦を出土するこの廃寺の実態については不明な点がいまだに多いが、養老川左岸においては数少ない瓦の出土地であり、郡衙との関係も含め実態を明らかにする必要がある。



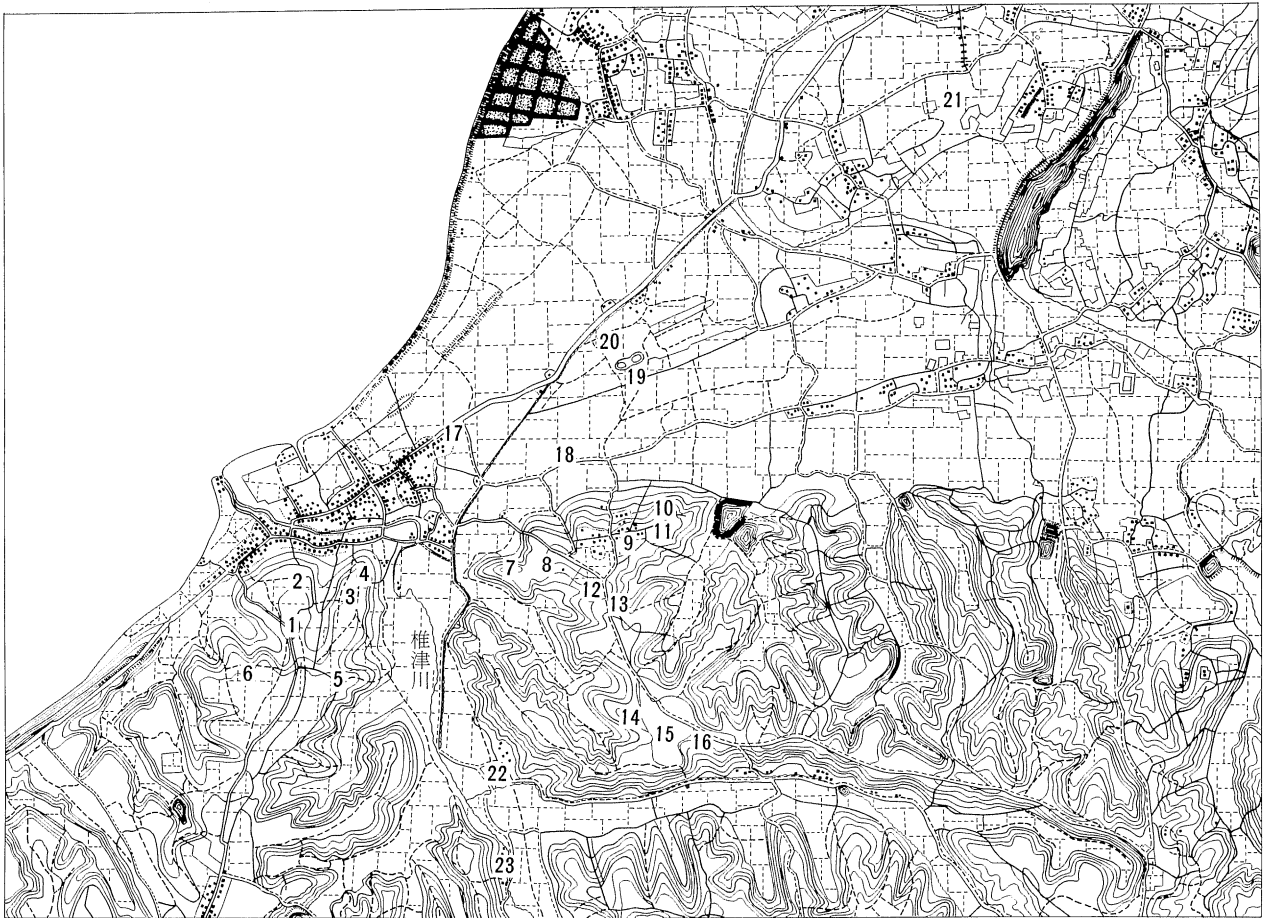
郡衙の推定地が小折であるからと言って、地域的拠点としての姉崎地区の地位が低下したと見るべきではなかろう。式内社の姉崎神社の成立の時期がどの程度遡るかは不明であり、かつて境内において実施された発掘調査においても鬼高期を中心とする住居跡の検出に止まっているが、のちに姉崎神社として顕現するような精神的核は連綿としてあったと考えておくべきであろう。遺跡の調査例は、奈良・平安時代に関しては概して希薄であるが、五霊台遺跡に隣接する椎津尾崎遺跡において、貝の投棄された平安時代の井戸跡が検出されており、茶ノ木遺跡では奈良時代の集落が検出されている。

中世には姉崎保が史料上に見えてくる。海上郡内では今富保の方が早く登場し、貞応元年（1222）の壬生家文書に見える。今富保の規模・場所は不明である。のちに壬生家を称する官務家小槻氏の国宗による開発とされている⁽¹⁾。国宗の父隆職の兄である師経が保延4年（1138）に上総介に補任されているところから、師経の段階で上総との接点を見出すのも可能である。姉崎と今富が平安時代から鎌倉時代にかけて開発されたことと、両地区にそれぞれ首長級の前方後円墳があることが偶然の一致かどうか、考える必要もあろう。古墳時代前期から平安時代末期と言えば数百年の開きがあり単純に結びつくものではないことはもちろんであるが、核となる部分が顕在化したり逆に潜在化したりといった長期的な反復運動のようなことを考える必要があるかもしれない。個別細分化する研究動向の中であってそれは逆行するものであるが、かえって必要な視点とも思われる。

ここで中世全般について概説することはできないので、椎津に絞って触れておきたい。地名としての椎津の初見は建武2年（1334）の三浦高継寄進状に「眞野郡椎津郷」とある。三浦高継から椎津郷の田一町が鶴岡八幡宮に寄進されている。のちに椎津を本貫地とする在地領主が椎津氏を名乗るようになったと考えられるが、これは「此外不入續郷椎津知行云々」という一文を含む文書にみられる。応永年間前後と考えられる文書中に見える一文であるが、記述上からは別筆のようにも見え、応永期の事象を表現したものかどうかの検討が必要ではないかと思われる。椎津城が史料に見えるのは、永正16（1519）年に足利高基から家臣にあてた感状に「椎津要害事」とあるのが最初である。その後は約40年後の永禄3（1560）年の北条氏政書状に「椎津大普請」とあり、天正中期以降と見られる北条氏書状には「椎津当番高城」とある。これら史料から永正年間には古河公方に対抗する勢力の一つの拠点であったことが知られ、永禄以降は後北条氏の支配下にあったことがわかる。ただし、領域支配という天では、半手所領の書き上げの中に椎津が見えることや、千葉胤富宛書状に里美義弘が椎津へ退散したとの記述があることから領域としての椎津は不安定な状況にあったと言えよう。支配の安定性という点では、「不入＝相定」とされた八郷の方が優っていたと思われる。

なお、この八郷とは、「泉之」「嶋之」「町田」「津比地」「引田」「麻井」「梶路」「風戸」であって現在の大字とほとんど変わるところはない⁽²⁾。中世文書に見られる地名が、現在比定し難いものが多いのに比べると、既に近世的枠組が形成されていた様子もうかがえる。

次頁には、陸軍迅速図を基に、周辺の遺跡をプロットしたものを掲載した。迅速図作成時の景観として、古代・中世にそのままあてはまるものではないだろうが、現時点よりも幾許かは、往時の景観を留めているのではないかと考えられる。第1図と比較すると、この約百年間における開発の様を見せつけられるようである。なお、図中22の「国光」は、「馬野郡富益郷目録」等富益郷関連の文書に見える「くにみつ」あるいは「国光」と言う名田の比定地であり、小字名として残った数少ない一例である。同図6とした二才山遺跡は、小字名二才山を冠したものであるが、同じく富益郷関連の文書に

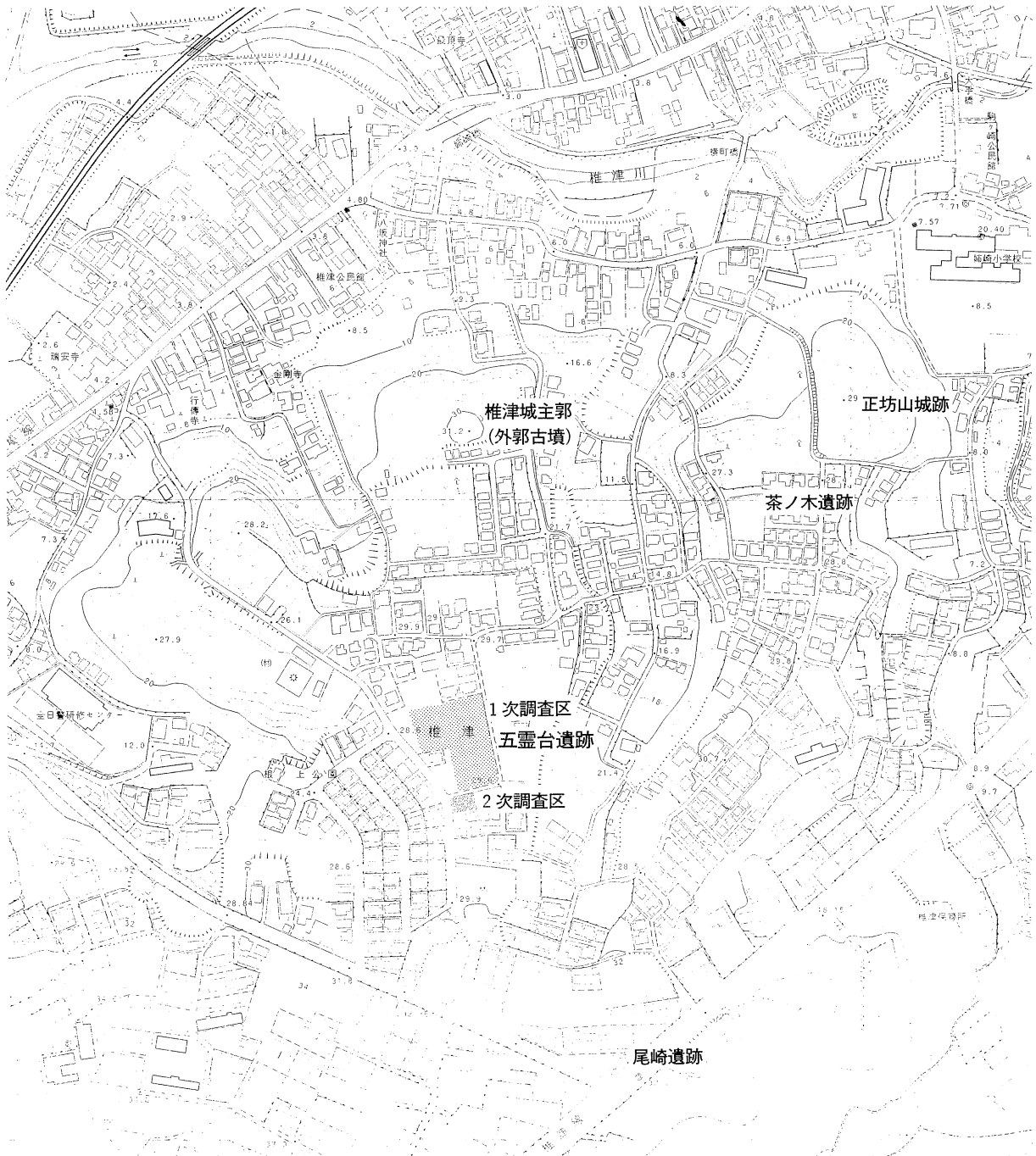


1. 五霊台遺跡 2. 外郭古墳 3. 茶ノ木遺跡・稲荷山古墳 4. 正坊山城跡 5. 尾崎遺跡 6. 二才山遺跡
 7. 山王山古墳 8. 釈迦山古墳・姉崎神社 9. 台貝塚 10. 姉崎天神山古墳 11. 姉崎東原遺跡 12. 鶴窪古墳
 13. 原一号墳 14. 毛尻遺跡 15. 六孫王原遺跡 16. 六孫王原古墳 17. 妙経寺遺跡 18. 棗塚遺跡
 19. 姉崎二子塚古墳 20. 上野合遺跡 21. 島穴神社 22. 「国光」 23. 「堀ノ内」

第2図 五霊台遺跡と周辺の遺跡(約1/3.3万, 陸軍迅速図を一部改変)

見える「二才むま」の名残かもしれない。国光の南方には堀ノ内という小字がある。城館の存在をうかがわせる地名であるのでプロットした。城館との関連性という点では、五霊台遺跡の南方約3kmの、現在は桜台団地となっている地域には、「二重堀」「三ノ輪台」という小字がややまとまった形で存在する。先に椎津の地名について触れたが、現在の大字椎津以外にも椎津とつく小字名は散見される。図示はしていないが、深城地域には「椎津山」、不入斗には「椎津道」がある。これら椎津が人名なのか、地名なのかは定かではないが、小字名に冠される名称としての椎津の特異性を見ることができる。少なくとも市内の他の大字名は、この椎津のように散見されない。市北部に残る「椎津田」(郡本地区)「椎津貝」(能満地区)も、同列に論じ得るか、距離的な隔たりが大きいので、この点については慎重にならざるを得ないが、もし同様のものであるなら、その広がりにはさらに大きいものとなる。

椎津地区の歴史については、遺跡の調査事例も少なく、断片的にしか捉えられていないのが現状である。上記地名の拡散の特異性等含めて、他方面からのアプローチの必要性を感じる。なお、遺跡にかかる文献については紙幅の都合上割愛した。



第3図 五霊台遺跡周辺地形図 (1/5,000)

(1) 小槻氏については、以下の文献によるところが大きい。

「太政官厨家について」「官務家小槻氏の成立とその性格」2編共に橋本義彦『平安貴族社会の研究』吉川弘文館 1976

(2) 「泉之郷」以外の7郷は現在の大字との対比が可能である。「嶋之」＝「島野」、「町田」＝「町田」、「津比地」＝「甘五里」、「引田」＝「引田」、「麻井」＝「浅井小向」、「梶路」＝「神代」、「風戸」＝「風戸」。風戸を除く6郷は、養老川下流左岸の沖積地に比較的まとまっているのを見ることができる。大字の位置については第1図を参照されたい。なお同図中央西寄りに「泉台」とあるが、これは最近になって造成された住宅地に対して新たに付与されたものであって「泉之郷」との関連はない。

2. 調査の概要（第4図）

今回の調査は、例言の通り二度に分けて実施されたものである。椎津662,663の二筆〔A地点とする〕については、細田哲平氏による宅地造成に先行して、市内遺跡発掘調査による確認調査の結果を受け、対象範囲全面について、発掘調査を実施したもので、平成8年7月より10月まで行った。現道を挟んで南側の隣接地〔五霊台(B)遺跡〕については、東日本建設株式会社による宅地造成に先行して、市原市教育委員会ふるさと文化課による試掘の結果を受けて、平成9年1月9日より同月24日まで本調査を実施した。

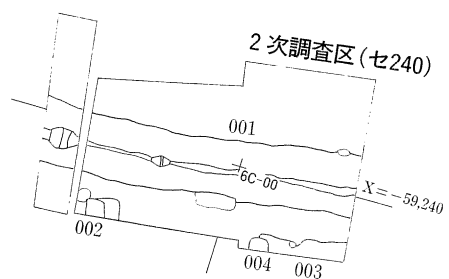
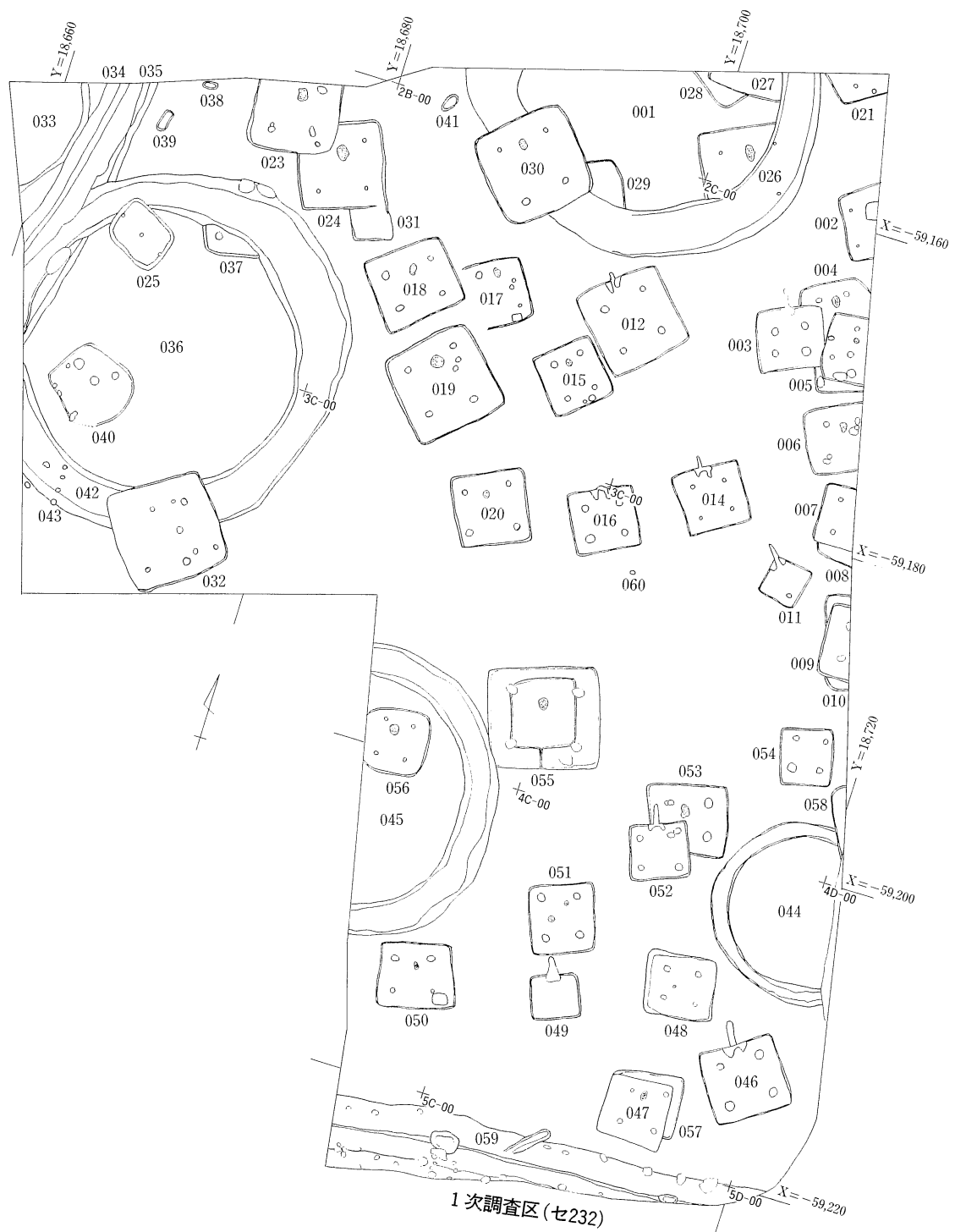
調査区の設定については、A地点では事業者の協力により公共座標系に20mピッチを原則として、杭を打設し大グリッドを設定し、細部の方眼杭については、必要に応じて調査側で設定した。B地点については、A地点の成果を延長して調査側で設定した。遺構番号については、その性格に関係なく着手順に番号をつけた。整理については、通常の方法によった。

調査の結果、古墳時代前期の住居跡30軒、古墳5基、古墳時代後期以降の住居跡12軒、中世の土壇墓4基、方形竪穴状遺構1基、溝2条、椎津城に付随すると考えられる堀跡2条などを検出した。これらの遺構に伴う遺物以外に、遺構に伴わない遺物の出土がある。縄文土器・弥生土器や埴輪などである。調査開始時点において、当地は畑であったが、開墾や椎津城の築城や廃城の際の土砂の大量の移動が伺える。古墳の周溝においては、遺物の混在が激しく、本来的な意味で古墳に伴う遺物の認定には、困難な面が多かった。周辺からの土の移動のみならず、周溝の埋没過程において、土器の廃棄場所として機能したものと考えられる。このような出土遺物については、各遺構の時期を示すと言うよりは、遺跡全体の性格の一端を示すものとして扱い、比較的残存状況の良好なものあるいは特徴的なものに限って掲載した。

3. 調査した遺構と遺物

(1) 縄文時代（第5図、図版23）

今回の調査においては、縄文時代の遺構は検出されなかったが、図示したような縄文土器片が出土している。1は、口縁直下に方向の異なる二条の縦位沈線が巡る。上段の沈線はゆるく右に弧を描き、下段のものはそれよりさらにゆるく左に弧を描く。沈線の間隔は、下段の方が密である。さらに、その下に一条浅く縦位の撚り糸文的な部分も認められるが不明瞭である。口唇部には浅い刻みが認められる。田戸上層式の新しい段階あるいは子母口式と考えられる。2から5は撚り糸文の認められるものである。いずれも単軸絡条体第一類による施文である。施文は全体にまばらな感がある。2から4の3点は、右撚り一段の縄Rを使用しているのに対し、5のみは左撚り一段の縄を使用している。3・5については撚り糸間約4mm、2は10mm、4は12mmである。いずれも早期撚り糸文系の土器の一部と考えられる。6は、浅く縄文を施したものである。約10mm間隔で条が認められる。条を構成する粒子は概して浅い。単節LRによる。早期撚り糸文に伴うものかもしれない。7から20は前期後半浮島式である。今回の資料からは文様構成全体を復元することはできなかった。7・8は口縁部で、7では内傾する口縁部に斜位の条線を巡らせている。この条線は三条で一単位であり、長・中・短を反復し



0 10m

第4図 五霊台遺跡全体図 (1/400)

ている。このうち、中・短の二条は互いに接してしまう箇所が多く、一条に見えてしまう部分がある。この条線下には変形爪形文が一条巡り、その下位には三角形の刺突が一行認められる。変形爪形文下に三角の刺突が認められるものとして他に12と14がある。8の口縁部も7と同様な三条一単位の条線が認められる。7に比べると中・短の長さの差がほとんどなく、かつ、重複した位置に施文されており、結果的に長く細い条線と短く太い条線の二条が一単位となって巡っているように見える。条線下位には、変形爪形文が二条巡っている。変形爪形文はその端部は深くなっている。9は、胴部上半と思われる部分である。上下の判別は難しいが、ここでは変形爪形文がC字を呈する場合が多いという傾向をふまえておきたい。この土器では上位に一条の変形爪形文、中位に二条を1単位とする平行沈線による横位および菱形の施文がある。さらに、この菱形の沈線区画内や沈線に重複して、刺突文が加えられている。この刺突の原体は不明である。下位には変形爪形文が二条巡っている。15は二条の変形爪形文が施されるものであるが、とくに下位の施文は不明瞭である。10・11は変形爪形文の下位に波状貝殻文を施すものである。いずれも施文の際に支点となった端部が深くなっている。11ではわずかに三角形の刺突が認められる。波状貝殻文については不鮮明かもしれないが、細かい条線が内部に走っている。10では波状は不明瞭であるが、部分的にギザギザとなる部分があり、サルボウのように放射肋のある貝殻によることが認められる。なお、11の変形爪形文では原体に付随する微小な条線が施文の際の原体の移動に伴って小さな波状を呈しているのに対し、10ではそのような痕跡は認められず、施文の端部のみ残して中央部を撫で消しているように見える。微小な条線の存在は施文具が竹のような繊維質であることをうかがわせる。10・11を見る限り変形爪形文の施文後に整形するものと整形しないものがあることがわかる。7は整形していない部類に属する。ただし、同一個体内における整形の不徹底による可能性も否定できない。他の物については不明瞭な12を除き、整形されているようである。16～20はいずれも胴部破片であり、不明瞭な部分も多いが、波状貝殻文が施されている。21は、中期初頭下小野式と考えられるものである。無文の胴部に2種類の結節文が施される。比較的太いしっかりした結節文にほぼ接するように、やや細く浅い結節文が伴っている。この太い結節文と浅い結節文は別個に施文されたのではなく、同一原体の回転により施文されたと考えられる。太い方の結節文は、左撚り0段の縄を左巻きに結んだもの、細い方の結節文は右撚り0段の縄を右巻きに結んだものによって作られている。いずれも、撚りの方向に逆らうように結び目をつくることとなり、撚りが弱くなっている。このような一見異なる原体が同一原体上にある。具体的な原体の確定には及ばなかった。なお、以下に下小野式の設定にかかる報文の一部を掲げておく。「下小野貝塚土器第二类D 本類も無紋地に綾絡紋を縦横あるいは不規則に施文している。但し、本類においては、縄紋原体が撚合せた縄ではなくただ繊維束を右ないし左に撚ったものを結んで回転押捺しているのが特徴である。」本例は、繊維束による結節文であることで共通するが、上記の原体の複雑さは、本例個別の属性である。類例についてはその有無を含め、十分な検討は行っていない。

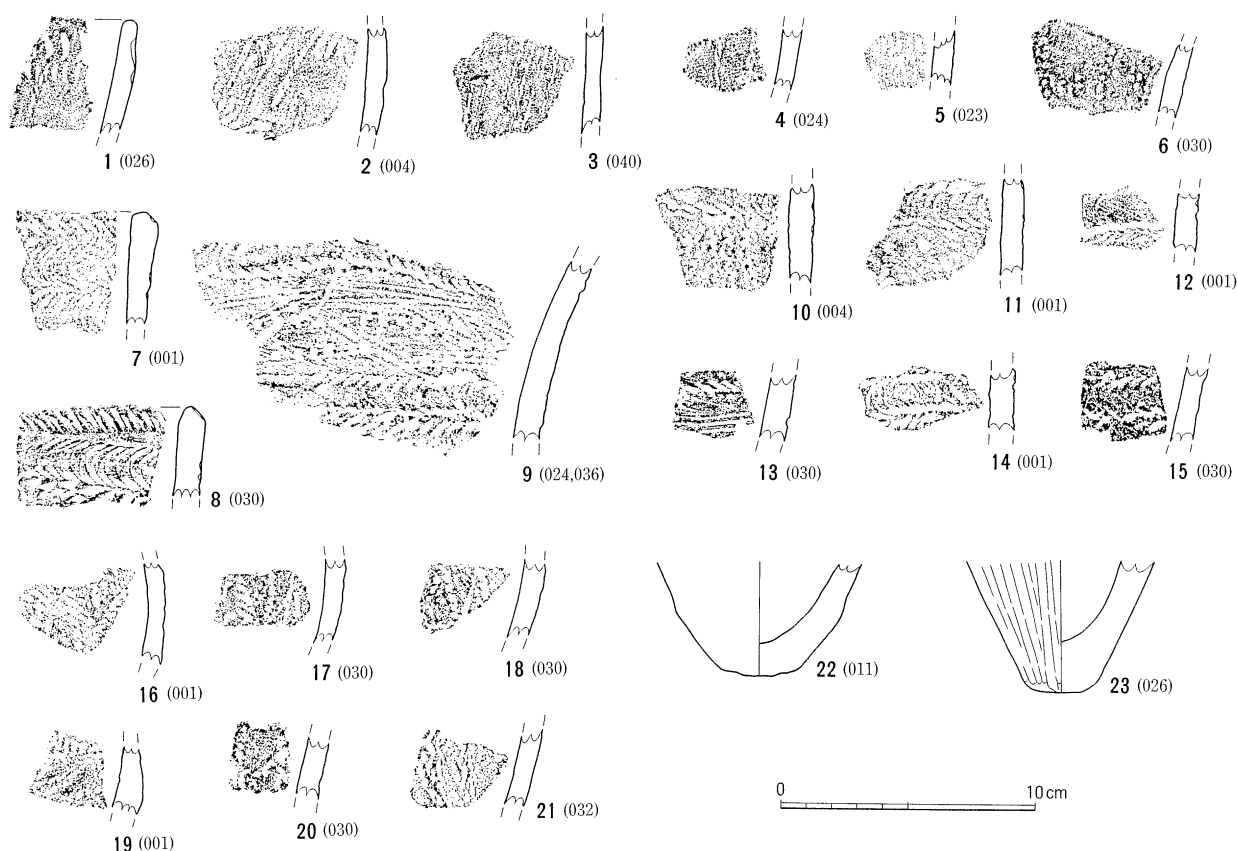
なお、本項については以下の文献によるところが多い。

上守秀明他『房総考古学ライブラリー2 縄文時代〔1〕』財団法人 千葉県文化財センター 1985

高野博光他『西の台〔第2次〕－船橋市西の台遺跡発掘調査報告書－』船橋市遺跡調査会 1985

西村正衛『石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心として－』早稲田大学出版会 1984

11 千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚



第5図 縄文土器実測図(カッコ内は遺構番号)

14 千葉県香取郡小見川町木之内明神貝塚

15 千葉県香取郡小見川町阿玉台貝塚

篠遠喜彦・江森正義・岡田茂弘「千葉県下小野貝塚発掘報告」『考古学雑誌第36巻第3号』1936

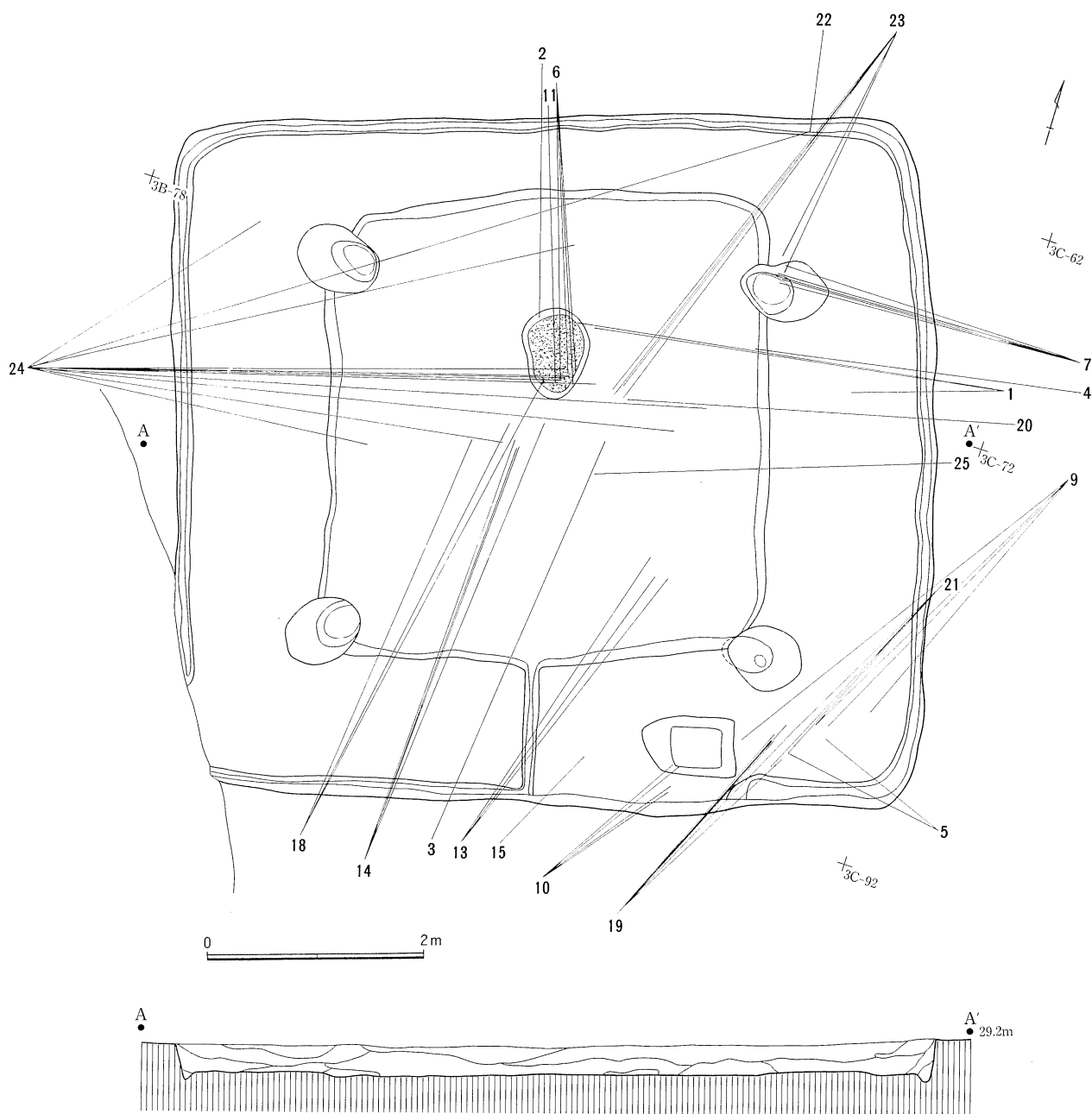
松浦史浩「浮島式土器の施文技法について」『東京大学文学部 考古学研究室研究紀要 第13号』1995

(2) 古墳時代前期

今回調査した遺構の過半数を占める。この時期の住居跡は全体で30軒を数える。大半が床面中央よりやや北に寄った箇所には炉を持ち、4箇所の支柱穴を伴う。貯蔵穴を伴うものはわずかである。なお、ここで古墳時代前期としたものは、ほぼ上記の特徴を有する住居跡を一括して扱ったもので、後のカマドを持つ住居跡群と分離したものである。土器型式では五領式から和泉式にかけての時期となるが、記述に際しては特に分離していない。ただし、古相と思われるものから配列するよう心掛けた。

遺物の掲載については、遺構出土遺物のうち図示しうるものは極力掲載するようにしたが、紙幅の都合上掲載できなかったものもある。また、複数時期にわたると思われる遺物を出土している遺構が多く存在することは、本遺跡においても例外ではない。明らかに時期を異にする遺物については、後段にまとめて扱ったが、不徹底な部分がある。また、時期差が微妙で分離しえなかった遺物については、同一の挿図中に掲載してある。

なお、当該期におけるいわゆる外来系の土器については活発な議論のあるところであり、本遺跡においても複数の遺構から出土している。これらの遺物については、掲載にあたってはやや優先した部

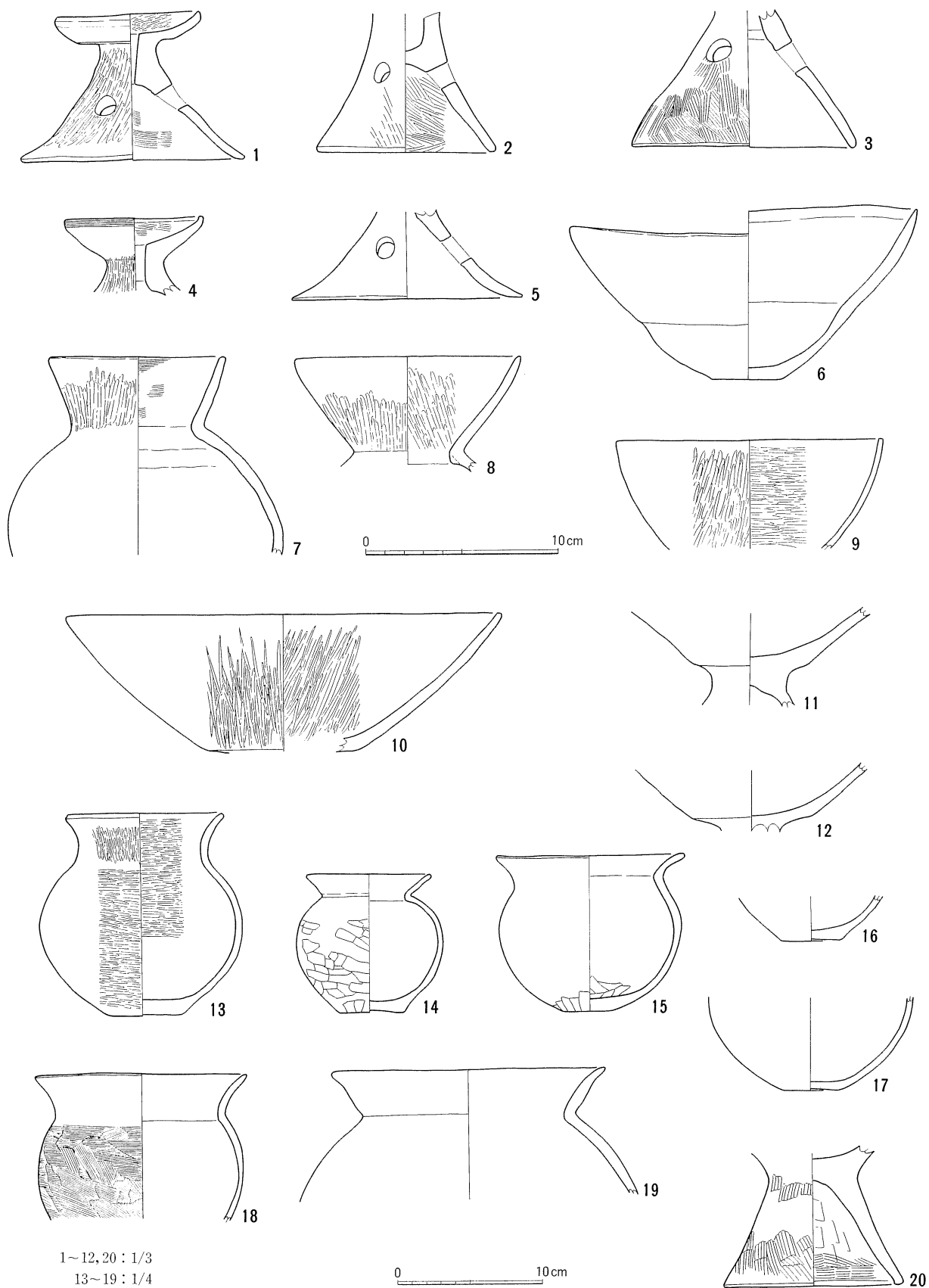


第 6 図 055住居跡実測図

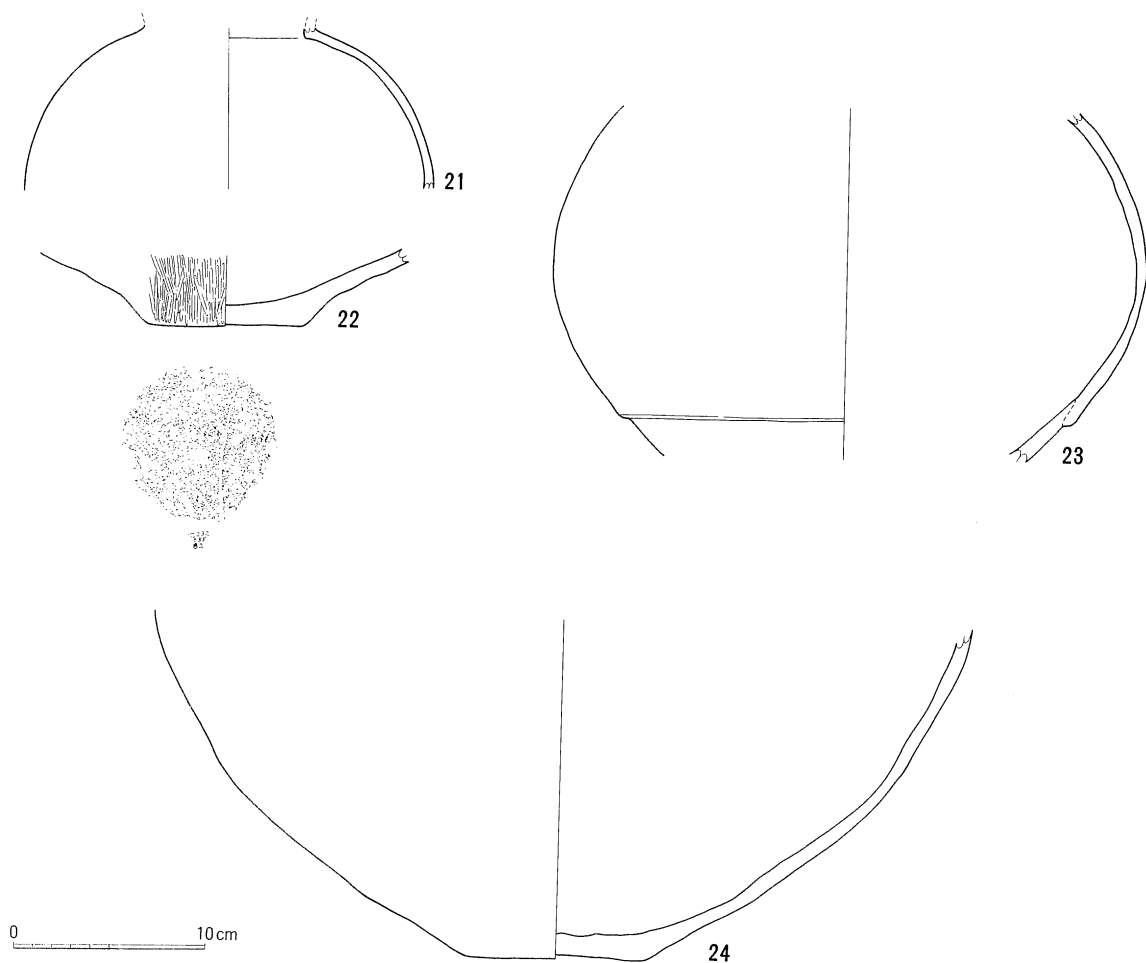
分があるが、あくまで今後の議論の材料を提供したにすぎないのであって、特別の意味を持たせることを意図したものではない。分布論上新たな一点を与えるのみである。

055住居跡（第 6 図～第 9 図、図版 4、12）

調査区のほぼ中央で検出された。今回調査したなかでは最も大きい住居跡である。東西 7 m、南北 6.6m と、やや東西に長い方形を呈する。南西端部分は 045円墳周溝により切られている。柱穴は 4 箇所検出され、東西間 3.9m、南北間 3.3m である。また、この柱穴を境として内側部分が約 10cm 低くなっている。貯蔵穴は南辺東寄りの部分で検出された。壁周溝は南辺の中央から東にかけての部分で一部

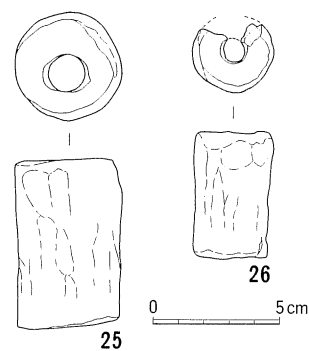


第7図 055住居跡出土土器実測図



第8図 055住居跡出土土器実測図(2)

途切れるがほぼ全周し、南辺中央部から住居の中央に向かって屈曲し、上記段差部分に達している。規模の大きさに比例して掘り込みが深かったことに起因して、比較的多くの遺物を出土している。1～5は小型器台であるが、図化し得なかったものが最低3個体ある。6はやや大型の鉢である。頸部は大きく開いていおり、内面に稜を明瞭にのこしている。23は壺の胴部であるが、下半に段を形成している。24は大型の壺の胴部である。焼成が全体に甘い感がある。



第9図 055出土土錘

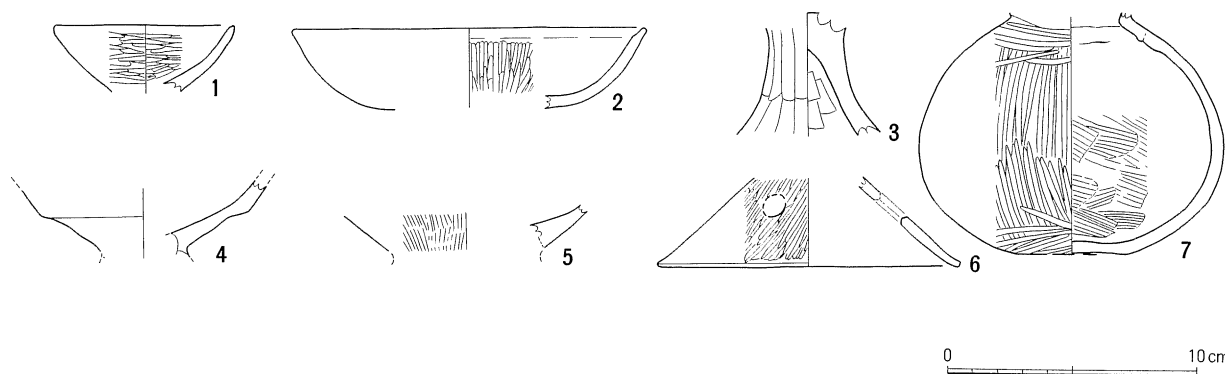
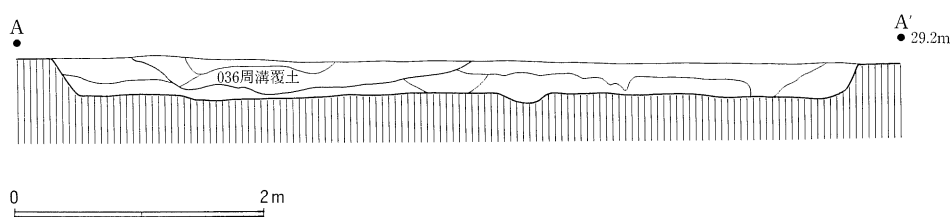
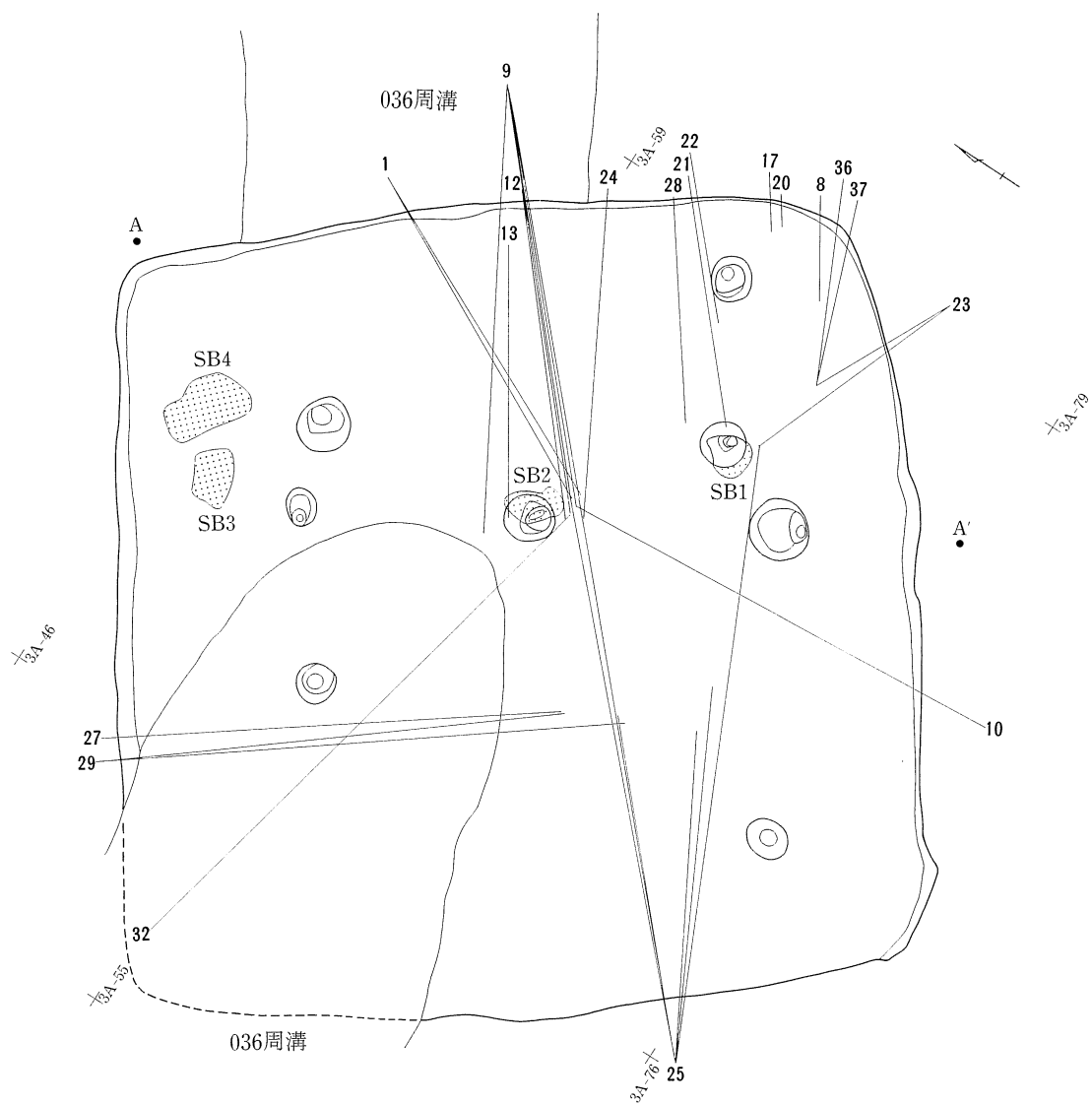
055住居跡

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	器台	7.2	11.0	7.6	ミガキ ナデ	斜位のミガキ 脚内部はハケのちナデ	透かし穴3箇所
2	土師器	高坏		8.9	(7.2)	ハケのちナデ 脚端部面取り	脚内部はナデ・ハケ	透かし穴3箇所 ほぞ部欠落
3	土師器	器台		11.4	(7.1)	ナデ ハケ	ケズリ ナデ	透かし穴3箇所 やや内湾

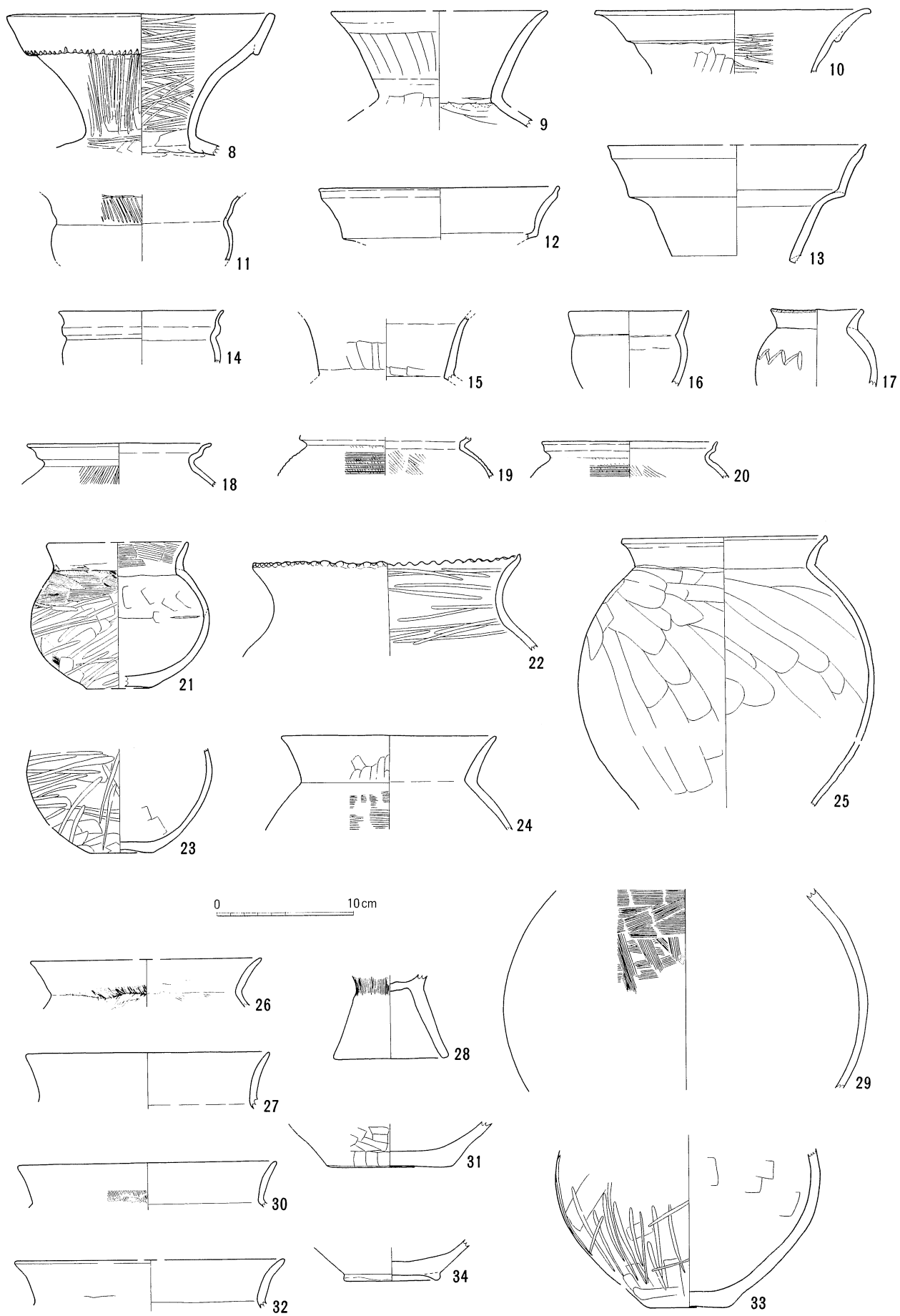
番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
4	土師器	器台	7.1		(4.1)	横位のナデ ナデ ミガキ	ハケのちナデ 脚内部ナデ	
5	土師器	器台		11.5	(4.5)	縦位のケズリ・ナデ	ナデ 横位のナデ	
6	土師器	鉢	18.0	3.6	9.1	口縁端面面取り ナデ	ナデ 屈曲部に弱い稜線	全体に歪んでいる
7	土師器	壺	8.8		(10.3)	縦位のミガキ 部分的にハケ ナデ	横位のハケのちミガキ	
8	土師器	壺	11.7		(6.0)	ナデ 縦位のミガキ・ナデ	ナデ	やや内湾
9	土師器	壺	13.7		5.7	縦位のミガキ	横位のミガキ	口唇部部分的に 平坦面あり
10	土師器	高坏	22.3		(7.2)	横位のナデ 縦位のミガキ 口縁端面面取り	やや右傾した縦位のミガキ	東海系?
11	土師器	高坏			(5.2)	斜位のナデ 横位のナデ	ナデ	
12	土師器	高坏			(3.5)	ナデ	ナデ	
13	土師器	壺	10.8	5.3	14.2	口縁端面面取り 縦位のミガキ 横位のミガキ	横位のミガキ	1203cc
14	土師器	小型壺	8.5	4.2	9.8	横位のナデ ケズリ・ナデ	横位のナデ	
15	土師器	甕	13.0	3.4	10.9	口縁端面面取り 横位のナデ ケズリ	横位のナデ ケズリ 稜線は 鈍い	
16	土師器	小型壺		4.0	(3.0)	粗いナデ	粗いナデ	
17	土師器	甕		3.9	(6.5)	ナデ	ナデ	
18	土師器	甕	14.6		(10.1)	口縁端部やや雑な面取り 横 位のナデ・ハケ	横位のナデ	
19	土師器	甕	19.0		(9.0)	横位のナデ	横位のナデ	
20	土師器	台付甕		9.2	(7.2)	ハケ ナデ	ナデ 脚内部ケズリ・ハケ	
21	土師器	壺			(18.6)	粗いナデ	横位のナデ ナデ	
22	土師器	壺		8.1	(3.7)	粗いミガキ 光沢あり	ナデ	木の葉底
23	土師器	甕			(18.6)	ナデ 胴下半に輪積み痕	ナデ	径はやや不安定 (10100cc)
24	土師器	壺		3.5	(18.0)	ナデ	ナデ 器表荒れており整形全 体に不明瞭	(12464cc)

032住居跡（第10図～第13図、図版4、11）

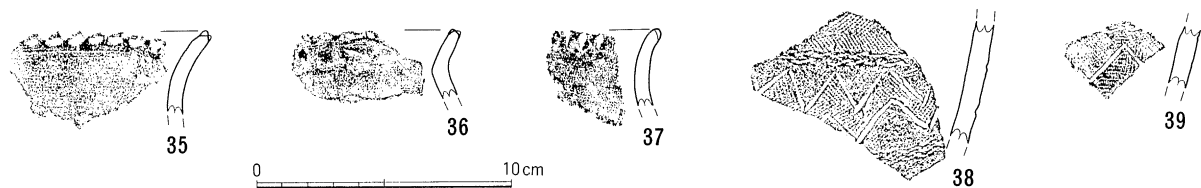
調査区中央よりやや北西に寄った部分で検出された。036円墳の周溝が住居跡の東西を横断する形で通っている。南北6.3m、東西6.7mの長方形を呈する。炉は確認されず、柱穴と思われるピットの配置も不規則であった。この住居跡からは比較的多くの遺物が出土している。8の壺の頸部は、床直上から倒立した状態で出土したものである。25は、確認調査時に出土したものである。18～20はS字状口縁の甕である。18は縦位のハケだけをほどこしているが、19・20については横位の条線が加えられている。いずれも器壁が薄く、胎土中に雲母が目立ち、焼成がやや不良である点で共通する。また、18については白味が強いのにに対し、19・20暗灰色である点で異なる。S字甕の分類に即せば、18はD類、19・20はB類あるいはC類であろう。〔B類とC類の相違点について、分類を提示した文献（赤塚次郎『廻間遺跡』1990）の表記からは峻別し難い。また、実物との比較検討も行っていない。〕全体的に今回の調査で出土した古墳時代前期の土器総体からみると古相を示している感がある。S字甕については編年上位置の異なるものが出土していることは、遺物の一括性が不安定であることを示すが、いずれも覆土からの出土であり、それらを分離することは不可能であった。



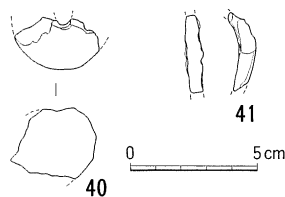
第10図 032住居跡実測図



第11图 032出土土器实测图



第12図 032出土土器拓影



第13図 032出土土器・鉄製品

35～39に示した破片資料のうち、35、36甕の口唇部は、内外両方向からの押捺が加えられているのに対し、37では外面からのみである。38、39は壺の同部で同一固体の可能性はある。38では羽状縄文に接して2条の結節文、その下に山形文、2条の結節文と続く。山形文内の縄文は、羽状縄文がベースである。38・39共に無文部は赤彩されている。40は球状の土鍾。41は釘と思われる鉄製品である。

032住居跡

番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	高坏	6.8		(2.7)	横位のミガキ	横位のミガキ	
2	土師器	高坏	13.8		(3.2)	横位のナデ 整形不明瞭 横位のナデのち縦位のミガキ	横位のナデのち縦位のミガキ	
3	土師器	器台			(4.9)	縦位のケズリ 赤彩	赤彩 脚内部横位のケズリ	
4	土師器	高坏			(2.8)	整形不明瞭	整形不明瞭	内外面とも赤彩
5	土師器	台付甕			(1.5)	ハケ	ナデ	
6	土師器	器台		11.4	(3.6)	斜位のミガキ 脚端部面取り	ナデ	透かし穴2箇所 あり本来3箇所
7	土師器	壺		4.2	(9.4)	横位のミガキ 縦位の密なミガキ 横位のミガキ 横位のミガキ	横位のナデ 横位のハケ	
8	土師器	壺	18.9		(10.5)	横位のナデ ケズリのち縦位のミガキ ケズリのち横位のミガキ	横位のミガキ 頸部まで赤彩 ケズリ ナデ	
9	土師器	壺	16.0		(8.7)	横位のナデ 縦位のナデ 横位のナデ	横位のナデ 指頭痕ナデ	
10	土師器	壺	20.1		(4.7)	横位のナデ 縦位のケズリのちナデ	横位のナデ 横位の弱いミガキ	
11	土師器	壺			(4.9)	横位のミガキ 縦位のミガキ 横位のナデ	横位のナデ	径はやや不安定 器壁は全体に薄い
12	土師器	壺	17.5		(3.9)	横位のナデ	横位のナデ	
13	土師器	壺	19.0		(8.2)	横位のナデ	横位のナデ	12と同一の可能性あり
14	土師器	壺	12.0		(4.0)	横位のナデ	横位のナデ	
15	土師器	壺			(4.5)	横位の粗いナデ 横位のケズリ 横位のナデ	横位の粗いナデ 横位のケズリ	作りは全体に雑な感あり
16	土師器	小型壺	8.8		(5.7)	横位のナデ 浅い沈線 丁寧なナデ	横位のナデ ケズリのちナデ	
17	土師器	小型壺	5.6		(5.8)	口唇部に刻み 頸部の輪積み痕明瞭ナデ へらによる山形文は全周しない	ナデ	
18	土師器	甕	13.3		(3.0)	横位のナデ ハケ	横位のナデ ハケ	S字甕
19	土師器	甕			(2.8)	横位のナデ ハケ	横位のナデ ハケ	S字甕
20	土師器	甕	12.8		(2.7)	横位のナデ ハケのち沈線のちナデ	横位のナデ ハケ	19と同一の可能性あり S字甕
21	土師器	甕	10.2	5.0	10.8	横位のハケのち横位のナデ 横位のハケのち斜位のケズリ	横位のハケのち横位のナデ	837cc
22	土師器	甕	19.8		(7.2)	ナデ	横位の粗いミガキ	

番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
23	土師器	甕		4.5	(7.8)	ケズリのち粗いミガキケズリ	ナデ	
24	土師器	甕	15.6		(7.0)	横位のナデ 横位のナデのち縦位の強いナデ 横位のナデ	横位のナデ 稜線は弱い ナデ	
25	土師器	甕	14.9		(20.1)	横位のナデ 頸部稜線明瞭ケズリ	横位のナデ 斜位のナデ	(4980cc)
26	土師器	甕	17.0		(3.7)	ハケのち口縁部のみ横位のナデ	ハケのち横位のナデハケ	
27	土師器	甕	17.8		(4.2)	横位のナデ	横位のナデ 強いナデ	器表緻密
28	土師器	台付甕		8.0	(6.2)	ハケ 横位のナデ	ナデ 脚内部粗いナデ	
29	土師器	甕			(15.0)	横位のハケ 一部縦位のハケナデ	横位のナデ 強いナデ	傾き・径ともにやや不安定
30	土師器	甕	19.0		(3.5)	横位のナデ 斜位のハケ	横位のナデ 不整方向の弱いミガキ 稜線明瞭 強いナデ	
31	土師器	甕		7.5	(3.3)	横位のケズリ 円周方向のケズリ 不整方向のケズリ	ナデ 内面亀裂多い	
32	土師器	甕	19.7		(3.7)	横位のナデ	横位のナデ	
33	土師器	甕		5.5	(11.7)	ケズリのちミガキ	ナデ	
34	山茶碗	碗		6.6	(2.6)	ヨコナデ 高台の貼りつけやや雑、粗痕あり。切離し痕不明瞭	ヨコナデ	「荒肌手」?

024・031住居跡（第14・15図、図版2、10）

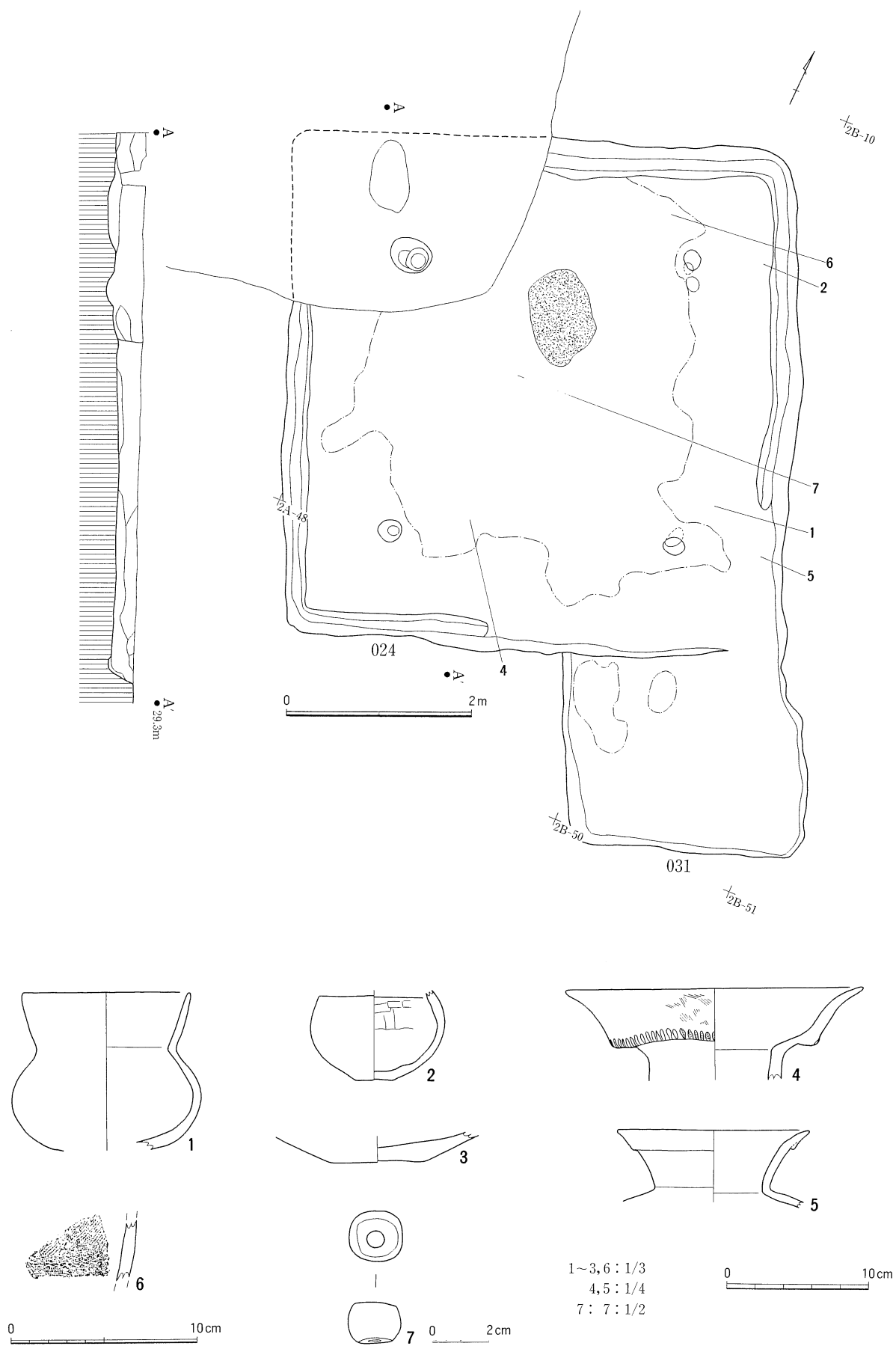
調査区北縁やや西寄りの部分で検出された。北西隅側は023住居跡と切り合い関係がある。一辺約5.4mのほぼ正方形を呈し、中央やや北寄りの部分に炉を持つ。壁周溝は南西隅付近で途切れ、全周しない。南辺を共有するように東西約2.5m、南北約2mの浅い竪穴状の遺構が接続している。この部分を031住居跡としてあつかった。この031では貼り床状の硬化面が認められ、床面の高さも024とほぼ等しいところから、同住居跡に付属する遺構である可能性がある。024の支柱穴は、4箇所検出されており、柱穴間の距離はいずれも約3mである。031では柱穴は確認できなかった。第14図7は024から出土したヒスイ製の玉である。長さ12mm、幅18mm、孔径3mmである。中央部でややふくらみを持ち、上下の平坦部は平行ではない。孔の方から見た形は円というよりも隅丸方形といった感じである。6の破片資料は壺の胴部であろう。比較的幅広い帯縄文下に多条の結節文が接している。

024住居跡

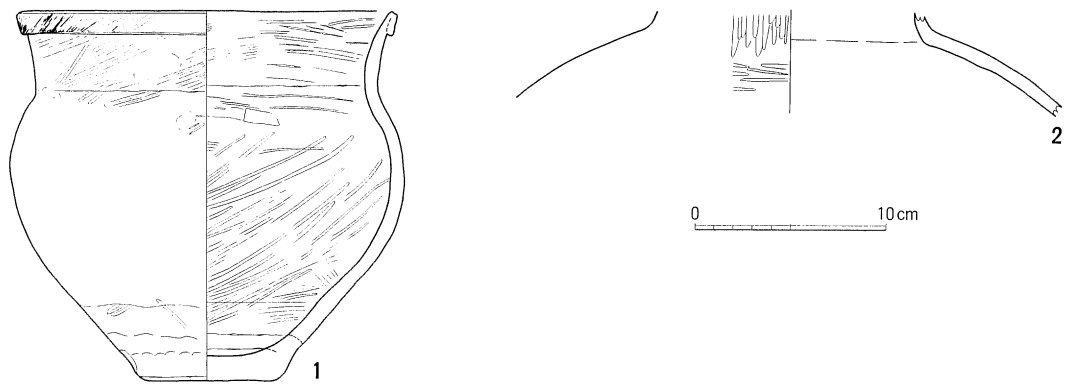
番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	埴	8.7		(8.4)	横位のナデ 縦位のミガキ 横位のナデ	横位のナデ 粗いナデ	
2	土師器	埴		2	(4.8)	横位のナデ ナデ	横位のケズリ ナデ	
3	土師器	壺		5.0	(1.5)	ナデ	ナデ	内面黒褐色
4	土師器	壺	21.0		(6.5)	面取り ハケのち横位のナデ 横位のナデ 接合部の整形部分的には雑	横位のナデ 粗いナデ	複合口縁
5	土師器	壺	13.5		(5.5)	横位のナデ	横位のナデ	

031住居跡

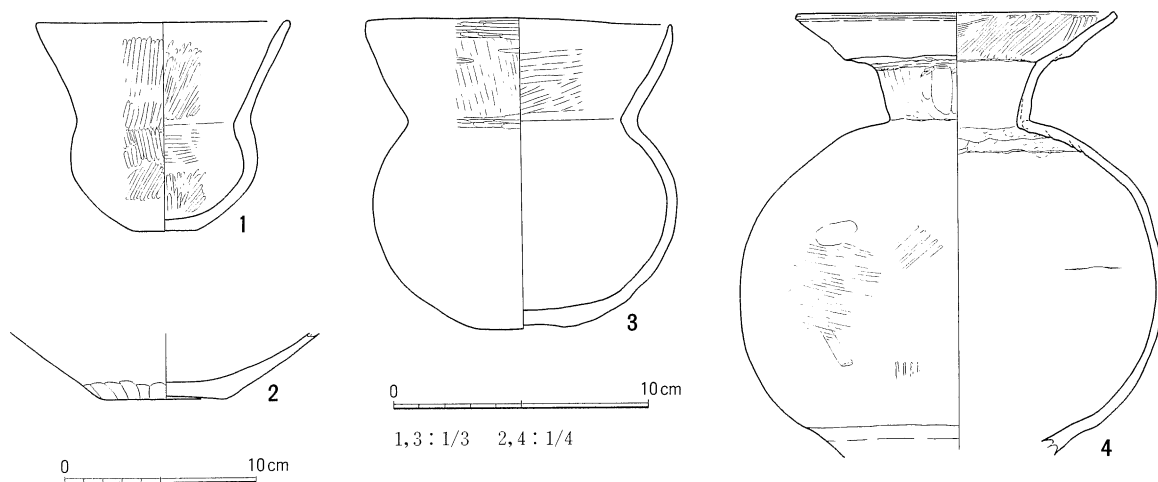
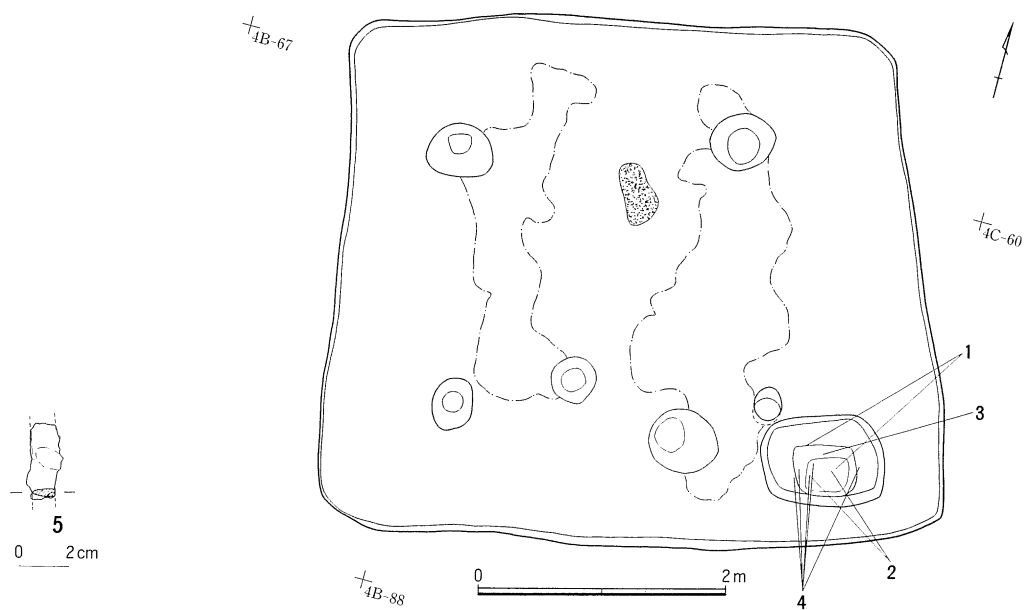
番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	甕	19.9	6.6	19.6	きつい横位のナデで面取り 右斜め上にナデ 右斜め上のハケメ ナデ 左上がりのヘラミガキ	ハケのあとミガキ	3885cc
2	土師器	壺			(5.5)	ナデ 一部ミガキ	器壁は荒れている	



第14図 024・031住居跡実測図・024出土遺物実測図



第15図 031出土土器実測図



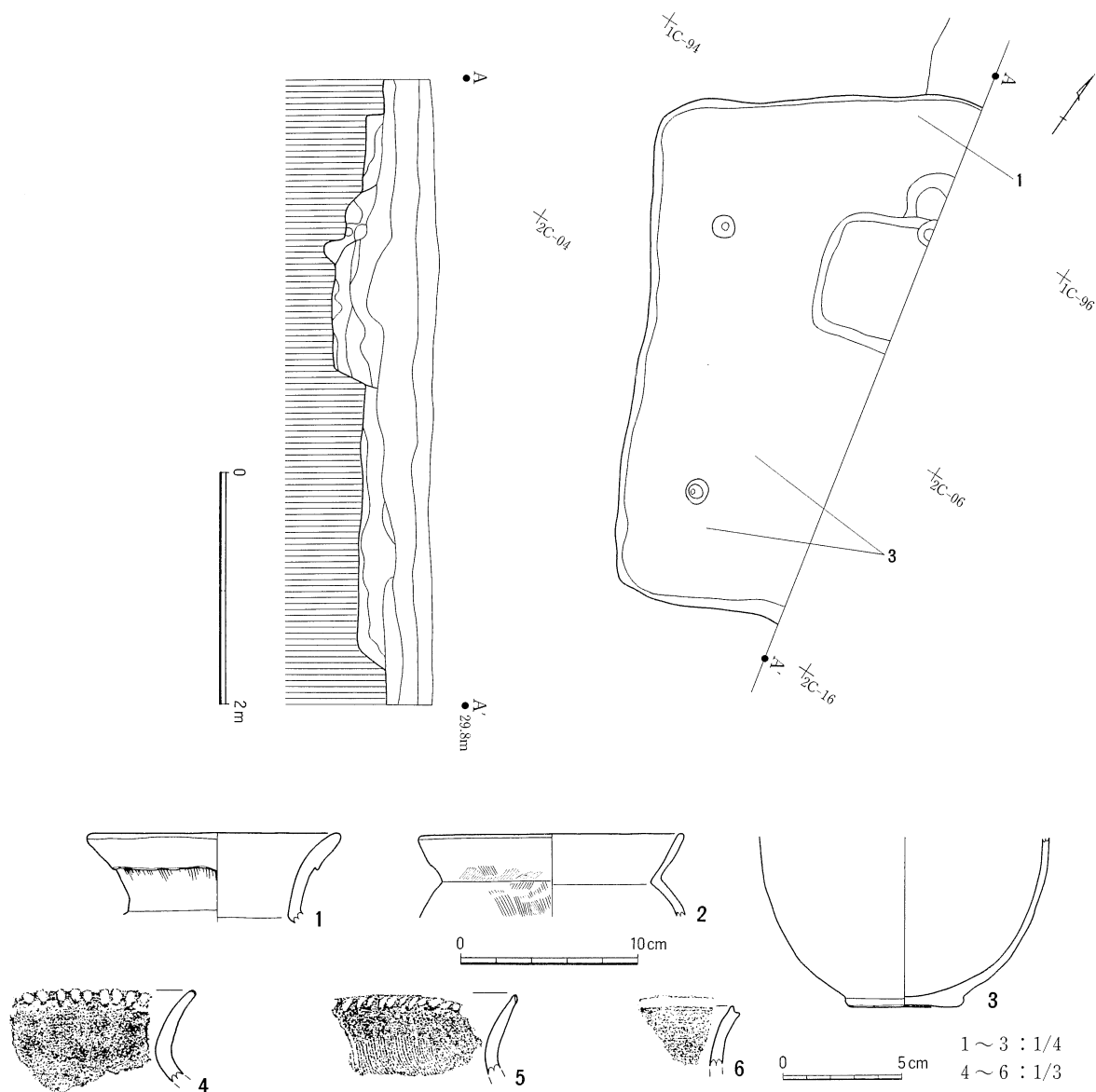
第16図 050住居跡実測図

050住居跡（第16図、図版4、13）

調査区中央より南西寄りの部分で検出された。確認面からの掘り込みは極めて浅い。平面形は北辺が4.2m、南辺が5.1mと台形を呈する。炉は中央やや北寄りにある。支柱穴は4箇所を確認されているが、4本の配置はやや歪んでいる。南東隅で貯蔵穴が検出された。掘り込みが浅かったため床面からの遺物の出土はなかったが、貯蔵穴から図示したような遺物が出土している。

050住居跡

番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	埴	10.0	2.6	8.2	ナデ ミガキ ナデ	ミガキ 横位のナデ 横位のハケ 放射状のミガキ	
2	土師器	甕		6.4	(3.6)	ナデ ケズリ ナデ	ナデ	内面黒褐色
3	土師器	埴	11.9	3.6	12.3	横井のミガキ 縦位の弱いミガキ 横位のミガキ 横位の粗いナデ 粗いナデ	横位のナデ 横位の弱いミガキ 稜線明瞭 横位のナデ	頸はやや内湾 完形
4	土師器	壺	16.6	8.5	(25.0)	横位のナデ 縦位のへらケズリ ハケののちナデ ミガキ	縦位のミガキ 横位のナデのちミガキ 接合部に粘土紐の痕 指頭圧痕 ナデ	頸部付近は非常に細かい状態で出土



第17図 002住居跡実測図

002住居跡（第17図、図版4、16）

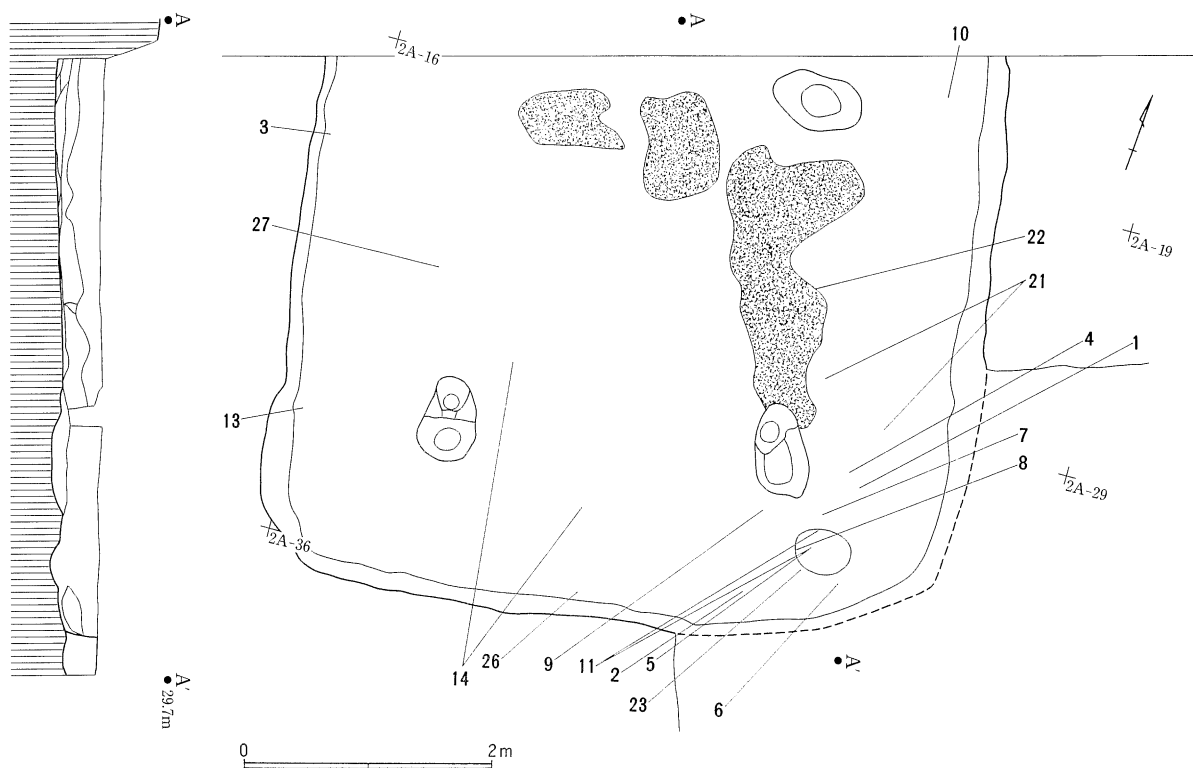
調査区の北寄りの部分で検出された。東半は現道下に及んでいる。全体の約2分の1の調査となった。炉があったと思われる部分は、後世の所産と思われる方形の土坑による攪乱を受けている。一辺約4.2mの方形を呈するものと思われる。柱穴は西半の2箇所で見出されているが、いずれも掘り方の直径が約20cmで床面からの掘り込みも浅い。柱穴の間隔は2.3mである。遺物は図示したような複合口縁の壺、ハケ整形の甕、底部の突出する壺などの他に拓影で示した甕がある。

002住居跡

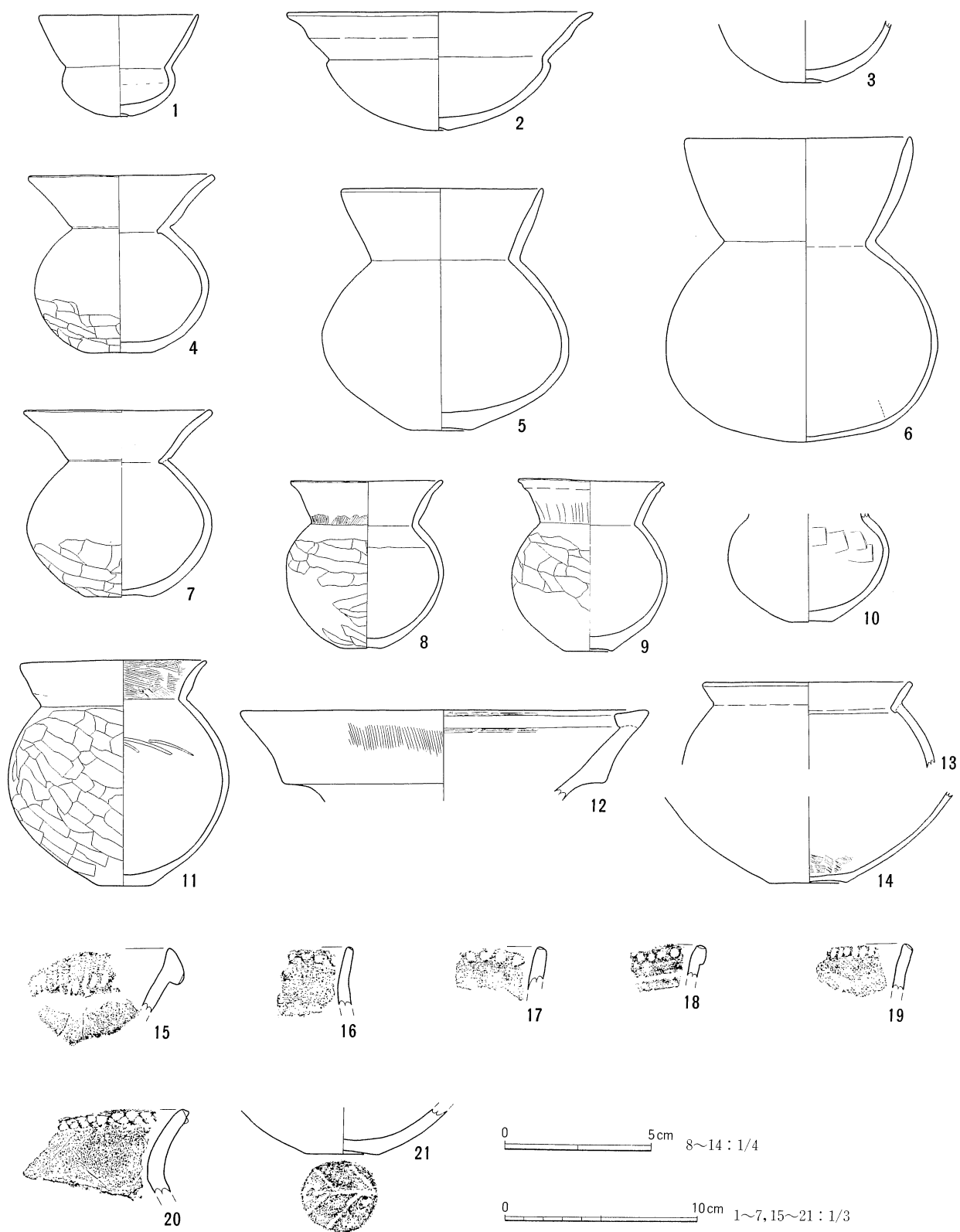
番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	壺	13.8		(5.1)	横位のナデ ハケ 縦位のミガキ	横位のミガキ	
2	土師器	壺	14.8		(4.7)	横位のナデ ハケ	横位のナデ	
3	土師器	甕		6.2	(9.8)	ナデ 部分的にハケ残る	ナデ 部分的に横位のハケ	

023住居跡（第18図～第20図、図版2、10）

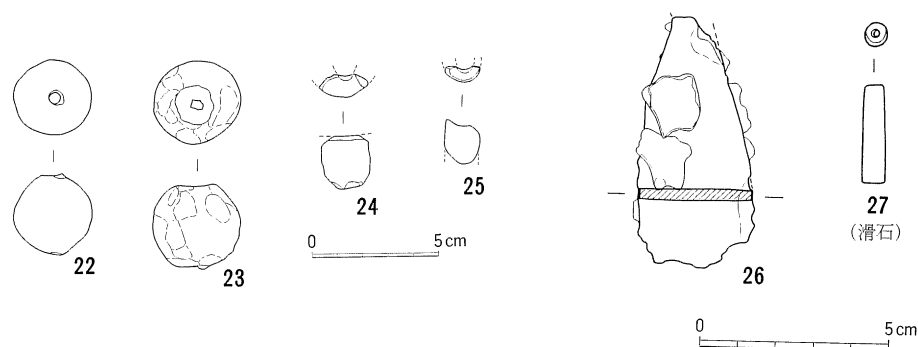
調査区北縁のやや西方に位置する。024住居跡と切り合い関係にある。本遺構の方が新しいと判断した。北辺部は調査区外に及んでいる。全体の4分の3程の調査となった。東西5.4mで、南北もそれに近いと推測される。柱穴は北西以外の3箇所で見出され、柱穴間の距離はそれぞれ2.5mである。炉は中央北寄りで検出され、周辺に焼土がややまとまって検出された。出土した遺物は図示した通りであるが、小型品は完形品を含み比較的残存状態が良好であった。なお、12は駿河地方の大廓式と考えられる壺である。口唇部が特徴的であり、全体にやや砂質で、頸部外面に縦位のハケ目を巡らしている。近隣では木更津市椿3号墳から類似した装飾をもつ壺が出土している。26は鎌かもしれない。



第18図 023住居跡実測図



第19図 023出土土器実測図



第20図 023出土土錘・鉄器・管玉

023住居跡

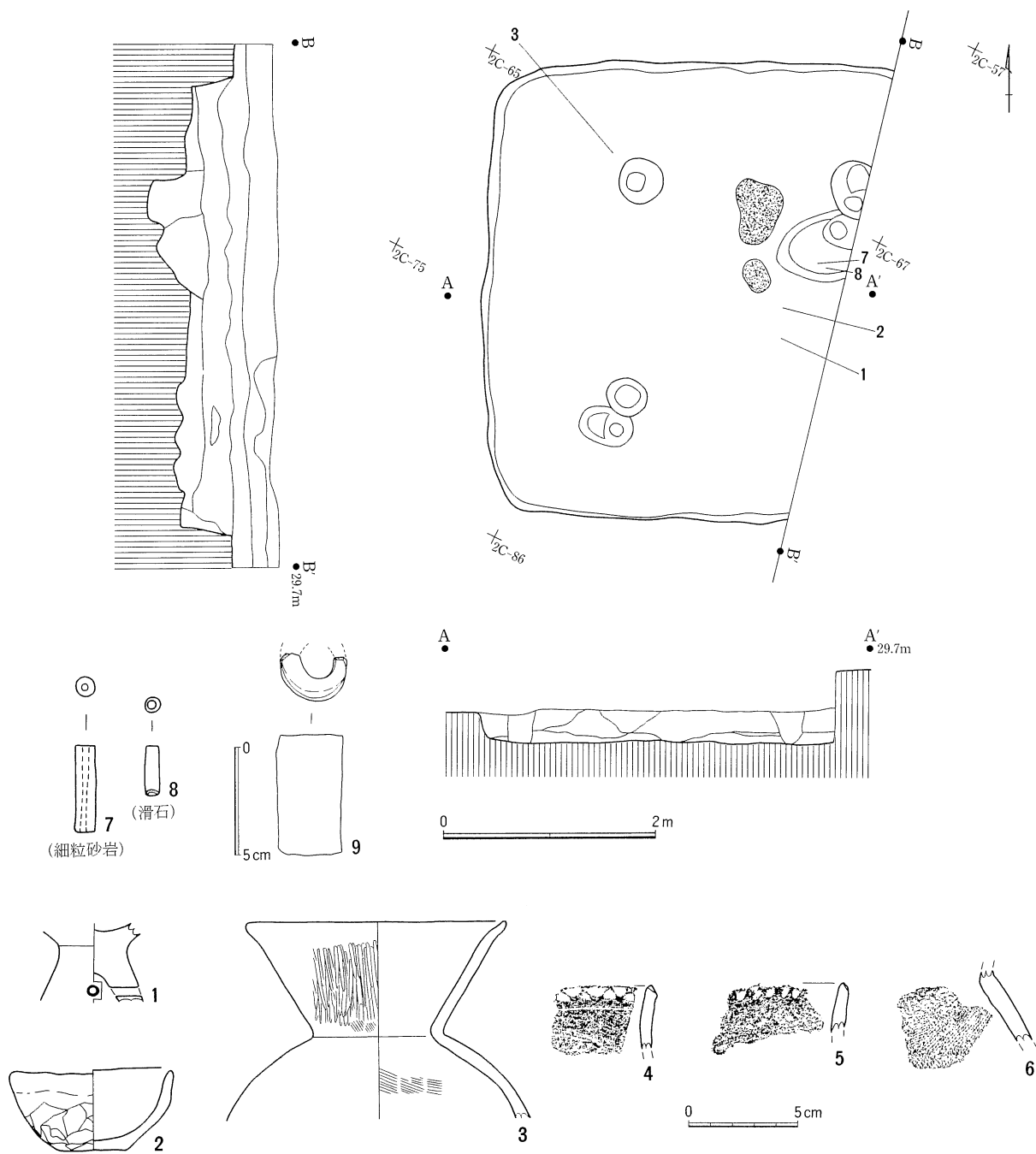
番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	埴	8.1	1.0	5.2	横位のミガキ	やや右傾した垂直方向のミガキ	接地部は凹
2	土師器	坏	15.5	0.9	6.0	横位のナデ	横位のナデ	内外面とも赤彩 接地部は凹
3	土師器	埴		2.2	(3.2)		丁寧なナデ	
4	土師器	小型壺	9.3	3.2	9.1	横位のナデ ナデ ケズリ 部分的に黒斑	横位のナデ	ほぼ完形
5	土師器	埴	10.2	3.1	9.1	横位のナデ 縦位のミガキ 横位のミガキ	ミガキの上から横位のナデ 縦位のミガキ ナデ	
6	土師器	埴	11.3		15.6	横位のミガキ 頸は内湾気味 粗いミガキ 部分的に黒斑	横位のミガキ ナデ工具痕あり	丸底
7	土師器	小型壺	9.5	3.6	9.6	横位のナデ ケズリ 部分的 に黒斑あり	横位のナデ ナデ	完形
8	土師器	小型壺	10.2	2.7	11.4	横位のナデ 部分的にハケ 部分的に横位のケズリ	横位のナデ ナデ	
9	土師器	小型壺	9.9	3.2	11.6	横位のナデ 縦位のケズリ 部分的にケズリ・ナデ 円周 方向のケズリ	横位のナデ ナデ	
10	土師器	小型壺		2.9	(7.5)	横位のミガキ 胴部下半に帯 状の黒斑 ケズリ	横位の工具痕 ナデ	
11	土師器	甕	12.7	3.6	15.5	横位のナデ・部分的に縦位の ケズリ ケズリ 粗いナデ	ハケ ナデ 工具痕	
12	土師器	壺	28.0		(6.3)	横位のナデ ハケのちナデ 縦位のハケ 横位のナデ	ハケ 横位のナデ	大廓式
13	土師器	甕	14.0		(5.9)	横位のナデ	横位のナデ	
14	土師器	甕		5.2	(6.0)	ナデ 部分的に横位のケズリ 円周方向のナデ	ナデ 放射状のハケ	

006住居跡（第21図、図版4、15）

調査区東縁のやや北寄りに位置する。全体の約3分の1は現道下に及んでいる。一辺4mの隅円方形を呈する。南東隅以外の3箇所では柱穴を検出している。柱穴間はいずれも2.1mである。図示した遺物のうち管玉は、北東の柱穴の南側の小土坑の覆土中から出土したものである。

006住居跡

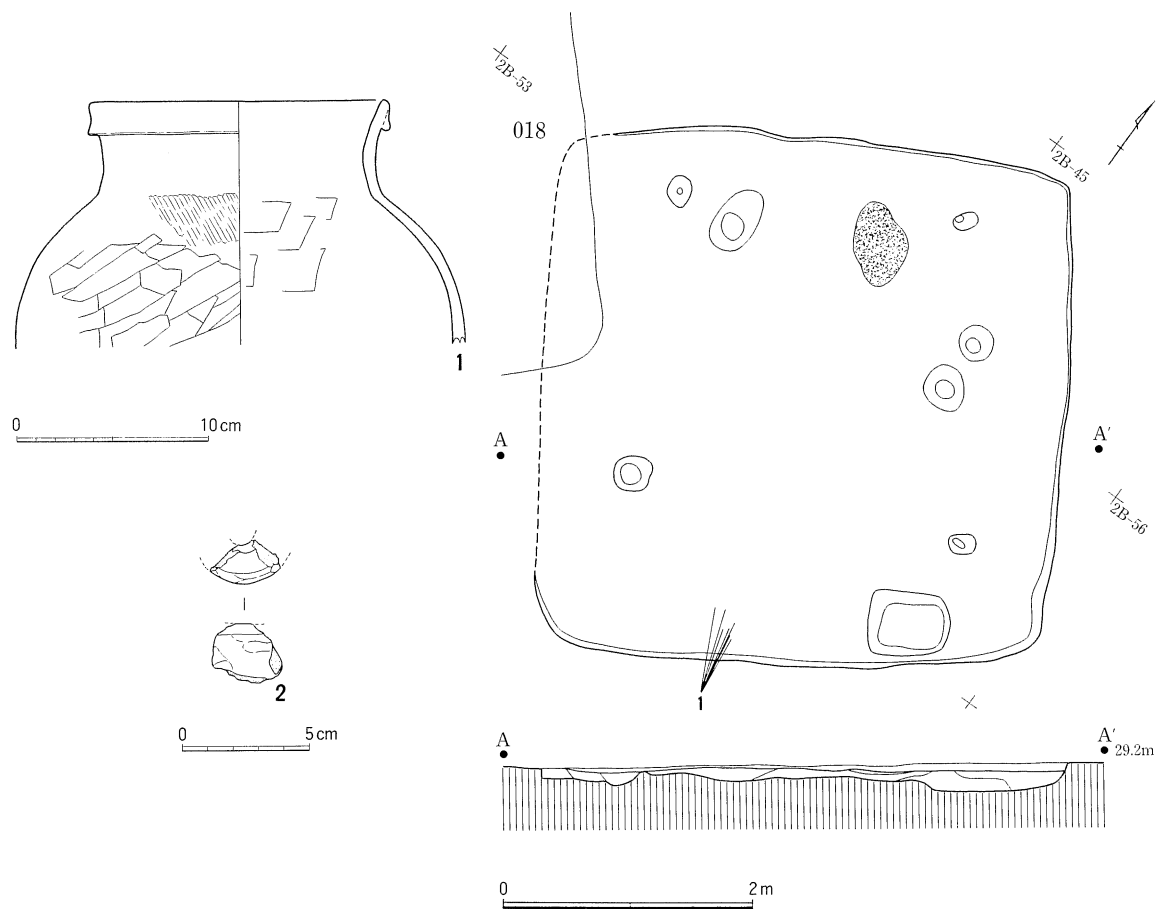
番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	器台			(3.8)	ナデ 縦位のミガキ	ナデ	透かし穴は4箇所
2	土師器	小型碗	7.2	3.1	3.7	ナデ ケズリ 輪積みの痕跡	ナデ	
3	土師器	壺	11.7		(9.2)	ナデ 縦位の弱いミガキ 部 分的に縦位のハケ	横位のナデ 部分的に横位の ハケ	



第21図 006住居跡実測図

017住居跡（第22図、図版3、14）

調査区中央よりやや北西寄りの部分で検出された。西辺の一部が018住居跡と切り合っている。新旧関係については覆土の観察からは判定できなかった。確認面からの掘り込みが浅く、特に西辺ではわずかに床面のみを残すのみであった。一辺4.2mの隅円方形を呈する。柱穴は不規則に小ピットが検出されたに留まる。炉は中央より北北東に寄った箇所検出されている。炉と向かい合うような位置で貯蔵穴と思われる方形の土坑が検出されている。遺物は図示した土器が、住居の南辺に近い部分で出土した。複合口縁の広口壺である。



第22図 017住居跡実測図

017住居跡

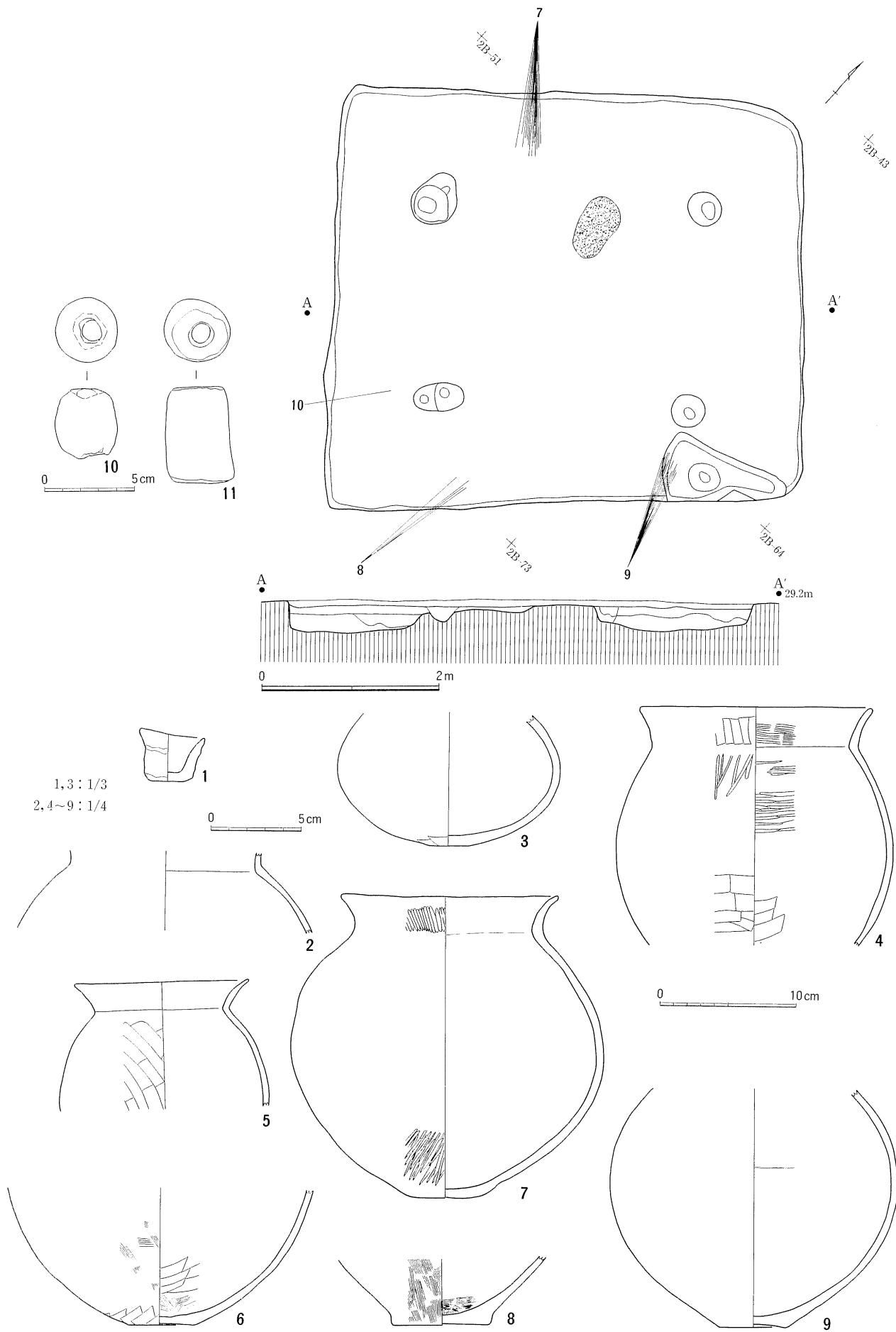
番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	甕	15.5		(13.0)	横位のナデ 粗いナデ 部分的に左傾した弱いミガキ	横位のナデ	

018住居跡（第23図、図版3、15）

017住居跡と南東辺の一部が重複する。東西5.4m、南北4.5メートルのやや歪んだ長方形を呈する。炉は中央やや北寄りの部分で検出された。柱穴は4箇所検出されている。柱穴間は東西で3.3m、南北で2.4mと住居の平面形態を反映して、東西間が長くなっている。確認面からの掘り込みは浅く、壁の立ち上がりは数cmにとどまった。貼り床除去後の状況では、住居の中央を高く残し、柱穴を通るように周溝状に掘り下げていることが認められた。遺物は図示したように、甕を多く出土している。

018住居跡

番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	小型鉢	3.5	2.0	2.6		横位のナデ	手捏ね
2	土師器	甕			(6.0)	ナデ	ナデ 稜はやや甘い明瞭	
3	土師器	埴		2.3	(7.4)	ナデ 粗いナデ	ナデ	



第23図 018住居跡実測図

番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
4	土師器	甕	17.1		(18.0)	横位のナデ 縦位のケズリ	横位のナデ 横位のミガキ ケズリのちナデ	(4147cc)
5	土師器	甕	12.9		(9.5)	横位のナデ 斜位のケズリの ちナデ	横位のナデ	
6	土師器	甕		4.9	(10.3)	ナデ ハケのち強いナデ 放 射状のケズリ	ナデ ケズリのちナデ 底部 中心から放射状のハケ	
7	土師器	甕	16.0	6.0	22.6	横位のナデ 斜位のミガキ	横位のナデ 横位のやや強い ナデ	5436cc
8	土師器	甕		7.0	(5.1)	ハケ 底部は粗いナデ	ナデ 不定方向のハケ	
9	土師器	甕		5.1	(18.0)	横位のナデ ナデ	ナデ	

015住居跡（第24図、図版3、14）

調査区のほぼ中央で検出された。一辺4mの正方形を呈する。柱穴と思われるピットは6箇所で見出されたが、重複が認められるところから、建て替えが行われたと考えられるが、平面規模の変化はなかったと思われる。炉は中央やや北寄りで見出されている。南東の柱穴の南側に不整形のピットがあり、貯蔵穴と考えられる。貼り床除去後の状況は018に類似しており、中央部を高く残し、柱穴を通るように周溝状に掘り下げていることが認められた。遺物は図示したようなものが出土している。このうち1の高坏は、脚部に比べ丸底風の坏部が大きい点で特徴的である。山陰系の高坏と言える。

015住居跡

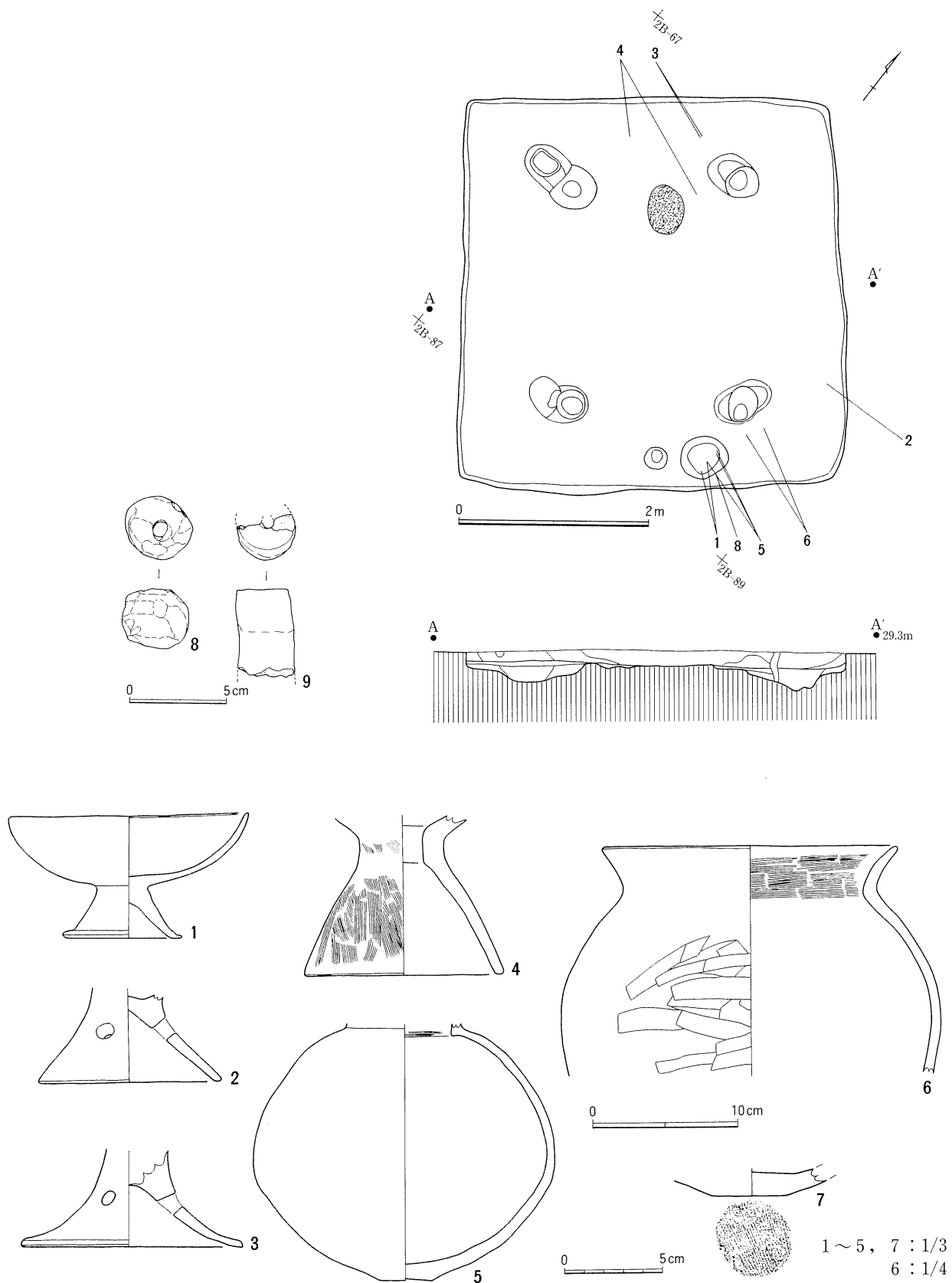
番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	高坏	12.3	5.8	6.5	ナデ 横位のナデ	放射状のミガキ 脚内部ナデ	山陰系
2	土師器	器台		9.2	(4.9)	縦位のミガキ 脚端面取り	ナデ 脚内部ナデ	透かし穴は3箇所
3	土師器	器台		11.3	(5.0)	ナデ	横位のナデ 脚内部は横位の 粗いナデ	透かし穴は3箇所
4	土師器	器台		10.0	(8.2)	ナデ	ナデ	接地部は部分的に平坦
5	土師器	壺		3.0	(13.3)	ナデ	横位のハケ ナデ	(1233cc)
6	土師器	甕	20.1		(15.9)	横位のナデ ケズリ	横位のハケ 頸部の屈曲は緩 い ナデ	口唇部部分的に 面取り(9984cc)

026住居跡（第25・26図、図版3、15）

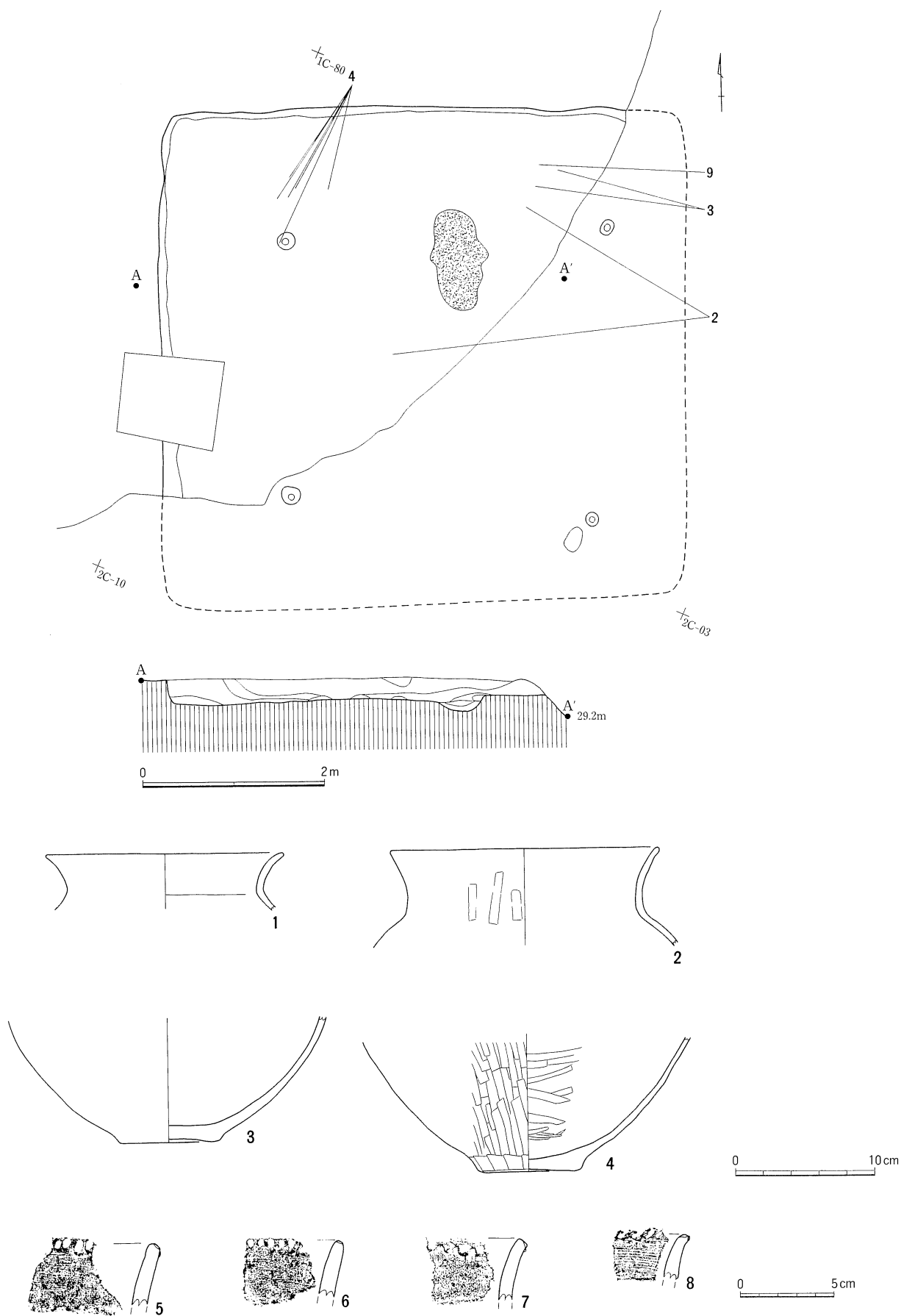
001円墳の周溝により2分の1以上が切られる形で検出された。周溝内において、柱穴と考えられる小ピットが3箇所で見出されている。一辺5.5mのほぼ正方形を呈すると思われ、西側の2箇所の柱穴間が約2.9mであり、他は3.3mである。炉は北側の2柱穴間のほぼ中間で見出された。遺物はいずれも床直上で検出されており、甕の出土が目立つ。頸部の屈曲は比較的弱いと言える。

026住居跡

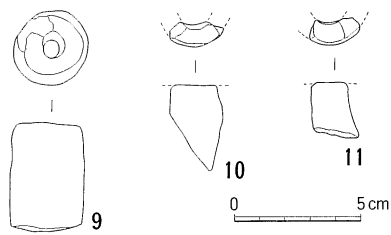
番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	甕	17.0		(4.2)	横位のナデ 一部斜位のナデ	横位のナデ 稜線は明瞭だが 弱い部分がある	
2	土師器	甕	19.4		(7.7)	口縁端部は面取り 横位のナ デのち一部縦位のナデ	横位のナデ	
3	土師器	甕		7.0	(9.0)	ナデ	ナデ	接地面は環状 靱殻圧痕
4	土師器	甕		6.2	(9.6)	縦位のきついナデ 横位のナデ	横位のきついナデ	



第24図 015住居跡実測図

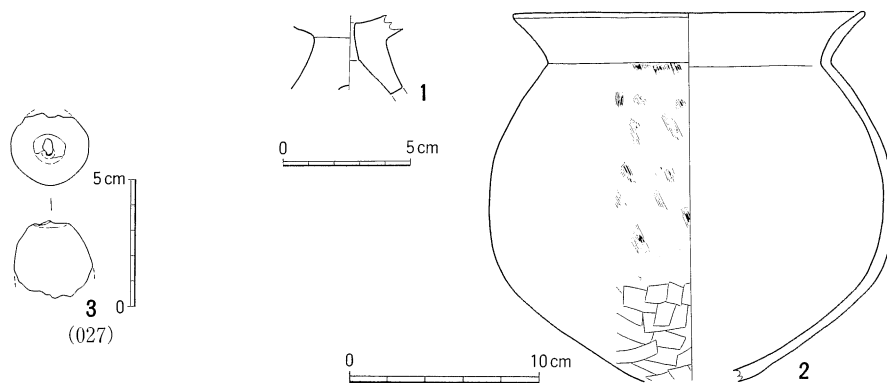
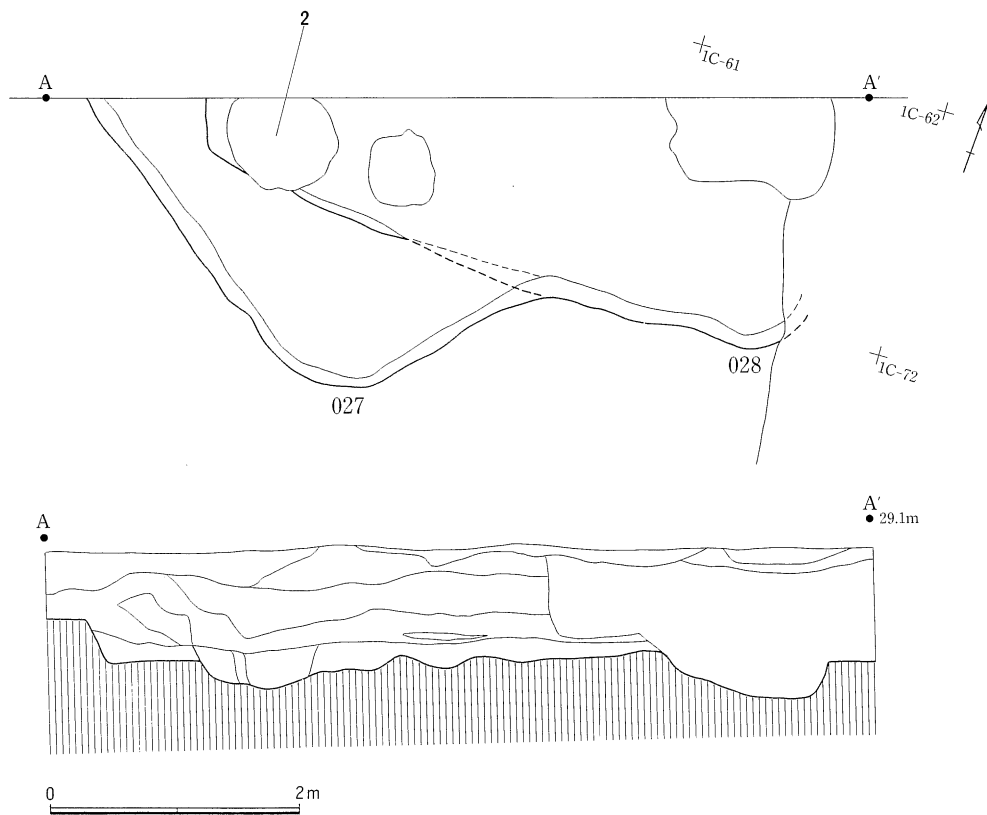


第25図 026住居跡実測図



第26図 026出土土鍾

第25図5～8に示した破片資料のうち5～7では、口唇部の押捺は上方からの一方方向のみで、8では、内面からと外面からの2方向からである。8では上から見ると矢羽根状に施文されているのがわかる。第26図9～11は管状の土鍾である。全体の形状がわかるのは9のみであるが、10、11も類似した形状であったと考えられる。



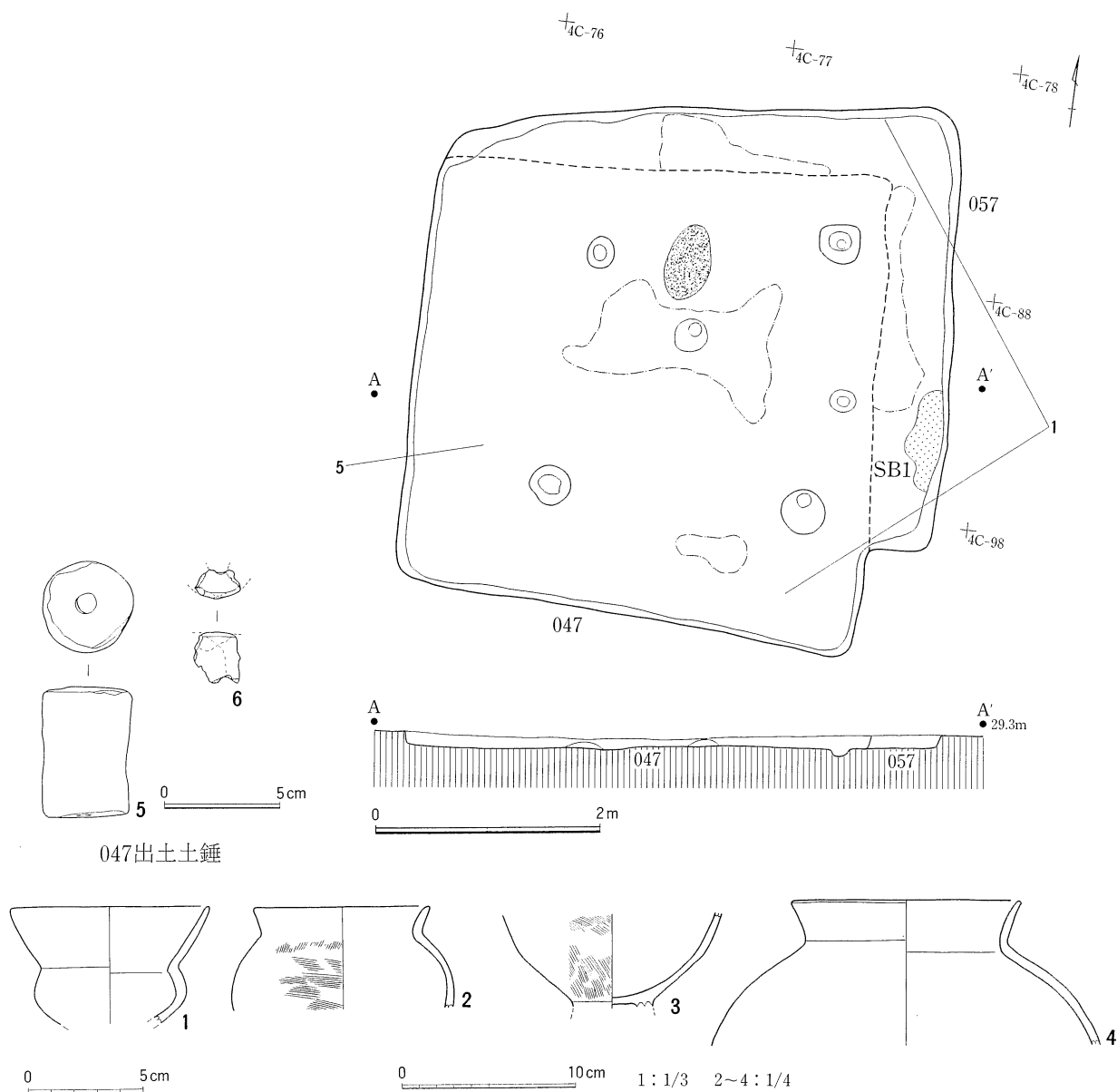
第27図 027・028住居跡実測図

027・028住居跡（第27図、図版3、15）

調査区北縁の東寄り部分で重複して検出された。両住居とも、南側の一部を調査し得たに留まり、残余の部分は北方に延びている。土層断面の観察により、028が新しいと判断された。028の東側は001の周溝が切っており、後世の攪乱も加わって残存状況はよくなかった。027も西端の部分に攪乱を受けており、状況は良くなかった。平面形態は、方形に近いものと考えられる。規模は不明な点が多いが、028の南辺は3.2mという値が得られる。柱穴については、攪乱された部分が多く、検出にはいたらなかった。遺物は覆土および攪乱層からの出土である。器台・甕・土錘を図示するに留まる。

027・028住居跡

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	器台			(3.1)	ナデ	ナデ	透かし穴の痕跡 一箇所のみ
2	土師器	甕	18.4		(19.6)	口縁端面取り 横位のナデ ハケのちナデ 横位のケズリ	横位のナデ 頸部の稜線明瞭	



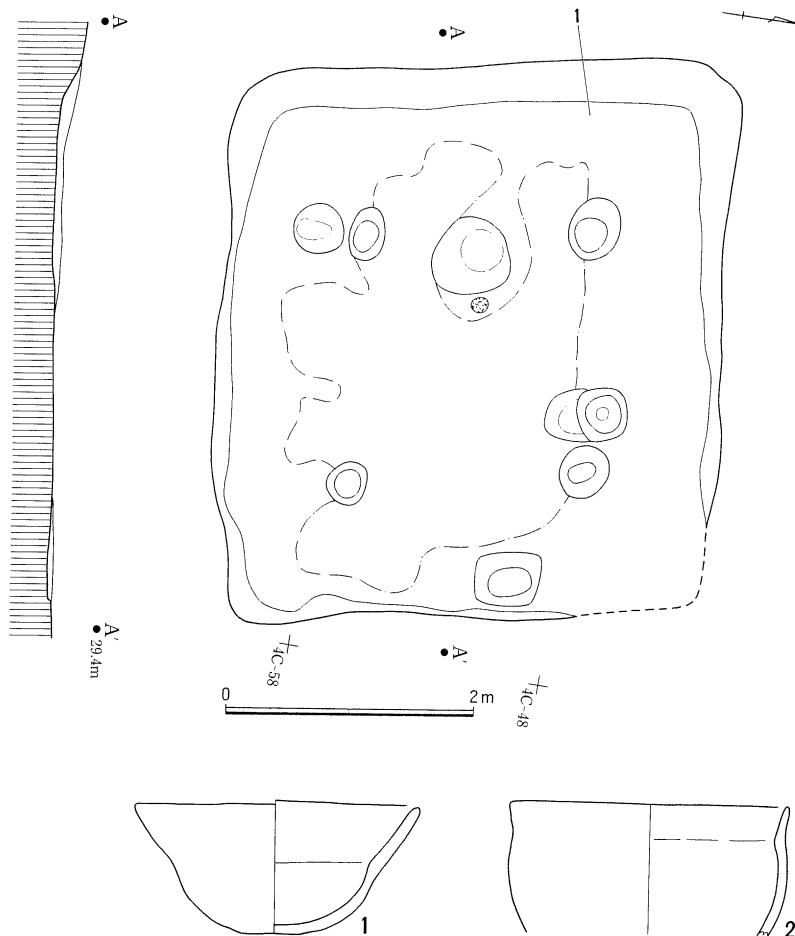
第28図 047・057住居跡実測図

047・057住居跡（第28図、図版5、15）

調査区の南端に近い部分で検出された。2軒がほとんど重複する状態であった。掘り込みの深さはほぼ同一であった。北寄り部分および東寄りの部分で硬化した床面が認められ、この硬化面が直線的に切れているところから、この部分を新しい方の住居跡により切られたものと判断した。新しい方が047、古い方が057である。057は、北辺が4.4m、東辺が3.9mと、やや東西に長い長方形を呈していたと推測される。東壁の南寄り部分で貝ブロックが検出されている。047は不整な方形を呈し、一辺はそれぞれ4m前後となる。炉は北側2柱穴の中間で検出された。柱穴は4箇所検出されている。柱穴間の距離は、2.2～2.4mである。出土遺物は、ほとんどが047出土であるが、047・057間で接合したものもある。このうち2は甕の上半部、3は台付甕の脚部を欠いた胴下半部である。ともに外面に類似するハケ目を残し、胎土も近似することから、同一個体である可能性がある。

047住居跡

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	埴	8.6		(5.1)	ミガキ ナデ	横位のナデ	頸部はやや内湾
2	土師器	甕	10.1		(6.0)	横位のナデ ハケのちナデ	横位のナデ	
3	土師器	甕			(5.5)	ハケのちナデ	ナデ 脚内部ナデ	2と同一？
4	土師器	甕	13.2		(8.5)	口縁端部弱い面取りナデ 部分的に横位のハケ	ナデ	整形は全体に不明瞭



第29図 048住居跡実測図

048住居跡（第29図、図版 5、14）

調査区中央やや南寄りで検出された。掘り込みは浅く、また、壁の立ち上がりも緩やかである。北東隅付近では掘り込みは明瞭には捉えられなかった。東西4.4m、南北4.1mとやや東西に長い長方形を呈する。他の住居跡の炉が北寄りに設けられていたのに対し、この住居跡では西寄りの部分に設けられている。ただし、床面がわずかに赤化した部分が若干認められた程度である。柱穴は4箇所検出され、東西2.2m、南北1.8mと平面形を反映している。炉と向き合う形で方形の貯蔵穴が検出されている。遺物は図示したような埴等が出土している。外面よりも内面において頸部の屈曲が強調されている感がある。

048住居跡

番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	埴	11.1	2.4	5.3	横位のナデ 稜線はない	横位のナデ 稜線は明瞭	一部黒斑あり
2	土師器	碗	10.9		(5.2)	横位のナデ	横位のナデ 弱い稜線あり	径はやや不安定

053住居跡（第30図、図版 5、11）

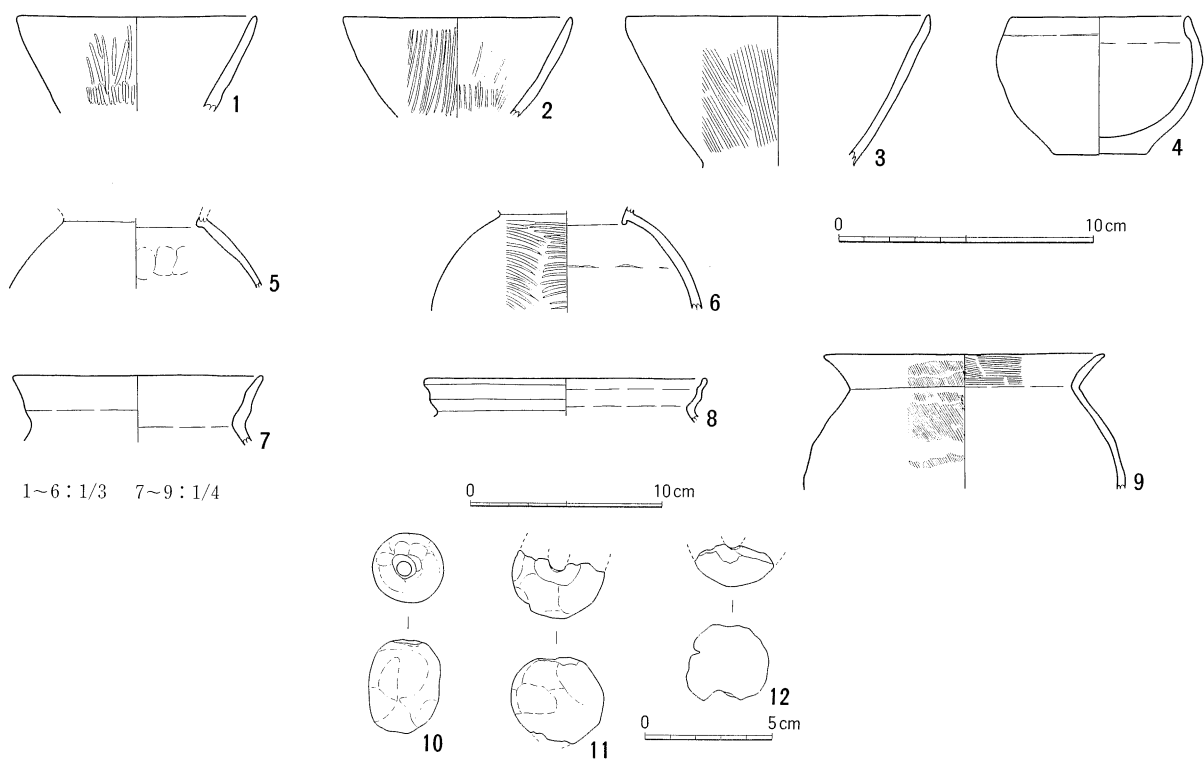
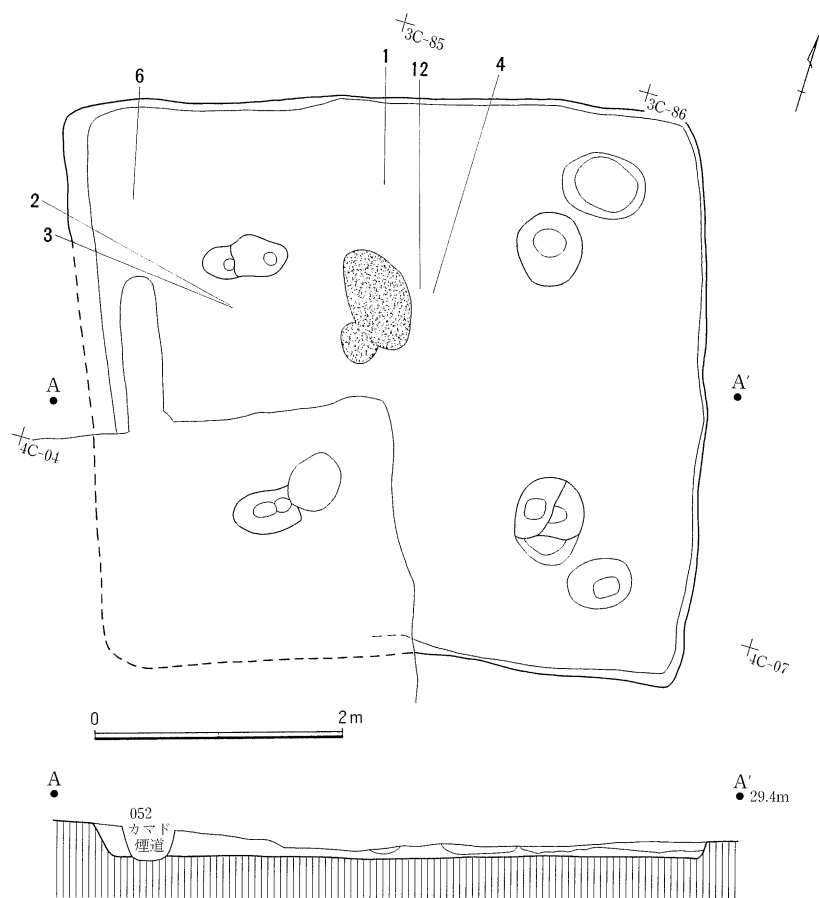
調査区中央よりやや南西に寄った部分で検出された。北西約4分の1の部分は、かまどを持つ住居跡052により切られている。北辺5.1m、東辺4.5mで、やや東西に長い方形を呈する。柱穴は4箇所で検出されているが、北東の柱穴以外では2度ないし3度の掘り直しがあったことが認められるが、平面形の変更を伴うものではなかったと判断される。柱穴間はほぼ2.1mを前後するが、北側の2柱穴が若干広い。炉は、北側2柱穴のやや西寄りの部分で検出されている。遺物は図示した通り、埴・甕・碗が出土している。8はS字甕の口縁部であるが、胴部の施文等是不明である。

053住居跡

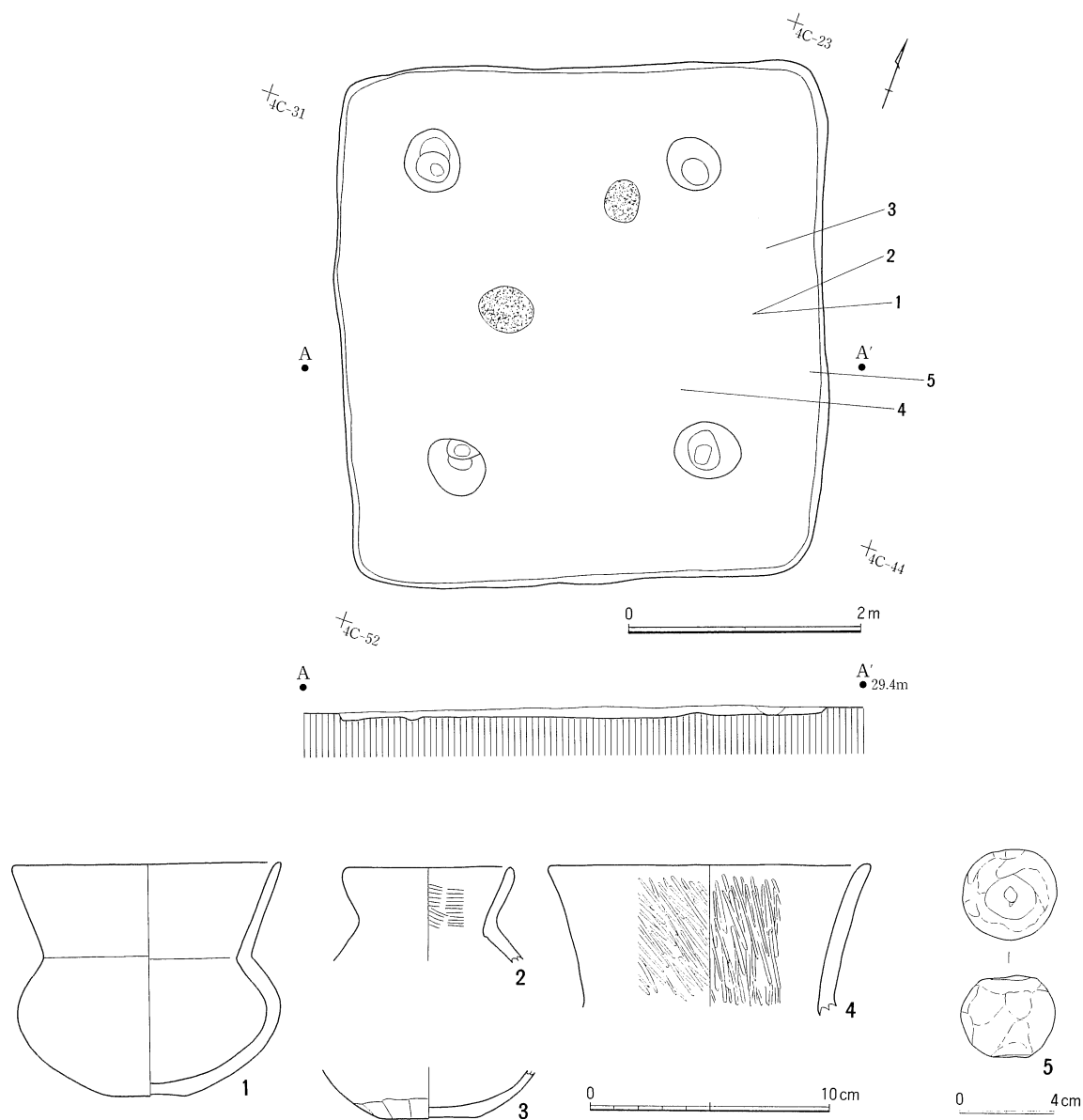
番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	埴	9.4		(3.8)	横位のナデのち縦位のミガキ	横位のナデ	
2	土師器	埴	8.9		(4.0)	横位のナデ 縦位のミガキ	横位のナデ ナデのち部分的に縦位のミガキ	内外面全面赤彩
3	土師器	埴	11.9		(6.0)	横位のナデ 縦位のハケ・ナデ	横位のナデ	
4	土師器	小型鉢	6.9	3.5	5.4	横位のナデ 円周方向の粗いナデ 輪積	横位のナデ	口縁部は肥厚する
5	土師器	壺			(2.8)	横位のナデ	ナデ 指頭痕	器壁は概して薄い
6	土師器	壺			(4.1)	横位のナデ 赤彩	ナデ	
7	土師器	甕	13.1		(3.7)	ナデ	横位のナデ	
8	土師器	甕	14.7		(2.4)	横位のナデ	横位のナデ	S字甕
9	土師器	甕	14.5		(7.2)	横位のナデ 斜位のハケ斜位のハケのち一部ナデ	横位のナデ 横位のハケ	

051住居跡（第31図、図版 4、13）

調査区中央やや南寄り、048西方で検出された。東西4.3m、南北4.1mとやや東西に長い方形を呈する。掘り込みは浅く、床の残存状況は良好ではなかった。柱穴は4箇所検出され、東西2.4m、南北2.2mと平面形を反映している。炉は、北寄りの部分と西寄りの部分の2箇所で赤化した床面が検出されたに留まる。西寄りで検出されたものが、柱穴の中間に位置するところから、こちらが本来的なものかもしれない。同様に西寄りの部分で炉が検出された048が近接することから、この2軒は、親近性を持つと言えるかもしれない。遺物は図示したものが床直上から出土している。1の埴の胴部はやや扁平であり、底部はやや窪んでいる。



第30図 053住居跡実測図



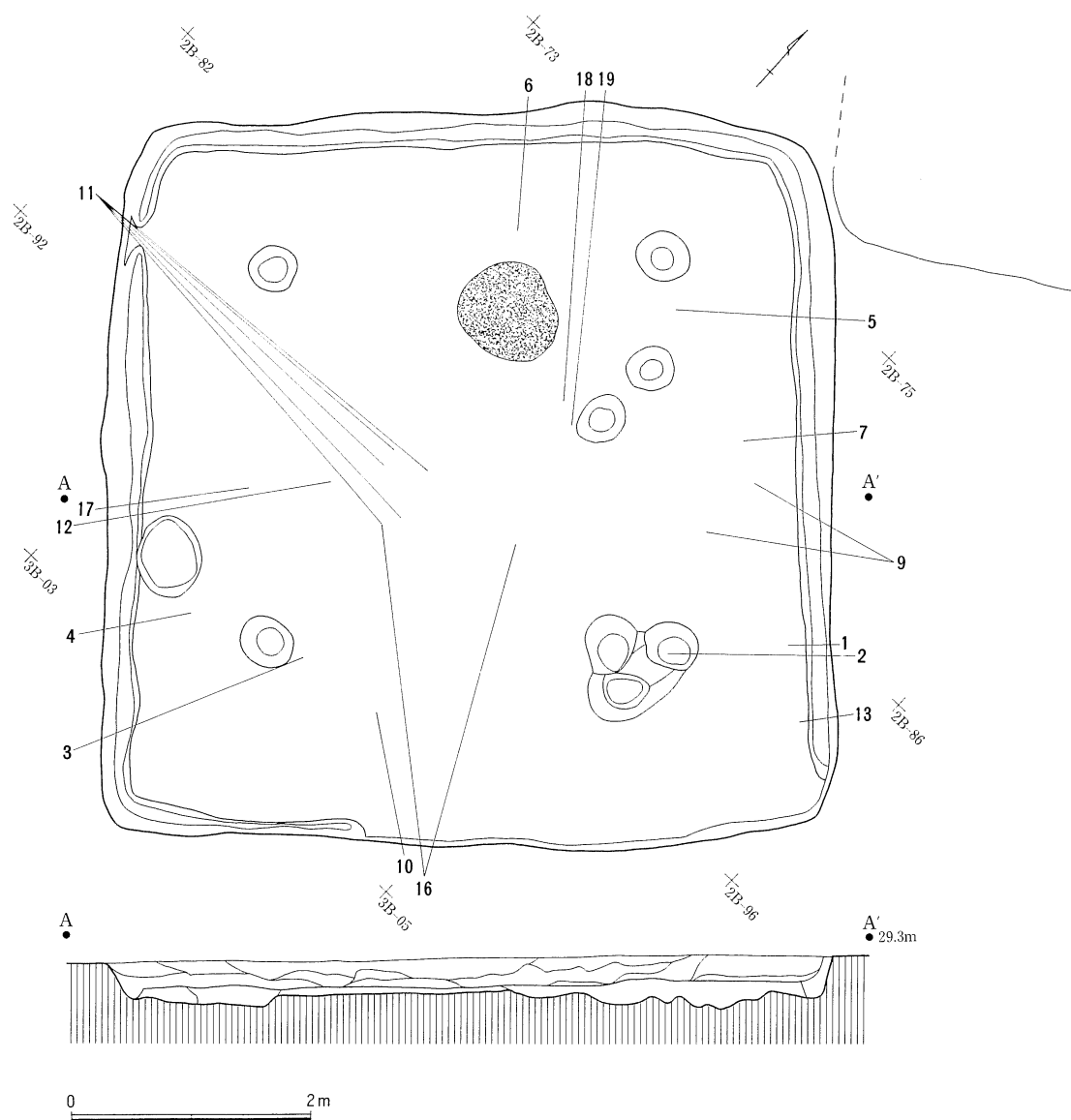
第31図 051住居跡実測図

051住居跡

番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	埴	11.2	3.1	9.8	横位のナデ	ナデ	整形は全体に不明瞭
2	土師器	壺	6.8		(4.0)	ナデ	ハケのちナデ 粗いナデ	
3	土師器	埴?	13.4		(6.4)	縦位のミガキ	縦位のミガキ	
4	土師器	甕		4.0	(2.1)	ナデ ケズリ	ナデ	

019住居跡 (第32・33図、図版3、16)

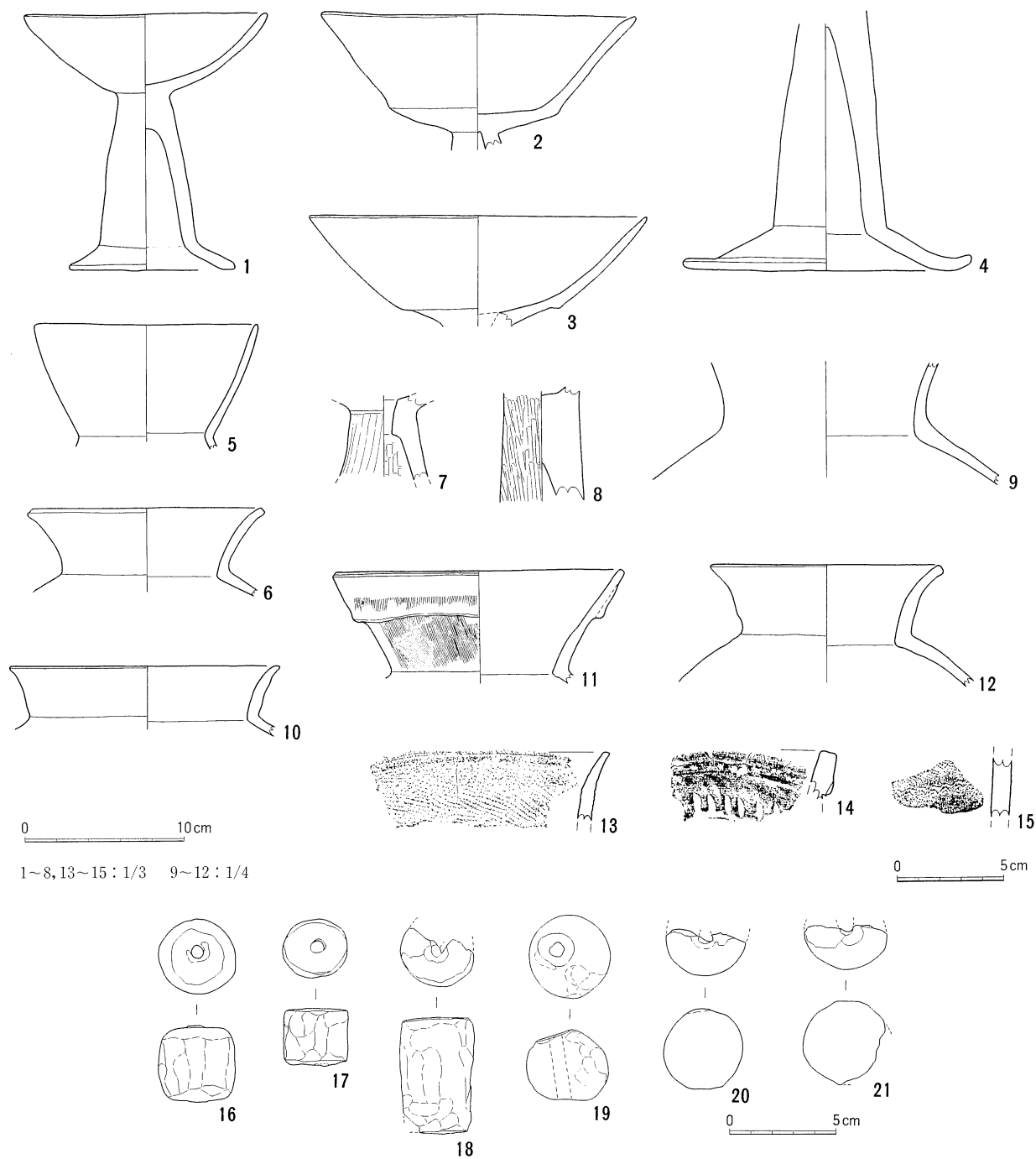
調査区中央よりやや北西に寄った部分で検出された。ほぼ、一辺6mの正方形を呈する。壁周溝は南西辺の一部で切れ、南東辺では約3分の1のみで認められた。柱穴は4箇所検出され、柱穴間はほぼ3.3mであった。遺物は図示したように高坏・壺・甕などがある。1の高坏は坏部がやや小振りで脚端の屈曲した接地部分は短く、4などと趣を異にする。



第32図 019住居跡実測図

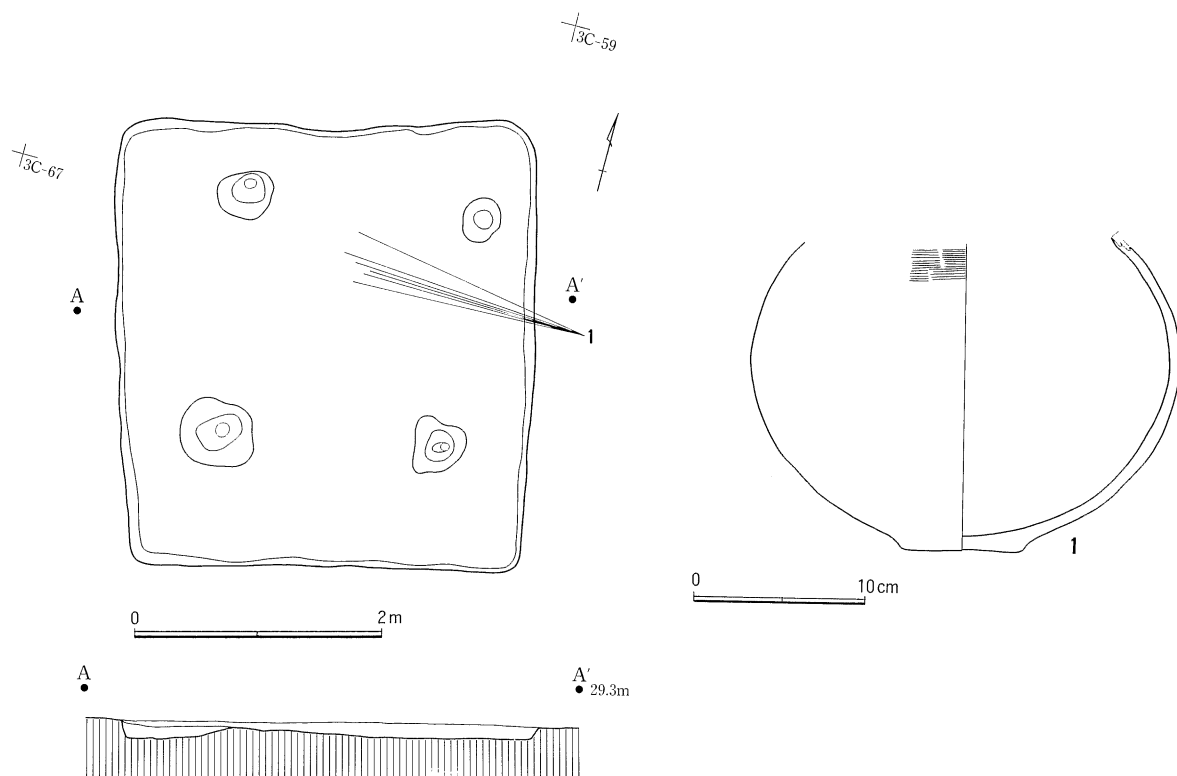
019住居跡

番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	高坏	11.4	7.2	12.0	縦位のミガキ	ミガキ 脚内部横位のやや粗いナデ	
2	土師器	高坏	14.7		(6.4)	横位のナデ 円周方向のナデ	横位のミガキ 縦位のミガキ 円周方向のミガキ	内外面全面赤彩
3	土師器	高坏	15.8		(5.2)	丁寧なナデ	丁寧なナデ	内外面全面赤彩
4	土師器	高坏		12.7	(11.7)	縦位のミガキ 横位のナデ	横位のナデ	
5	土師器	埴	10.3		(5.5)	横位のナデ 赤彩	横位のナデ	
6	土師器	甕	14.5		(5.3)	口縁端面取り やや肥厚している 縦位のミガキ	横位のミガキ 稜は明瞭	
7	土師器	器台			(3.8)	ナデ 縦位のケズリのち横位のナデ	ナデ 脚内部横位のケズリ	
8	土師器	高坏			(5.2)	弱いミガキ 赤彩		



第33図 019出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
9	土師器	壺			(5.5)	横位のナデ 縦位のミガキ 横位のミガキ	縦位のミガキ 横位のミガキ 横位のナデ	
10	土師器	甕	16.8		(4.0)	やや左傾したハケのち横位の ナデ	横位のナデ 稜は明瞭	
11	土師器	壺	18.0		(7.1)	口縁上端部部分に凹 縦位の ハケのち横位のナデ 口縁下 端部分的に面取り	横位のナデ	整形やや雑
12	土師器	壺	14.3		(7.5)	横位のナデのち縦位のミガキ	横位のミガキ	



第34図 054住居跡実測図

054住居跡（第34図、図版5、13）

調査区の中央やや東寄りの部分で検出された。南北3.5m東西3.3mのやや南北に長い方形を呈する。柱穴は4箇所検出され、柱穴間は1.8～1.9mである。炉は検出し得なかった。遺物は頸部を欠く甕が床直上から検出されている。

054住居跡

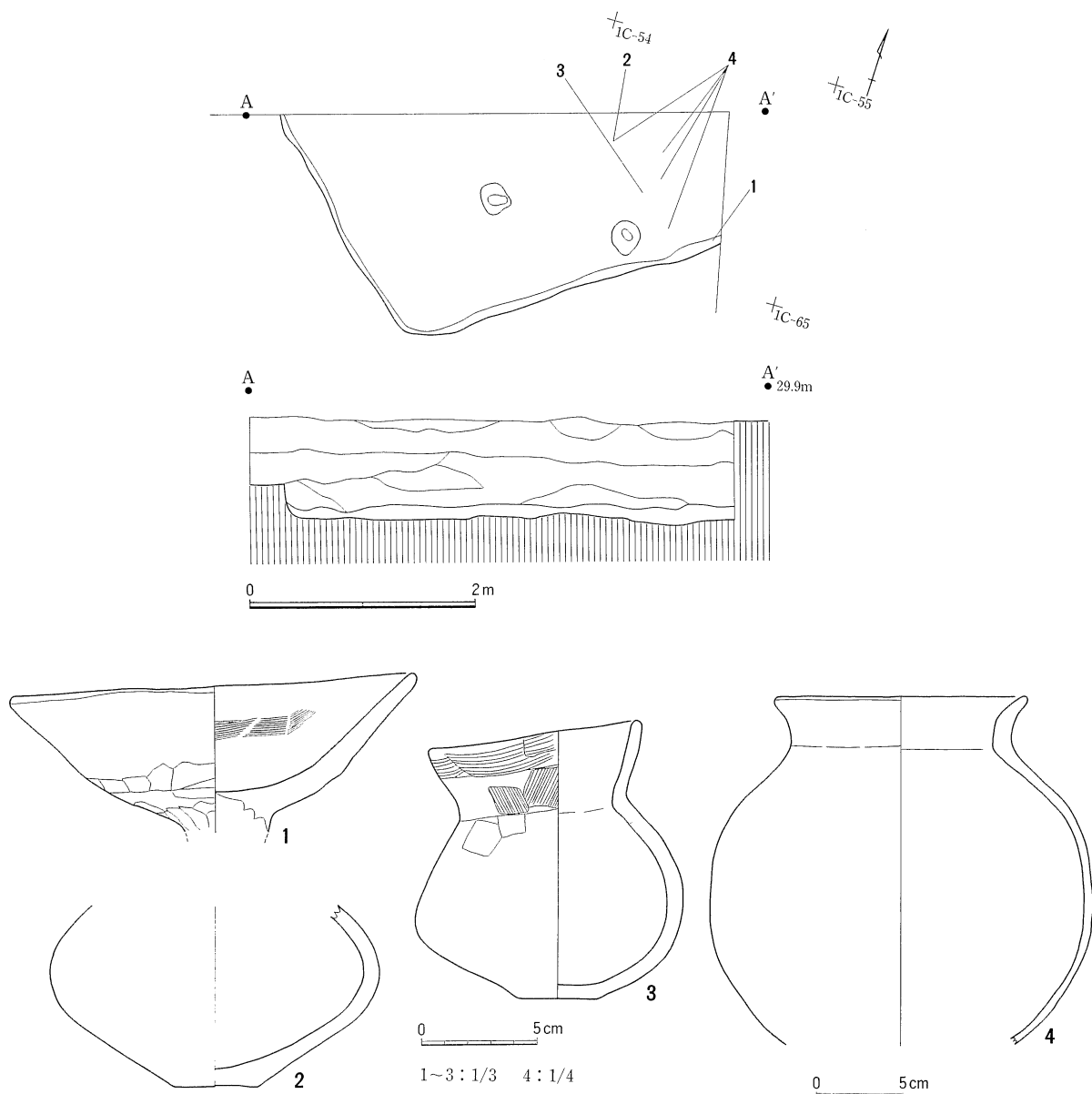
番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	甕		6.5	(16.6)	横位のハケ ナデ 接地部は円周方向のナデ	ナデ	

021住居跡（第35図、図版3、16）

調査区の北東隅で検出された。住居跡の北西の隅部分のみの検出であり、全体の規模は不明である。平面形はおそらく方形を呈すると思われる。柱穴と考えられるピットの検出は1箇所にとどまり、入り口部分にもピットを検出した。遺物は図示したようなものが出土している。このうち1の高坏、2の埴については、いずれも器壁が厚手である。また、2の胴部は扁平である。

021住居跡

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	高坏	17.3		(6.4)	横位のナデ 横位のケズリ 縦位のケズリ 坏部下半の稜線は甘い	横位のナデ 部分的にハケ 微妙な凹凸あり	全体に器壁厚い
2	土師器	埴		3.6	(7.9)	ナデ 全体に整形不明瞭 赤彩の可能性	横位のナデ 部分的にハケ	全体に器壁厚い
3	土師器	埴	8.9	3.4	11.6	横位のナデ 縦位のハケ ナデ	横位のナデ ナデ 部分的に凹凸顕著	全体に器壁厚い 胴部は歪んでいる
4	土師器	甕	14.3		(20.3)	ナデ 微妙な凹凸多い	横位のナデ 稜は甘い	(4892cc)



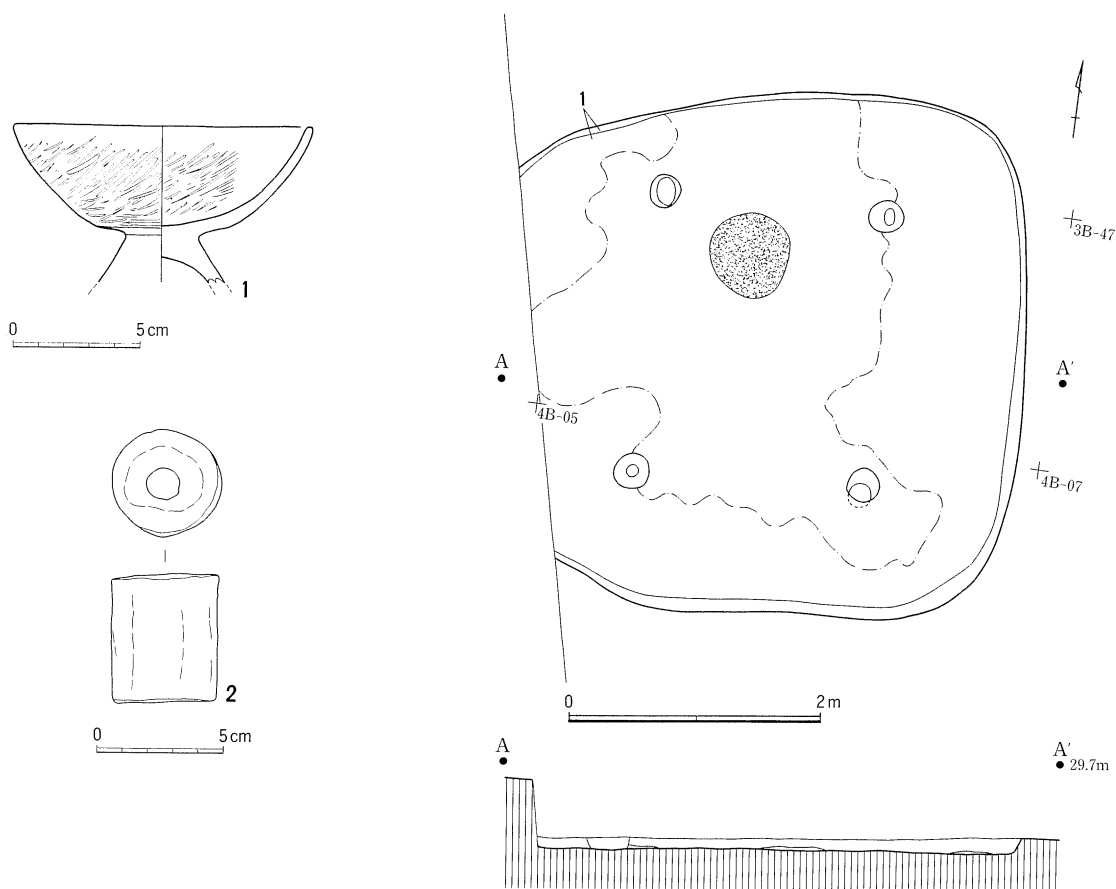
第35図 021住居跡実測図

056住居跡（第36図、図版5、13）

調査区の西辺のほぼ中央で検出された。住居の西辺はわずかに調査区外に及んでいる。4 m四方の方形に近い形態と考えられるが、検出された4箇所の柱穴の間隔を見ると、東西間が1.9m、南北間が2.3mであるのでやや南北に長いものであるかもしれない。炉は、北側2柱穴間のやや住居の中心寄り部分にある。遺物の出土は少なく、図示した高坏・円筒状土鍾を提示しうるのみである。

056住居跡

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	高坏	11.7		(6.3)	横位のナデ 粗いミガキ 縦位のナデ	横位のナデ 粗いミガキ 脚内部粗いナデ	口唇部やや平坦 脚内部以外赤彩



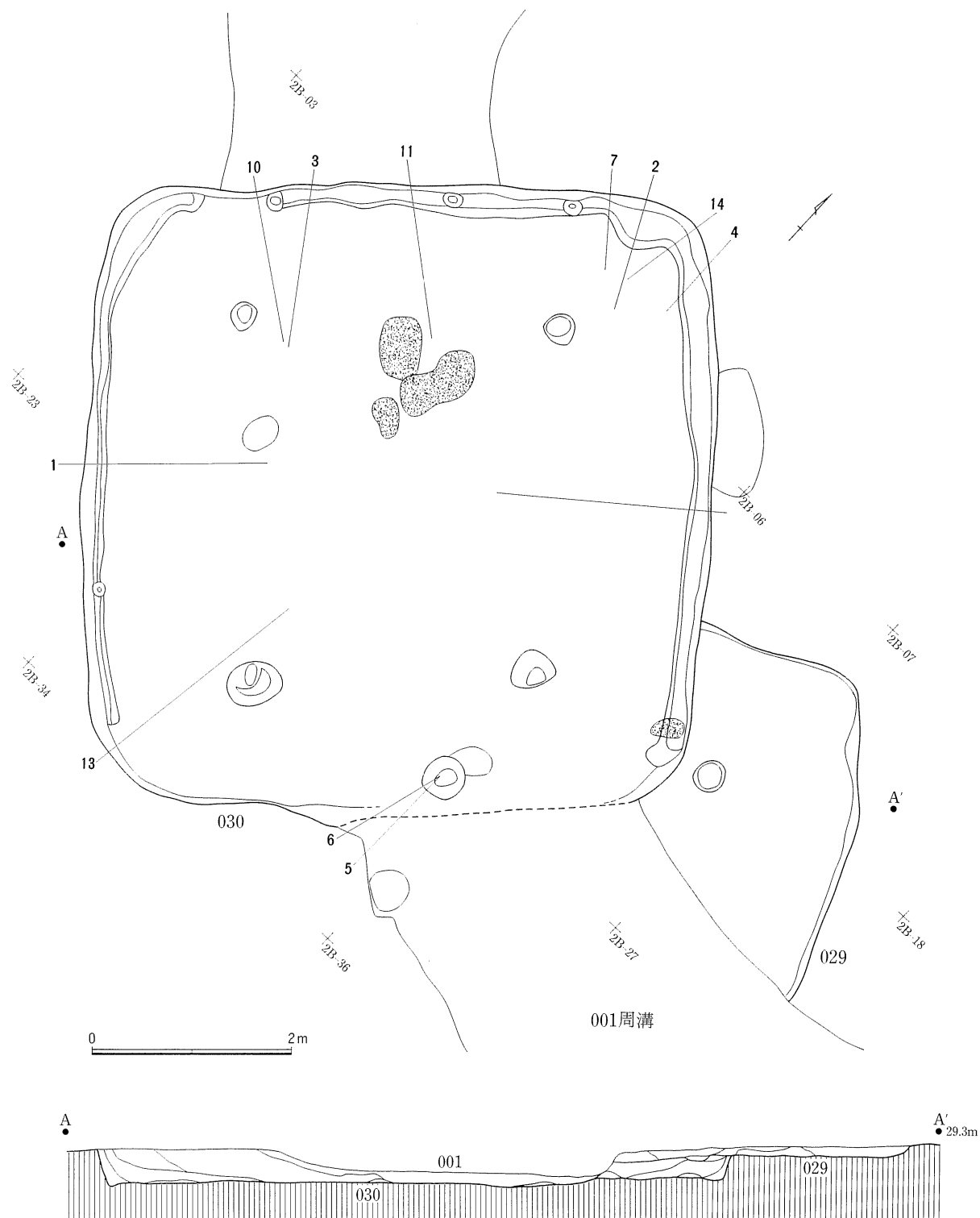
第36図 056住居跡実測図

029住居跡・030住居跡（第37図～第39図、図版2、14）

調査区北縁中央に近い部分で検出された。上層を001円墳の周溝が南北に縦断する形でおつている。住居の南辺は欠くが、北辺は周溝の方が浅く、輪郭を捉えることができた。6.3m四方の方形を呈すると判断される。壁周溝は、断続的に巡っている。柱穴は4箇所検出され、東西間3m、南北間3.5mと、南北間を長くとしている。炉は北側2柱穴間のほぼ中間で検出された。南辺際の中央よりやや東寄りの部分で入り口ピットを検出した。この030の南東に重複して029がある。030の覆土中に検出された焼土を、029の炉の痕跡と考え、029の方が新しいと判断した。030・001よりも掘り込みが浅いため、住居の全体の規模を捉えるには至らなかった。柱穴と思われるピットを一箇所検出しているが、上記炉と近接してしまう感は否めない。

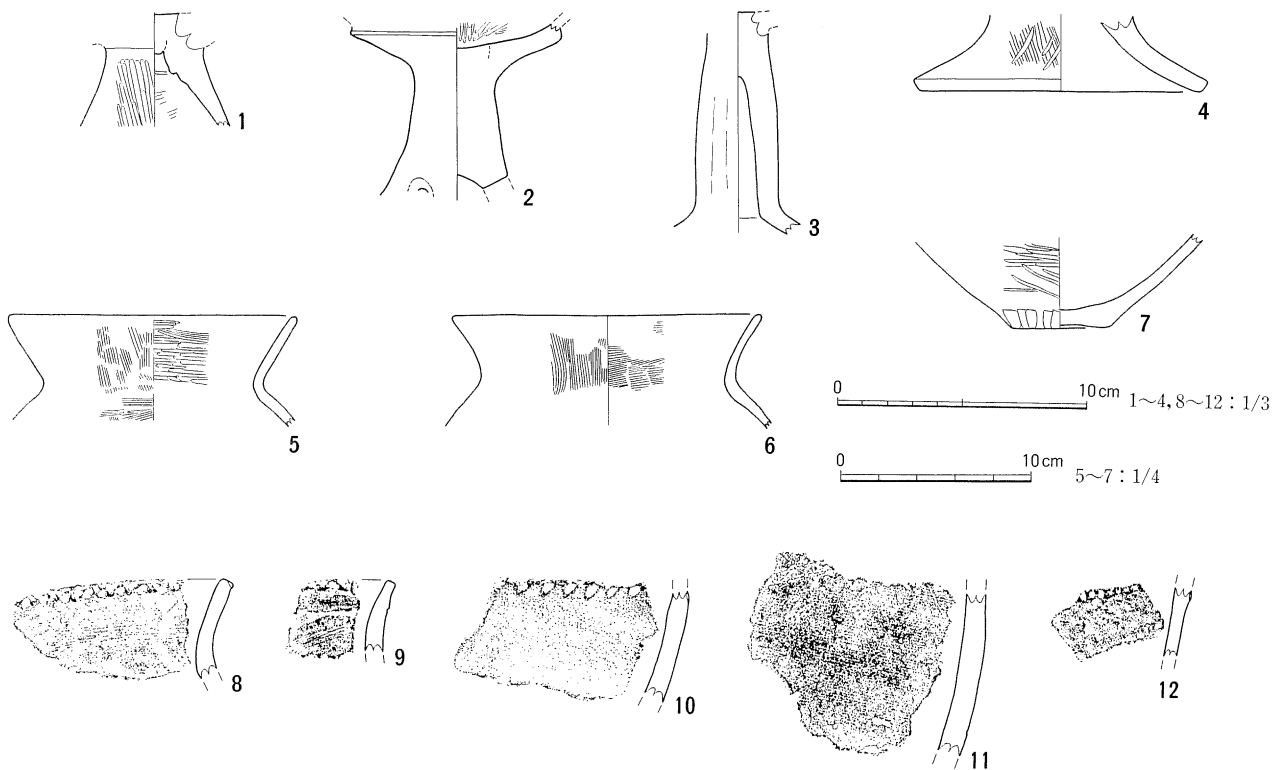
030住居跡

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	高坏			(4.4)	縦位のミガキ	ナデ 脚内部横位のハケ	
2	土師器	高坏			(6.9)	ナデ	ミガキ 脚内部ナデ	
3	土師器	高坏			(8.7)	ナデのち弱い面取り	脚内部ナデ	脚内部以外赤彩
4	土師器	高坏?		11.0	(3.0)	ハケのち斜位の弱いミガキ	横位のケズリのちナデ	
5	土師器	甕	15.0		(5.9)	縦位のハケ 横位のハケ	横位のナデのち横位のミガキ	
6	土師器	甕	16.2		(6.1)	横位のナデ 縦位のハケのち部分的にナデ	横位のナデ ナデのち横位のハケ	
7	土師器	壺		4.8	(4.9)	横位の弱いミガキ 横位のケズリ 接地面は環状	ナデ	

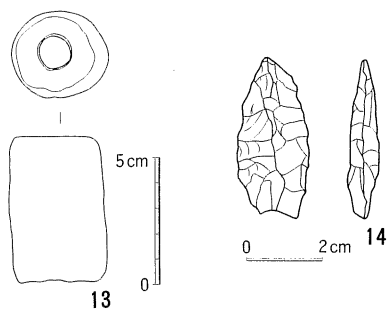


第37図 029・030住居跡実測図

遺物は図示したような物が出土している。2は高杯であろうか。杯部に明瞭な段差が認められること、脚部の透し穴から杯部との間に空間がないことが特徴的である。8～12の破片資料のうち8は外面のやや上方からの押捺、9は内側から口唇部の外角にかけての押捺である。さらに9では口唇下にゆるい段が認められる。10は器形不明であるが、水平方向の施文箇所には施文具の痕跡と思われる細



第38図 030出土土器実測図



第39図 030出土土錘・石器

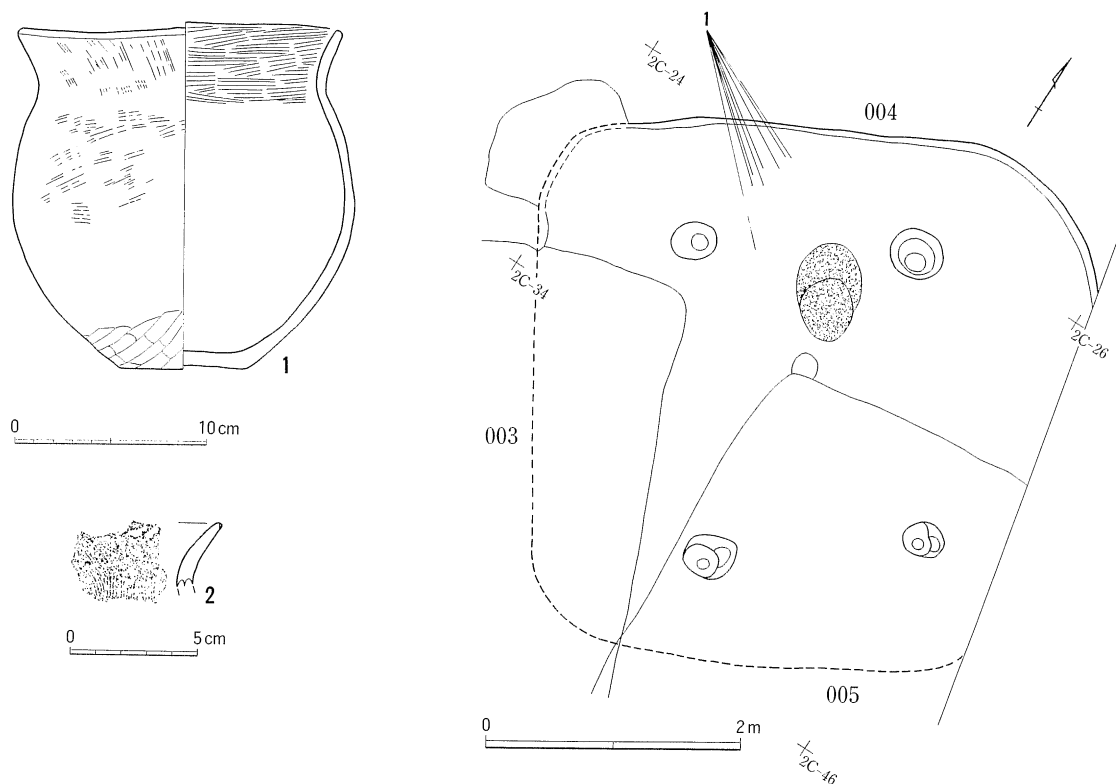
い条線が斜め方向に走っている。11は破片の上方には単節の縄文と3条の結節文が見られ、その下方の広い無文部をはさんで結節文が1条認められる。12は水平方向のやや小さい楕円の刺突が密に並ぶものである。39図に示した土錘・石器のうち、石器は玄武岩製である。今回の調査では、このような石器の出土例はこれが唯一であった。

004住居跡（第40図、図版4、13）

調査区東辺中央よりやや北寄りで検出された。西辺は003により切られ、南辺は005と重複する。南東側は現道下に及んでいる。主軸を北西に向けた。一辺約4.5mの隅円方形である。柱穴は4箇所検出されている。柱穴間の距離は主軸方向で2.5m、主軸と直交する方向で1.8mである。遺物は図示した甕が炉と北壁の間で集中して出土した。

004住居跡

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	甕	16.7	6.8	18.3	縦位のナデ 縦位のハケのち 横位のナデ ハケのち粗いミ ガキ ケズリのち粗いミガキ	ハケ ナデ	木の葉底 2883cc

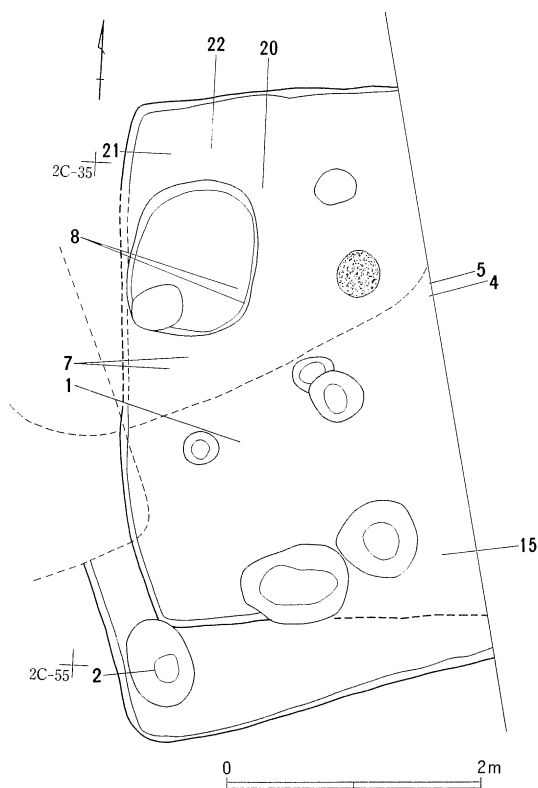


第40図 004住居跡実測図

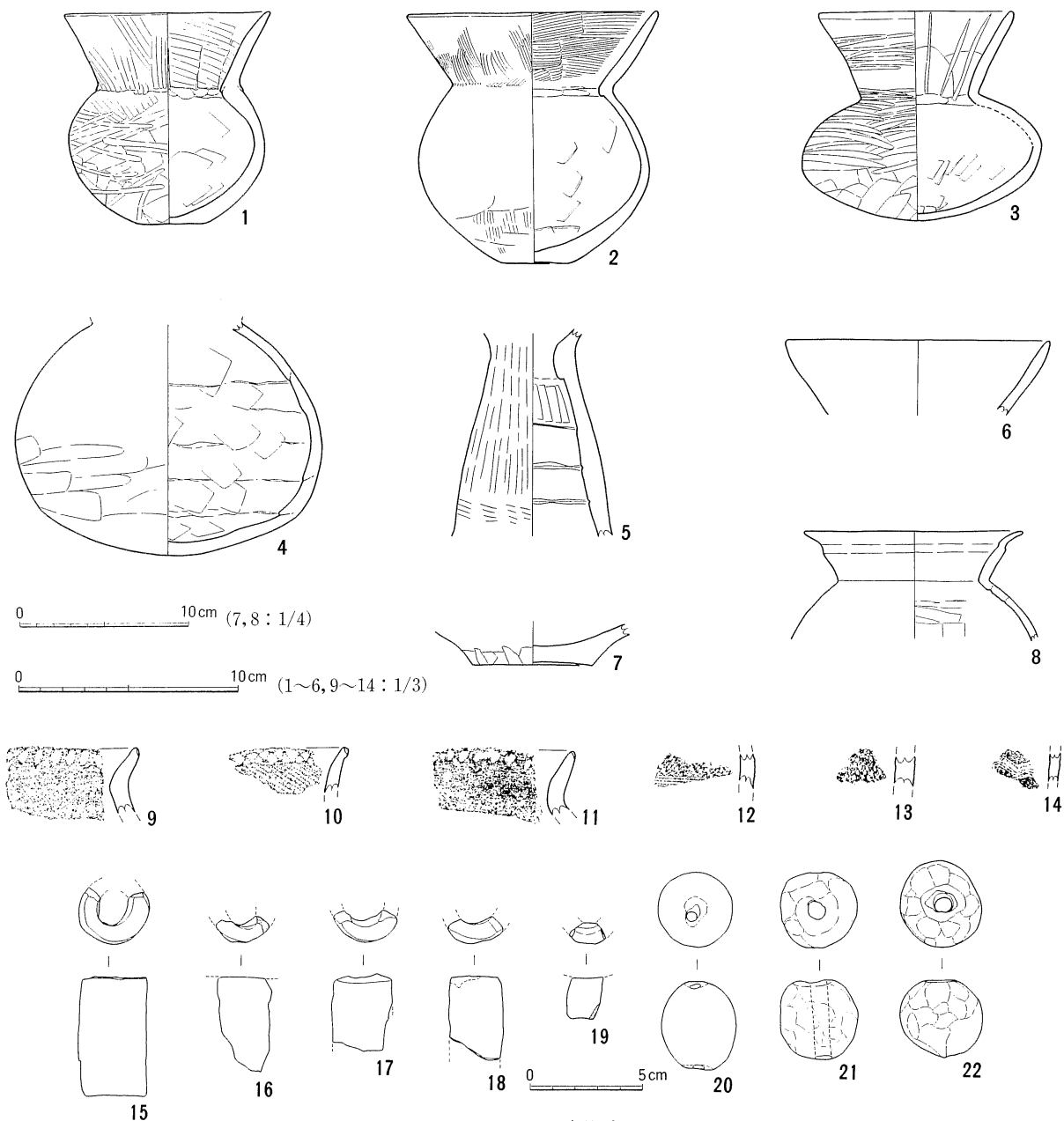
005住居跡（第41・42図、図版4、13）

004と重複して検出された。全体に掘り込みも浅く、003や004との重複により平面形の復元も不安定である。炉と思われる焼土が中央より北寄りで検出されている以外は、柱穴も良好なものは検出されなかった。南側ではさらにもう一軒の住居を思わせる掘り込みがあるが、ここでは一括して取り扱った。

遺物は図示したように、埴がやや目立つ。和泉式であろう。破片資料は9～11は刻みのある甕の口縁で、9、11は外面からの一方向のみ、10では口縁端を上下の二方向から施文している。12～14は壺の胴部で、14は櫛描きの波状文である。土鍾は他の住居跡に比べ出土量が多い。管状というより、むしろ円筒状と言うべきもの5点、卵状の1点を含め球状のもの3点である。



第41図 005住居跡実測図



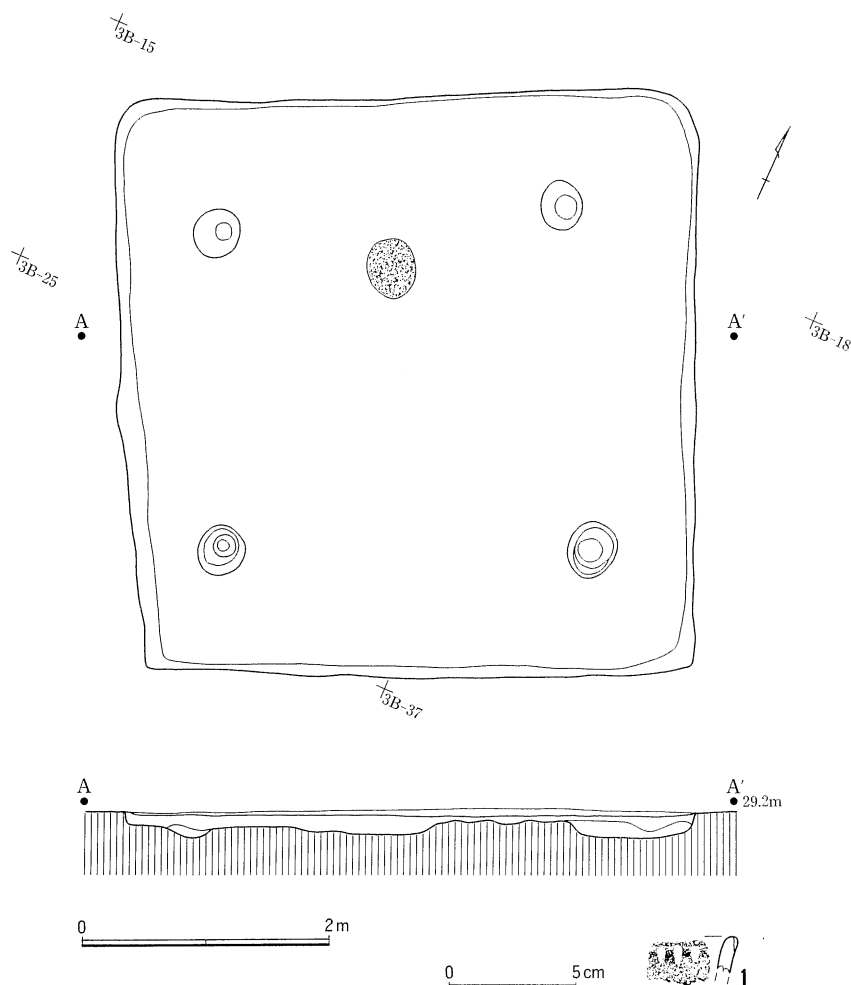
第42図 005出土遺物実測図

005住居跡

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	埴	9.3	2.9	9.5	縦位のハケのち横位のナデ 斜位のハケのちケズリのちミ ガキ	横位のハケのち横位のナデ 軽い指頭痕ナデ	
2	土師器	埴	11.1	3.0	11.3	縦位のハケのち横位のナデ ケズリ	横位のハケのち横位のナデ ケズリ	
3	土師器	埴	8.7		9.3	ケズリのち横位のナデのち横 位のミガキ	横位のケズリのち横位のナデ のち放射状に縦位のミガキ	
4	土師器	埴			(10.4)	ケズリのちナデ	ナデ 粘土紐の痕跡残す	
5	土師器	高坏			(9.3)	横位のナデ 縦位のケズリ 横位のハケ	横位のケズリ 輪積み痕残す	
6	土師器	甕	12.8		(6.5)	横位のナデ ナデ	ナデ 横位のナデ 横位のケ ズリ	
7	土師器	甕		7.2	(2.5)	ナデ 横位のケズリ 円周方 向のケズリ	ナデ	
8	土師器	壺		11.7	(3.4)	横位のナデ	横位のナデ	頸部は内湾 内外面共赤彩

020住居跡（第43図、図版23）

調査区の北寄り部分で検出された。一辺4.6 mの正方形を呈する。柱穴は4箇所検出された。柱穴間は2.5 mから3 mの間でばらついているが、東西間がやや広い。炉は北側の柱穴の中間で検出された。この住居跡からは良好な遺物の出土はなかった。確認面からの掘り込みが非常に浅いことによる。刻みのある、甕の口縁1点のみを拓影で示すにとどまる。

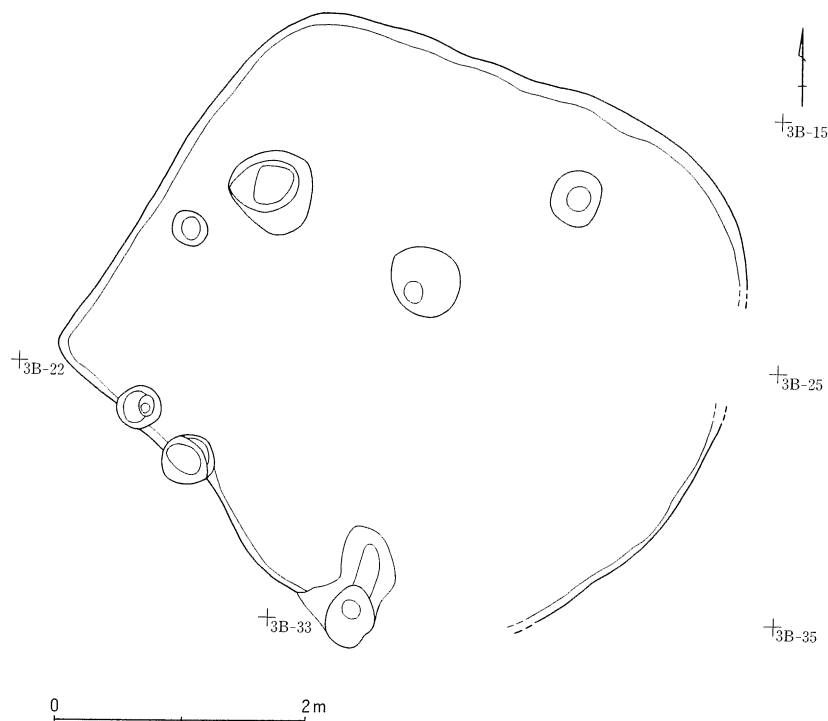


第43図 020住居跡実測図

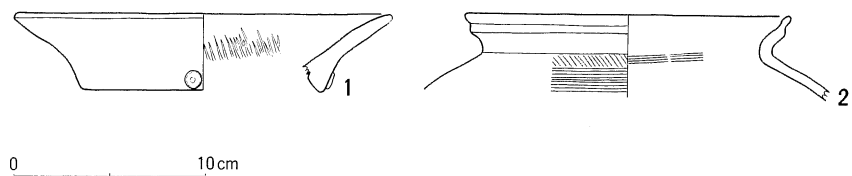
040住居跡（第44図）

調査区中央より西寄りの部分で検出された。住居跡と言うよりは、浅い不整形な落ち込みと言う方が正確かもしれない。壁の立ち上がりは緩やかで、内部には数個の小ピットがあるが、配置は不規則であり、炉や床は認められなかった。なお、覆土から図示したような遺物が出土している。

第45図1は、複合口縁の壺の口縁部である。円形付文が1箇所認められる。2はS字甕で、胴頸接合部の横位のハケも特徴的である。



第44図 040住居跡実測図



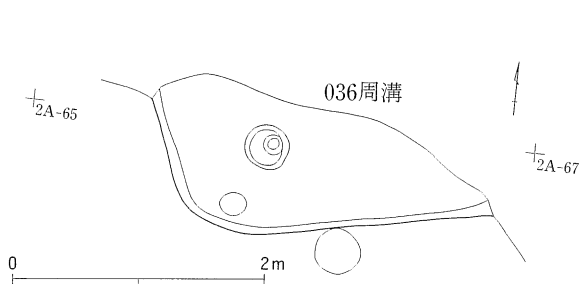
第45図 040出土土器実測図

040住居跡

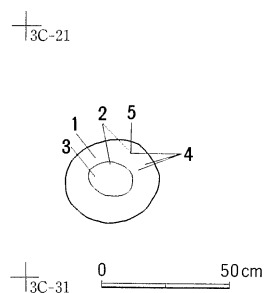
番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	壺	19.9		(4.0)	口縁端面取り 横位の弱いミガキ 横位のナデ	横位のナデ 縦位のミガキ	
2	土師器	甕	17.0		(4.3)	横位のナデ 斜位のハケのち横位のナデ 横位のハケ	横位のナデ 横位のハケ	S字甕

037住居跡（第46図、図版5）

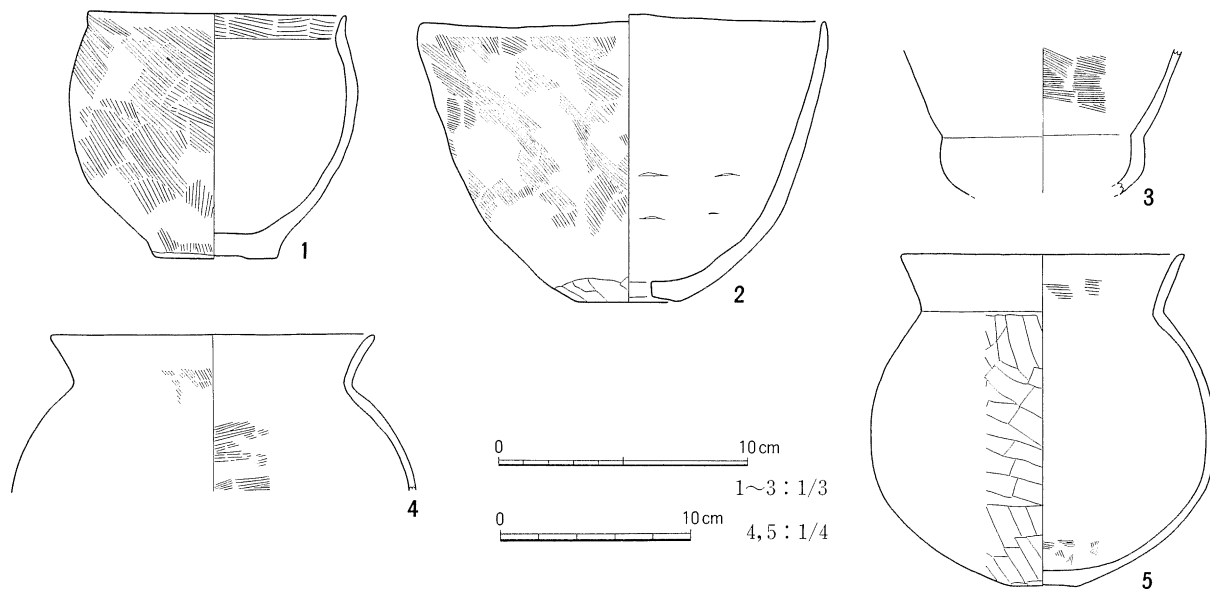
036円墳に大半を切られている住居跡である。わずかに南西隅部分を検出したに留まる。柱穴も一箇所で検出したのみである。円礫が3点集中して出土したが、性格不明である。他に良好な遺物の出土はなかった。



第46図 037住居跡実測図



第47図 060土坑実測図



第48図 060出土遺物実測図

060土坑（第47・48図、図版5、14）

調査区のほぼ中央で、図示したような土器が直径約40cmの土坑から一括して出土した。図示した遺物の2の甔の口縁をほぼ水平にした状態で置かれ、内側から他の土器が出土している。一括性の高い出土状況であった。ただし、土坑の性格は不明である。

060土坑

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	壺	10.2	4.8	9.8	斜位のハケのちナデ	横位のハケ ナデ	561cc
2	土師器	甔	15.9	3.8	11.4	ナデのちハケ 縦位のケズリ	横位のナデのち縦位のナデ	内面口縁下3cmの幅で白色の付着物 1163cc
3	土師器	埴			(5.8)	ナデ	ハケ ナデ	
4	土師器	甕	17.0		(8.4)	横位のナデ ハケのちナデ	横位のナデ ハケのちナデ	
5	土師器	甕	14.8	3.8	17.6	横位のナデ ケズリ	横位のナデ ハケのちナデ	2704cc

(3) 古 墳

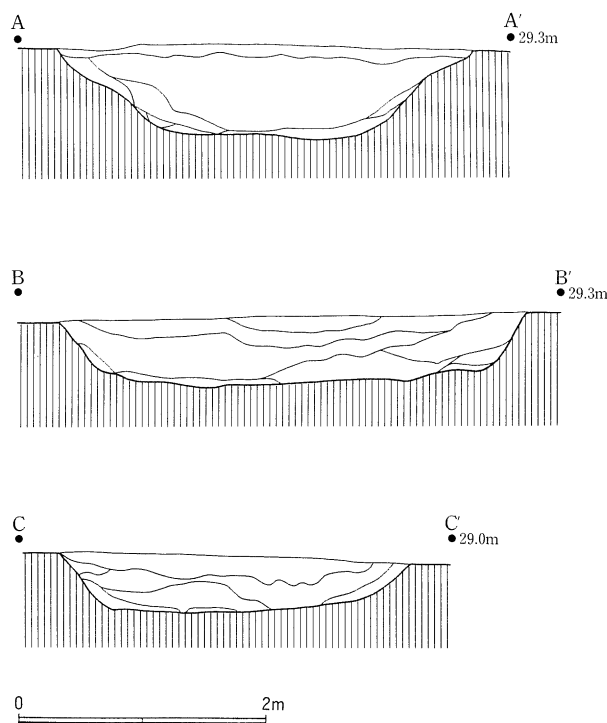
今回の調査では、5基の円墳を検出した。いずれも一部が調査区外に及んでおり、全体を把握し得たものはない。また、主体部はいずれにおいても検出されていない。

036円墳（第49図～第53図、図版6、20）

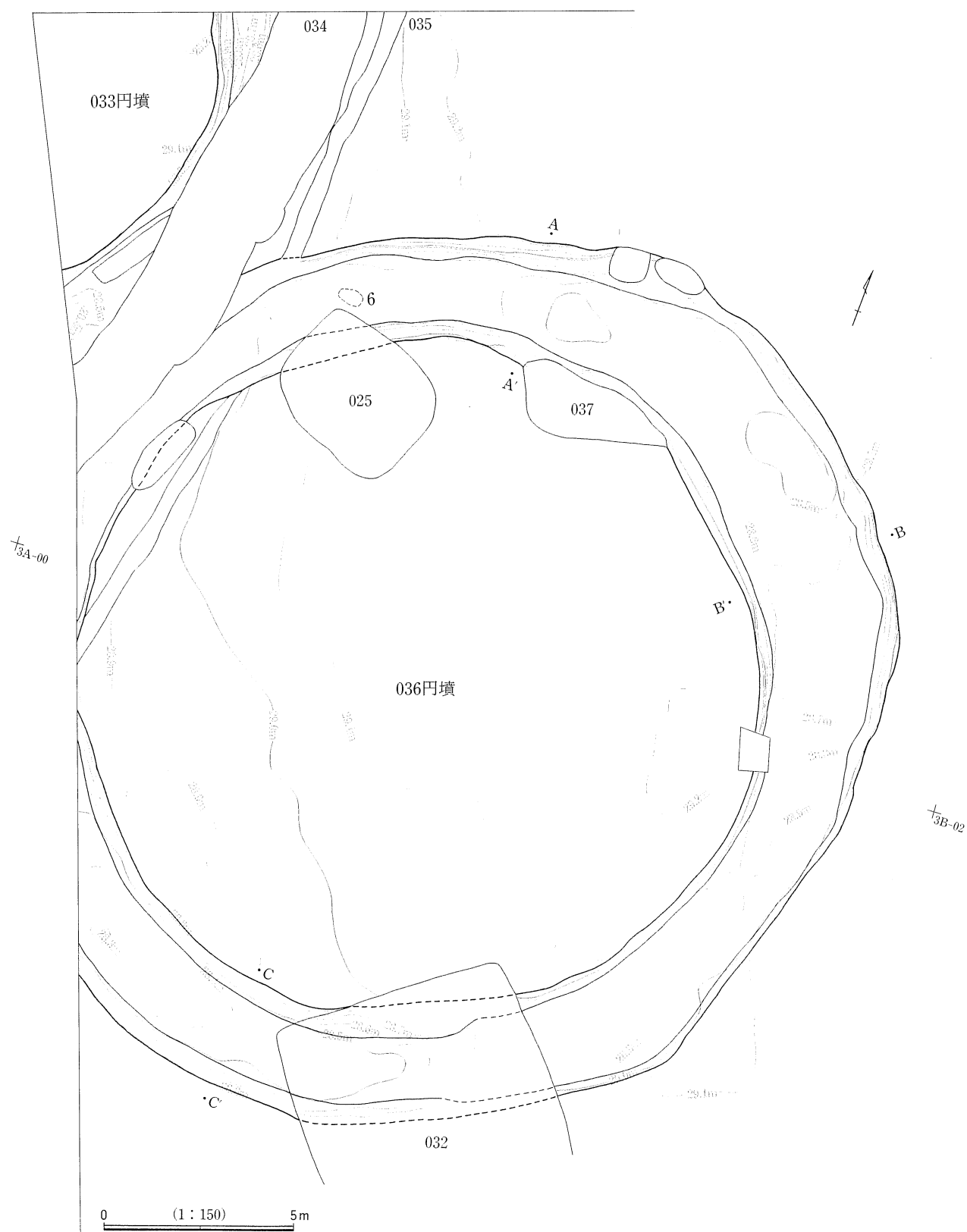
調査区の北西で検出された。西側の一部は、調査区外に及んでいるが、ほぼ全体をつかむことができた。外径約24m、内径約18mである。周溝は断面逆台形を呈し、北東および南西がやや深い。周溝の上端幅は、狭いところで約2.4m、広いところで約4.2mであるが、平均的には3mといったところである。033円墳の周溝と北西部分で重複するものであるが、当該部分を中世の溝035が通っており、二つの円墳の前後関係は不明である。

周溝から出土した遺物は図示した通りである。周溝の埋没過程での投棄遺物や後世の土の移動により近隣から移動した遺物を多く含むと考えられる。これら遺物のうち6の壺は、北側の周溝底面直上で破片が集中して出土したものが、ほぼ完形に復元されたものであり、古墳のおおまかな時期を示すものと考えられる。1の高坏は覆土中からの破片資料がほぼ完形に復元されたものである。6の壺と同様な位置付けが可能かもしれない。坏部が浅い点が特徴的である。

破片資料はいずれも弥生ないし古墳時代前期と考えられる。このうち11は広口壺の口縁であろうか、口縁上端に楕円形の施文が巡っている。施文部内には、縦横の細い条線が見られるところから、布を用いての施文であることが考えられる。第52図には土鍾をまとめてある。球状の

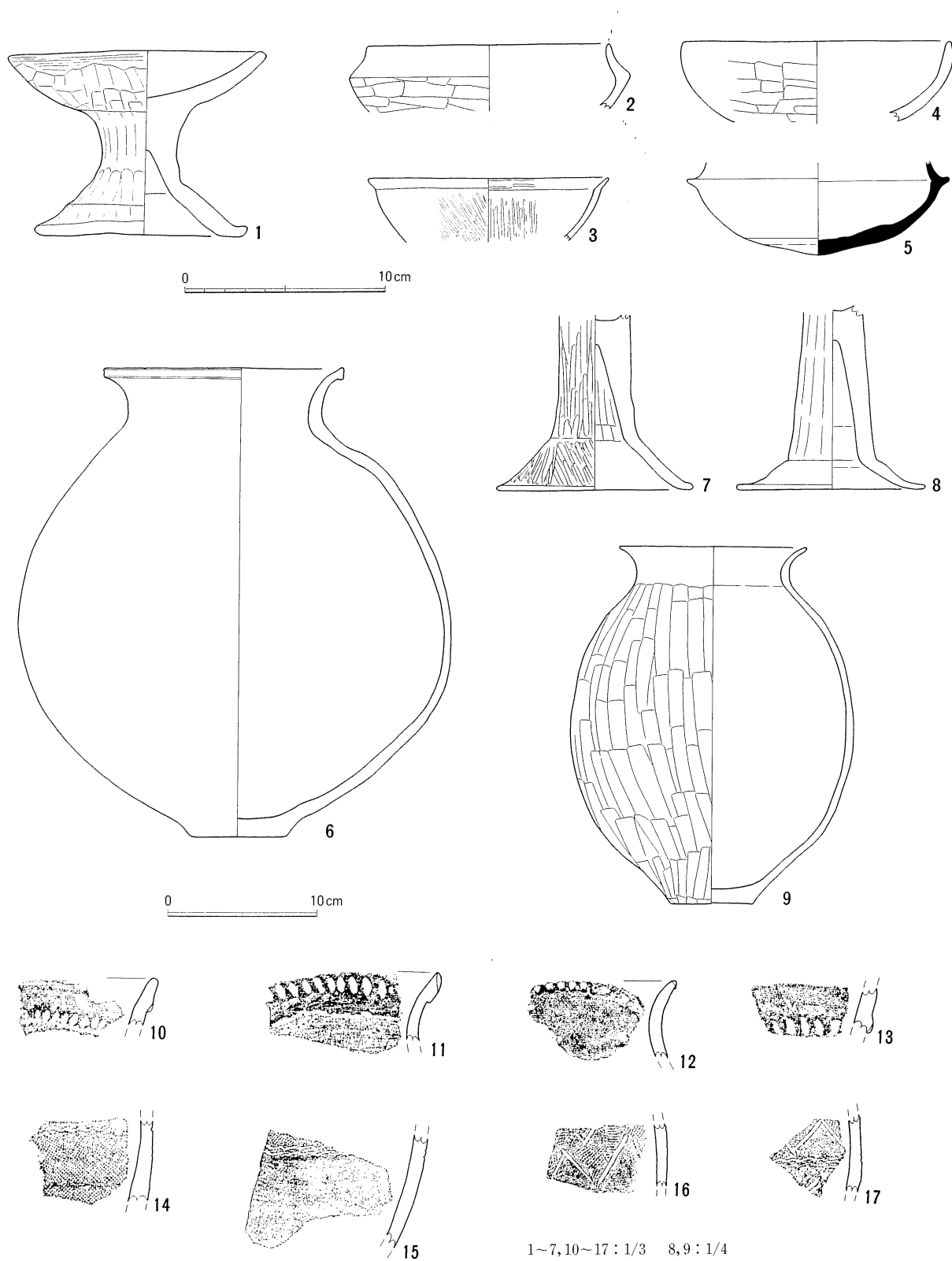


第49図 036円墳周溝土層断面

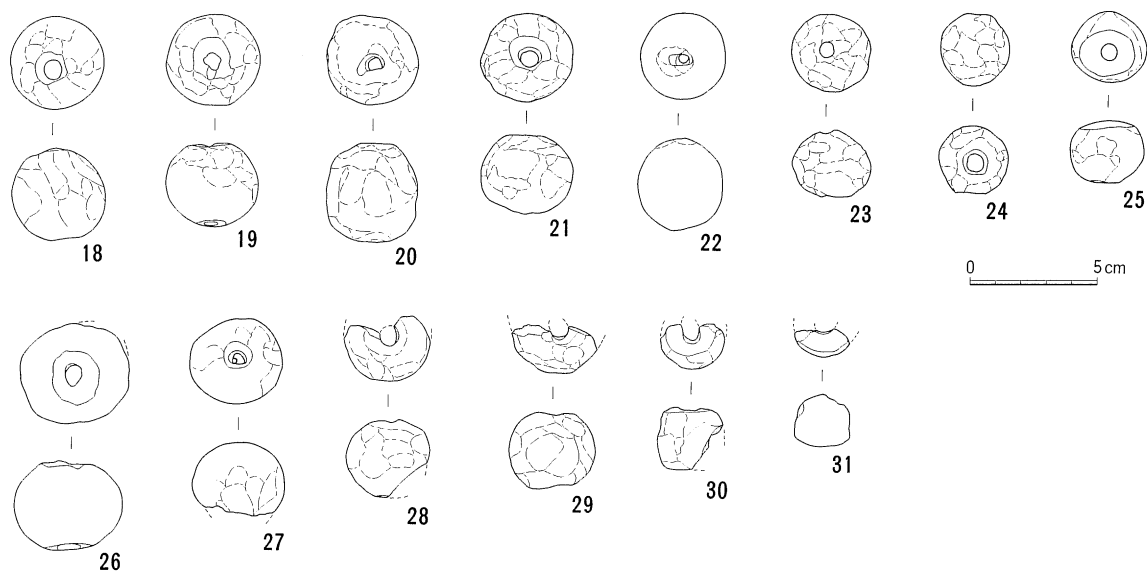


第50図 033円墳・036円墳実測図

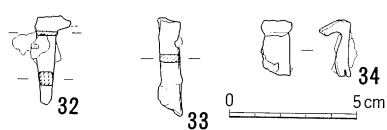
土鍾がほとんどである。他時代の遺物の混在は考えられるが、形状的にまとまりを見せるところから、一括投棄の可能性も考えられる。ただし、被葬者の生産基盤あるいは生業と直接結びつくかどうかは判断し難い。投棄者の生業に関わるものと考えておきたい。



第51図 036出土遺物実測図



第52図 036出土土錘実測図



第53図 036出土鉄製品

第53図は、鉄製品である。いずれも破損しており種類は不明瞭である。32、33は刀子かもしれない。34は上部が屈曲している。断面は長方形である。釘と考えている。いずれも木質の付着は認められなかった。

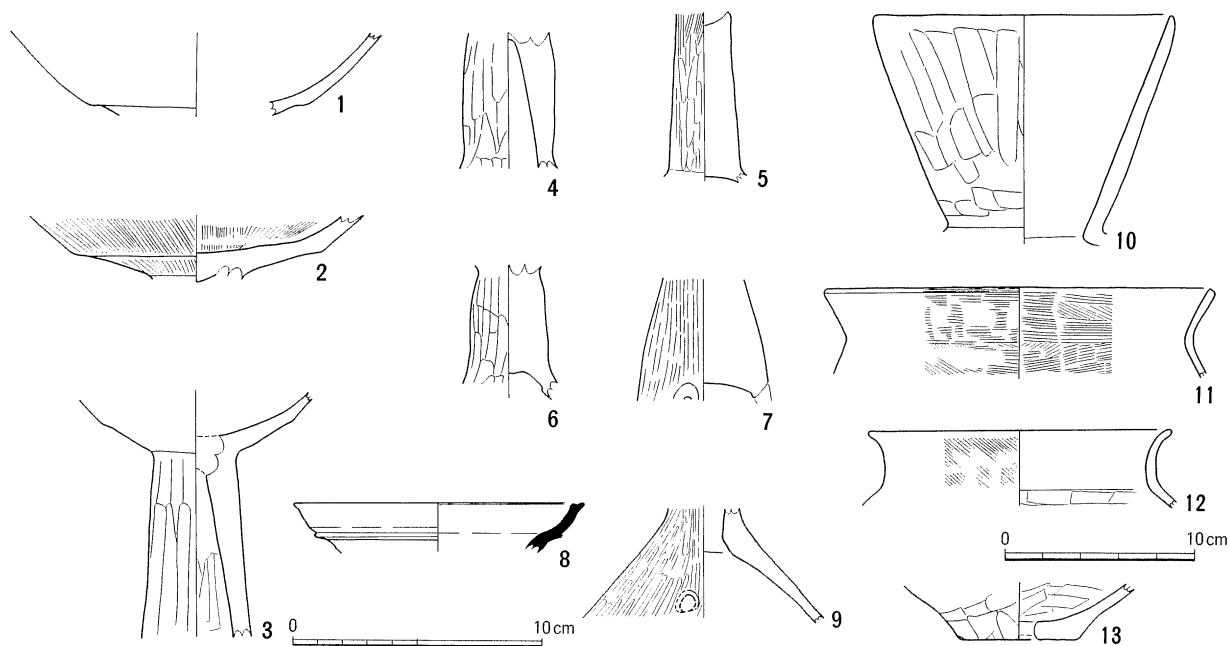
036円墳

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	高坏	12.6	10.3	9.2	横位のナデ 縦位のケズリ 緩い面取り 縦位のケズリ	横位のナデ 横位のケズリ 横位のナデ	
2	土師器	坏	11.9		(3.3)	横位のナデ 横位のケズリ	横位のナデ	内外面赤彩
3	土師器	坏	11.9		(3.2)	左傾したミガキ	縦位のミガキ	器壁は概して薄い
4	土師器	坏	13.4		(4.1)	横位のナデ 横位のケズリ	横位のナデ	内外面全面赤彩
5	須恵器	杯	(13.0)		(4.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	
6	土師器	壺	20.0	6.2	31.6	口縁上下端とも緩い面取り ナデ	ナデ	
7	土師器	高坏		9.7	(8.8)	縦位のケズリ 赤彩	横位のケズリ 横位のナデ	接合部離脱
8	土師器	高坏		9.4	(8.9)	弱い面取り	横位のケズリ 横位のナデ	
9	土師器	甕	12.5	5.6	24.0	横位のナデ 縦位のケズリ	ナデ	

001円墳（第54図～第57図、図版6、20）

調査区北縁の中央から東にかけて検出された。調査区内には、南半約2分の1がおよんでいる。外径約25m、内径約18mで、不整な円形を呈する。周溝の幅は3～4mであり、南寄りの部分で深さを増す。周溝の断面形は半月形で、下端は特に西半部で不明瞭である。周溝からの出土品は図示したように多様である。厳密な意味で古墳に伴うと言えるものを分離することは不可能である。ただ、高坏類がやや目立ち、それらは周辺の住居跡からの出土も認められないことは指摘しうる。また、甕や甔は比較的まとまって周溝の北寄り部分で覆土の上層から出土したものであるが、周溝のある程度の埋没後に一括して投棄されたものと考えられる。

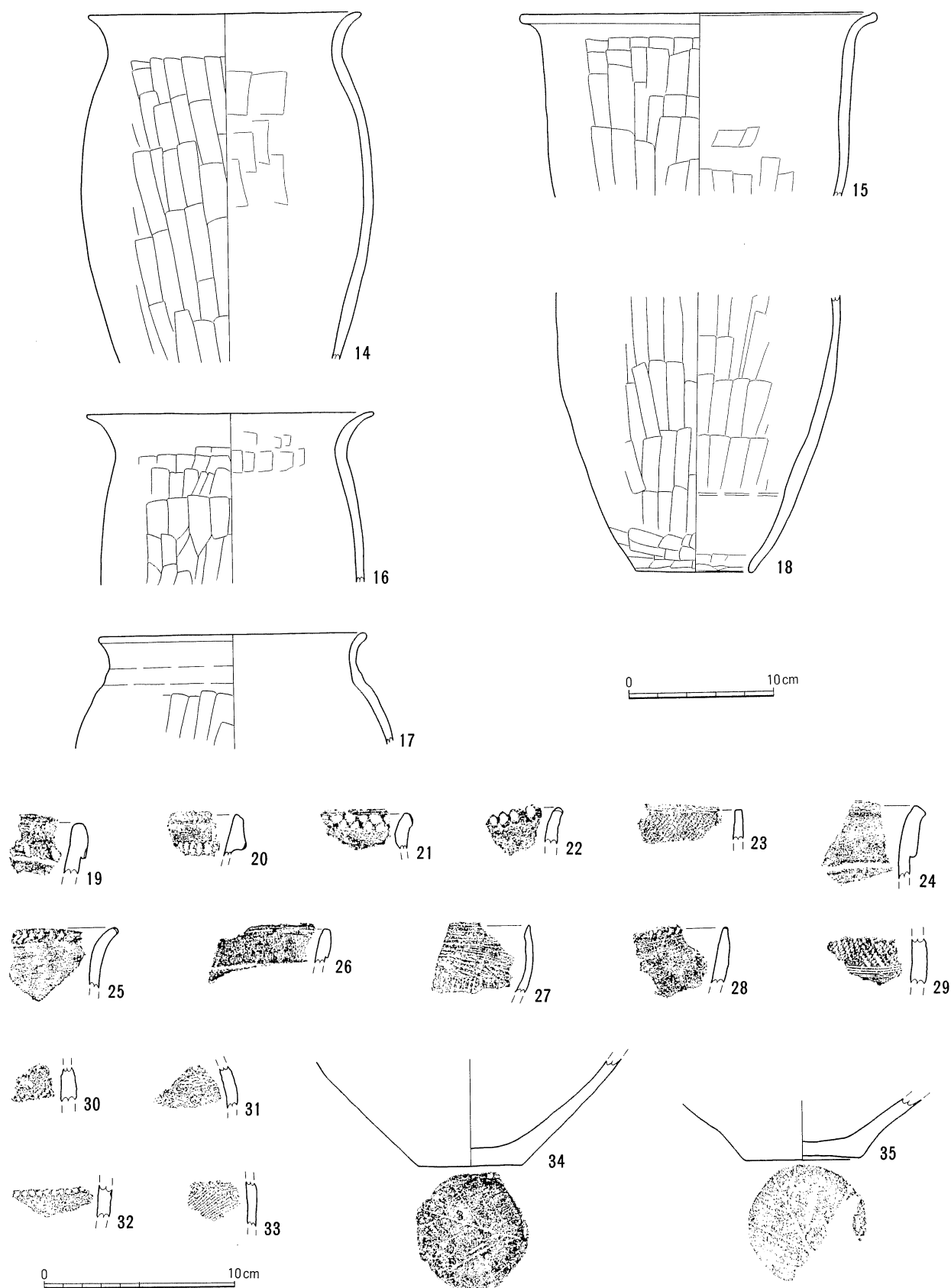
第57図に示したように、土鍾がまとまって出土している。036程には完形品は多くなかった。形状的には球状の多い点では、036と共通する。重量も本来は大きなバラツキはなかったのではな
いかと考えられる。



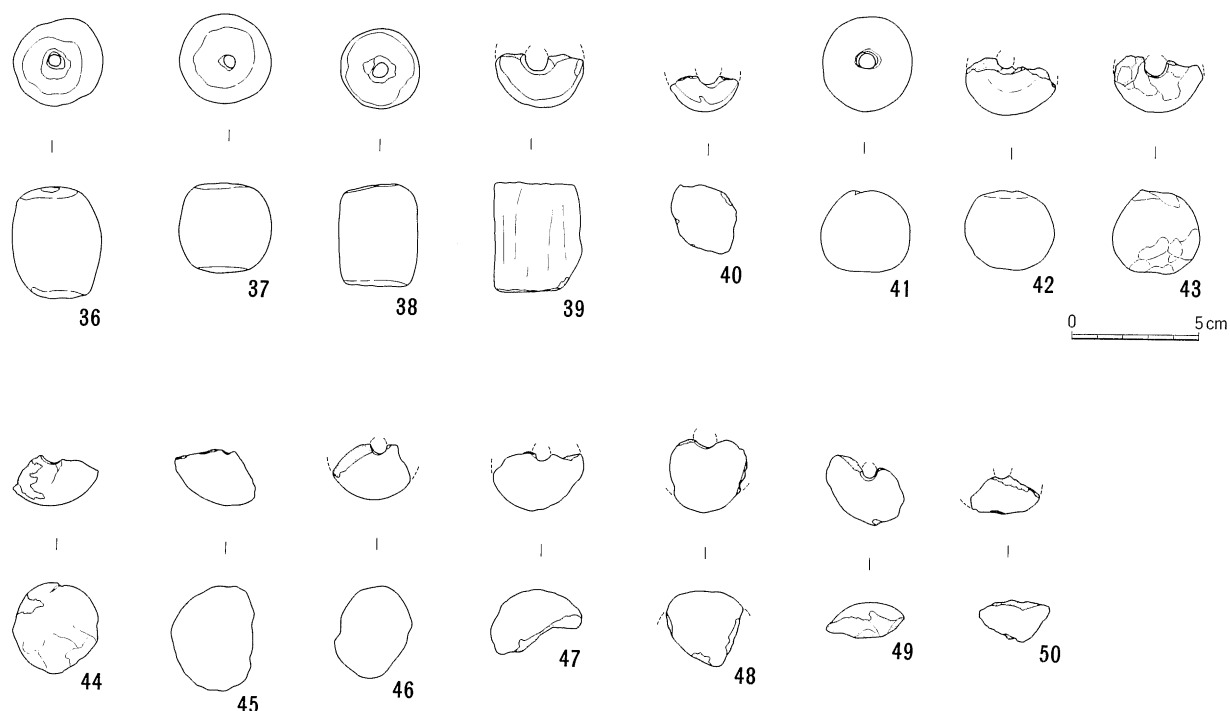
第55図 001出土遺物実測図（1～10：1/3、11～13：1/4）

001円墳

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	高坏			(3.3)	整形不明瞭	弱いミガキ	内外面全面赤彩
2	土師器	高坏			(2.7)	斜位のミガキ	放射状のミガキ	内外面全面赤彩
3	土師器	高坏			(9.8)	横位のナデ 縦位のケズリの ちナデ	整形不明瞭	内外面全面赤彩
4	土師器	高坏			(5.3)	縦位のケズリ ナデ	ケズリ	
5	土師器	高坏			(6.7)	縦位のハケ 縦位の弱いミガキ	ナデ	坏部離脱
6	土師器	高坏			(5.3)	縦位の弱いナデ 縦位のケズリ 赤彩	横位のケズリ	
7	土師器	高坏			(4.9)	縦位の弱いミガキ ナデ	ナデ	透かし穴は本来 3箇所
8	須恵器	甗	11.7		(1.8)	ヨコナデ	ヨコナデ	
9	土師器	器台			(4.2)	縦位のミガキ	横位のケズリ 横位のナデ	
10	土師器	埴	11.7		(9.0)	縦位のナデ 横位のナデ	横位のナデ	内外面全面赤彩
11	土師器	甗	20.6		(5.0)	横位のハケ 斜位のハケ	ハケ	
12	土師器	甗	15.7		(4.0)	横位のハケのちナデ	横位のハケのちナデ横位のケ ズリ	
13	土師器	甗		6.1	(3.2)	横位のケズリのち粗いナデ 不整方向のナデ	横位のケズリ	
14	土師器	甗	18.6		(24.0)	横位のナデ 縦位のケズリ	横位のケズリ ナデ	
15	土師器	甗	24.4		(12.6)	横位のナデ 縦位のケズリ	ナデ 縦位のケズリ	
16	土師器	甗	19.6		(11.6)	横位のナデ 縦位のケズリ	ナデ 横位のケズリ	
17	土師器	甗	18.2		(7.8)	横位のナデ 縦位のケズリ	ナデ	
18	土師器	甗		7.8	(19.6)	縦位のケズリ 横位のケズリ	縦位のケズリ ナデ 横位の ケズリ	



第56図 001出土遺物実測図(2)



第57図 001出土土錘実測図

044円墳・058土坑（第58・60図、図版6）

調査区東辺の南寄り部分で検出された。東半は、調査区外の現道下に及んでいる。外径約11m、内径約9mである。周溝幅は、0.7～1.2mで、北寄り部分および南寄り部分でやや掘り込みが深い。相対的な規模を反映して、深くて30cm、浅くて10cmである。なお、現道に平行するように溝状の落ち込みが検出されており、さらに、周溝の北端に近い部分では、住居跡の一部となる可能性のある、丸みのある方形の遺構058が検出されている。この遺構に関しては良好な床面は検出されなかった。

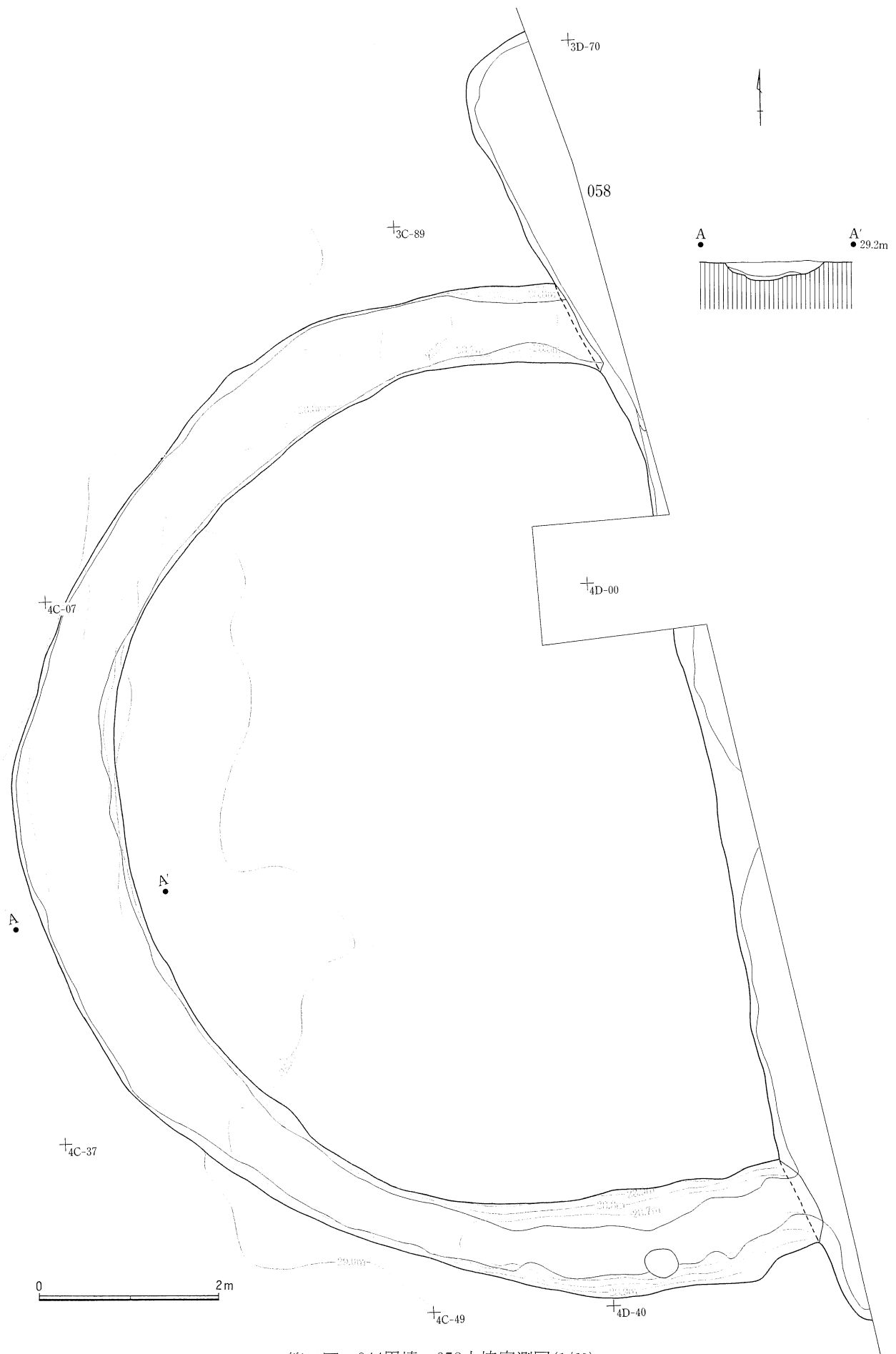
第60図に示した遺物は、いずれも本来この遺構に伴うものとは判定し難い。ただし、058からは、鉄製品がまとまって出土しており、7のような細い管状の土錘も含むところから比較的新しい時期の遺構である可能性はある。今回の調査全体の中で考えると中世の所産である可能性も考えられるが、ここではその可能性の指摘に留める。

044円墳

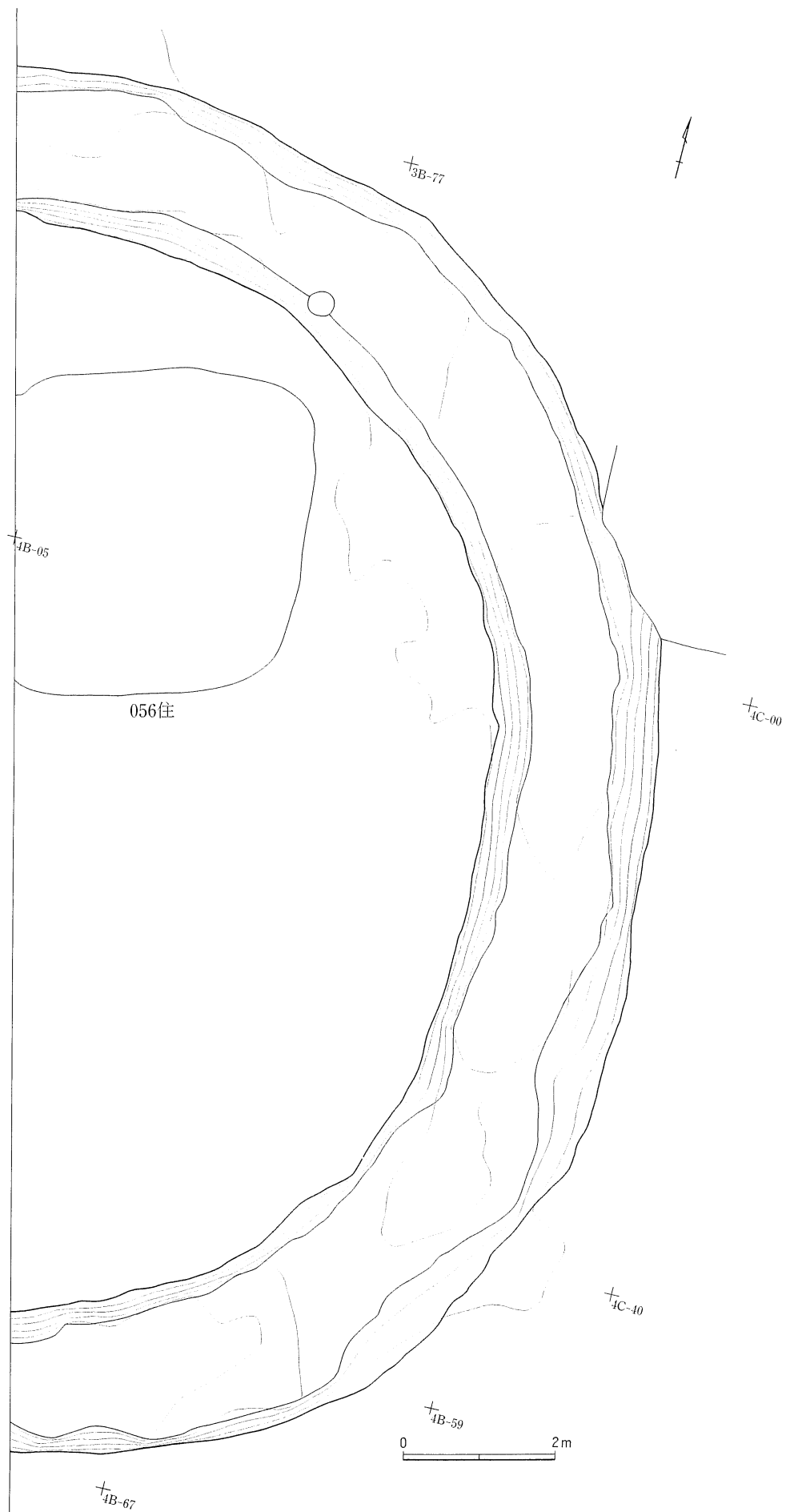
番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	甕	17.6		(5.2)	ハケのち部分的に横位のナデ	ハケのち横位のナデ 横位のケズリのちナデ	口縁付近に細かい擦痕あり
2	土師器	甕	19.9		(3.2)	口縁端部面取り 横位のナデ ハケ	横位のハケ ナデ	

045円墳（第59・61図、図版6）

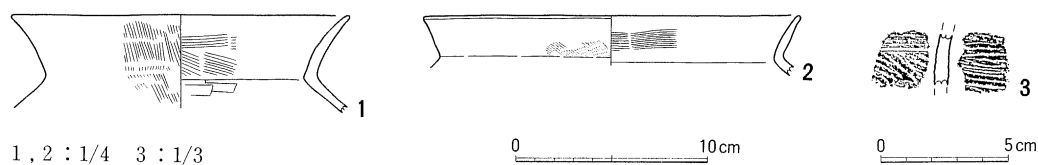
調査区西辺の南寄り部分で検出された。東半約2分の1の調査となった。外径約18m、内径約15mである。周溝幅は2～2.4mである。周溝の断面形は半月形と言ってよく、下端は必ずしも明瞭ではない。周溝の深さは、東側が相対的に深く約40cm、それ以外で20～30cmである。



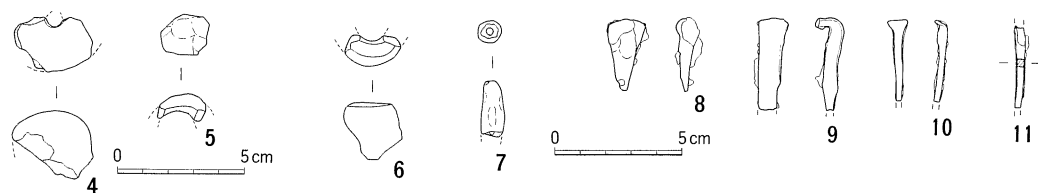
第58図 044円墳・058土坑実測図(1/60)



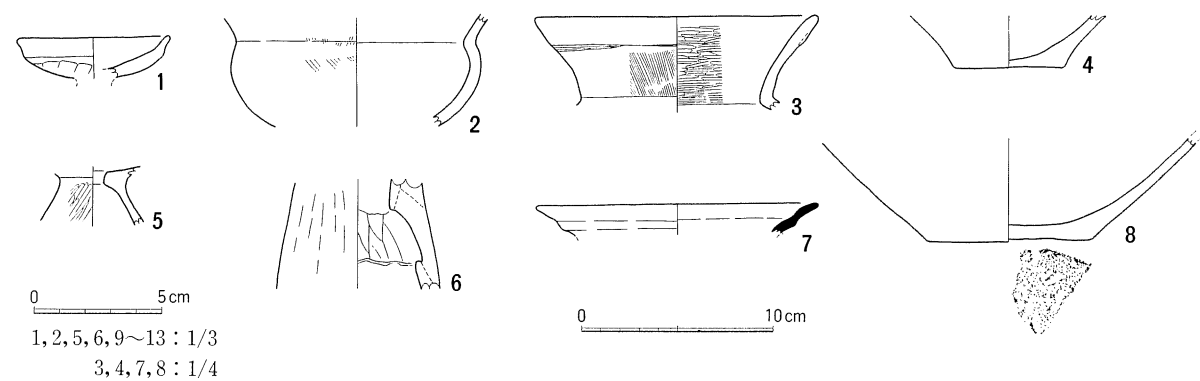
第59図 045円墳実測図 (1/80)



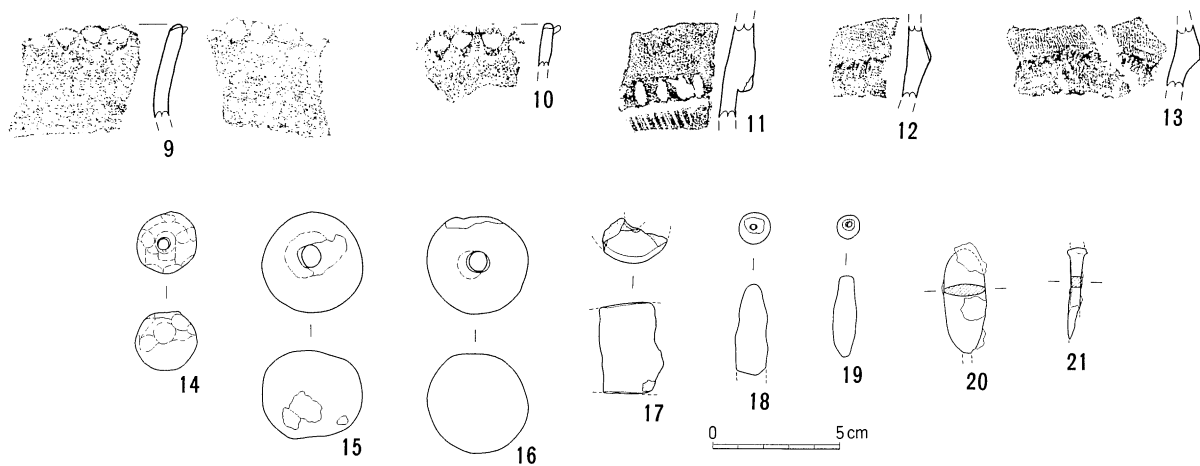
1, 2 : 1/4 3 : 1/3



第60図 044・058出土遺物実測図 (1～5 : 044、6～11 : 058)



1, 2, 5, 6, 9～13 : 1/3
3, 4, 7, 8 : 1/4



第61図 045出土遺物実測図

第61図は045出土遺物であるが、種々雑多とでも言うべき内容であり、本来伴うものを分離できるものではない。5は器台の一部であるが器壁が極めて薄いという印象をもつ。8は拓影でもわかりづらいかもしれないが、底面にもハケメが認められるものである。破片資料のうち11は複合口縁の壺であろう。口縁下端を巡る刻み内部には水平方向の細かい条線が認められる。ハケ状工具を用いて施文

したと考えられる。土錘は6点出土している。球状、円筒状、管状とややまとまりに欠ける。18・19などの管状のものは、重量的にも軽く、相対的に新しい時期の産物と考えるべきであろう。鉄製品は、鍬と釘が出土している。鍬は長さ4.2cm、幅1.7cmの柳葉型である。

045円墳

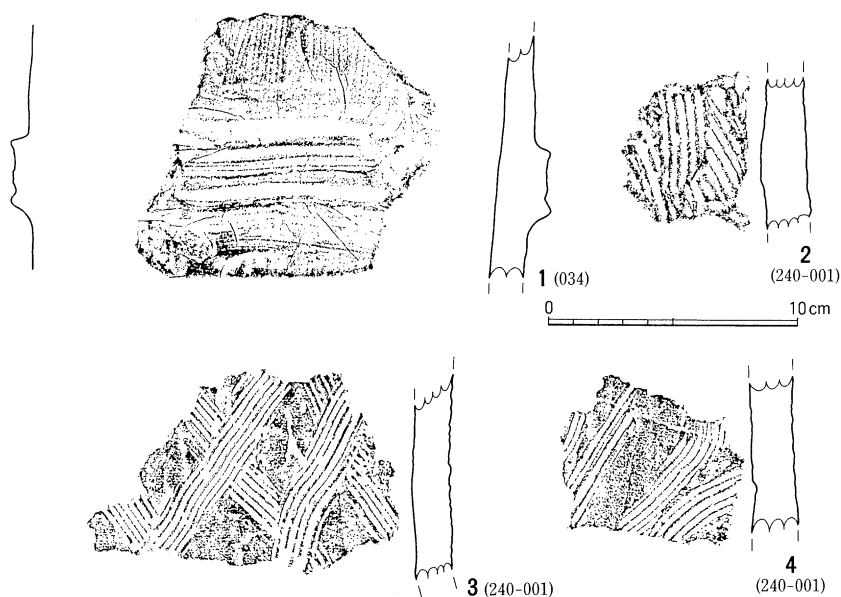
番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	器台	5.8		(1.6)	横位のナデ ケズリ	横位のナデ	
2	土師器	器台			(2.5)	縦位のミガキ	ナデ	器壁は概して薄い
3	土師器	壺	14.8		(5.0)	横位のナデ 縦位のハケ ハケのちナデ	横位のナデ 部分的にハケ	
4	土師器	甕		5.7	(2.8)	ナデ 黒斑あり	ナデ	
5	土師器	埴			(4.5)	ナデ 部分的にハケ赤彩	ナデ	
6	土師器	高坏			(4.4)	緩い面取り	斜位のナデのち縦位のナデ 脚内部横位のナデ	
7	須恵器	甌	10.0		(1.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	
8	土師器	壺?	14.8		(1.6)	横位のナデ	横位のナデ	内外面全面赤彩

033円墳（第50図）

調査区の北西隅で検出された。周溝の大半を034溝に切られており、残存部分は極めて限定される。規模等も推測する材料にかける。036よりは、やや小振りといったところであろう。図示しうる遺物の出土はなかった。

(4) 円筒埴輪（第62図、図版21）

今回の調査において、古墳に伴わないが円筒埴輪が数点出土している。1は、比較的幅の広いタガが一条巡っている。タガ全体は凹形だが、その下端は稜をもって、その部分だけは断面三角形を呈している。外面はタテハケにより、のちにタガを巡らせ、ヨコハケを施している。ヨコハケはタガの凹面にも認められる。内面は横方向のケズリが認められるのみである。全体に黄色味を帯び、砂っぽい



第62図 円筒埴輪実測図

質感がある。2は、断続的な縦あるいは斜め方向のハケが認められる。内面は横方向のケズリが認められる。橙色を呈し、焼成はやや甘い感がある。3は、格子状に斜め方向のハケを施す特徴的なものである。外面の一部に縦方向に面取り風の整形が認められる。内面は横方向のケズリである。4は、3に類似した斜め方向のハケが認められるものであるが、この遺物では格子状を呈する部分はない。3、4ともに橙色を呈し、良く焼け締まっている。これらと同様な円筒埴輪は、千葉県教育委員会による椎津城跡の確認調査に際して出土している。類例については不明であり、今後の課題として残しておきたい。椎津城の築造にさいして、前方後円墳である外郭古墳を改変したとの伝承もあり⁽¹⁾、これら埴輪が同古墳に伴うものであった可能性がある。

- (1) 椎津城跡の発掘調査は、昭和46年に伊禮正雄氏を団長として実施されたのが、最初である。この時の調査の具体的な成果は残念ながら報告書からは読み取り難く、わずかに同報告書の末尾に、古墳を改変して廓とした旨の記載を認めるのみである。なお、同報告書の大半は、軍記類における武田氏あるいは足利義明を巡る動向の記述に終始している感がある。当時の城廓研究のオーソドックスなあり方かも知れないが、素直な感想を述べさせてもらうなら、あまりに軍記に迎合しすぎているという感想をもつ。物語に不可欠な虚構性をどう処理するかといった視点が欠落しているといわざるを得ない。

伊禮正雄『椎津城の歴史－本丸と内濠の試掘－』市原市教育委員会 1973

(5) 古墳時代後期～平安時代

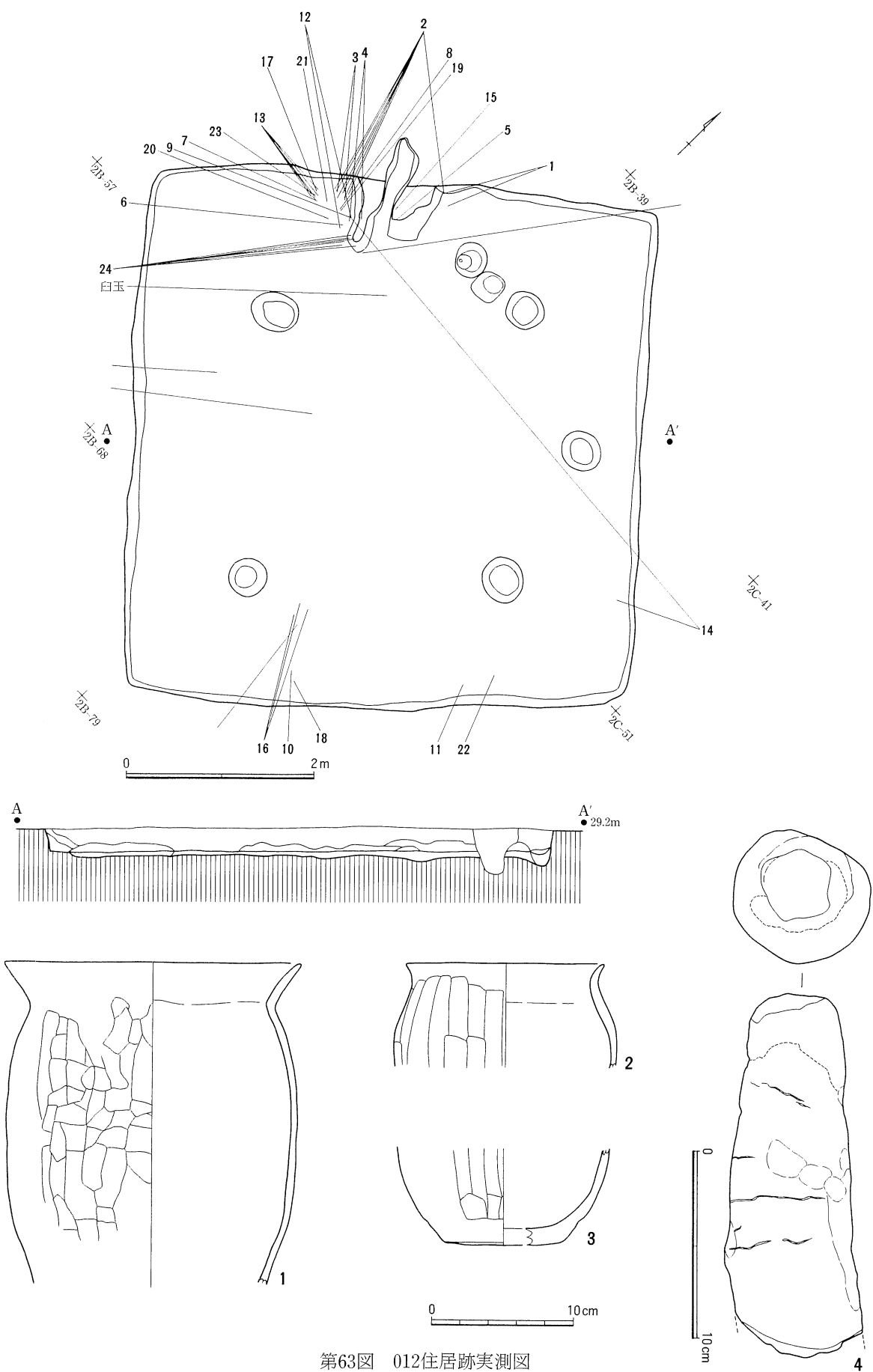
住居内にカマドを有するものを以下にまとめて報告する。古墳時代前期に比べて軒数は少なく、時代的には古墳時代後期から平安時代にかけてのものとなる。近接する茶ノ木遺跡の盛期と重複する時期でもあり、適宜同遺跡の成果を援用しつつ記述を進めることとする。

012住居跡（第63図～第65図、図版6、17、18）

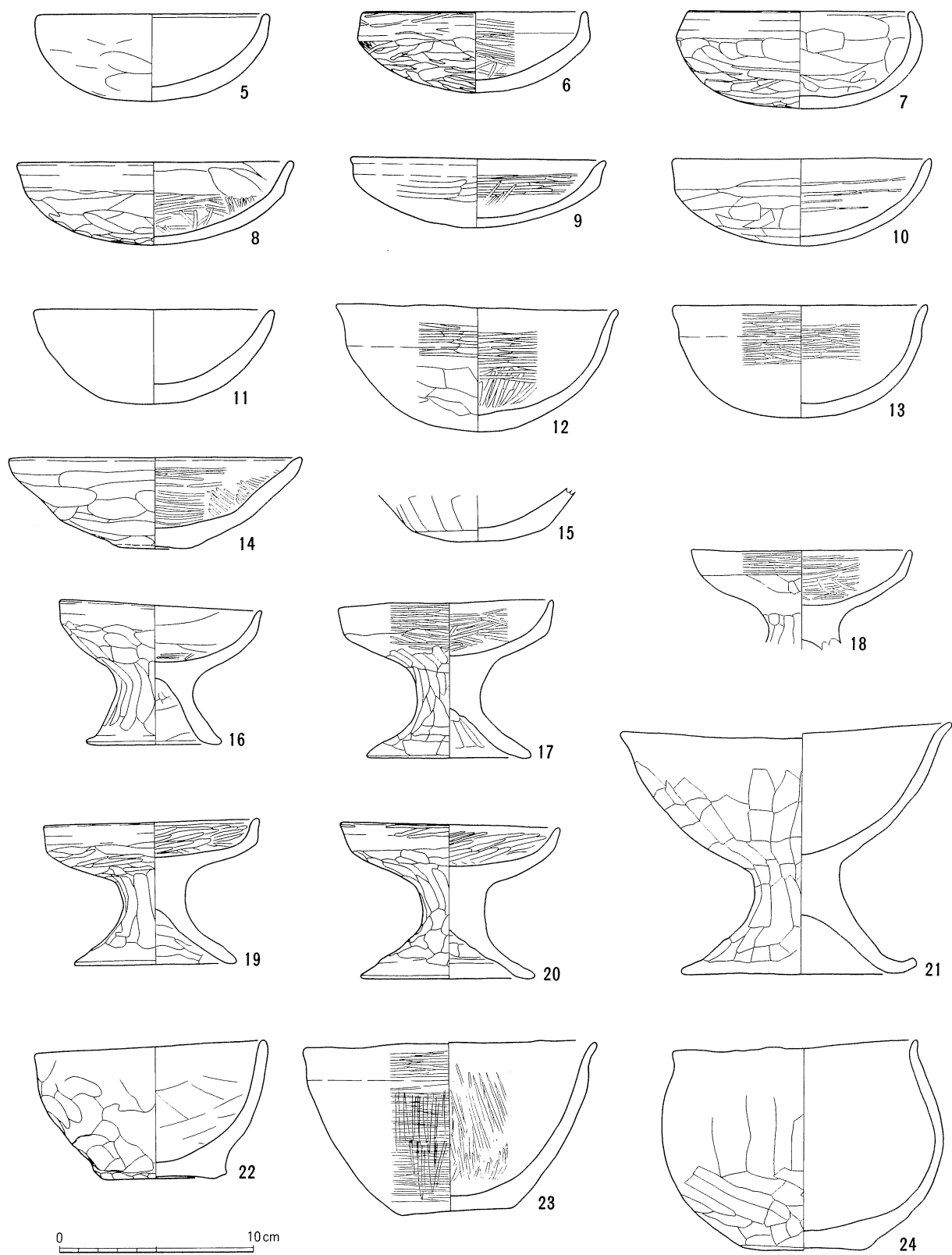
調査区中央より北寄りの部分で検出された。一辺5.4mのほぼ正方形を呈する。主軸は北東に向き、北西辺の中央にやや長い煙道のあるカマドが付属する。カマドの右袖は、後世の細い溝状遺構により攪乱を受け、一部欠失している。柱穴は4箇所検出され、各柱穴間は2.7mで均一である。カマドの左袖の外側から比較的多くの遺物を出土している。完形品も多い。坏・高坏が多く、鉢、甕支脚を含む。甕はいずれも口縁に最大径があり、頸部はくの字状である。整形は縦方向のケズリである。これら特徴は当該期の他の遺構出土の甕全般にわたり共通する。坏は模倣坏、丸底の坏共にあるが、量的には模倣坏が多い。高坏は、坏部口縁が直立するもの、やや外反するものがあり、底部は丸底ないし平底である。

これら遺物の様相は、茶の木遺跡における遺跡における8期に相当するのではないかと考えられる。ちなみに、茶の木遺跡においては、第8期に対して7C初頭という年代観が与えられている。

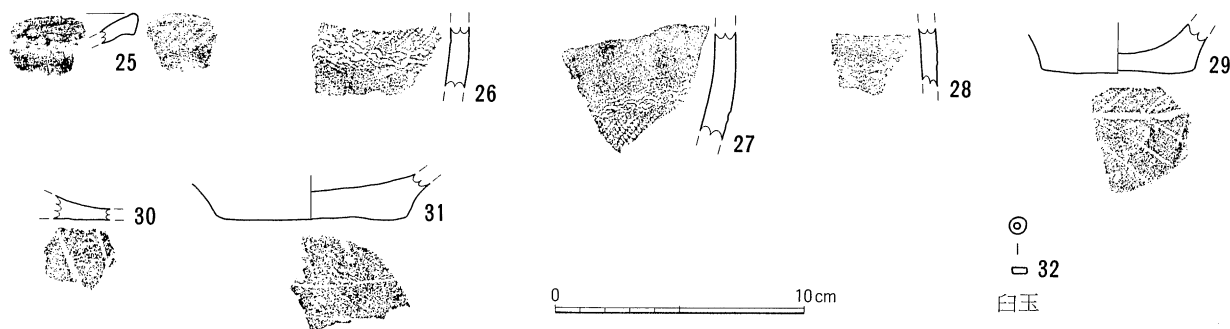
第65図に示した遺物のうち32は滑石製の臼玉である。25～28は前代までの壺類、29～31はいわゆる木の葉底である。



第63図 012住居跡実測図



第64図 012出土遺物実測図



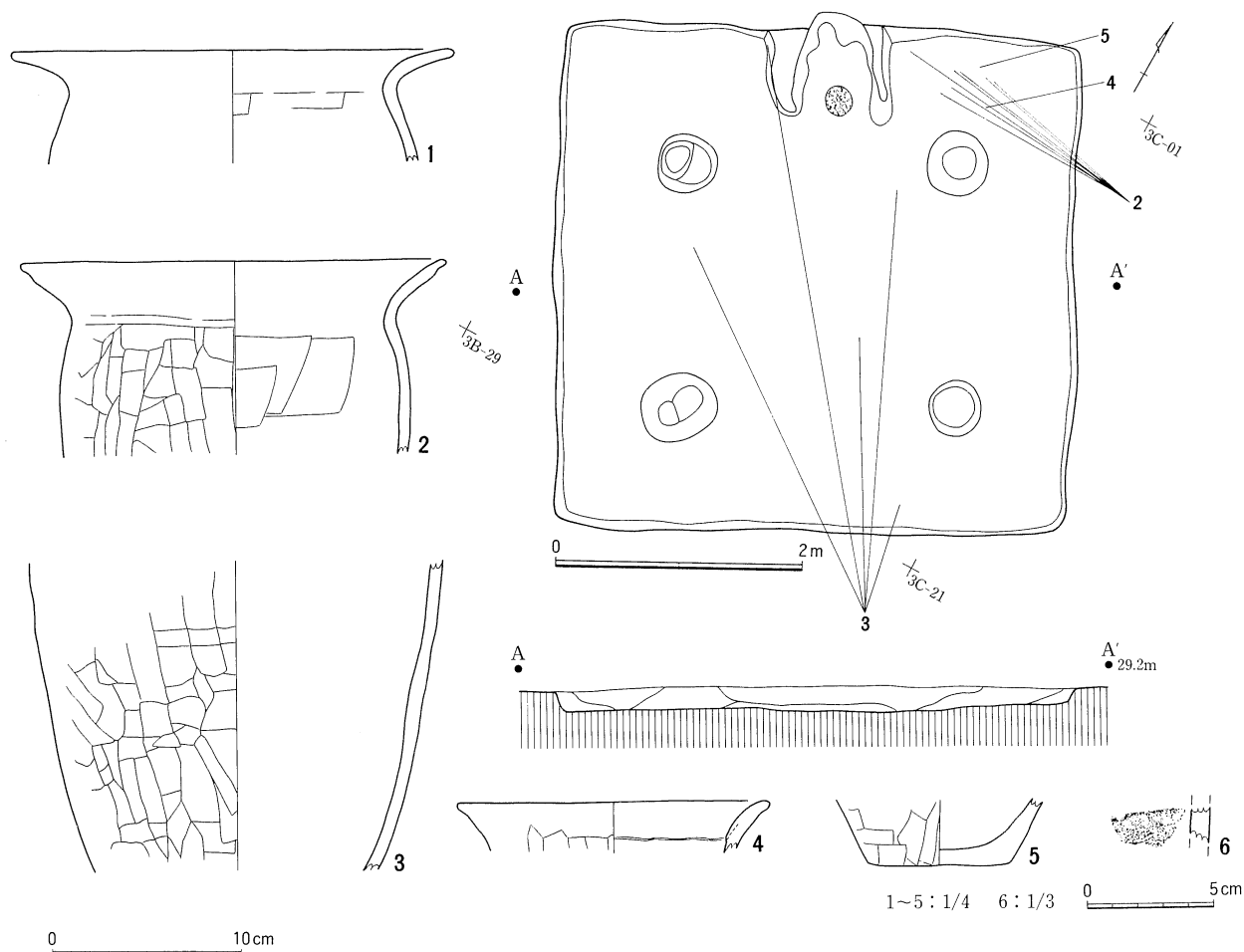
第65図 012出土土器拓影

012住居跡

番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	甕	20.6		(22.8)	横位のナデ 継続的な縦位のケズリ	横位のナデ 頸部に緩い稜線あり	(5919cc)
2	土師器	甕	13.8		(7.4)	横位のナデ 縦位のケズリ	横位のナデ 部分的に稜線あり 横位の強いナデ	
3	土師器	鉢?		8.0	(6.9)	縦位のケズリ ナデ	ナデ	
4	土師器	支脚			(19.2)			部分的に灰褐色で硬化
5	土師器	坏	11.5		4.4	ヘラケズリ	ナデ	器面荒れている
6	土師器	坏	11.2		4.1	横位のナデのちミガキ ヘラケズリのちミガキ	ミガキ	
7	土師器	坏	11.2		4.9	ナデ ヘラケズリのち部分的にミガキ	ナデのちミガキ	
8	土師器	坏	13.8		4.2	ナデ ヘラケズリ	ミガキ	
9	土師器	坏	12.7		3.5	横位のナデ 横位のケズリ	横位のミガキ	口縁部やや肥厚する
10	土師器	坏	12.6		4.6	横位のナデ 円周方向のケズリ 弦方向のケズリ	横位のナデのち部分的に横位のミガキ	
11	土師器	坏	12.0		4.8			器面荒れており整形不明瞭
12	土師器	坏	14.1		6.1	横位のミガキ 横位のケズリ 底部付近磨耗により不明瞭	横位のミガキ 放射状のミガキ	
13	土師器	坏	12.8		5.7	横位のミガキ 稜線は緩い	横位のミガキ	
14	土師器	坏	14.7	3.5	4.6	ナデ ヘラケズリ	ミガキ	
15	土師器	鉢?		2.3	(2.4)	横位のケズリ 円周方向のケズリ	ナデ	
16	土師器	高坏	10.1	6.3	7.0	ナデ 横位のヘラケズリ 縦位のヘラケズリ ナデ	ナデのちミガキ ヘラケズリ	
17	土師器	高坏	10.5	8.1	7.8	横位のミガキ 縦位のケズリ 横位のケズリ	横位のミガキ 横位のナデ 横位のケズリ	黒褐色の付着物あり
18	土師器	高坏	11.0		(5.0)	横位のミガキ ケズリ 横位のナデ 縦位のケズリ	横位のミガキ 脚内部ナデ	
19	土師器	高坏	10.6	8.0	7.2	ナデ 横位のヘラケズリのちミガキ 縦位のヘラケズリ ナデ	ミガキ 横位のヘラケズリ	坏部赤彩
20	土師器	高坏	11.0	8.3	7.8	ナデのちミガキ 縦位のヘラケズリ ナデ	ミガキ ヘラケズリ ナデ	
21	土師器	高坏	16.0	10.4	12.2	横位のナデ 縦位のケズリ ナデ	ナデ 脚内部横位のナデ	坏部は楕円形 488cc
22	土師器	鉢	11.6	5.7	6.7	ヘラケズリ	ナデ	320cc
23	土師器	鉢	14.5	5.6	8.5	横位の細いミガキ 縦位の細いミガキ 木の葉痕の上からナデ	横位のナデ やや左傾した縦位のミガキ	682cc
24	土師器	鉢	12.1	6.4	10.3	横位のナデ 縦位のケズリ 斜位のケズリナデ	横位のナデ ナデ	口縁は不整な円形 951cc

016住居跡（第66図、図版7）

一辺約4 mの正方形を呈する。北よりやや西に触れて主軸を持ち、北壁ほぼ中央にカマドがある。カマドの奥壁は、住居跡の壁よりわずかに外に及んでいる。柱穴は4箇所検出され、柱穴間は、それぞれ2 mと均一である。遺物はカマド右袖および床面状に散布した状態で、甕を出土している。全形を知り得るものはないが、いずれも類似した形状を示している。



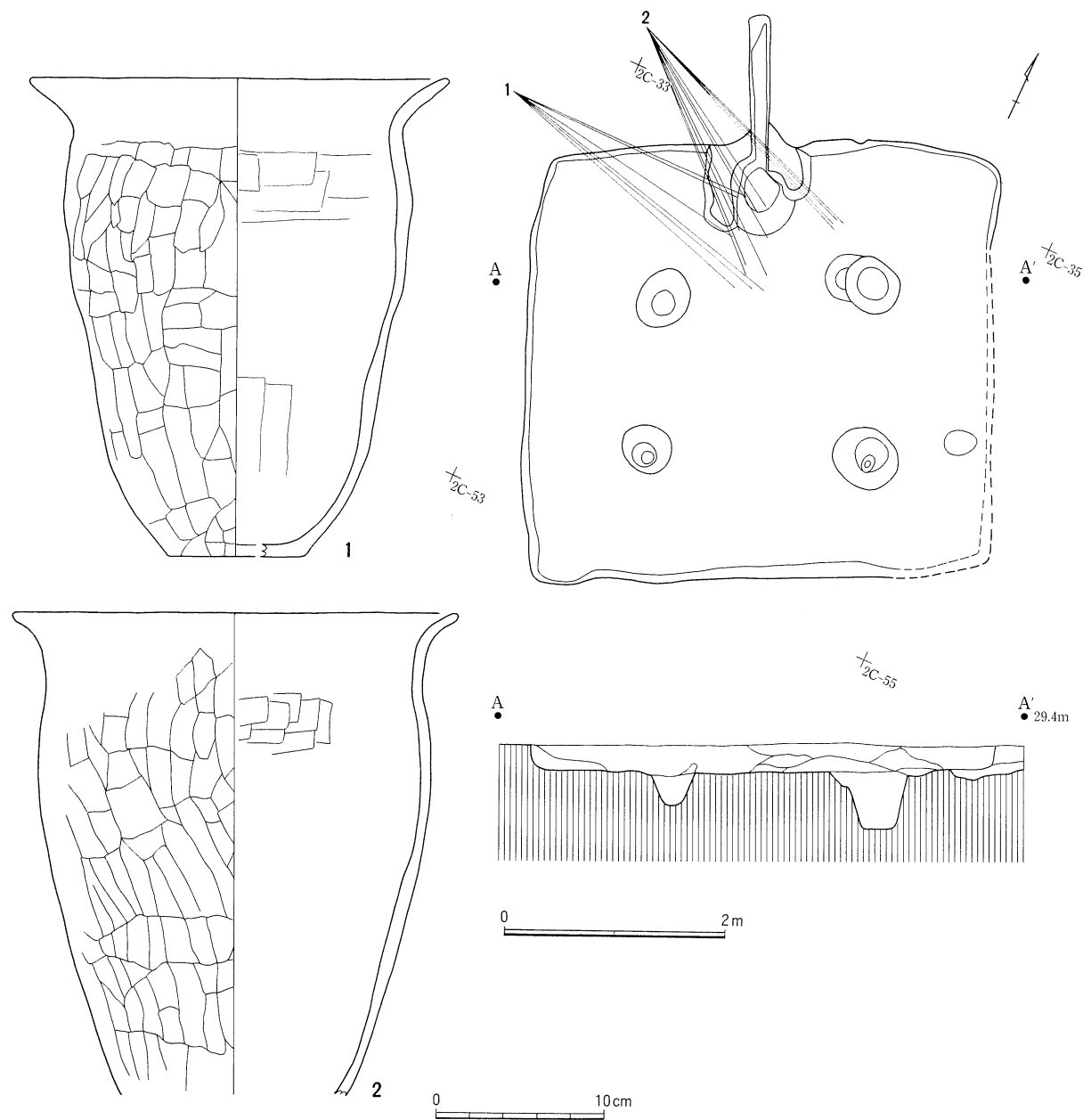
第66図 016住居跡実測図

016住居跡

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	甕	23.3		(6.0)	横位のナデ ナデ	横位のナデ 横位のケズリのちナデ	
2	土師器	甕	22.3		(10.3)	横位のナデ 縦位のケズリ	横位のナデ 横位のケズリのちナデ ケズリは幅広い	
3	土師器	甕			(16.5)	縦位のケズリ 横位のケズリ	ナデ	
4	土師器	甕	16.4		(2.7)	横位のナデ 縦位のケズリ	横位のナデ 頸胴の接合部の段差顕著	
5	土師器	甕		7.5	(3.5)	横位のケズリ 部分的に縦位のケズリ 弦方向のケズリ	ナデ	

003住居跡（第67図、図版7、18）

調査区中央より、やや北東に寄った部分で検出された。東西4.2m、南北3.9mの長方形を呈する。南辺の一部および東辺は004と重複する。カマドは北辺のほぼ中央にあり、やや長い煙道がある。柱穴は4箇所検出されているが、東西間2.1m、南北間1.5mであり、平面形よりも東西間が強調されている。遺物はカマドの周辺から甕が出土し、うち1個体については全形を復元し得た。



第67図 003住居跡実測図

003住居跡

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	甕	24.7	8.0	28.4	ナデ 縦位のケズリ	ナデ 横位のケズリ 縦位のケズリ	6011cc
2	土師器	甕	26.2		(28.7)	横位のナデ 縦位のケズリ	横位のナデ 横位のケズリ	(8627cc)

046住居跡（第68図、図版 7、18）

調査区の南東隅に近い部分で検出された。一辺4.8mの正方形を呈する。主軸はほぼ北西方向で、北西辺の中央にカマドをもつ。床の残存状況は比較的良好で、図示したような硬化面の広がりが見えられた。柱穴は4箇所で見出され、各柱穴間は2.5mである。遺物は図示したように甕の出土が多いが、いずれも床直上からの出土である。なお、1の須恵器の坏は、覆土中からの出土である。東海地方からの搬入品と考えられる。また、刀子の一部とみられる鉄製品が出土している。遺存状態は悪く、片関であることが認められるのみである。

046住居跡

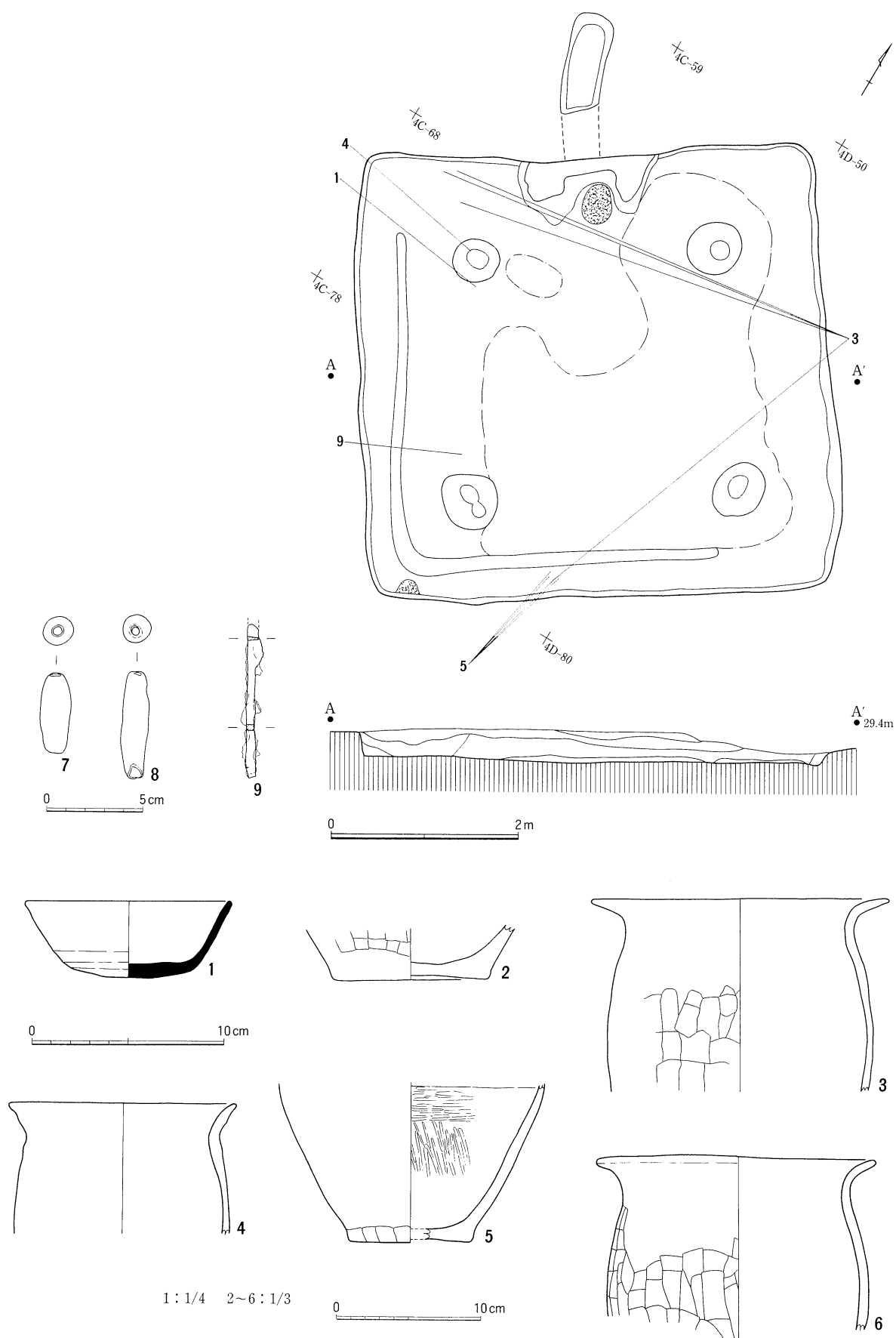
番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	須恵器	坏	10.6	2.4	4.0	ヨコナデ 回転ヘラケズリ	ヨコナデ	
2	土師器	甕		10.9	(3.9)	縦位のケズリ 横位のナデ	ナデ	
3	土師器	甕	20.7		(13.5)	横位のナデ 縦位のケズリ	横位のナデ 横位のケズリのちナデ	
4	土師器	甕	15.7		(9.2)	横位のナデ 全体に不明瞭	横位のナデ	
5	土師器	鉢?		8.6	(11.2)	縦位のケズリ 横位のケズリ 全体に不明瞭	横位のナデ	
6	土師器	甕	19.1		(12.9)	横位のナデ 縦位のケズリ	横位のナデ	

014住居跡（第69図、図版 7、19）

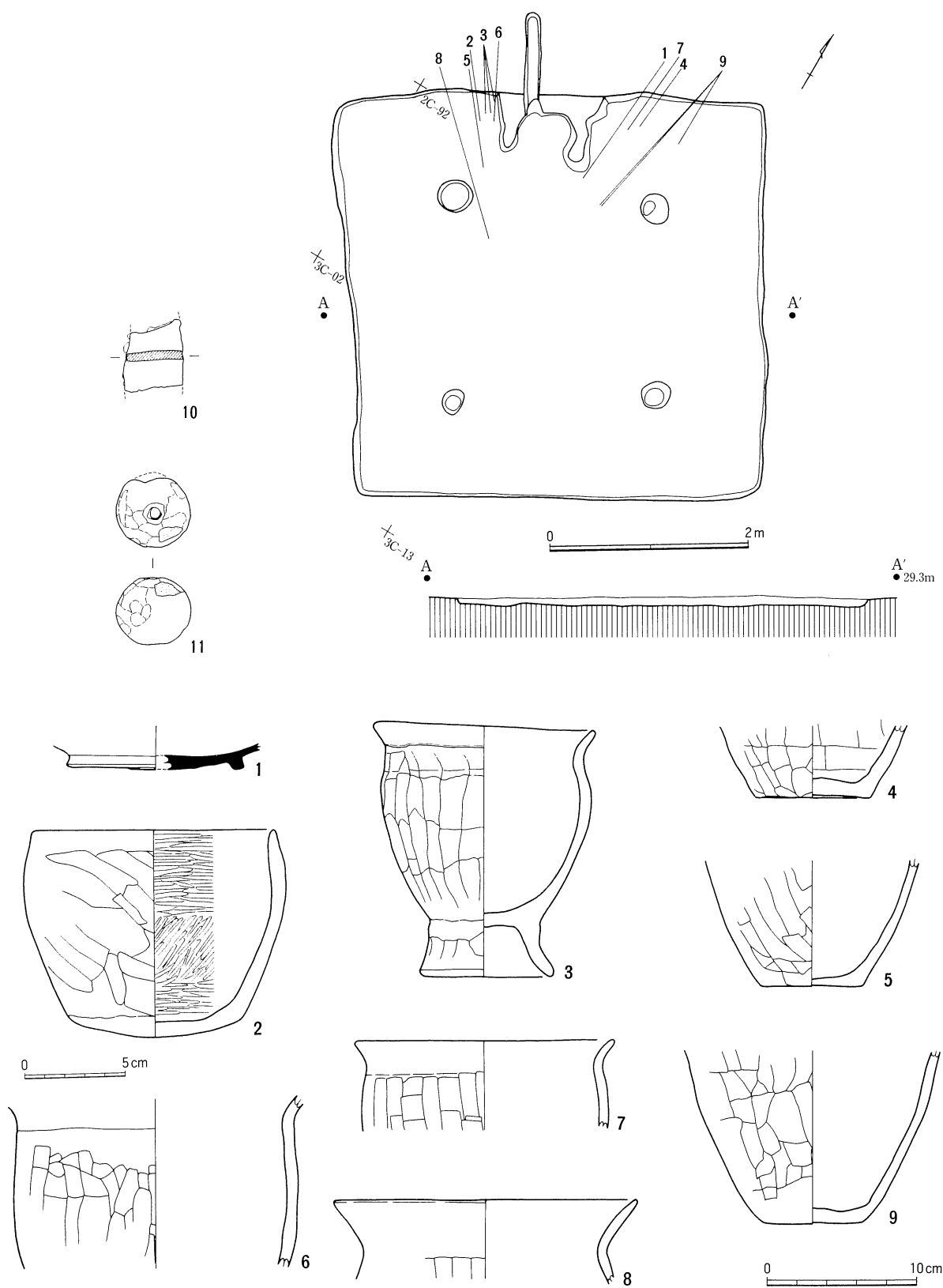
016の東に位置する。一辺4mの正方形を呈する。柱穴は4箇所見出され、柱穴間は、2.1mと均一である。北辺ほぼ中央にカマドをもつ。カマドの遺存状態は良くなかった。カマドの周囲から図示したような遺物が出土している。甕が主である。1は須恵器の高台付きの坏で、底部がわずかに突出する。湖西窯跡群の製品と考えられる。鉄製品は鎌の刃の一部と考えられる。

014住居跡

番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	須恵器	坏		8.7	(1.4)	ヨコナデ 回転ヘラケズリ	ヨコナデ	底部やや突出
2	土師器	鉢	12.0	7.9	10.3	横位のナデ ケズリのちナデ	横位のミガキ 右傾したミガキ 横位のミガキ	762cc
3	土師器	台坏甕	14.5	8.3	16.8	横位のナデ 縦位のケズリ	横位のナデ 脚内部ナデ	1244cc
4	土師器	甕		7.7	(4.8)	縦位のケズリ 弦方向の一定方向のケズリ	横位のケズリのちナデ	底部はやや上に凸
5	土師器	甕		6.8	(8.4)	縦位のケズリ 横位のケズリ	ナデ	
6	土師器	甕			(11.3)	横位のナデ 縦位のケズリ	横位のナデ	
7	土師器	甕	17.1		(6.0)	ナデ 縦位のケズリ	ナデ	
8	土師器	甕	20.0		(5.3)	横位のナデ 縦位のケズリ	横位のナデ	
9	土師器	甕		6.6	(11.6)	縦位のケズリのちナデ 横位のケズリ 不整方向のケズリのちナデ	横位のケズリのちナデ	



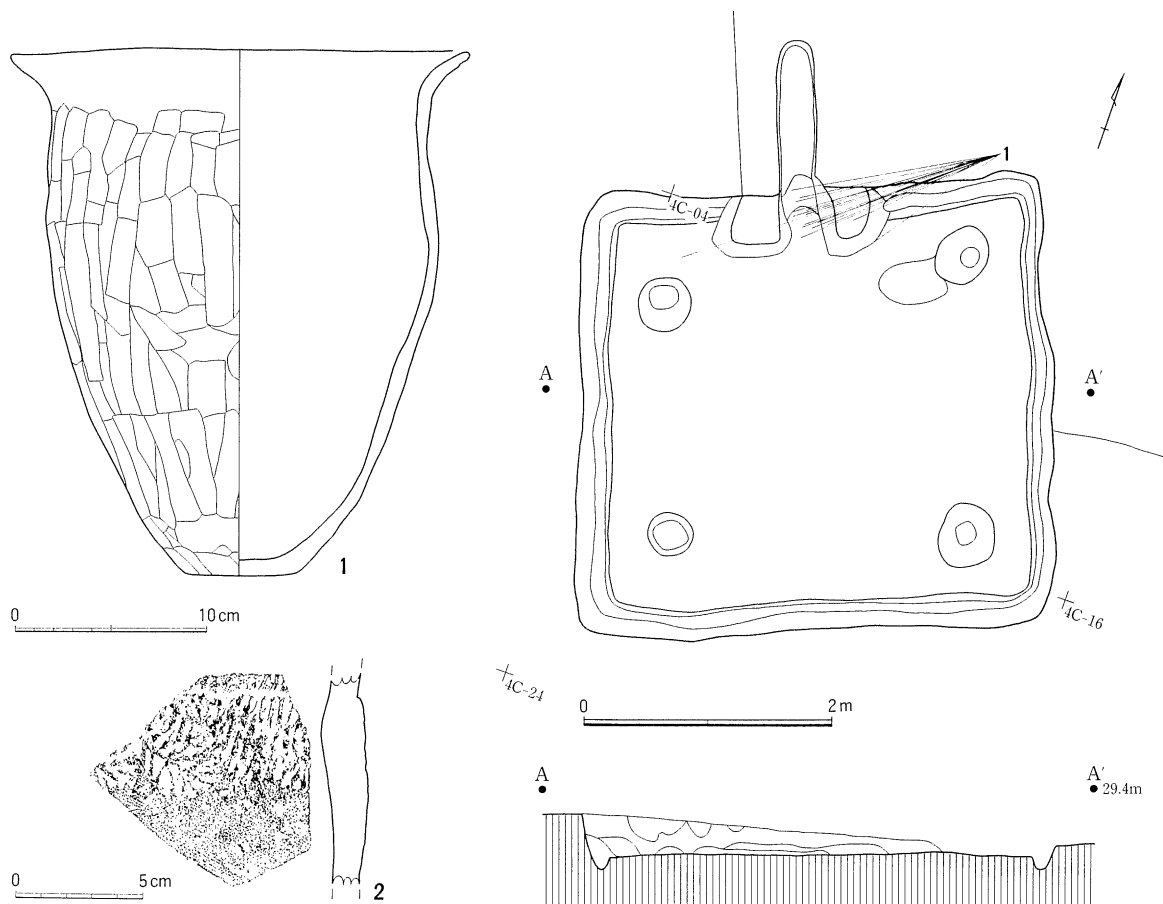
第68図 046住居跡実測図



第69図 014住居跡実測図

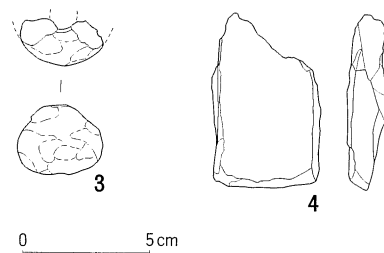
052住居跡（第70・71図、図版7、18）

一辺3.6mの正方形を呈する。053住居跡の南西隅を切っている。壁周溝は全周する。北辺のほぼ中央にカマドをもち、約50cmの煙道を持つ。柱穴は4箇所検出されているが、西側の2柱穴間が2mであるのに対し、ほかではほぼ2.4mとそろっている。他の住居跡に比べ、柱穴が全体に壁際に寄っている印象を受ける。遺物は図示した甕がカマドの周辺より出土し、ほぼ完形に復元された。ほかの遺物は覆土中からの出土である。



第70図 052住居跡実測図

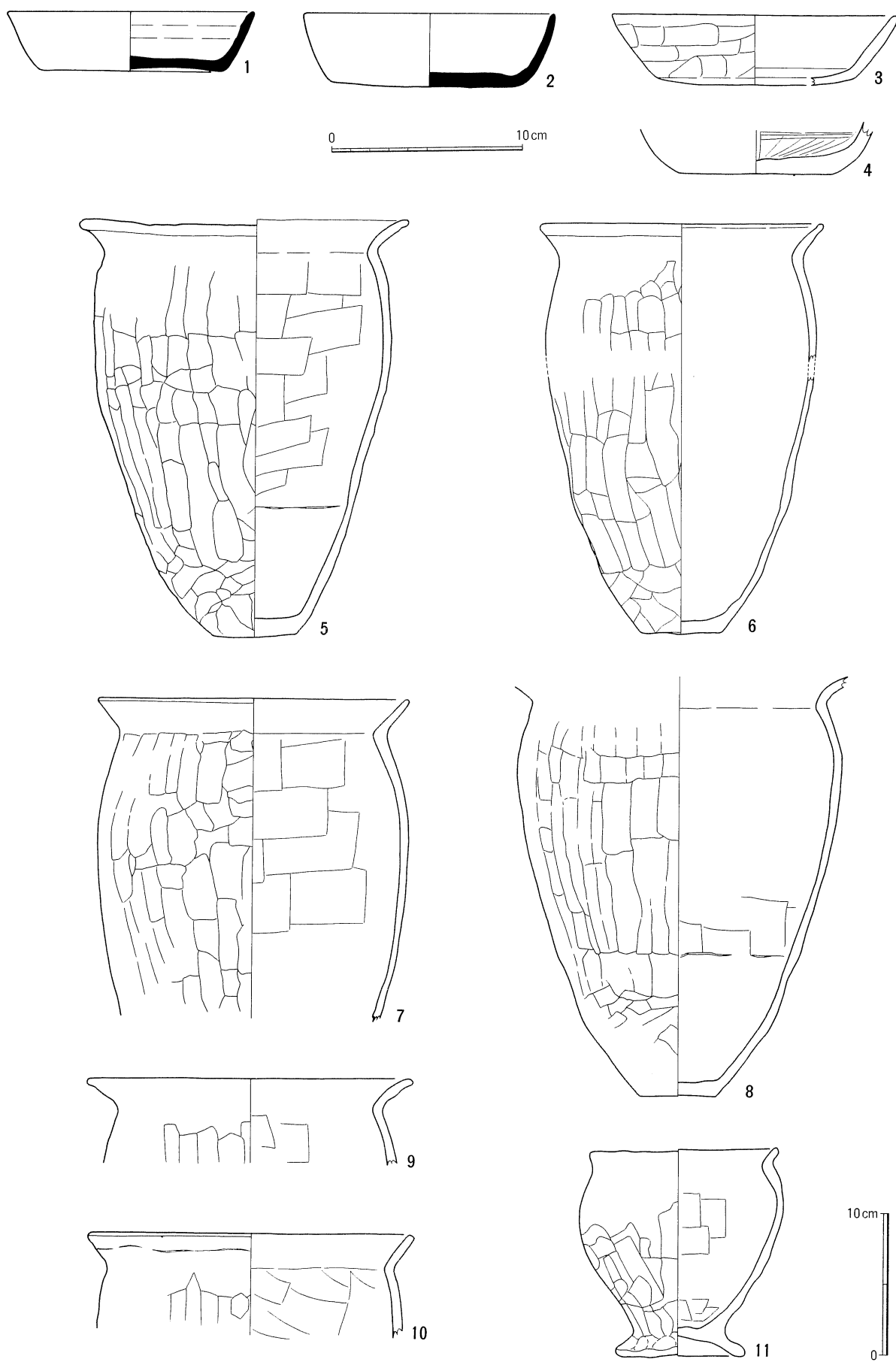
第70図1がカマド内から出土した甕である。ごく一般的な器形であり、容量計算によれば約6ℓであることがわかる。2は中世陶器で図示した傾きはやや不安がある。羽状の叩きが特徴的である。常滑であろうか。3はややいびつな球状の土錘である。4の石製品はやや厚い板状で残存している2つの側面は面取りされているようである。先端は鋭角的で刃のようでもあるが性格不明である。



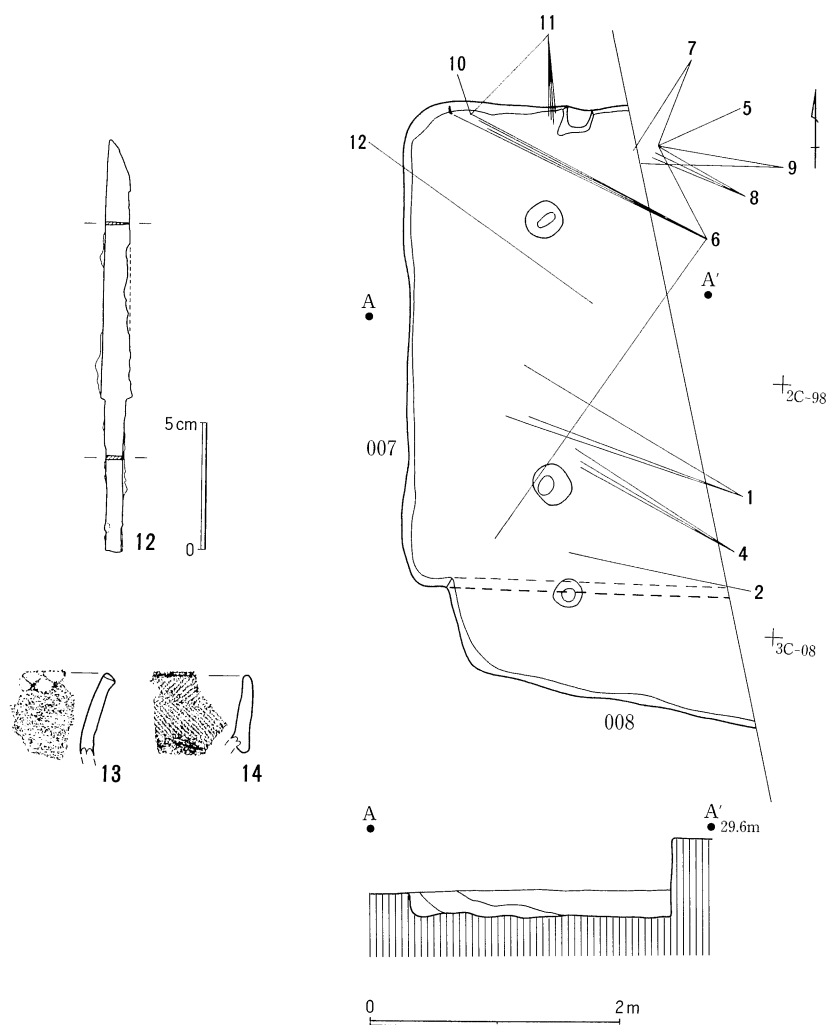
第71図 052出土土錘・石製品

052住居跡

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	甕	24.0	5.1	27.8	横位のナデ 縦位のケズリ	横位のナデ	6077cc



第72図 007出土遺物実測図 (1~4 : 1/3, 5~11 : 1/4)



第73図 007・008住居跡実測図

007住居跡（第72・73図、図版7、19）

調査区ほぼ中央の東縁で検出された。東半は現道下に及んでおり、西側約2分の1の調査となった。西辺のみ全長を把握し、3.9mを測る。南辺では008住居跡との切り合いがあるが、この008との関係は不明瞭である。008自体の規模等も推測する材料を欠く。007は主軸をほぼ北に持ち、北辺の調査区との境にあたる部分でカマドの袖と見られる部分を検出した。カマドの本体は調査区外となる。遺物は図示したように、カマドの周辺から甕を多く出土し、やや南寄りの部分で床よりやや浮いた状態で坏類が出土している。1・2は共に須恵器の坏で、2は底部外面中央付近に、回転糸切り痕を残すが、1では、全面回転ヘラ削りにより、切り離しの痕跡は認められない。市原市の永田・不入窯あるいは木更津市の上名主ヶ谷窯の製品かと思われる。鉄製品では両関の刀子がほぼ完形で出土している。

007住居跡

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	須恵器	坏	12.7	9.3	3.1	ヨコナデ 回転ヘラケズリ	ヨコナデ	火罨あり
2	須恵器	坏	12.9	9.2	3.8	ヨコナデ 回転ヘラケズリ	ヨコナデ	火罨あり
3	土師器	坏	14.8	6.0	3.7	横位のナデ ヘラケズリ	横位のナデ	
4	土師器	坏		8.0	(2.7)	ヨコナデ 回転ヘラケズリ わずかに回転糸切り痕	放射状のミガキ 弦方向のミ ガキ 円周方向のミガキ 内 黒	

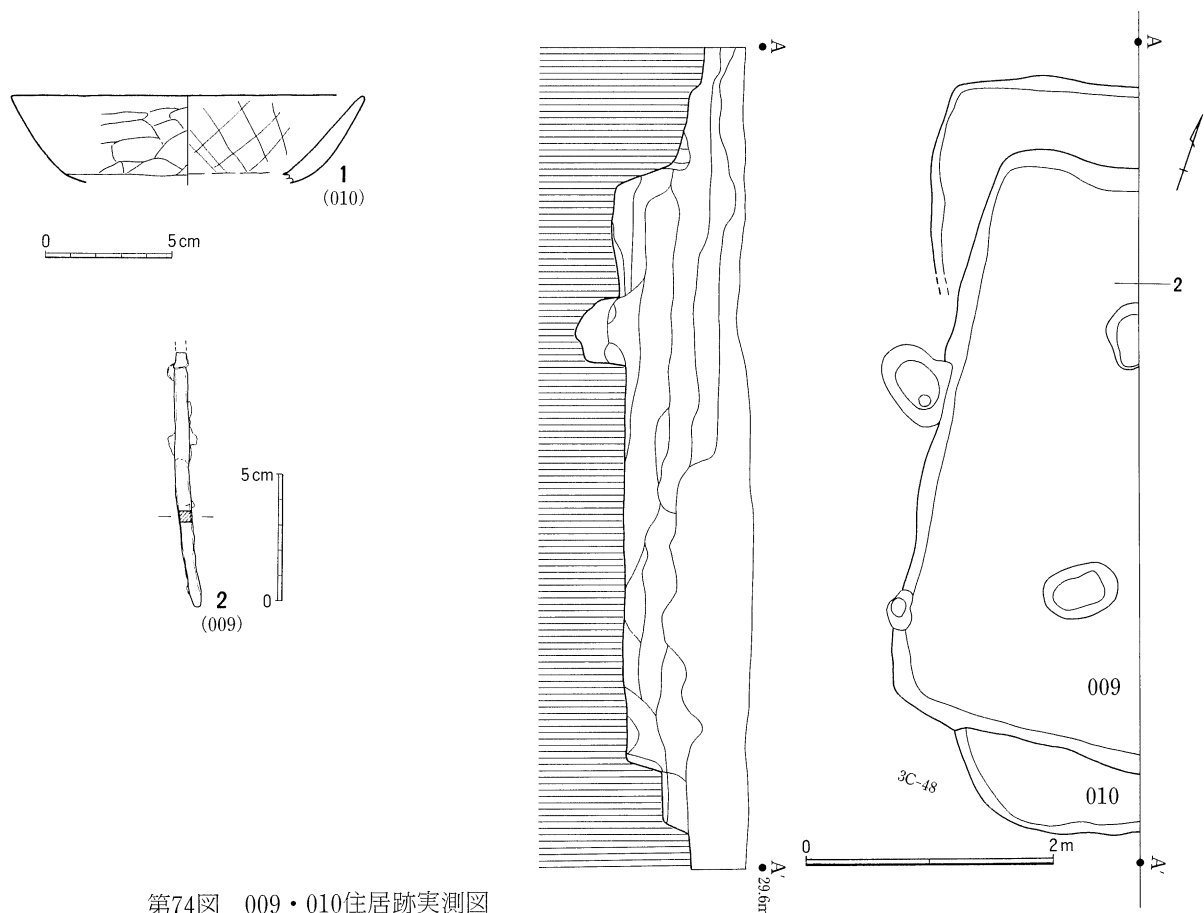
番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
5	土師器	甕	22.1	6.0	29.4	横位のナデ 縦位のケズリ 斜位のケズリ 弦方向のケズリ	横位のナデ	4734cc
6	土師器	甕	19.5	5.4	29.0	横位のナデ 縦位のケズリ 弦方向のケズリ	横位のナデ	4985cc
7	土師器	甕	21.6		(22.8)	口縁端部弱い面取りあり ナ デ 縦のケズリ	弱いナデ 横位のケズリのち ナデ	(6689cc)
8	土師器	甕		5.2	(29.7)	横位のナデ 縦位のケズリ 斜位のケズリ 弦方向のナデ 輪積みの痕跡の凹凸顕著	横位のナデ 輪積み痕残す	
9	土師器	甕	22.6		(6.0)	横位のナデ 縦位のケズリ	横位のナデ 輪積み痕残す	
10	土師器	甕	22.5		(7.3)	横位のナデ 縦位のケズリ 頸部に輪積み痕	縦位のナデ 斜位の強いナデ 頸部に緩い稜線あり	
11	土師器	台坏甕	13.0	8.7	14.8	横位のナデ 縦位のケズリ 指頭による押さえつけ	横位のナデ 横位のケズリの ちナデ	1271cc

009・010住居跡（第74図、図版8）

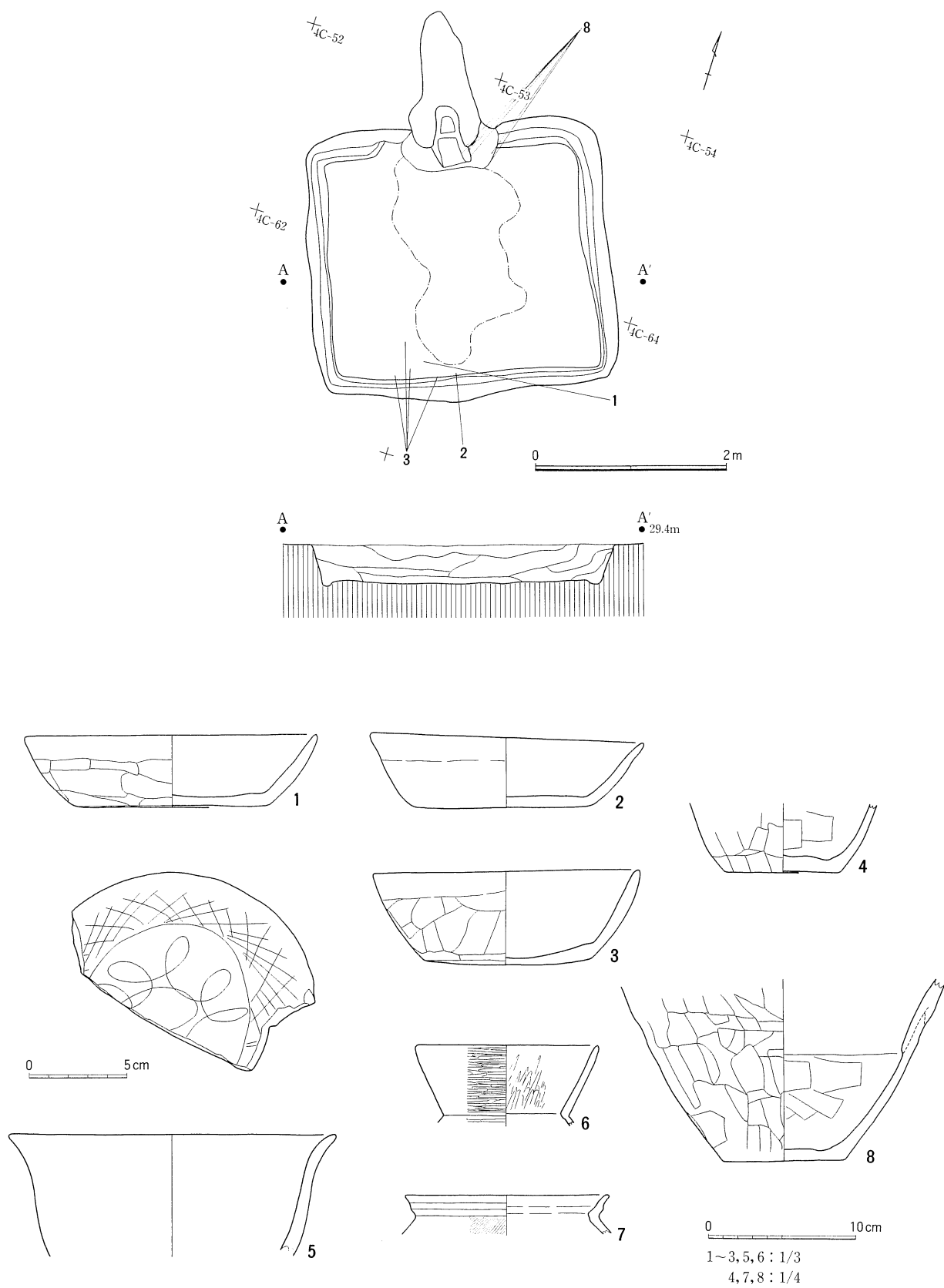
調査区東縁のほぼ中央で検出された。東半2分の1以上は調査範囲外に及んでいる。掘り込みの浅い010住居跡の中央部分を009がより深く掘りこんでいる。009は主軸をほぼ北に持ち、西辺は4.5mである。柱穴は西側の2箇所が検出され、間隔は2.1m、今回の調査範囲内においてはカマドの痕跡は認められていない。010は、西辺が6mである。遺物は図示した土師器の坏が出土している。いずれも覆土からの出土である。坏では、体部内面にわずかに斜格子の暗文が認められる。

010住居跡

番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	坏	13.7		(3.4)	ナデ ヘラケズリ	ナデ 斜格子暗文	



第74図 009・010住居跡実測図



第75図 049住居跡実測図

049住居跡（第75図、図版8、19）

調査区の南寄りの中央部分で検出された。東西3m、南北2.7mの長方形を呈する。比較的掘り込みは深く、壁周溝は全周する。北辺中央にカマドをもつ。カマド前方から南にかけての部分で床の硬化が認められる。柱穴は床面を精査したが検出されず、住居外の周辺においても検出には至らなかった。遺物は図示したものが、床からかなり浮いた状態で出土した。1、3の土師器の坏では、体部内面に斜格子暗文、底面に螺旋状暗文をもつ。2は体部内面に斜格子暗文をもつものである。なお、これら暗文については、赤外線投影により、鮮明に捉えられた。従来、暗文については器面を密にすることにより、視覚的効果が現れると理解してきたが、他の土師器のミガキの部分については肉眼観察と変わるところはなかった。したがって、今回出土した暗文については、赤外線とよく反応する、何らかの物理的特性が加わっているということまでは言えよう。その特性が具体的にどのような形で付与されたかについては、自然科学的な分析によるしかない。ここでは問題の指摘にとどめておく。

049住居跡

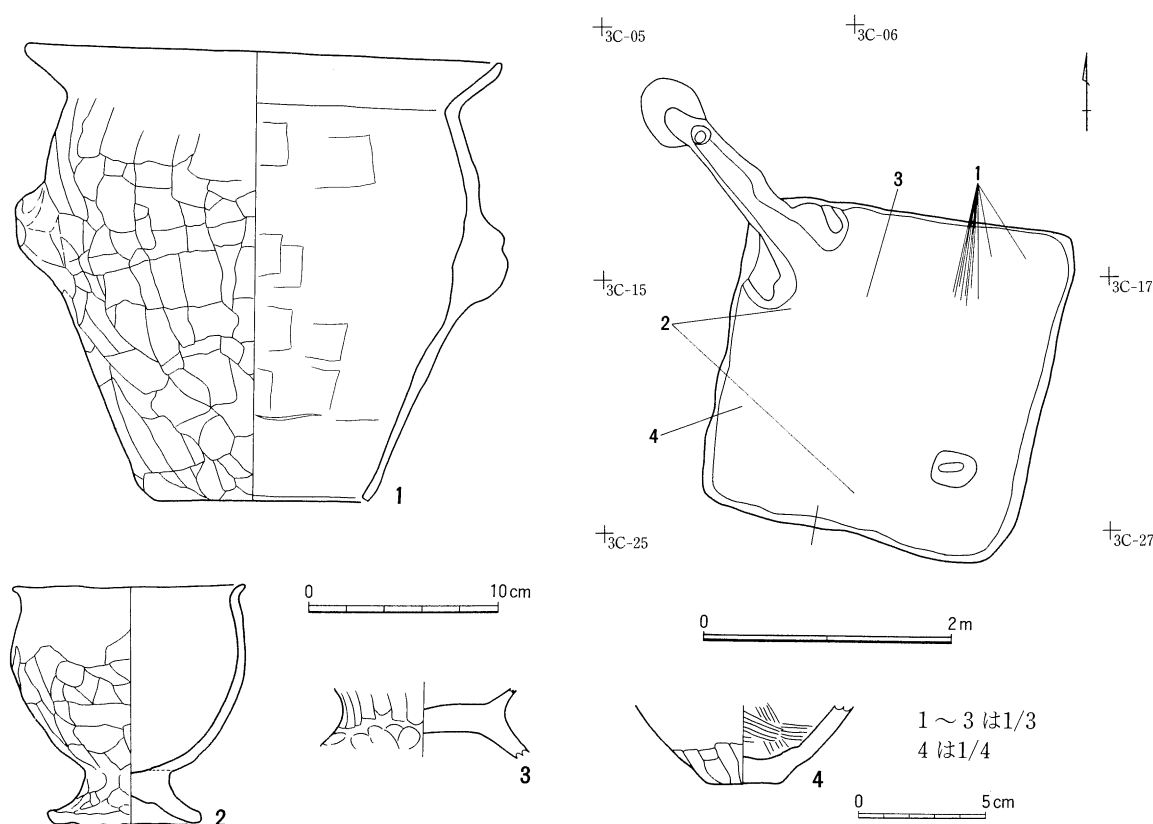
番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	坏	14.9	9.9	3.7	横位のナデ ヘラケズリ	横位のナデ 斜格子暗文 螺旋状暗文	
2	土師器	坏	13.9	8.8	3.6	ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	ヨコナデ 斜格子暗文	
3	土師器	坏	13.5	8.6	4.8	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ 斜格子暗文 螺旋状暗文	
4	土師器	甕		7.8	(4.8)	横位のケズリ 弦方向のケズリ	横位のケズリのちナデ 整形は粗い	
5	土師器	鉢	16.7		(6.3)	横位のナデ 器表荒れており全体に不明	横位のナデ	
6	土師器	埴	9.2		(4.2)	横位のミガキ	横位のナデ 縦位のミガキナデ	内外面全面赤彩
7	土師器	甕	14.0		(2.7)	横位のナデ ハケ	横位のナデ	S字甕
8	土師器	甕		8.4	(12.2)	横位のケズリ 不整方向のケズリのちナデ	ケズリのちナデ 輪積み部段差明瞭	

011住居跡（第76図、図版8、20）

調査区中央東よりで検出された。一辺2.6mの正方形を呈する。カマドは北西隅に設けられている。柱穴と思われるピットがカマドの対角線上で一つ検出されているが、他は住居の外周を含めて精査しても検出されなかった。カマドは遺存状況は悪かったが、煙道が北西方向に約80cmのびている。遺物は、台付き甕の本体部分がカマド内で検出され、台の部分は床面上で検出された。瘤状の取っ手をもつ甕は、住居の北東隅付近で出土している。いわゆる隅カマドをもつ住居跡である、本遺構をもって、本項による住居跡群の展開は終了したと考えておく。

011住居跡

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	土師器	甕	25.0	11.4	23.7	横位のケズリ 縦位のケズリ 斜位のケズリ 瘤状の取っ手 2箇所	横位のナデ 横位のケズリのちナデ 取っ手の裏面は凹凸顕著	口縁部やや肥厚する 底部口唇部はケズリのちナデ
2	土師器	台坏甕	12.2	7.7	12.6	ナデ 縦位のケズリ 台部は指頭による押圧	横位のナデ ケズリ 台内部指頭による押圧	723cc
3	土師器	台坏甕			(3.7)	縦位のケズリ 指頭による押圧	ナデ 台内部粗いナデ	
4	土師器	甕		3.0	(3.2)	粗いナデ 横位のケズリ	ハケ ナデ	



第76図 011住居跡実測図

古墳時代後期から平安時代にかけての住居跡は、以上報告の通り12軒である。古墳時代前期と比較して、やや閑散とした景観が形成されたようである。杯類で見る限り断続的に見え、短い空白期をいくつかはさむようにも見える。ただし、甕には明瞭な相違を見出せない。杯の時間と甕の時間が違うということであろう。複数の時間を考えた場合には、どの時間から見るかで同時性も異なるのは当然の帰結である。

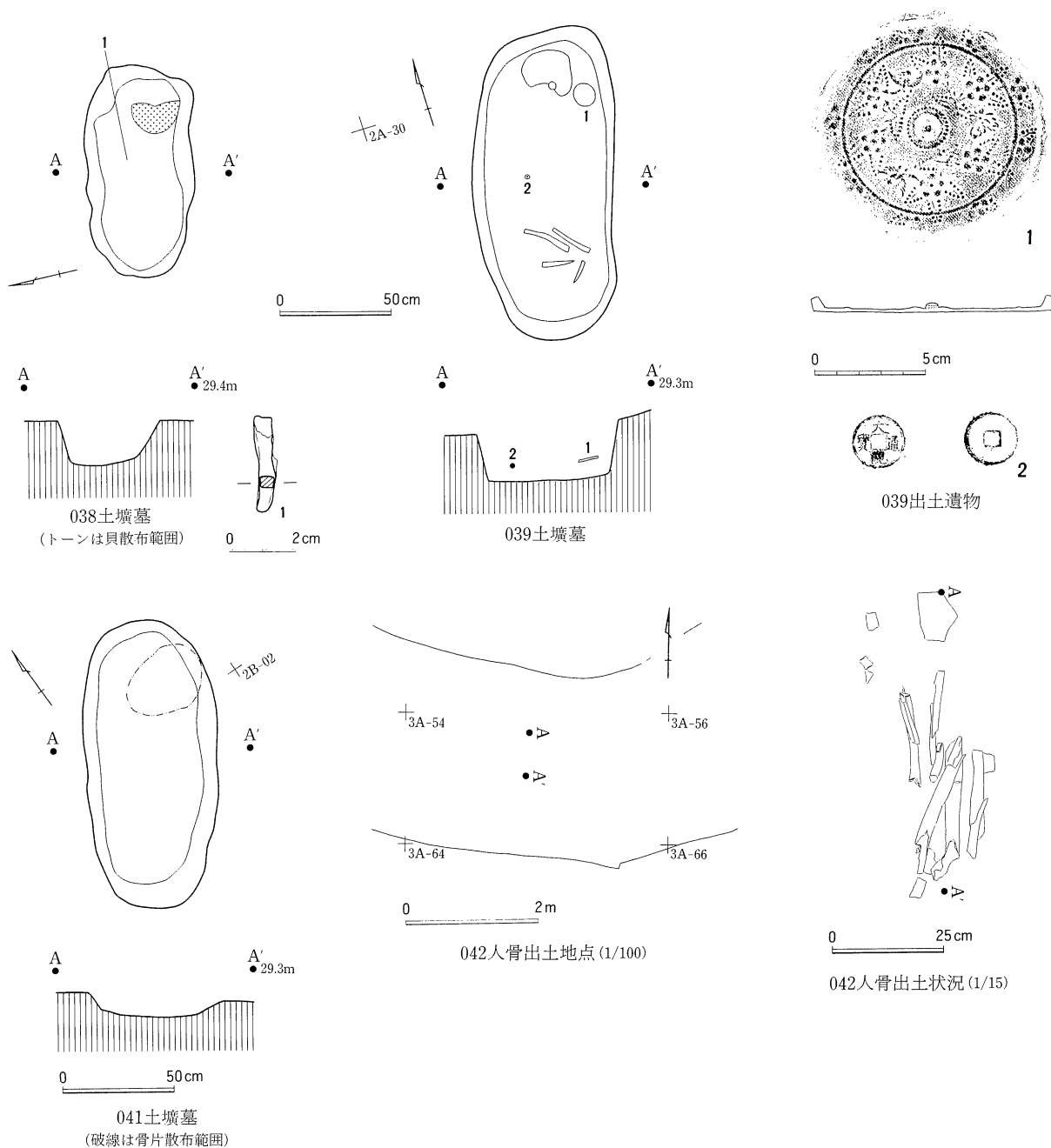
古墳時代前期とここまで報告した時期とでは、住居の集積度が異なるとは言えよう。その相違をもたらした、歴史的諸条件を明らかにすることが、本来の課題であろうが、今回はそこまでの検討はできなかった。

遺跡名の「五霊台」は、遺跡の北方にあったと考えられる「御霊祠」に由来するものであろう。御霊信仰は、具体的な個人を祭神とすることに特徴があるとされる。次章に触れる土壇墓等との関連で考えられるが、墓域となる時点における荒漠とした景観が、集落の終焉によってもたらされたものであるなら、この点において歴史は接続するのであって、唐突に中世が始まるのではないと言える。ただ物事の推移はかなり複雑であったであろうことは言うまでもない。

(6) 中 世

土壙墓・土坑（第77図、図版 8、22）

今回の調査では、人骨を伴わないものも含めて、5基の土壙墓・土坑が検出されている。調査区の北寄りにやや集中する傾向を示すが、群集といった様相ではない。年代を示す遺物の出土は少なく、わずかに039土壙墓から和鏡と渡来銭の出土を見たのみである。その他に年代を示すものはなく、すべてが同時期の所産とする根拠を欠くが、漠然と墓域形成期の所産として、一括してここで扱う。



039土墳墓

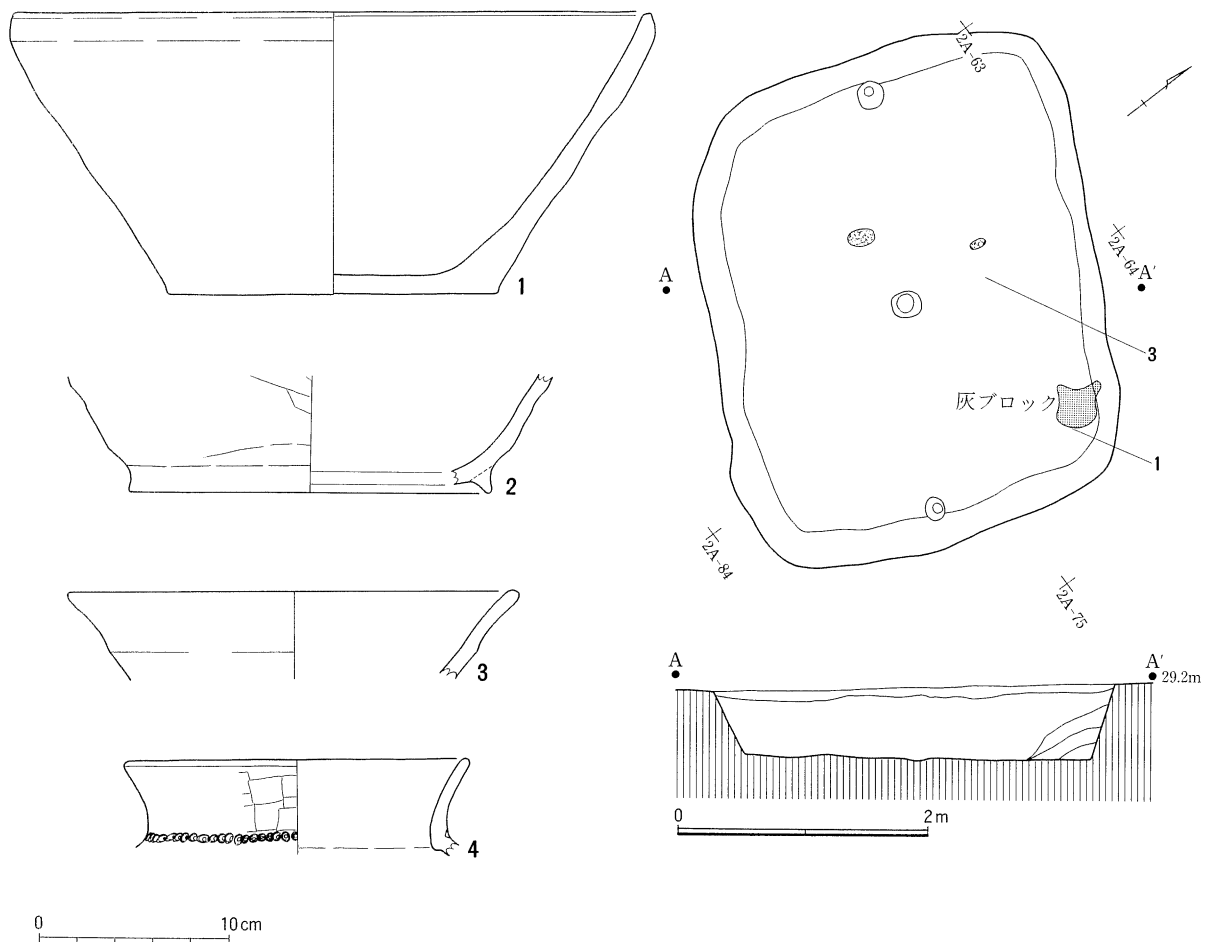
調査区の北西隅に近い部分で検出された。長軸1.4m、短軸0.6mで、方形というよりは長楕円形である。主軸は北寄りやや東に振れる。北端で頭蓋骨が出土し、南端に近い部分では脛骨と思われる骨が出土したが、いずれも遺存状態は悪い。人骨の出土状況から判断すると、東向きに屈葬したものと判断される。頭蓋骨の東からは梅花双雀鏡が出土している。また、腹部にあたる部分からは渡来銭〔大観通宝〕が出土した。

041土墳墓

調査区北縁のほぼ中央で検出された。長軸1.3m、短軸0.6mを測る。主軸はやや東に振れる。深さは10cm強であった。北端に近い部分で、頭蓋骨の一部および歯がややまとまって検出された。遺存状態は良くない。他の遺物の出土はなかった。

042土墳墓

036円墳の南端部分の周溝覆土上層から大腿骨と思われるものを含む、おそらく一体分となる人骨が出土した。周溝埋没後に土墳墓が掘られたものと考えられる。ただし、土墳の規模等は不明である。骨の出土範囲は、南北1.3m、東西0.6mの範囲に収まる。他の土墳墓と同様の類似した規模であったと考えておきたい。主軸はほぼ北となると考えられる。他の遺物の出土は認められなかった。



第78図 025方形竪穴状遺構実測図

038土坑

これまで示した土壇墓とほぼ同規模であるが、人骨の出土はなかった。主軸を東西に持ち、長軸1 m、短軸0.5 mである。東に寄った部分で、貝ブロックが検出されている。ほかに鉄釘の一部と思われる鉄製品が出土している。

025方形竪穴状遺構（第78・79図、図版8、20）

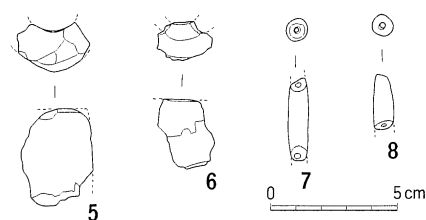
調査区の北西より部分で、平面形が方形というよりは平行四辺形に近い、竪穴状の遺構が検出された。方形竪穴状遺構という名称については、中世の類似遺構の呼称を踏襲した。覆土は他の住居跡に比べ、黒味が強く、ロームの小ブロックを多く含むほぼ単一の層であった。主軸は北西方向で、長軸方向で4 m、短軸方向で3 mである。床面中央の長軸上に3箇所柱穴状のピットが検出されている。ピットの間隔は、いずれも1.8 mである。また、床面の2箇所で小範囲の赤化した部分が認められ、東隅付近で、灰・焼土の混じったブロックが検出されている。この灰・焼土のブロックと共に、図示した常滑産の捏ね鉢が出土した。本遺構出土の破片では、口縁部を欠いていたが、隣接する034溝の覆土出土の口縁部と接合した。本遺構では床面直上からの出土であるのに対し、口縁部は覆土中からの出土である。この遺物が、本遺構廃絶直後の廃棄品であるとする、034溝は、この遺構廃絶以前に埋没過程にあったことを示す。出土した捏ね鉢の時期については、漠然と戦国期以前と捉えているが、上記の推移に従えば、034もほぼ同時期の所産と考えられる。

なお、この025の性格については、近隣における当該期の類例が僅少であるため、今後の課題としておきたい。

出土遺物は図示した通りである。1は上にも触れた常滑の捏ね鉢であるが、直線的に開いた体部が、口縁付近でわずかに内湾する。口唇部は狭い平坦面があるが、外方でわずかに盛り上がっている。内面には自然釉が掛かっている。底部は平滑で使い込んだ感がある。2は大型の山茶碗と考えられる。長石粒が目立つ。いわゆる精胎といわれるものかもしれない。焼成は堅緻で内面に降灰が認められる。3は、鎌倉地域で山茶碗窯系捏ね鉢と言われているものであろう。灰色で全体に砂っぽい質感である。

025方形竪穴状遺構

番号	種別	器種	口径	底径	器高	外面の特徴	内面の特徴	備考
1	常滑	捏ね鉢	32.8	17.0	15.0	口縁はやや内湾する	降灰による自然釉 底面は比較的平滑	
2	山茶碗			18.6	(6.4)	ヨコナデ やや凹凸目立つ	ヨコナデ 降灰	いわゆる精胎？
3	山茶碗窯系捏ね鉢		23.2		(4.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	
4	土師器	壺	17.6		(5.1)	口縁端部緩い面取り 横位のケズリのちナデ 円形刺突	横位のナデ 器表荒れている	



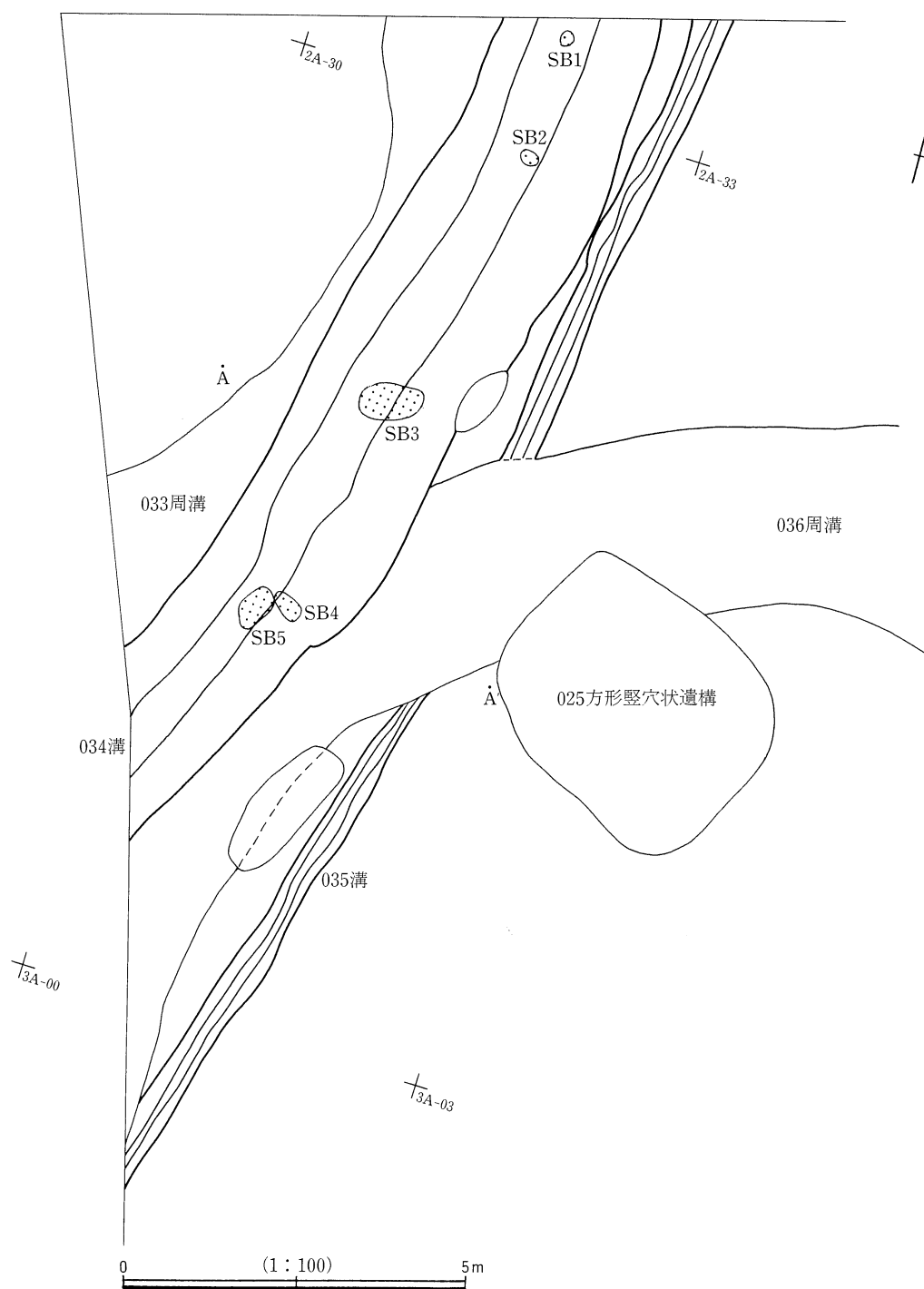
第79図 025出土土鍾実測図

第79図には土鍾を示した。5・6は円筒状、7・8は細い管状である。土鍾の変遷は熟知していないが、5・6は比較的古く、7・8は極めて新しい感もある。胎土も両者では異なり、色調も7・8は赤味が強い。現代のものとも区別し難い。形状的に変異の少ない遺物から時間情報を引き出すのは難しい。

034溝跡・035溝跡（第80図～第84図、図版8、20）

調査区北西隅を033円墳と036円墳の周溝の重複部分を通るように、北東から南西に向かって検出された溝が034である。この東側で034と平行して走る、細い溝が035である。034は、断面逆台形を呈し、深さは、確認面から約1 mを測る。比較的しっかりした溝である。上端幅は約2 mで、底面は幅約50 cmで全体に平坦である。035は、幅約30 cm、深さ約20 cmで、底面は曲線的である。034の覆土上層から中層にかけて、貝ブロックが検出されている。

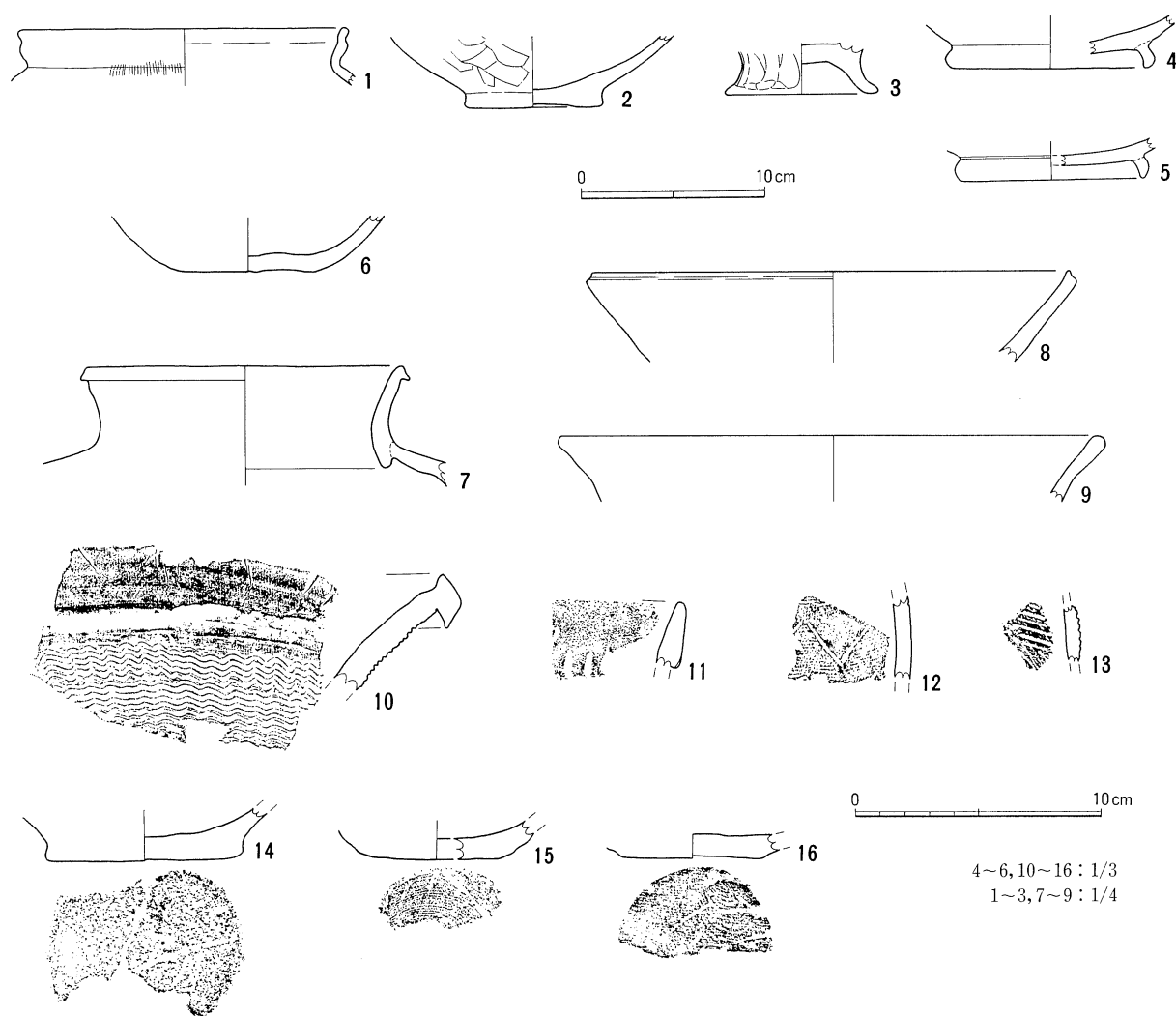
025のところでふれたように、この034については中世前半の所産と考えている。また、現在の地割



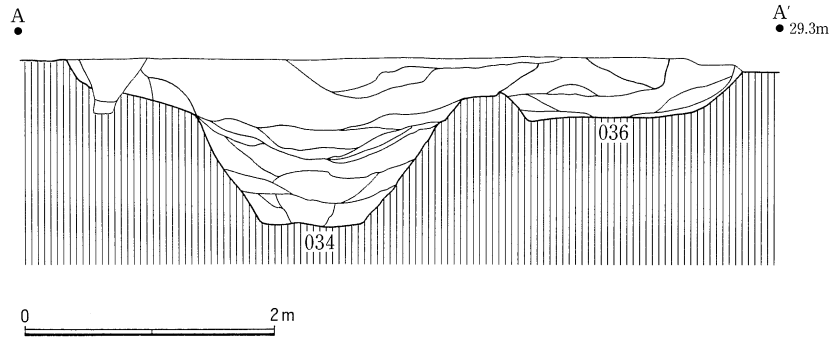
第80図 034溝・035溝実測図

線が、この溝の走向を踏襲していないことも、それを傍証していると考えられる。035については、時期を示す遺物の出土はなかったが、034と平行するところから、全く離れた時期の所産とも考え難い。

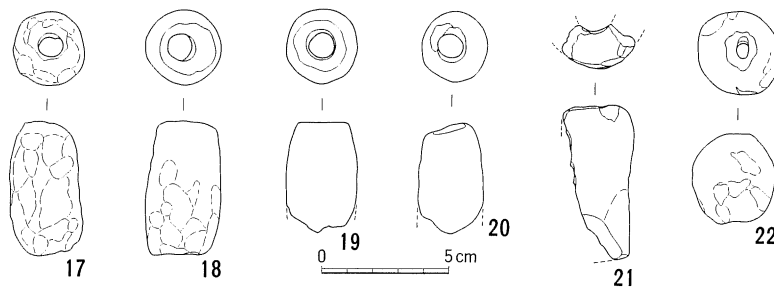
034の覆土からは雑多な遺物が出土している。1～3は土師器である。4・5は灰釉陶器の碗の底部で、高台は三日月型である。愛知県猿投の黒笹90号窯式に属すると考えられる。6は口縁部を欠くが瀬戸・美濃系の縁釉小皿と思われる。7は、胴部と頸部の接合が特徴的な壺である。また、口縁端部が下向きに外向する点も特徴的である。外面と頸部内面はハケにより、灰釉が施されている。特徴的な接合部から判断する限りにおいて、渥美の製品と考えられる。8は在地産の鉢である。内外面に赤褐色の釉が掛かっている。口縁端部はわずかに窪んでいる。9は、山茶碗窯系の捏ね鉢である。10は須恵器の甕の頸部である。口縁直下に櫛状工具による波状文が2単位巡っている。千葉県内の窯跡での報告例はなく、現段階では、北関東からの搬入の可能性を考えておきたい。14・15は土師器質土器の小皿である。底部はいずれも回転糸切り無調整である。なお、管状の土錘の出土がやや目立つ。角の丸い円筒状のことが多い。古墳の周溝出土のものが球状のものが多かったことと比べると、後世の土の移動は考慮すべきであるにしろ、ある程度時期差を反映しているようである。



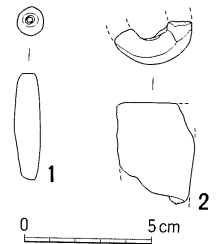
第81図 034出土遺物実測図



第82図 034土層断面



第83図 034出土土錘実測図



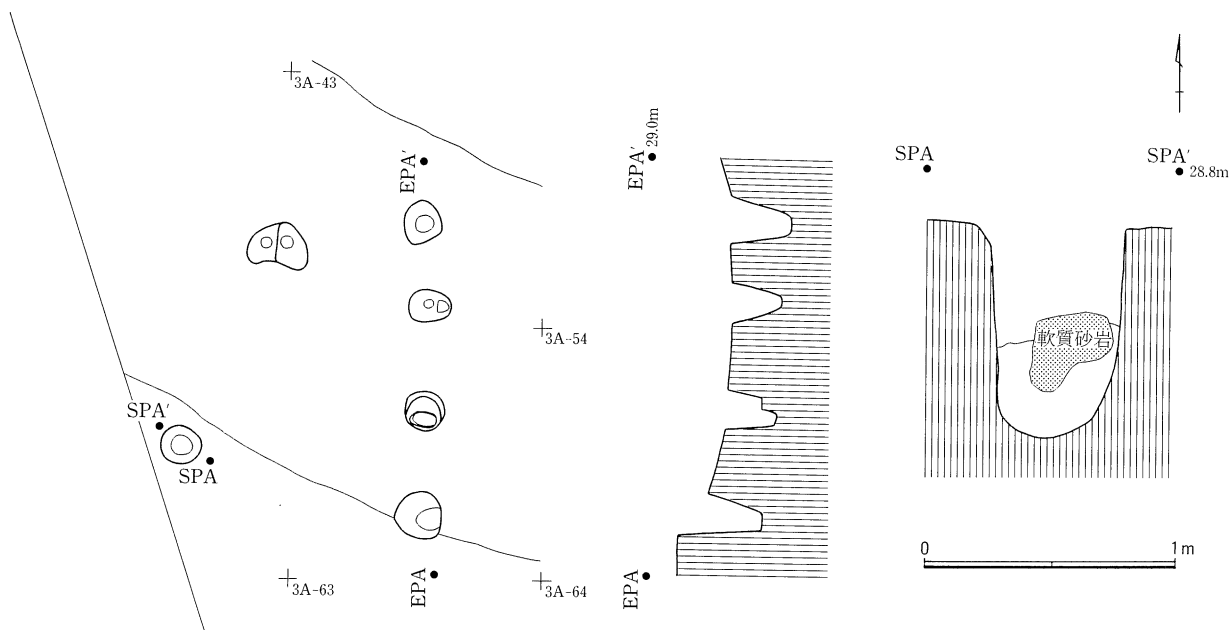
第84図 035出土土錘

034溝

番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	甕	17.6		(3.1)	横位のナデ 縦位のハケ	横位のナデ	
2	土師器	甕		7.0	(3.9)	斜位のケズリ	細い条線あり（ハケ？）	
3	土師器	台坏甕		7.8	(2.8)	縦位のケズリ	粗いナデ 脚内部ナデ	
4	灰釉陶器	碗		7.9	(2.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	高台は三日月形
5	灰釉陶器	碗		7.3	(1.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	
6	瀬戸美濃系	緑釉小皿		5.0	(2.3)	ヨコナデ 回転糸切り無調整	ヨコナデ	
7	渥美？	壺	17.0		(6.6)	ヨコナデ	ヨコナデ 頸部の接合特徴的	
8	在地系中世陶器	捏ね鉢	26.0		(5.0)	整形不明瞭	整形不明瞭	内外面共赤色の釉
9	山茶碗窯系 捏ね鉢		29.3		(3.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	

043ピット群（第85図、図版8）

036円墳周溝南東部分において、四つのほぼ直線的にならぶピット群とそのやや西側で2個のピットを検出した。このうち南西隅のピットの中層から石材が出土した。東側の4個については、ほぼ南北を向くが、その間隔は一定ではない。確認面からの掘り込みは南端のピットで約70cmである。中世以降の掘立柱建物跡は、古代以前と比べて柱穴の配置がやや不規則になるようでもあるので、これらについても中世以降の建物跡の可能性はある。

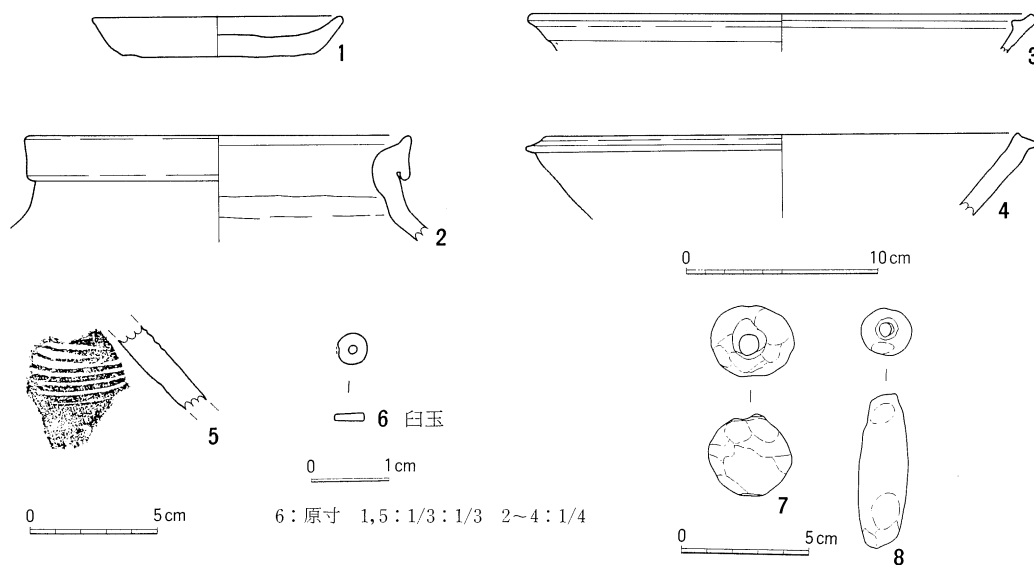
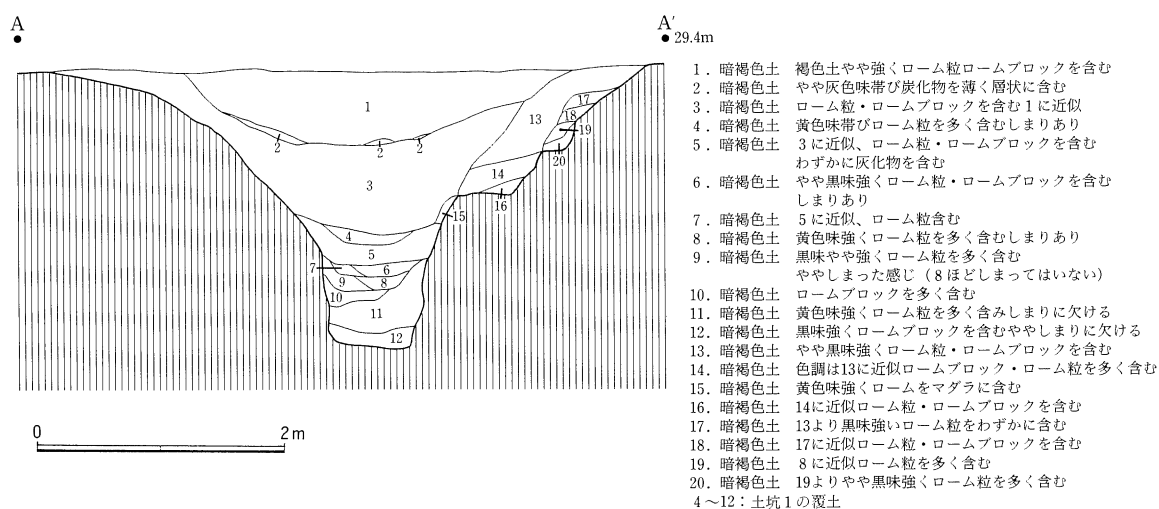
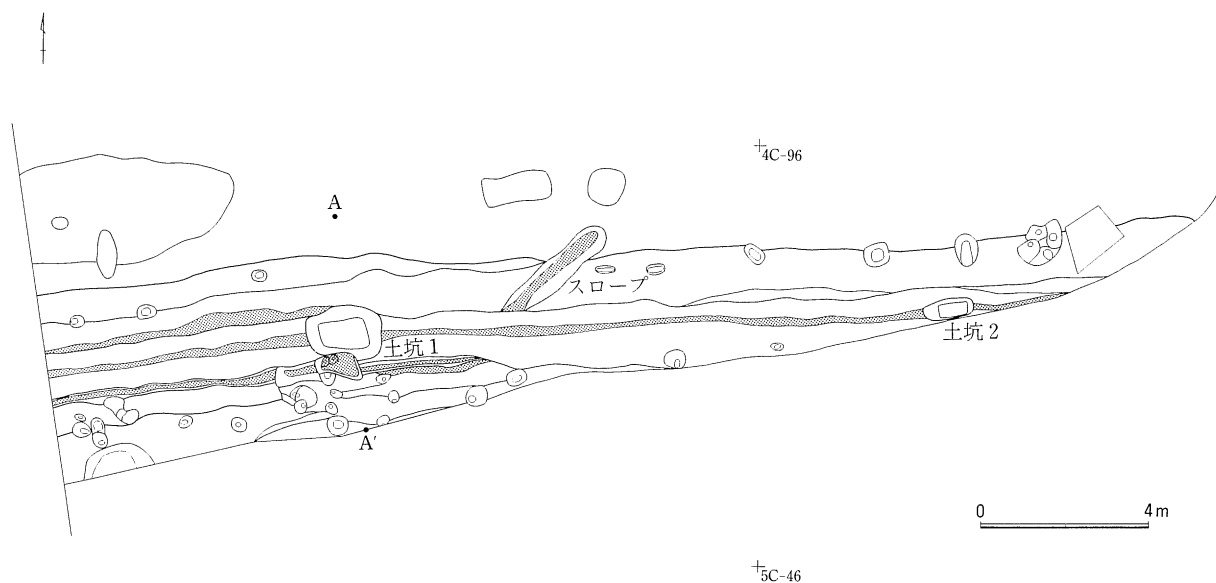


第85図 043ピット群実測図

059堀跡（第86図～第88図、図版9）

調査区の南端で現道に平行するように堀が検出された。上端幅は東方では掴みかねたが、約3.5mである。ただし、これは全体の掘りあがりの状態であって、法面の傾斜が異なる部分や平坦面を形成する部分が散見されるところから、何度かの掘りなおしがあったことを考慮に入れる必要がある。底面には2箇所の土坑が検出された。うち、西側の土坑の土層を見ると、堀埋没後の掘り込みとは認められない。東側の土坑については、十分な検討を加えることはできなかったが、堀の底面が両土坑のほぼ中央を通るように走っていることから、二つの土坑および堀は一体のものとして理解すべきと考える。なお、西の土坑について言えば、土坑部分の覆土とその上層の堀全体の覆土が異なることから、堀の埋没以前に土坑は埋まっていたといえる。堀の北法面の中央には、堀に対し斜めに入り下っていくスロープ状の平坦面がある。堀の底に降りるためのスロープと考えられるが、法面の傾斜変換部で途切れている。堀の南側、とくに西の土坑の周辺は、小規模に手を加えることが度々あったと見られ、ピットが多く、法面が乱れている。堀の南側の状況については現道があるため不明であるが、北側には、関連する施設の存在は確認されていない。

遺物は図示したものが、覆土中から出土している。他の遺構に比べて、出土量は少ない感がある。1は土師質土器の小皿で、底は比較的厚い。静止糸切りの痕跡を残す。2は常滑の甕の口縁部である。折り返された端部は頸部には非常に近づいているが、接してはいない。3は瀬戸・美濃系のすり鉢と思われる。内面の口縁直下に凸帯があり、口縁端部は面取りされている。全面に褐色の釉が掛かっている。4は常滑の片口鉢と考えられる。口縁端部がわずかに外方に引き出されている。



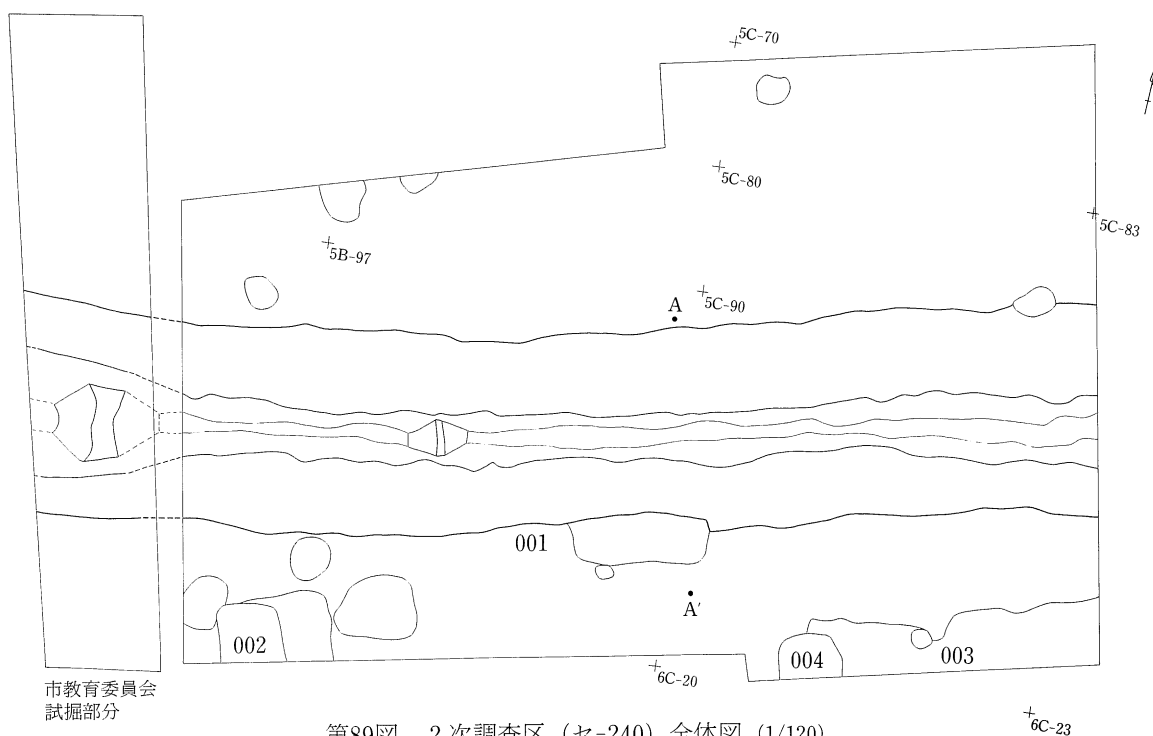
059堀

番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師質土器	小皿	9.8	6.2	1.6	ヨコナデ 静止糸切り無調整	ヨコナデ	
2	常滑	甕	20.1		(5.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	
3	瀬戸美濃系	すり鉢?	26.3		(2.0)	ヨコナデ	ヨコナデ 口縁直下に突帯	内外共鉄釉
4	常滑	片口鉢?	25.0		(4.4)	ヨコナデ 口縁端部張り出す	ヨコナデ	

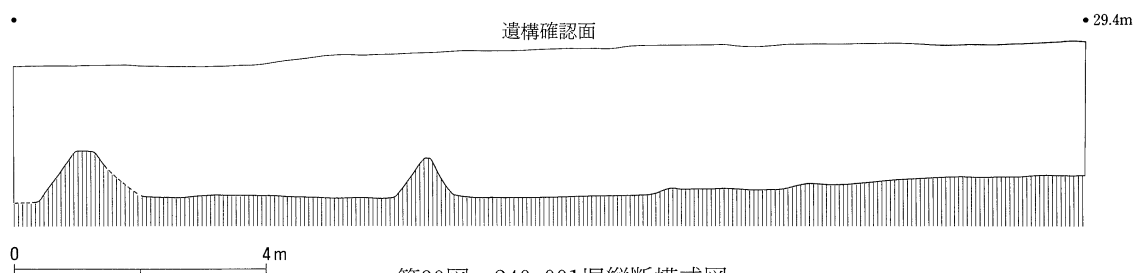
2次調査区（第89図、図版9）

240-001堀跡（第89・90図）

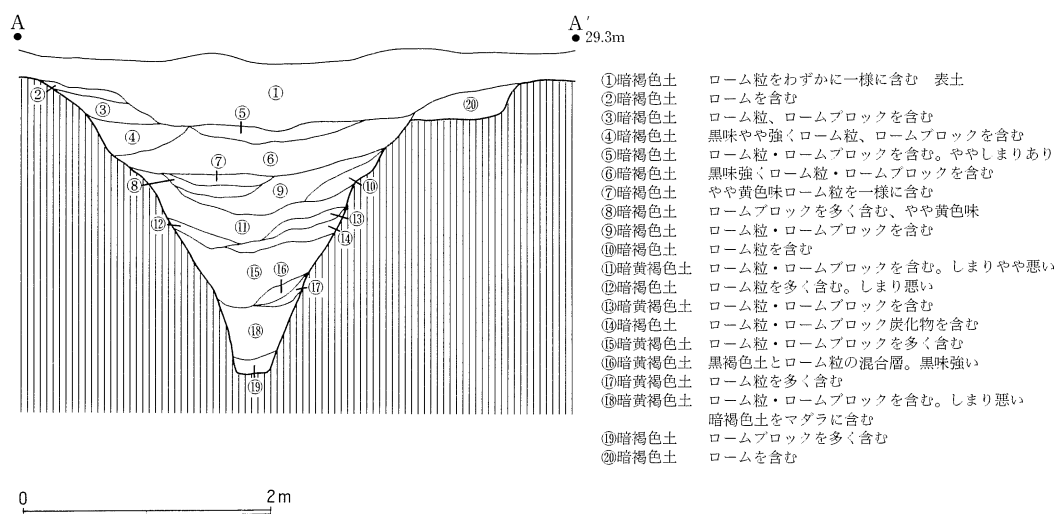
調査区中央を東西に貫通する。西側の市教育委員会試掘部分を合わせて、検出したのは、全長17mの部分である。上端幅は、3.2mではほぼ一定である。南北両法面で傾斜変換線が見られ、内側の方で傾斜がきつくなっている。底面は幅30cm前後で平坦であるが、全体的に断面形態は三角形に近いと言える。確認面から底面までは2.3mである。覆土は全体に同質であったが、中層の傾斜変換線付近では、焼土を比較的多く含む層が面的に広がっているのを確認している。底面で2箇所、断面三角形の高まりを掘り残している。このような掘り残しを伴う遺構は、城郭跡において散見されるものであり、本遺構も同様のものと考えられる。いわゆる畝堀の障壁と見ることができる。周辺の状況から、椎津城に伴うものと判断するのが妥当であろう。なお、059堀跡がこの畝堀と平行するところから、同時



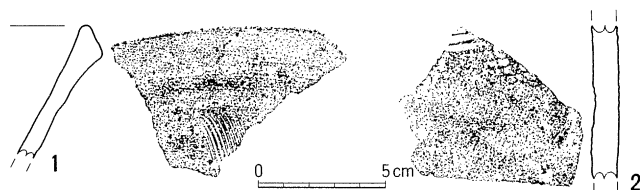
第89図 2次調査区（セ-240）全体図（1/120）



第90図 240-001堀縦断模式図



第91図 240-001 A-A'土層断面



第92図 2次調査区出土遺物

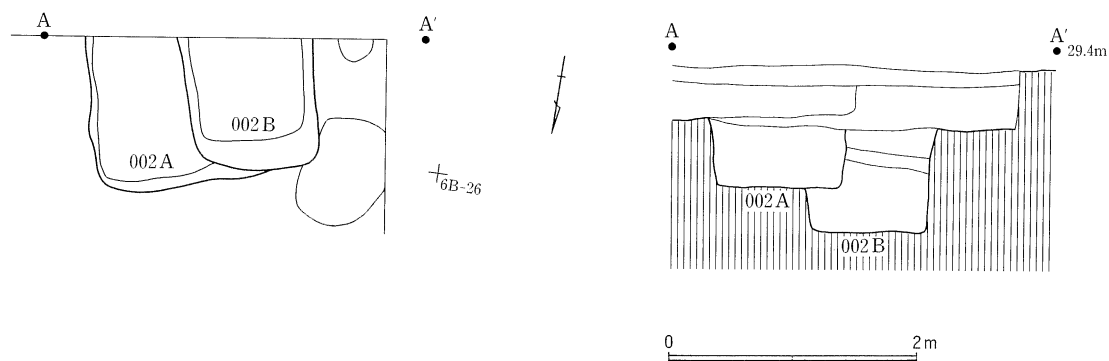
に機能した可能性もある。

これまで、椎津城の城域については、限られた部分において発掘調査が実施されたのみで、ほとんどが縄張り研究によって検討が進められてきた。今回の調査により、遺構という形で城跡の広がりがつかめたことは、ひとつの成果といえる。縄張り研究により想定された堀の位置とは若干の齟齬がみられるものの、台地の狭くなる部分まで城域がおよぶとした想定はほぼ正しかったことが明らかになった。

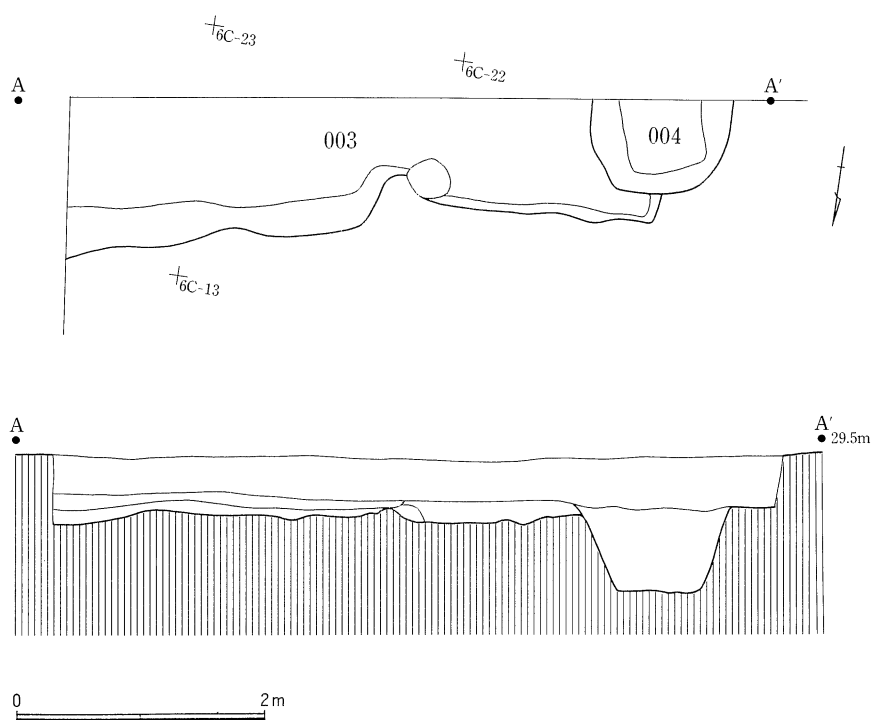
遺物の出土は概して少なく、図示したものを掲げるに留まる。1は瀬戸・美濃系のすり鉢の口縁部である。いわゆる鬼板で、1単位のすり目が認められる。2は甕の肩部であろう。外面に文様状の叩き目を残している。灰色で良く焼き締まっている。

その他の遺構 240-002～004土坑（第93・94図）

堀跡周辺においては、ほかに時期のわかる遺構の検出には至らなかった。とくに北側では希薄である。南側では、方形の土坑や浅い掘りこみが認められた程度である。このうち、002 A・Bはいずれも方形の土坑で、003が002を切っている。どちらも、覆土にはロームブロックを多く含み、一気に埋め戻されているようである。両土坑から遺物の出土はなかった。003は浅い土坑で、004とした楕円形の土坑に切られている。いずれも、全体の形状の把握はできなかった。遺物の出土も認められない。



第93図 240-002土坑実測図



第94図 240-003・004土坑実測図

参考文献（中世の項に限る、順不同）

- 服部実喜 「中世都市鎌倉と周辺地域出土の窯製品」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要 第5輯』 1997
- 藤沢良祐 「中世瀬戸窯の動態」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要 第5輯』 1997
- 青木 修 「続片口鉢の研究－中世知多古窯跡群を中心として－」『財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要 第2輯』 1994
- 河野真知郎他 『神奈川県・鎌倉市 今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』 鎌倉市教育委員会 1990
- 山本哲也他 『財団法人 君津郡市文化財センター発掘調査報告書第69集 千葉県袖ヶ浦市 文協遺跡』 1990
- 青木 修 「片口鉢の研究－中世知多古窯跡群を中心として－」『財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀

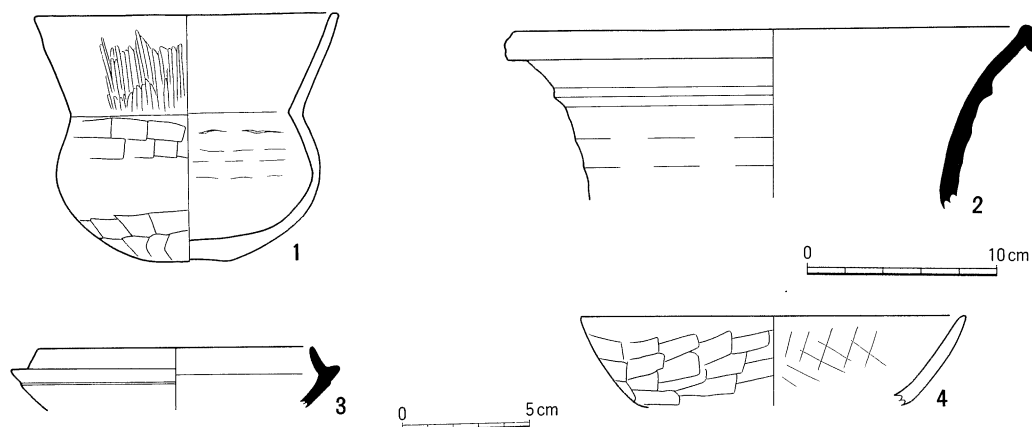
要 第1輯』 1993

- 藤沢良祐 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要第3号』 三重県埋蔵文化財センター 1994
- 中野晴久 「〔2〕常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器 真陽社』 1995
- 浅野晴樹 「中世在地土器の実態」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第8集』 1997
- 鈴木正貴他 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 清洲城下町遺跡Ⅴ』 1995
- 鈴木正貴他 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第53集 清洲城下町遺跡Ⅳ』 1994
- 加藤正信・笹生 衛 「荒久遺跡の概要」『研究連絡誌 第37号』 財団法人 千葉県文化財センター 1993
- 笹生 衛・神野 信 「芝野遺跡の概要」『研究連絡誌 第37号』 財団法人 千葉県文化財センター 1993
- 柴田龍司 「笹子城跡の概要」『研究連絡誌 第37号』 財団法人 千葉県文化財センター 1993
- 笹生 衛 「房総の中世土器様相について」『史館第23号』 株式会社弘文社 1991
- 笹生 衛 『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第10集 一 椎津城跡・大堀城跡発掘調査報告』 千葉県教育委員会 1990
- 笹生 衛・高梨俊夫 『君津市外箕輪遺跡・八幡神社古墳発掘調査報告書』 財団法人 千葉県文化財センター 1989
- 中能 隆・笹生 衛 『財団法人 君津郡市文化財センター発掘調査報告書第98集 千葉県君津市外箕輪遺跡発掘調査報告書』 1994
- 桜井敦史 「椎津尾崎遺跡」『市原市文化財センター年報（平成6年度）』 1997
- 桜井敦史 「分目要害遺跡」『市原市文化財センター年報（平成7年度）』 1997
- 市村高男 「房総における中世城館跡の地域的時代的分布とその特質」『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房国地域』 千葉県教育委員会 1996
- 小野正敏 「出土陶磁よりみた千葉の城館」『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房国地域』 千葉県教育委員会 1996
- 八巻孝夫 「椎津城跡・正坊山城跡」『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房国地域』 千葉県教育委員会 1996
- 浜名敏夫 「小弓公方の家臣上総椎津氏」『市原地方史研究 第18号』 市原市教育委員会 1994
- 浜名敏夫 「上総椎津氏の居城について」『千葉城郭研究 第3号』 千葉城郭研究会 1994
- 柴田龍司 「村落型城郭から都市型城郭へ」『千葉城郭研究 第3号』 千葉城郭研究会 1994
- 中山文人 「松戸市立博物館蔵 間宮家旧蔵文書について」『千葉城郭研究 第3号』 千葉城郭研究会 1994
- 滝川恒昭 「袖ヶ浦市内の城郭に関する資料調査」『袖ヶ浦市史基礎資料調査報告書7 袖ヶ浦の中世城館跡』 袖ヶ浦市教育委員会 1997
- 櫻井敦史 『財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第35集 白船城跡Ⅱ』 1997
- 山下峰司 「灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 1995

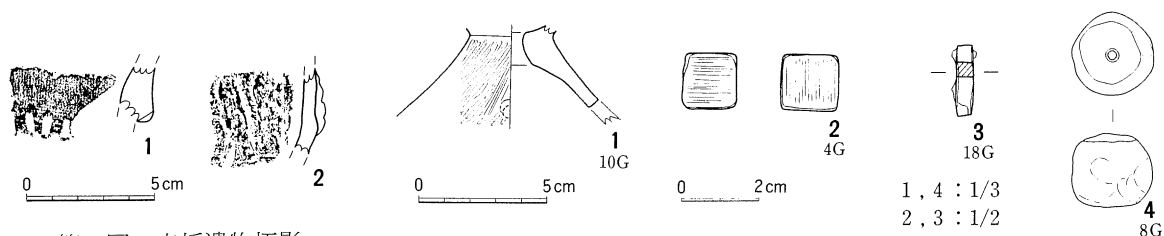
(7) その他の遺物（第95図～第97図）

ここでは、表土除去作業中また排土中から採取された遺物および確認調査で出土した遺物のうち紙幅の都合上掲載できなかった遺物を提示する。確認調査時のグリッドと今回の検出した遺構との重複関係は、大略次頁（第98図）に示した通りである。確認調査の内容は以下の報文を参照されたい。

小出紳夫他『平成8年度 市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会 1997



第95図 表採遺物実測図（1, 3, 4は1/3、2は1/4）

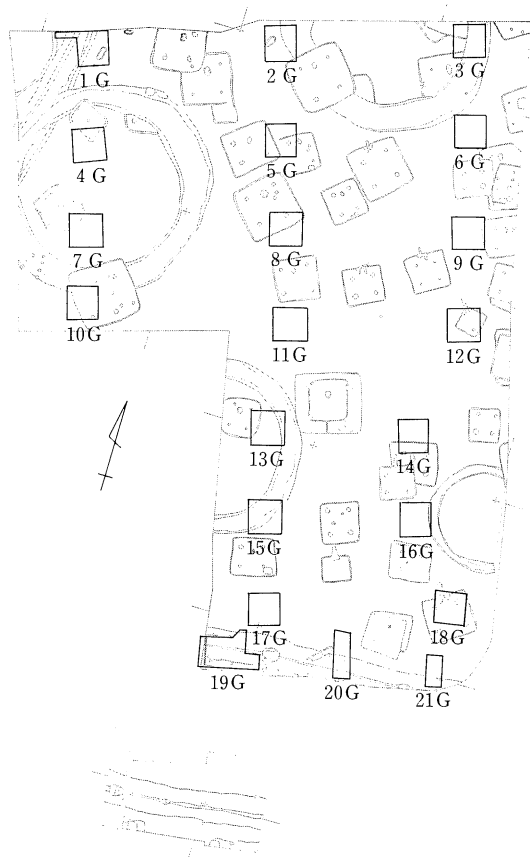


第96図 表採遺物拓影

第97図 確認調査出土遺物

表採遺物のうち1は埴であるが、002住居跡北方の表土除去中に採取したものである。2～4は排土中から採取した。2の須恵器の甕は口縁下に断面三角形の突帯が巡ることが特徴的である。3の須恵器の杯身では、口縁は内傾気味で、蓄受けの下方に次線が巡る。ただし、破片からの復原であるので、この沈線が全周する確証はない。4の土師器の杯は内面に斜格子の暗文が認められる。拓影図の1は、複合口縁の壺の口縁部、2は壺の口縁部で、棒状付文があるものである。付文上に三箇所刻みが加えられている。

確認調査出土遺物のうち2は、立方体の土師質の土製品である。出土位置から考えると、025方形堅穴状遺構との関係で捉えるべきかもしれない。中世の所産であるとする、サイコロを考えてもよいかもしれない。4の土鍾は球と円筒の中間的な形状である。



第98図 確認調査グリッド配置図（1/800）

表採

番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	埴	14.7	2.7	9.9	縦位のハケ 横位のケズリ ナデ 横位のケズリ	ナデ	底部はやや上に凸
2	須恵器	甕	26.8		(8.8)	ヨコナデ 口縁下に断面三角形の突帯	ヨコナデ	
3	須恵器	坏	10.8		(2.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	
4	土師器	坏	15.0		(3.6)	横位のナデ 横位のケズリ	横位のナデ 斜格子暗文	

確認調査

番号	種 別	器 種	口径	底径	器高	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	備 考
1	土師器	器台			(4.0)	斜位のミガキ	ミガキ 脚内部ナデ	透かし穴は4方向

(8) 五霊台遺跡出土の自然遺物（第1・2表）

今回の調査では、いくつかの遺構において、貝ブロックが検出された。古墳時代前期の住居跡032・047、中世土壌墓038、中世溝034がそれら遺構である。032や034では、複数箇所のブロックがある。各遺構における検出の平面的な位置については、個別の報告のなかで表示してある。

これら貝ブロックについては、一括して土嚢袋に収納して持ち帰り、整理作業の一環として、水洗・フルイ・選別・同定・計測を行った。水洗とフルイは同時に行い、その際浮遊した微小貝は、その時点で選別した。フルイは10・4・1mmの3段階を経た。二枚貝については、殻頂の残存しているものを同定、個体数の認定に用い、殻頂のないものは、計数の対象とはしていない。032出土のハマグリについては、比較的個体数が多かったところから、市内のこれまでの分析例に対比しうるように、殻高を計測した。各ブロックの構成内容については、別表の通りである。なお、038については、上記認定基準をみたすものがなかったが、アカニシの殻軸が数点認められている。

各ブロックの組成が何を意味しているかについては、検討の余地があるが、ここで本遺跡における総体的な傾向について、触れておく。ひとつには、貝以外の自然遺物を含むことがほとんどないことを指摘しうる。貝塚に比べ埋没中の土壌環境が骨の残存にはマイナス要因になったとも考えられる。また、貝以外の投棄がそもそもほとんどなかった可能性もある。たとえば034の3ブロックは比較的大きいブロックであったが、漁骨は同定不能の小片が約10点含まれており、すくなくとも埋没中の土壌環境は小破片といえど残存しうる環境であったと考えるべきであり、したがって貝以外の投棄はほとんどなかったとみるべきであろう。ただし、これは034の3ブロックについてのみ適用すべき結論であって、ほかの小ブロックに敷衍するべきではなからう。

また、全体的にイボキサゴの量が非常に少ないことが上げられよう。市内各遺跡において検出される貝ブロックには遺跡の時代にかかわらず、イボキサゴを比較的まとまって出土することが認められる。遺構によっては少量の出土に留まる場合もあるが、遺跡総体でみた場合、必ずといっていいほどその出土量は数千個のオーダーである。五霊台遺跡においては、各ブロック出土の総量でみても150個程度に留まる。このことと相関関係にありそうなのが、アラムシロである。同様に、アサリの出土も極めて少量である。縄文時代中期から晩期にかけての遺跡である市内能満上小貝塚遺跡においては、アサリは、二枚貝のうちでは、ハマグリに次ぐ位置を占め、シオフキがそれにつづくようである。一方、近接する茶ノ木遺跡の5世紀中葉以降の各貝ブロックの内容を見ると、アサリとハマグリが拮抗

する場合と、アサリがハマグリを上回る場合とがある。上小貝塚遺跡と比較すると、相対的にアサリの比重が増しているようである。五霊台遺跡においては、古墳時代前期においては、ハマグリとシオフキが拮抗するようであり、中世においては、シオフキが圧倒的になるが、アサリはほとんど変動しない。どのような要因によるかの検討は措くとして、これはこの遺跡の通時的な特性として捉えてよいであろう。

貝の構成内容が何らかの時代性を反映しているかもしれないと思われるのは、古墳時代前期においては、ハマグリがある程度の比重を占めていると見られるのに対し、中世においては、ハマグリがほとんど見られないことである。また、中世においては、マガキ・シオフキが圧倒的である。ほぼこの2種に収斂していると言えよう。マガキと相関関係があるように見えるものとして、フジツボがある。マガキの殻に付着していたものと考えられる。サルボウは中世のブロックで比較的目的立つ。上小貝塚ではほとんど見られなかったものである。茶ノ木遺跡においては、各サンプル間で多寡はあるが、ほぼ一様に認められるものである。別の貝種との相関は不明である。イボキサゴ、ハマグリ、アサリが僅少なことは、低地上の棗塚遺跡の貝層からはそれらが比較的まとまって認められるのとは対照的である。棗塚遺跡は、同じ中世とは言え、15世紀後半という年代が与えられており、また遺跡の性格も相違すると考えられるので、単純な比較はできない。しかし、五霊台遺跡で検出された中世の貝ブロックの構成物および構成比率は、採貝活動により採取された貝種および比率をストレートに反映したものではなく、市場を介したかどうかは別として、ある程度の選別が働いた結果と見るべきではないだろうか。

近接する茶ノ木遺跡においては、貝類以外にも魚類・鳥獣類の骨が検出されており、その報文において「弥生貝層（125号）がほぼハマグリとアカニシのみに限られているのに対し、古墳時代以降ではイボキサゴ・アサリ・ハマグリ・シオフキなど砂泥底干潟産種を中心に幅広い種を含むようになる。」とされている。ただし、「貝層の年代に不安があること」「採貝パターンに共時的バリエーションが存在した可能性も残されている」こともあわせて指摘されている。上記に想定した選別過程の介在と、採貝パターンのバリエーションとは、ともに貝ブロックの構成内容の対比を通して想定されるのであって、両者を峻別可能かどうかを検討する必要があるだろう。なお、解釈の相違にすぎないが、上記「弥生貝層」についても、その構成の単純さから見る限り、ある程度の選別を経ている感がある。なお、同じく茶ノ木の報文においては、「組成の変異傾向を見ると、多くの種が特定のブロックで高頻度を示す傾向をもつため、ブロック間の組成差が明らかである」との指摘がある。最終的には、解釈の問題となるであろうが、さらなるデータの蓄積によって判断すべきであろう。

五霊台遺跡の貝ブロックに限らず、どの遺跡の貝ブロックもそれぞれの個性があるようにみえる。個性の部分、遺跡全体の特性、さらにはより広い地域的特性、時代的特性を抽出していく必要があるだろう。自家消費型の採取・消費の場合と、市場経済あるいは漁業民支配の権力発生後の採取・分配・消費の場合とで、最終的に遺跡に投棄される貝のあり方に相違があるかどうか。その検証の可能性そのものから吟味する必要があるだろう。少なくとも、五霊台遺跡においては、貝ブロックの検出が数箇所で見られたものの、魚骨の検出は極微量であり、それも中世のものであって、古墳時代前期のブロックからの出土はない。一方、土鍾の出土は広く認められるところであり、集落の構成員が網漁に関わったことは否定し難い。そのような漁労活動が自家消費的であるならば、魚骨の出土が当然視されるで

あろう。しかし、そうはなっていない現実を見る限り、縄文時代的あるいは自家消費的捉え方では理解し難い。魚骨の欠如や比較的単純な組成を示す貝ブロックの存在は、漁獲物の分配する過程を経たことを示すものとも考えられる。埋没環境の影響も当然考慮すべきであろう点については、さきにも触れた通りであり、早急に結論づけることはできないが、そのような可能性も念頭におく必要がある。

姉崎・椎津地区においては、妙経寺遺跡、姉崎台貝塚、棗塚遺跡などの比較的規模の大きい貝層のほかに、原遺跡、椎津尾崎遺跡などで貝の投棄が認められている。今後の分析をまたなければならない部分が多いが、断片的ながら縄文時代から中世にいたる漁業との関わりを明らかにする材料がそろいつつある。漁業史との接点を模索すべきであったが、今回は果たせなかった。市原市においては中世以前の漁業に関する実態は不明な部分が多い。あえて列举するならば、1. 古代市原郡には海部郷が置かれた。（この海部郷は現在の市原市海士有木一帯に比定されている。）2. 応安五年（1372年）「市原八幡五月會馬野郡四村配分帳」には「鮎取」「鯛細工」「浦兄部」等の、職能集団を思わせる記載が見える。「鮎取」は川魚を対象とする漁業集団であろうか。少なくとも、市内のこれまでの調査においては、アユの骨の検出はなく、いつごろから行われてきたのか不明である。「鯛細工」は全くその職能は不明である。「浦兄部」は海面上の権利も含む漁業集団であろうか。「兄部」の意味するところは不明であるが、同文書にはこの「浦兄部」以外に、「調所兄部」「修理所兄部」「佃工所兄部」「検非違使所兄部」がある。なお「検非違使所下部」という記載もあるところから「兄部」は「下部」と対となるものであり、集団の階層を表現したものに見える。集団規模も比較的大きかったのかもしれない。いずれも断片的であり、当時の実態は不明であり、その後の動向についても全く不明である。

参考文献

- 『市原市史資料集（中世編）』市原市教育委員会 1980
- 越川敏夫他 『市原市姉崎・原1号墳周塋址及び集落跡の調査』原遺跡調査会 1984
- 樋泉岳二 「椎津茶ノ木遺跡出土の動物遺体について」『市原市椎津茶ノ木遺跡』財団法人 市原市文化財センター 1984
- 忍沢成視 『市原市能満上小貝塚』財団法人 市原市文化財センター 1995
- 小出紳夫他 「9. 姉崎妙経寺遺跡」『市原市文化財センター年報（平成7年度）』財団法人 市原市文化財センター 1998

4. ま と め

五霊台遺跡は、ここまで報告してきたように、縄文時代から戦国時代にわたる、多様な遺物・遺構が検出された。遺物・遺構ともに量的には、古墳時代前期に属するものが多数をしめ、古墳時代後期、奈良・平安時代がそれに続く。これら量的にまとまりのある遺物・遺構のみで、五霊台遺跡が位置づけられるものではなく、少量の、遺構に伴わない遺物も含め、以下にまとめて、本報告を締めくくることとする。

縄文時代については、遺物のみの出土であった。早期撚り糸文系、子母口式と思われるもの、前後半浮島式、中期初頭下小野式等があった。各時期とも断続的であり、長期的な生活の拠点であったとは考え難いが、周辺一帯は、早・前期の資料が相対的に希薄な状況にあり、貴重な成果と言う事ができよう。

縄文時代中期から弥生時代中期にかけては、本遺跡は空白期であって、弥生時代後期の遺物が散見されるようになる。覆土への混入という形でしか当該期の遺物は得られていないが、おそらく周辺にこの時期の集落が展開していることと考えられる。

まとまった形で遺物・遺構が検出されたのは、古墳時代前期遺構であるが、この中で032や055は相対的に古相を示すようである。032ではS字口縁甕が認められ、055では駿河東部の大廓式の壺が出土している。015では山陰系といえる高坏がある。S字甕については、肩部に沈線を巡らすものとそうでないものの2種に大別される。出土状況からは、両者を時期的に分離できないが、少なくとも、在地の系譜ではなく、伊勢湾沿岸の動向の中でとらえるべきものと理解すると、断続的ながら伊勢湾方面からの影響があったとはいえる。それが直接的であるか、間接的であるかはここでは問わないこととする。これは他の外来系の土器についても同様である。当該期の遺構から出土した土器のうち、甕については総体的に素口縁で頸部が「く」字状に屈曲するものが多い。屈曲の度合いはあまり強くないという印象をもつ。破片資料のなかには、口唇に刻みを甕の口縁部が含まれ、弥生時代後期から古墳時代前期に位置付けられると考えられるが、特定の時期を与えることができなかった。口唇部の刻みと一口に言っても、刻みの方向、施文具等一様ではないことは、ここであらためて述べるまでもないが、時期差、地域差、場合によっては個人差を包含しているようでもある。これらの検討については、今回は行っていない。住居跡出土遺物の中では、器台や埴・甕が多い。微妙な形態差の違いはあるが、ほぼ同一類型と扱いうる。典型的な五領式の段階で捉えられると考えられる。これら集落の営みが一旦途絶えるのは、土器の組成からみると019のような坏部下半に稜をもつ、あるいは脚の接地部が屈曲する高坏を伴う時期に至ってからのことと考えられる。土器編年上からは和泉式にかかる時期であろうが、相伴する甕に大きな形態上の変化も認めがたく、高坏の形態から別の時期とするよりは、一連の時間の中で捉えて差し支えないと判断し、今回は古墳時代前期として一括した時期区分を与えた次第である。

この、いわば第一次の集落期の営みが途絶えたのち、円墳群が形成された。いずれの円墳についても不完全な調査しか行いえなかったが、全体的な傾向としては、北寄りのものが相対的に大きい感がある。海岸よりから順次、墓域を拡大していったことの現れであろうか。いずれも主体部は検出されず、供献した土器を分離するのは困難であった。わずかに036の周溝直上で検出された壺がそのおおよその時期を示すと考えられる。また、001出土の高坏等が供献されたものであったかもしれない。

つぎに集落が形成される古墳時代後期のあいだを繋ぐ時期の中に収まるという漠然とした位置のみ与えておくこととする。

円墳群の形成ののちふたたび集落の形成が始まるのは、古墳時代後期からである。茶ノ木遺跡における住居跡の増加傾向の影響が、この地に及んだものとも考えられる。012においてまとまった遺物の出土が認められる以外は、甕の出土が目につく。甕だけ見た場合、形態上の差異は認めがたく、限られた供伴遺物から動向を推し量るしかない。たとえば046で出土した、やや小振りの坏Gは7世紀の中葉の所産であろうか。014から出土した底部のやや突出する高台付きの坏は、7世紀末から8世紀前半の、やや幅をもった時期であろう。049で見られた斜格子+螺旋の組み合わせをもつ暗文を持つ土器や007で出土した上総産と思われる須恵器は、8世紀中葉以降に位置付けられよう。このように見てくると、古墳時代後期以降の住居跡は、時期的に重複するものは、多くて2～3軒に留まると考えられる。全体に間延びさせて考えると、一時期一軒の可能性すらある。8世紀の住居跡については、椎津城主郭周辺でも確認されているが、総体として、閑散とした景観であったと思われる。最終的には、北東隅にカマドをもつ011をもって、再度形成された集落の展開は終了する。

なお、2度にわたる集落の営みのなかで、いわば通時的に見られるものに土鍾がある。形状としては、球状・卵状・円筒状・両端の細い管状とおおまかな分類は可能である。一部にどちらとも言い難いものを含む。形態および重量、孔径の差異が捕獲対象物の相違・時期による形態差等を反映していると考えられるが、その詳細については、明らかではない。量的には球状のものが多く、次いで円筒状、卵状は少数である。両端の細い管状のものも少数であるが、おそらく時期的には後出である。球状のものは、比較的存続期間が長いようである。円筒状のものは、球状のものと重複するようであるが、重量でみると、100gを超えるものは、円筒状のものに限られる。形状と重量に相関関係があることは認められよう。ただし、具体的に対象物の相違や漁法の相違を明らかにするのは困難である。この遺跡の特性の一つとして、網漁との関連が継続的に認められることがあげられるが、茶ノ木遺跡、尾崎遺跡を含め、海との関わりを強くみせているところに、この付近一帯の共通性が見出せる。

2度目の集落期のあとは、しばらく空白期があるようで、再度墓域となるのは、中世以降である。今回検出した土坑のうち、人骨を伴うものは3基、形態から土壇墓と判断したものが一基ある。039は和鏡と渡来銭が出土している。和鏡そのものの年代は、平安末とされるようだが、県内の諸例同様鎌倉期としておきたい。ほかの土壇墓については、手がかりを欠く。ある程度の時間幅は考えておいたほうがよいかもしれない。

土壇墓群の形成ののちの様相は、漠然としたところがあるが、方形竪穴状遺構や隣接する溝をほぼ一体のものと捉え、これらから出土した常滑の捏ね鉢や、山茶碗窯系捏ね鉢、渥美と思われる広口壺、瀬戸・美濃系の山茶碗などの一群を一括して扱っておきたい。各窯業生産地の編年観とは齟齬をきたす面もあるだろうが、消費地においては整合的には出土しないことは、鎌倉の状況からみる限りむしろ当然とすべきであろう。現段階では、年代を与えるのもためられるが、おおまかに14世紀前後としておく。将来的に修正する余地は大いにある。年代の目安とした、陶器類の年代を生産地の編年に直接あてはめれば、一部は13世紀前半頃まで押し上げることも可能であろうが、消費地鎌倉の様相を加味する限り、やや強引に過ぎると言えよう。袖ヶ浦市芝野遺跡とは、渥美製品の出土等類似する点がある。山茶碗や山茶碗窯系捏ね鉢の出土量は、いまだに希薄である。これらについては、鎌倉からまわって出土している。しかし、そのことをもって鎌倉との結びつきを強調するものではない。今回検出された遺構は、方形竪穴状遺構と溝のみであり、芝野遺跡で想定されている農村集落に近く、当時

の陶器の流通の一般的なあり方を示していると考えておくべきであろう。

椎津城主郭周辺においては、14世紀中葉の板碑が数例認められており、この時期に墓域が形成されたと考えられている。椎津城主郭周辺の調査においては、実際には墓墳の検出にはいたっていない。今回検出した、農村集落の一部とみられる遺構と、上記の墓域の関係については、今回の調査の範囲では判然としない。尾崎遺跡においては、方形竪穴状遺構の一つから13世紀前半の青磁皿片が出土している。五霊台遺跡とは300m離れており、現段階では同一遺跡かどうか判断し難いが、袖ヶ浦市文協遺跡のような遺跡の広がりを考えるならば、同一遺跡として位置付けられる可能性がある。その場合、五霊台遺跡、尾崎遺跡、椎津城主郭周辺をふくめた一帯に中世遺跡が展開している可能性も出てこよう。上記遺物より若干時期の下る遺物として、034出土の瀬戸・美濃系の縁釉皿、059出土の常滑の甕をあげることができる。

五霊台遺跡は、最終的には椎津城の一画を占めることとなる。A地点B地点の境界となった、東西方向に走る現道に平行して検出された二条の堀は、二条で対になるものかもしれない。南側の堀は、障壁を伴ういわゆる畝堀と考えられ、城郭特有の構造とみなしうる。二条の堀の規模が、全体に小振りな感は否めない。堀の間に土塁の痕跡でもあれば、堀の規模を補完する機能も想定し得、整合的な理解が可能になるだろうが、そのような証左はない。覆土中から出土した陶器類は、15世紀後半から16世紀にかけての所産であろう。量的には少なく、また、時期を同じくする建物の検出は認められず、恒常的施設が、堀の北方に展開していたとは考え難い。主郭と二ノ郭が16世紀中ごろに大規模な火災に見舞われ、その後に大規模な改修を受け、現在の城郭遺構が形成されたとされているが、火災を思わせる痕跡は、畝堀の覆土中層に焼土を多く含む層があり、それと結びつけて考えることが可能である。その場合、これら焼土の堆積は、焼失材の投棄によると考えられる。これが、覆土中層であることから、火災の段階では、畝堀がある程度埋まっていたということになる。火災ののちに改修を受けたという文脈には一致しない。異なった過程を経たと考えざるを得ない。尾崎遺跡で検出されたピット群は、椎津城に付随する集落遺構との見解が示されており、その中で16世紀には廃絶し、海岸砂堆上へ再編成されたと見られている。このような動向は史料からは伺い知れず、一方で16世紀以降に集中して史料上に現れる椎津城にかかわる事象を今回の調査成果から再構成するのも困難である。

中世陶磁器に関しては、生産地・消費地における研究が活発であり、双方の研究を土台にして、流通にかんする議論も活発である。また、消費地においては、出土陶磁器の構成比率の相違・変化が論じられている。今回の調査で出土した中世陶磁器は、量的には少なく、上記の研究動向に寄与しうる部分は少ない。ただし、中世前半の資料はまだ乏しいと言える段階にあり、瀬戸・美濃系の拡散以前の状況を知る上で、山茶碗や山茶碗窯系捏ね鉢について、今後も注意しておく必要がある。棗塚遺跡では、15世紀後半を中心とする時期の遺物がまとまって出土している。遺跡の性格・時期の相違はあるが、比較検討の進展によって、五霊台遺跡を含めた形での姉崎・椎津の海岸周辺部における中世の様相はさらに明らかになるであろう。

以上で、五霊台遺跡の総括をしめくくることとする。約3,000㎡の調査であったが、量的な多寡はあるが、縄文時代から戦国時代までを含む遺跡であることが明らかとなった。各時代・各分野において、多様な研究が進められている現状のもと、今回それらを逐一検討することはできなかった。手許の諸論文・報告にあたった程度である。あるいは、当然あたるべき文献にあたっていないかもしれない。また、特定の時代・事象の追求に偏らないよう留意したつもりである。それらの責は、報告者の負うものである。

第3表 土鍾計測値一覧表

鍾番号	遺構	形状	長さ	太さ	孔径	重量	残存状況	図番号
1	001	球	3.2	3.6	6	43	完形	57-41
2	001	球	3.6	(3.3)	(7)	(19)		57-44
3	001	球	3.3	3.4	9	(21)	約 1/2	57-43
4	001	球	(2.9)	(3)	(8)	(14)		57-48
5	001	球	(1.5)	(2.7)	(5)	(5)		57-50
6	001	球	(1.4)	(3)	7	(9)		57-49
7	001	管	4.3	3.4	9	(36)		57-39
8	001	球	3.6	(3.3)	7	(21)		57-46
9	001	球	4.2	(3.2)	(6)	(18)		57-45
10	001	球	(1.6)	(3.6)	7	(13)		57-47
11	001	管	4	3.1	5	50	完形	57-38
12	001	球	3.1	3.6	(6)	(22)	約 1/2	57-42
13	001	管	(2.5)	(2.6)	(8)	(8)		57-40
14	001	卵	4.4	3.5	5	53	完形	57-36
15	001	球 ?	3.5	3.7	5	50	完形	57-37
16	005	管	(4.2)	(2.3)	(12)	(9)		42-16
17	005	管	(3.3)	(2.7)	(13)	(10)		42-17
19	005	球	3.5	3.5	7	41	完形	42-21
20	005	球	3.9	3.4	5	44	完形	42-20
21	005	管	3.6	(2.5)	(14)	(9)		42-18
22	005	球	3.5	3.7	7	43	完形	42-22
23	005	管	5.6	3.1	11	32	約 1/2	42-15
24	005	管	(1.8)	(1.5)	(10)	(3)		42-19
25	006	管	5.5	3	15	(30)	約 1/2	21-9
26	014	球	3.3	3.7	5	37	完形	69-11
27	015	管	(4.5)	2.7	7	(28)		24-9
28	015	球	3	3.5	7	30		24-8
29	017	球	(2.2)	(2.7)	(7)	(8)		22-2
30	018	球	3.7	3.5	12	44	完形	23-10
31	018	管	5.3	3.5	10	79	完形	23-11
32	019	管	3.5	3.5	5	55	完形	33-16
33	019	管	2.5	3	5	29	完形	33-17
34	019	管	5.3	3.5	5	(43)	約 1/2	33-18
35	019	球	3.3	3.8	6	49	完形	33-19
36	019	球	3.7	3.7	5	(27)	約 1/2	33-20
37	019	球	(3.7)	4	7	(27)	約 1/2	33-21
38	023	球	3.1	3.1	4	27	完形	20-22
39	023	球	3.2	3.5	4	38	完形	20-23
40	023	管	(1.7)	(1.4)	(6)	(1)		20-24
41	023	管	(2)	(1.9)	(6)	(4)		20-25
42	025	管	(3.8)	(2.8)	(17)	(16)		79-5
43	025	管	(2.7)	(2.3)	(9)	(7)		79-6
44	025	管	(2.2)	0.9	2	(1)		79-8
45	025	管	(3.3)	0.8	2	(2)	約 1/2	79-7
46	026	管	4.3	3	6	42	完形	26-9
47	026	管	(3.3)	(2.2)	(10)	(6)		26-10
48	026	管	(2.2)	(2)	(11)	(4)		26-11
49	028	球	(3)	3	4	(21)	約 1/2	27-3
50	032	球	(2.8)	(3.4)	4	(12)		13-40

鍾番号	遺構	形状	長さ	太さ	孔径	重量	残存状況	図番号
51	034	管	6.2	(2.8)	(11)	(22)		83-21
52	034	管	5.3	3	11	43	完形	83-18
53	034	管	5.3	2.7	8	36	完形	83-17
54	034	球	3.5	3.3	5	34	完形	83-22
55	034	管	4.3	2.6	9	(23)		83-20
56	034	管	4.3	2.8	10	(29)		83-19
57	035	管	(4)	3	(14)	(14)		84-2
58	035	管	4.2	1	3	4	完形	84-1
59	036	球	3.6	3.7	7	47	完形	51-18
60	036	球	3.2	3.7	6	41	完形	51-19
61	036	球	3.5	4.3	6	55	ほぼ完形	51-26
62	036	球	3.9	3.5	5	51	完形	51-20
63	036	球	(2.9)	3.6	4	34		51-27
64	036	球	3.1	3.6	6	39	完形	51-21
65	036	球	2.4	2.9	6	21	完形	51-25
66	036	球	3	3.3	7	(19)	約 1/2	51-28
67	036	球	3	3.4	7	(15)		51-29
68	036	管	2.4	(2.5)	6	(8)		51-30
69	036	管	(2.1)	(2.1)	(8)	(4)		51-31
70	036	球	3.6	3.3	4	41	完形	51-22
71	036	球	2.6	3.2	6	24	完形	51-23
72	036	球	2.8	2.7	6	21	完形	51-24
73	044	球	(2.5)	(3.1)	6	(13)		60-4
74	044	管	(1.6)	(1.8)	(12)	(2)		60-5
75	045	球	3.9	4	7	55	完形	67-16
76	045	球	3.5	3.9	9	53	完形	61-15
77	045	管	3.5	(2.3)	(7)	(15)		61-17
78	045	球	2.3	2.5	5	14	完形	61-14
79	045	管	3.6	(1.2)	3	(5)	約 1/2	61-18
80	045	管	3.2	0.9	3	2	ほぼ完形	61-19
81	046	管	5.6	1.4	4	9	ほぼ完形	68-8
82	046	管	4.2	1.6	4	9	完形	68-7
83	047	管	(2.2)	(1.9)	(8)	(5)		28-6
84	047	管	5.7	3.9	9	108	完形	28-5
85	051	球	3.4	4	5	53	完形	31-5
86	052	球	(2.4)	(3.4)	7	(14)		71-3
88	053	球	(3)	(3.2)	(6)	(13)		30-12
89	053	卵	3.7	2.8	6	29	完形	30-10
90	053	球	(3.4)	3.7	7	(22)	約 1/2	30-11
91	055	管	5	3	8	(42)		9-26
92	055	管	6.6	4	15	127	完形	9-25
93	056	管	5	4.2	13	114	完形	36-2
94	058	管	(2.2)	(2.3)	(9)	(5)		60-6
95	058	管	(2.2)	0.9	3	(2)		60-7
96	059	管	6.2	1.9	6	20	完形	88-8
97	059	球	3.3	3.3	8	29	完形	88-7
98	030	管	5.6	3.7	13	90	完形	39-13
99	8G	球	2.9	3.2	3	37	完形	97-4

写真図版



1次調査区（北半）と椎津城主郭（南より）



1次調査区（南半）と2次調査区（西より）



023 住居跡全景



023 遺物出土状況



024 住居跡全景



024 遺物出土状況



031 住居跡全景



030 住居跡全景



029 住居跡全景



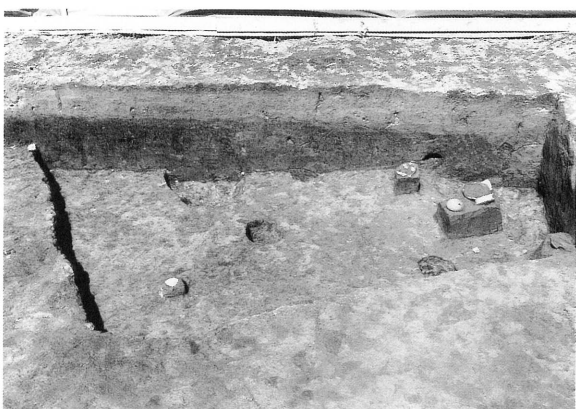
002 住居跡全景



026 住居跡全景



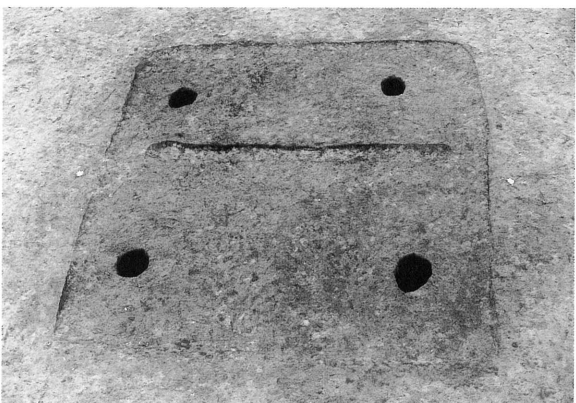
027・028 住居跡（手前は026）



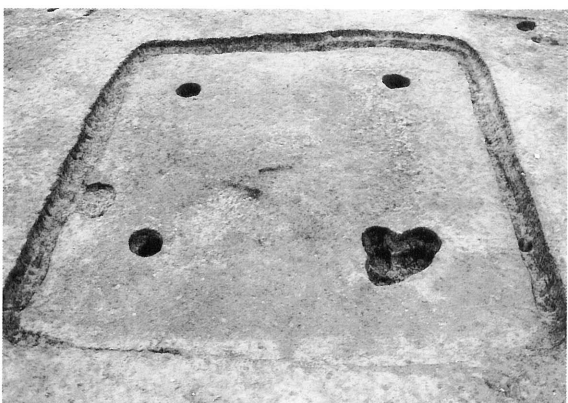
021 住居跡全景



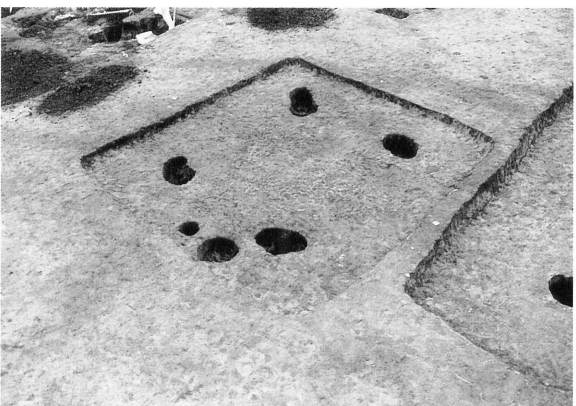
021 遺物出土状況



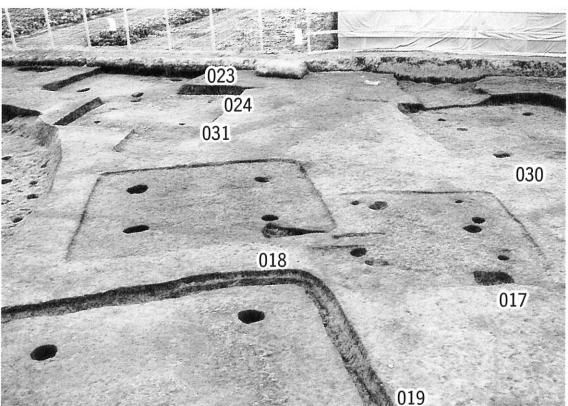
020 住居跡全景



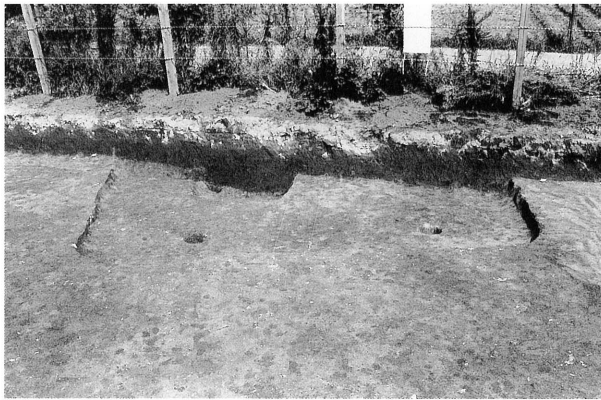
019 住居跡全景



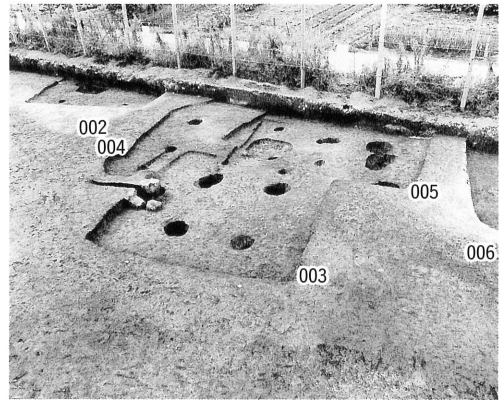
015 住居跡全景



018 住居跡と周辺の住居跡



002 住居跡全景



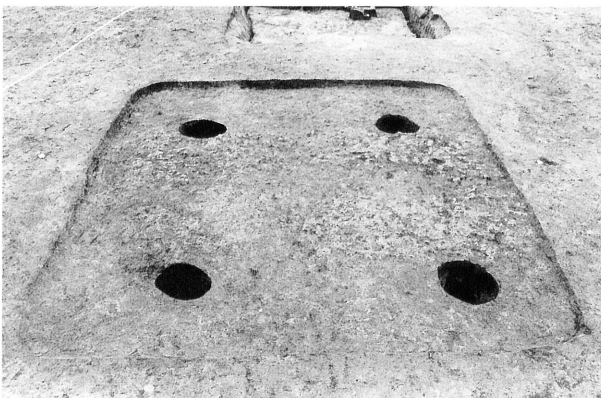
003 住居跡と周辺の住居跡



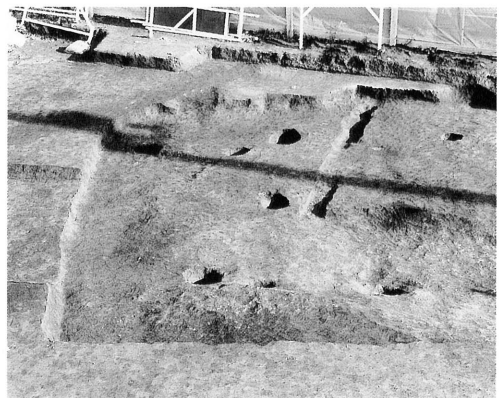
055 住居跡全景



055 住居跡全景（真上から）



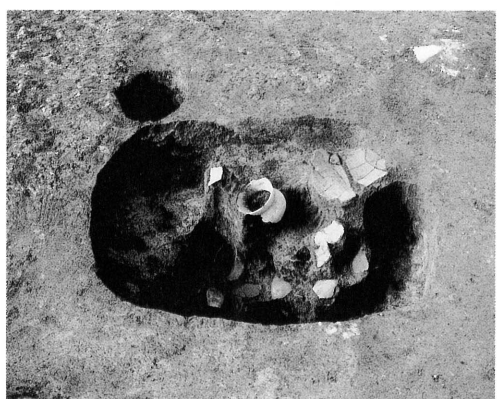
051 住居跡全景



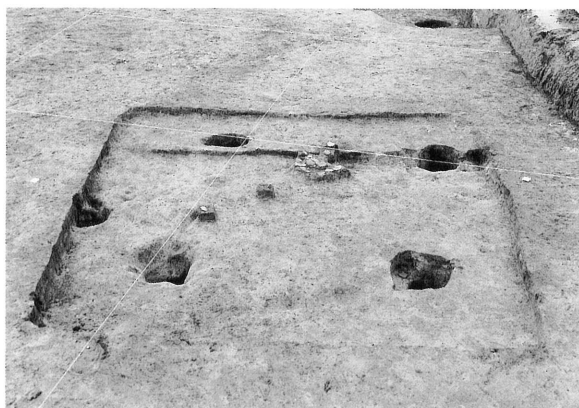
032 住居跡全景



050 住居跡全景



050 遺物出土状況（貯蔵穴）



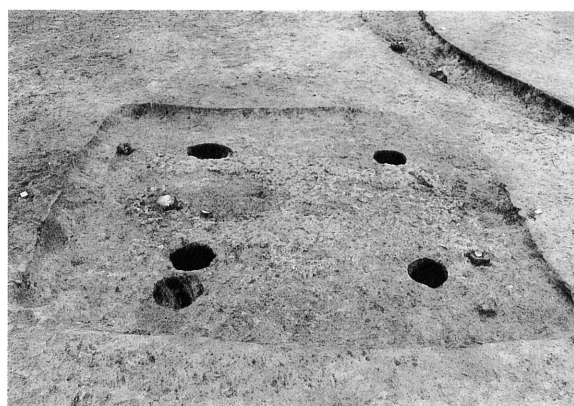
054 住居跡全景



047・057 住居跡全景



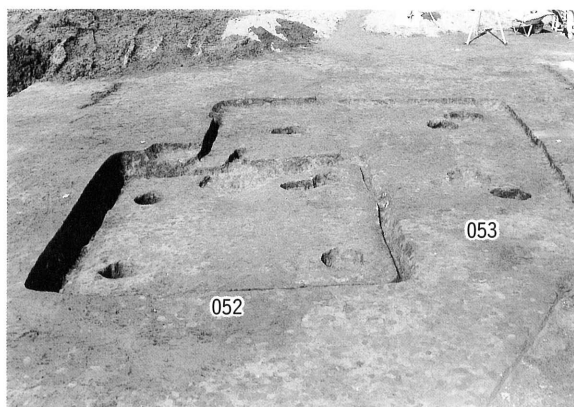
056 住居跡全景



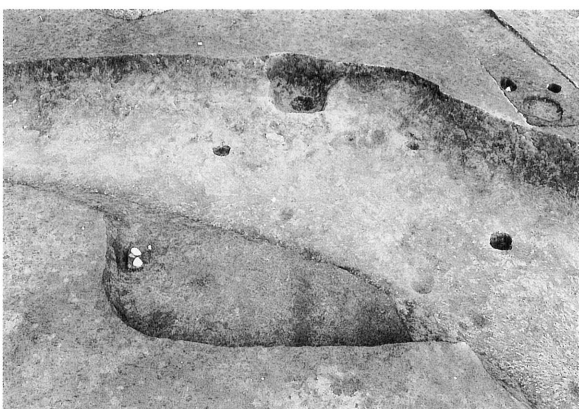
048 住居跡全景



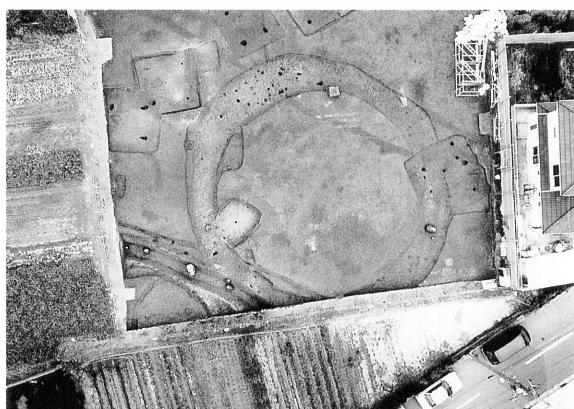
060 土坑遺物出土状況



052・053 住居跡全景



037 住居跡全景



036 円墳全景



036 円墳全景



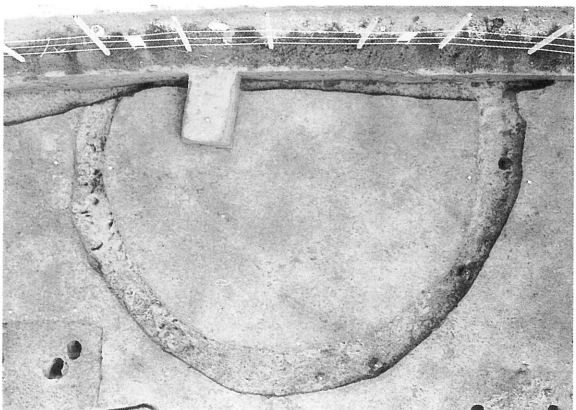
036 遺物出土状況



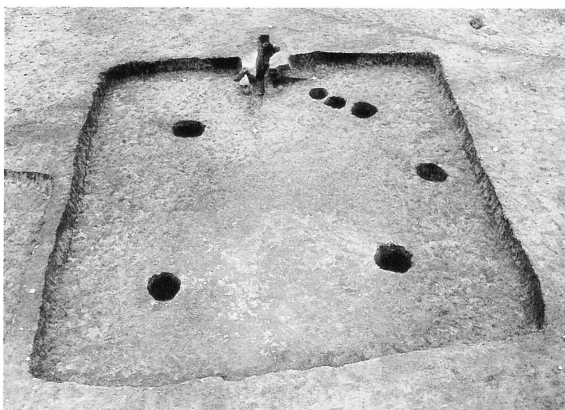
001 円墳全景



045 円墳全景



044 円墳全景



012 住居跡全景



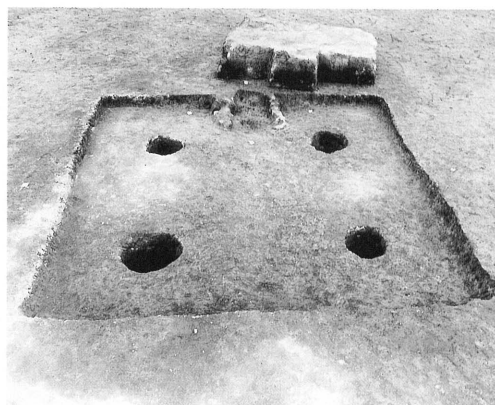
012 遺物出土状況



012 遺物出土状況



003 遺物出土状況



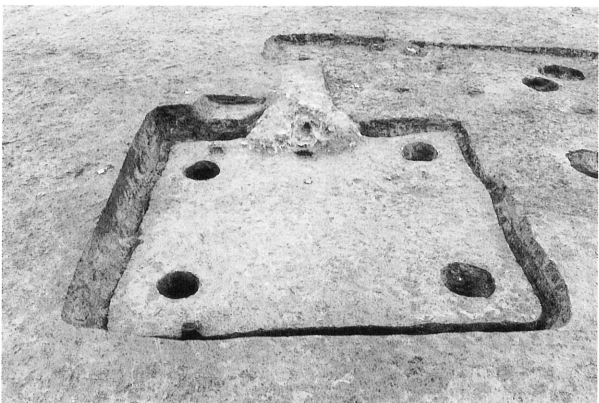
016 住居跡全景



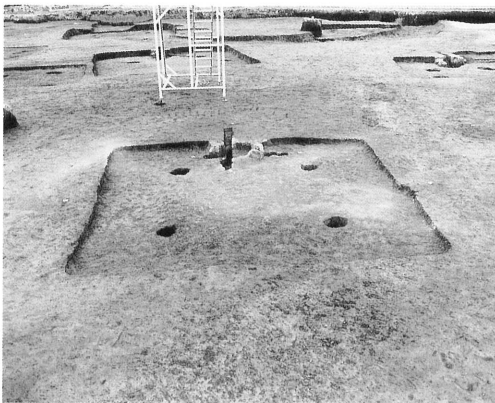
007 住居跡全景



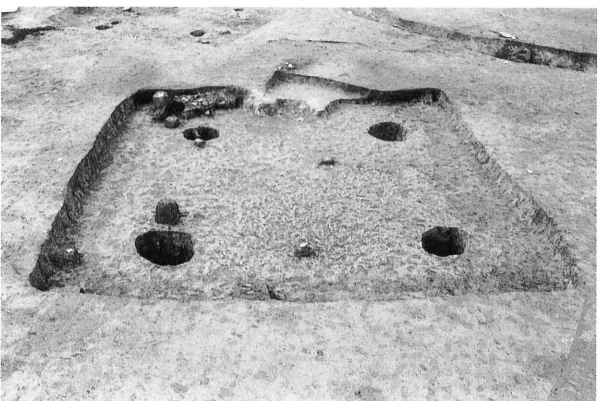
007 遺物出土状況



052 住居跡全景



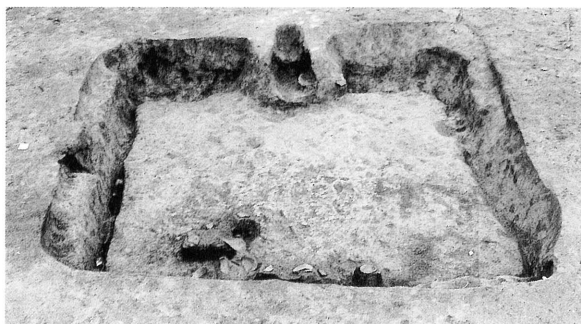
014 住居跡全景



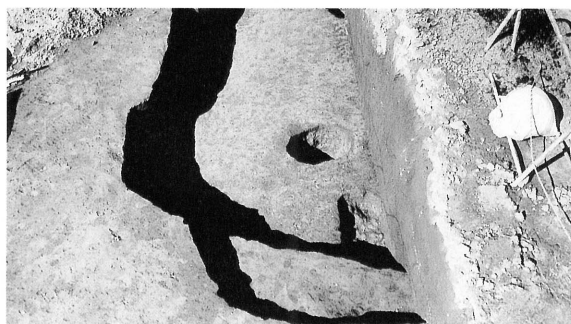
046 住居跡全景



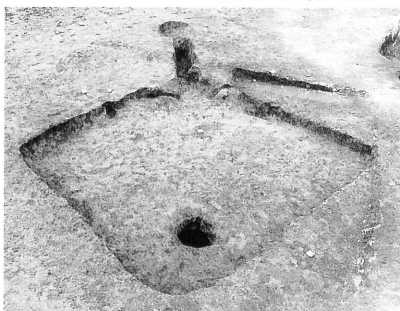
014 遺物出土状況



049 住居跡全景



009・010 住居跡



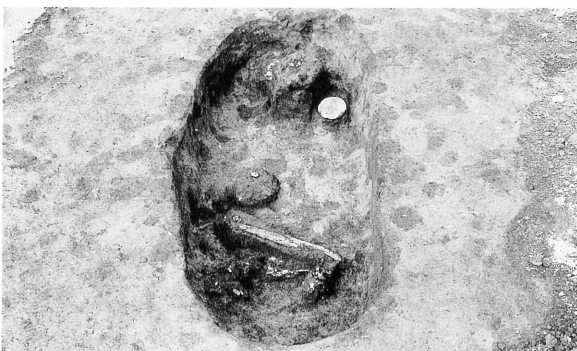
011 住居跡全景



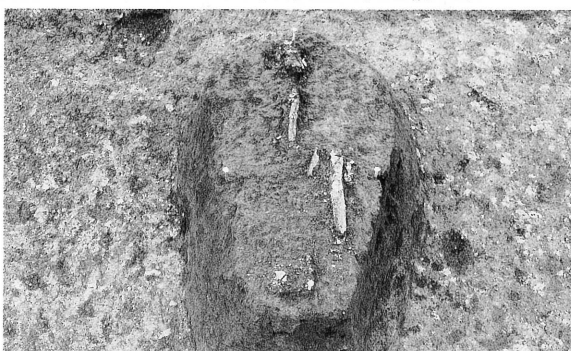
011 遺物出土状況



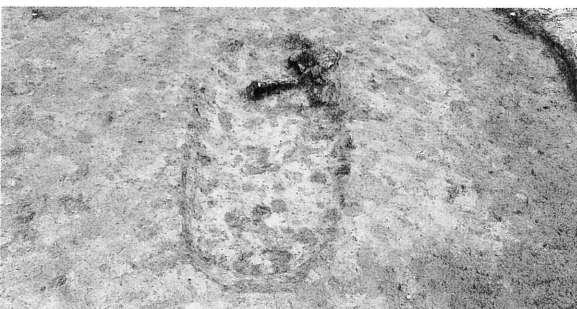
025 方形竪穴状遺構全景



039 土墳墓全景



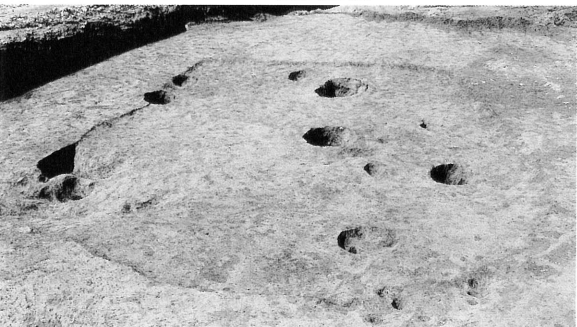
042 人骨出土状況



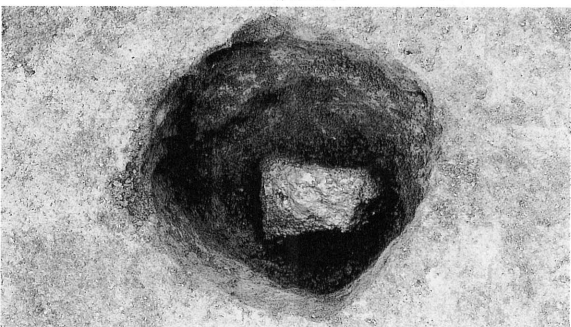
038 土墳墓全景



034 溝全景



043 ピット群検出状況



043 石材検出状況



059堀跡全景



059内土坑（1）および周辺のピット群



059内土坑（2）検出状況



059北法面のスロープ



059西壁土層断面



2次調査区西半（障壁のある堀，240-001）



2次調査区東半（障壁はない）



2次調査区002土坑



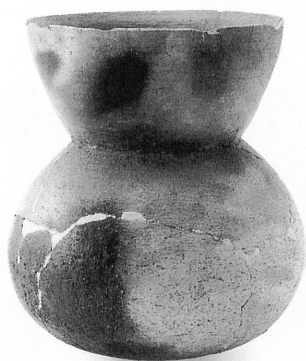
023



023



023



023



023



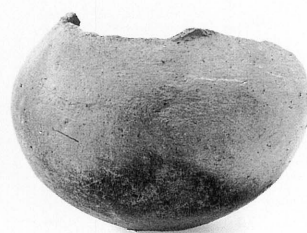
023



023



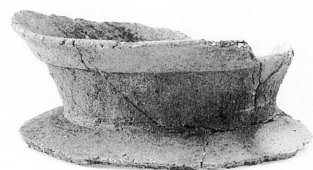
023



023



023



024



024



024



031



032



032



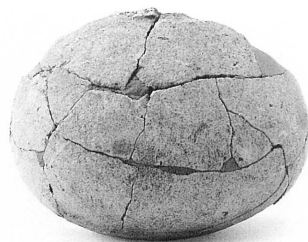
032



032



032



032



032



032



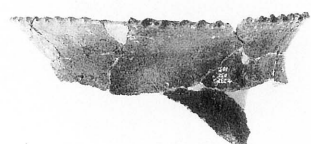
032



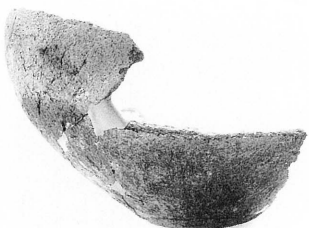
032



032



032



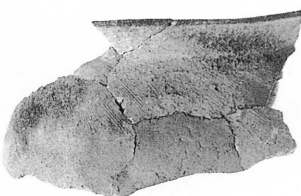
032



032



032



053



053



055



055



055



055



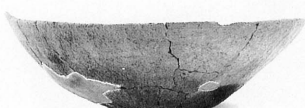
055



055



055



055



055



055



055



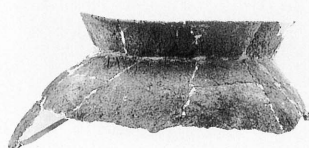
055



055



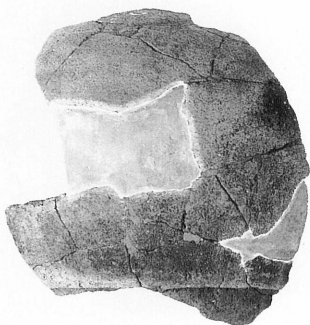
055



055



055



055



004



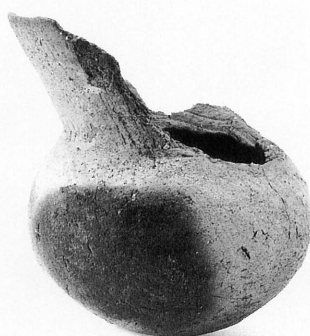
005



005



005



005



005



050



050



050



050



051



056



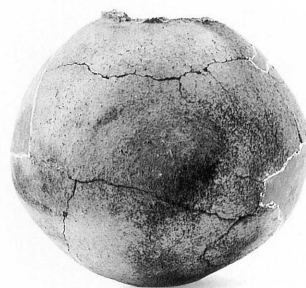
054



015



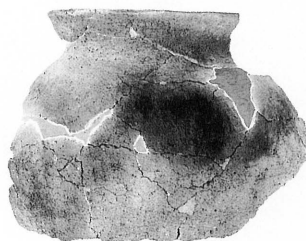
015



015



015



015



015



017



030



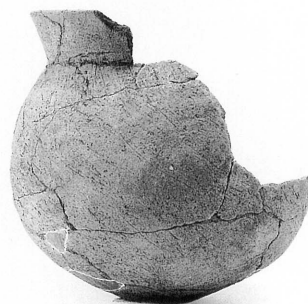
030



060



060



060



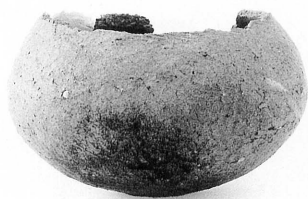
060



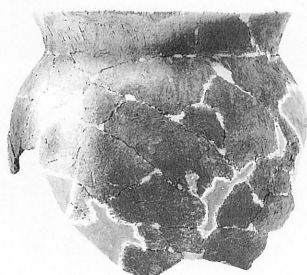
048



018



018



018



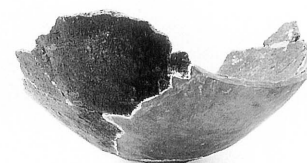
018



018



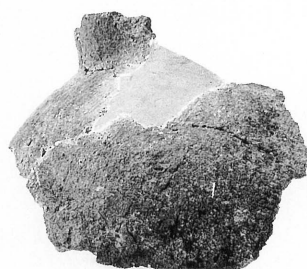
018



018



047



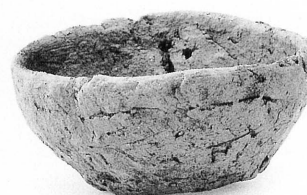
047



047



028



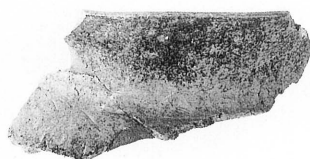
006



006



026



026



026



019



019



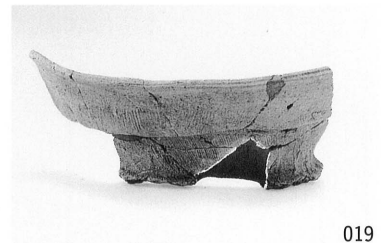
019



019



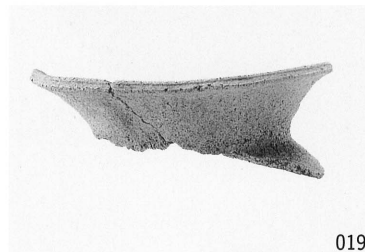
019



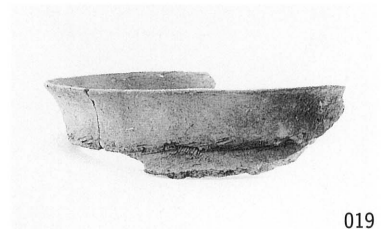
019



019



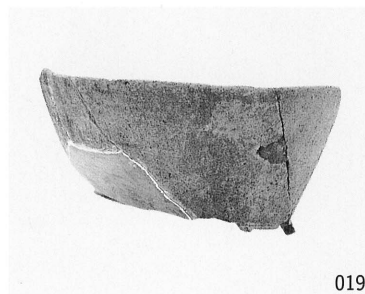
019



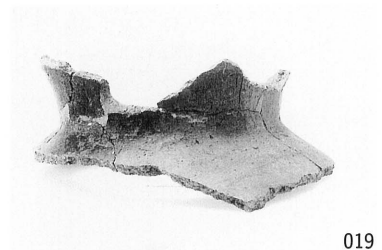
019



021



019



019



002



021



021



021



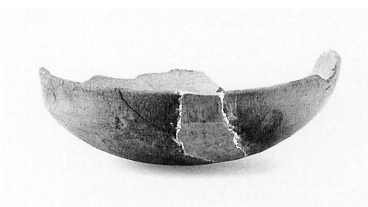
012



012



012



012



012



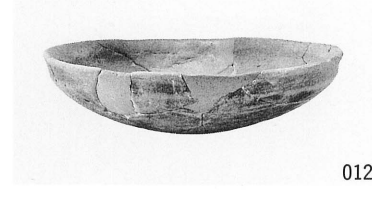
012



012



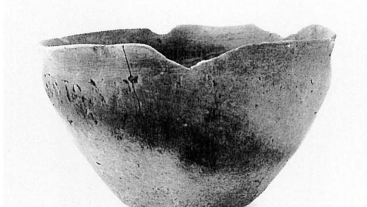
012



012



012



012



012



012



012



012



012



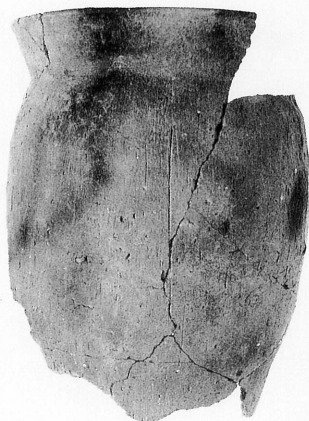
012



012



012



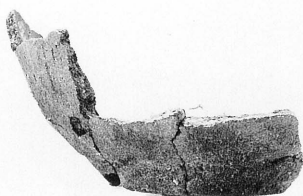
012



012



012



012



052



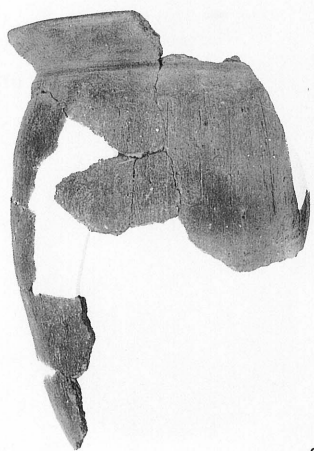
003



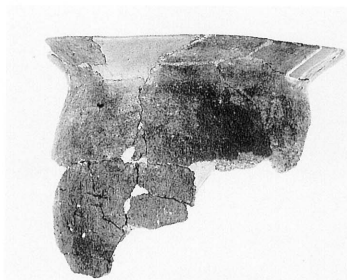
003



046



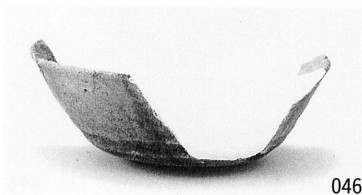
046



046



046



046



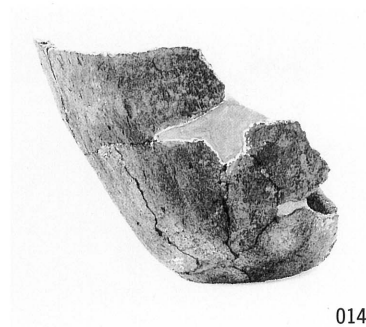
046



014



014



014



007



014



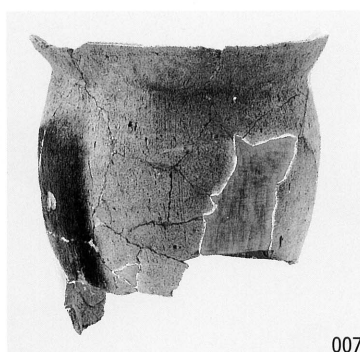
007



007



007



007



007



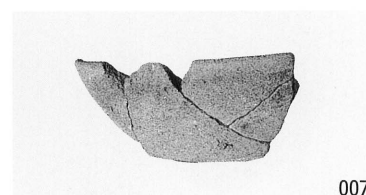
007



049



049



007



049



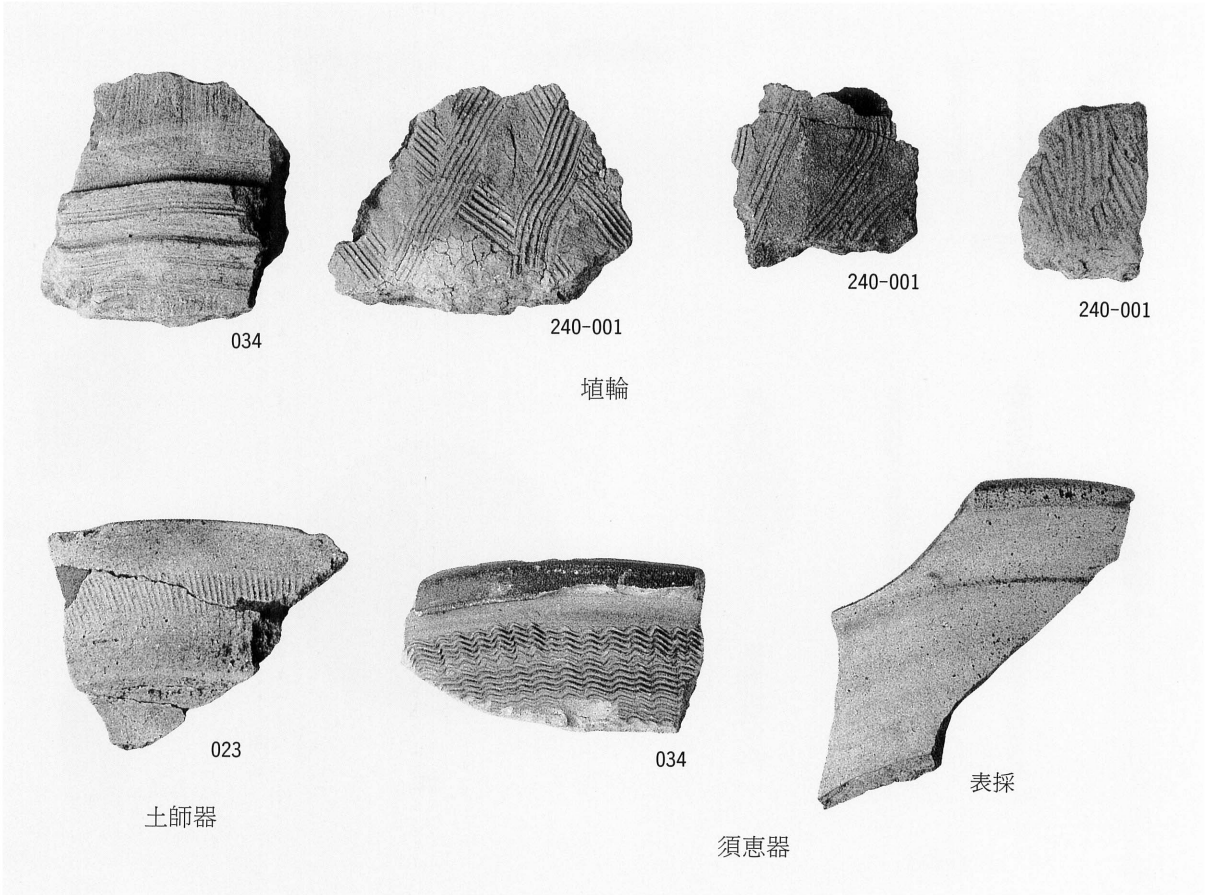
049



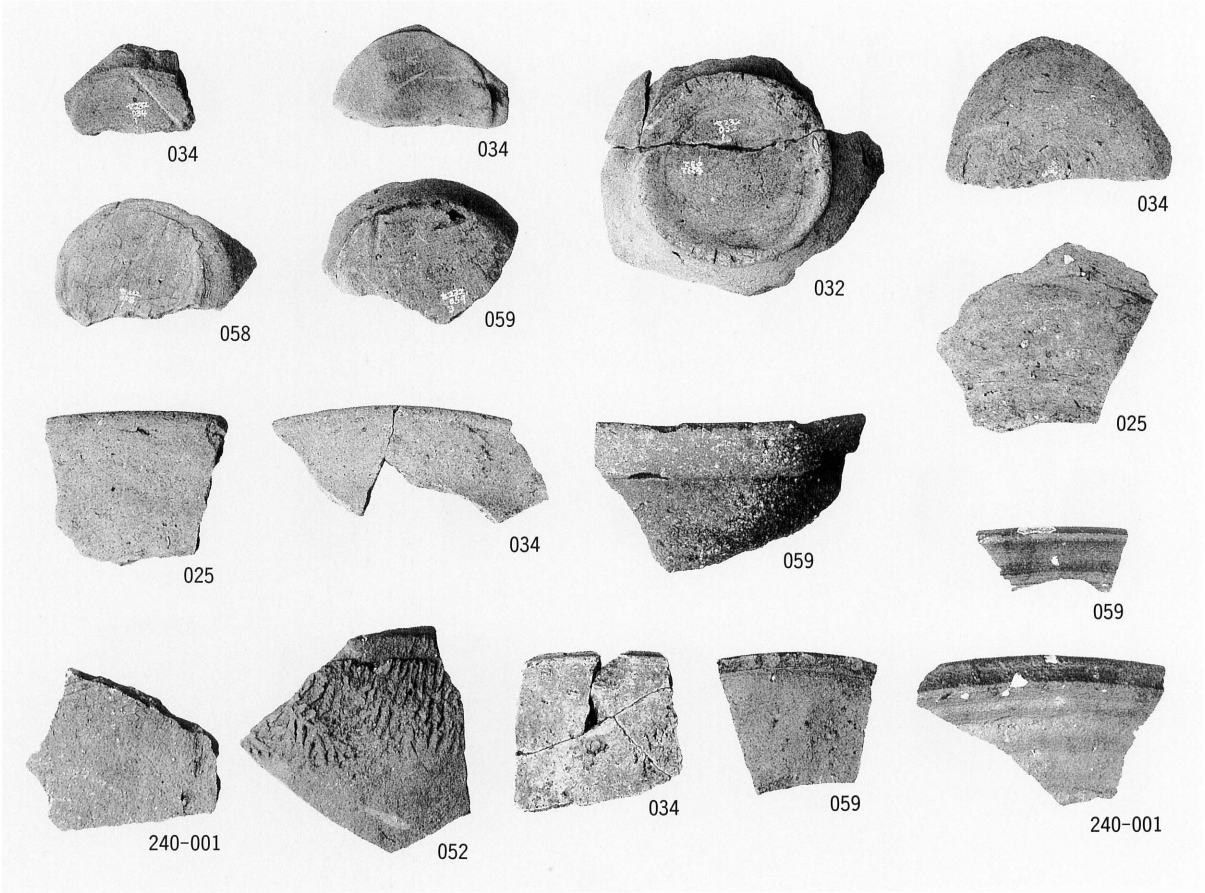
007



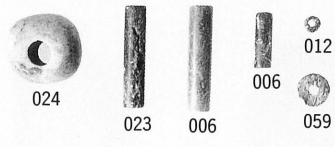
遺構出土及び表採遺物



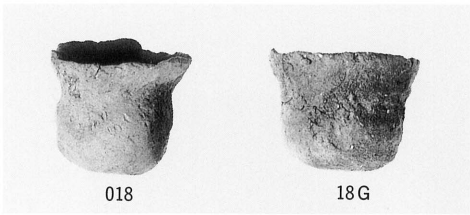
円筒埴輪・須恵器



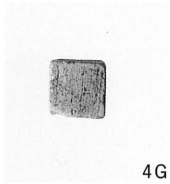
中世陶器



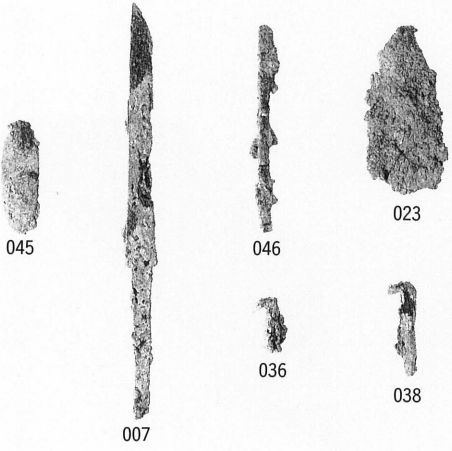
玉類



手捏ね土器



土製品



鉄製品



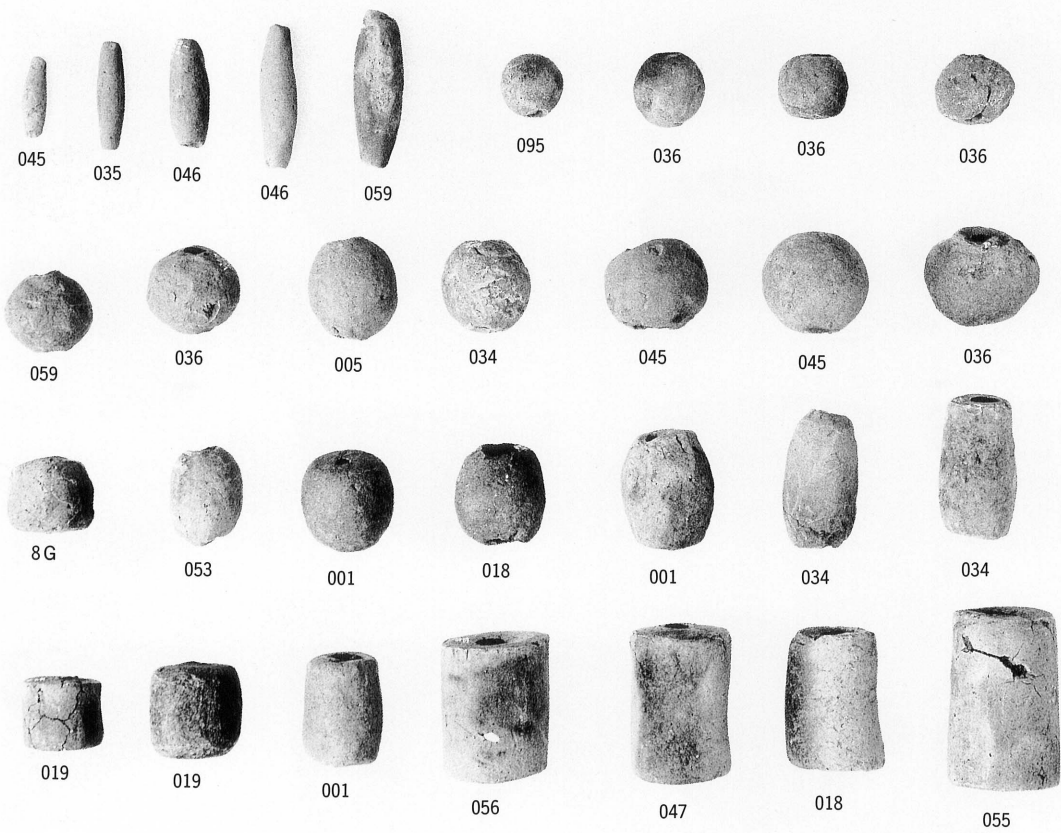
鏡



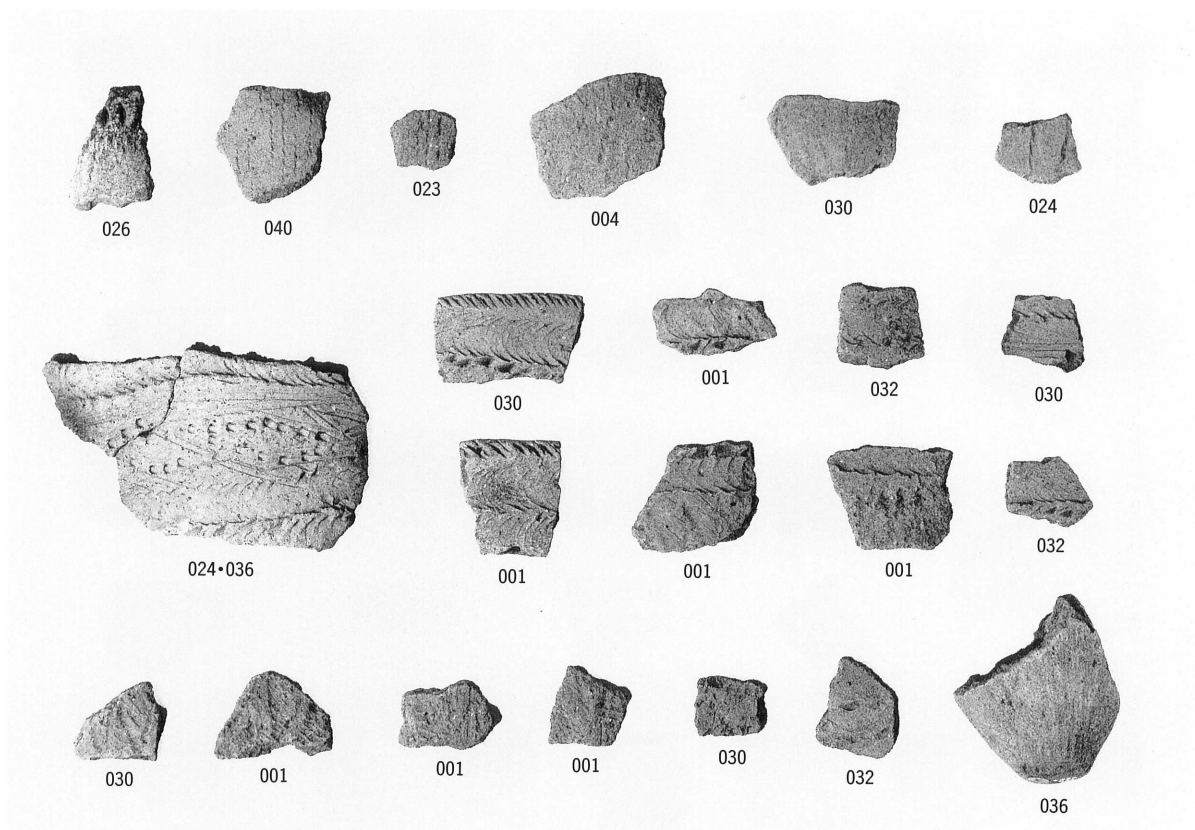
石製品



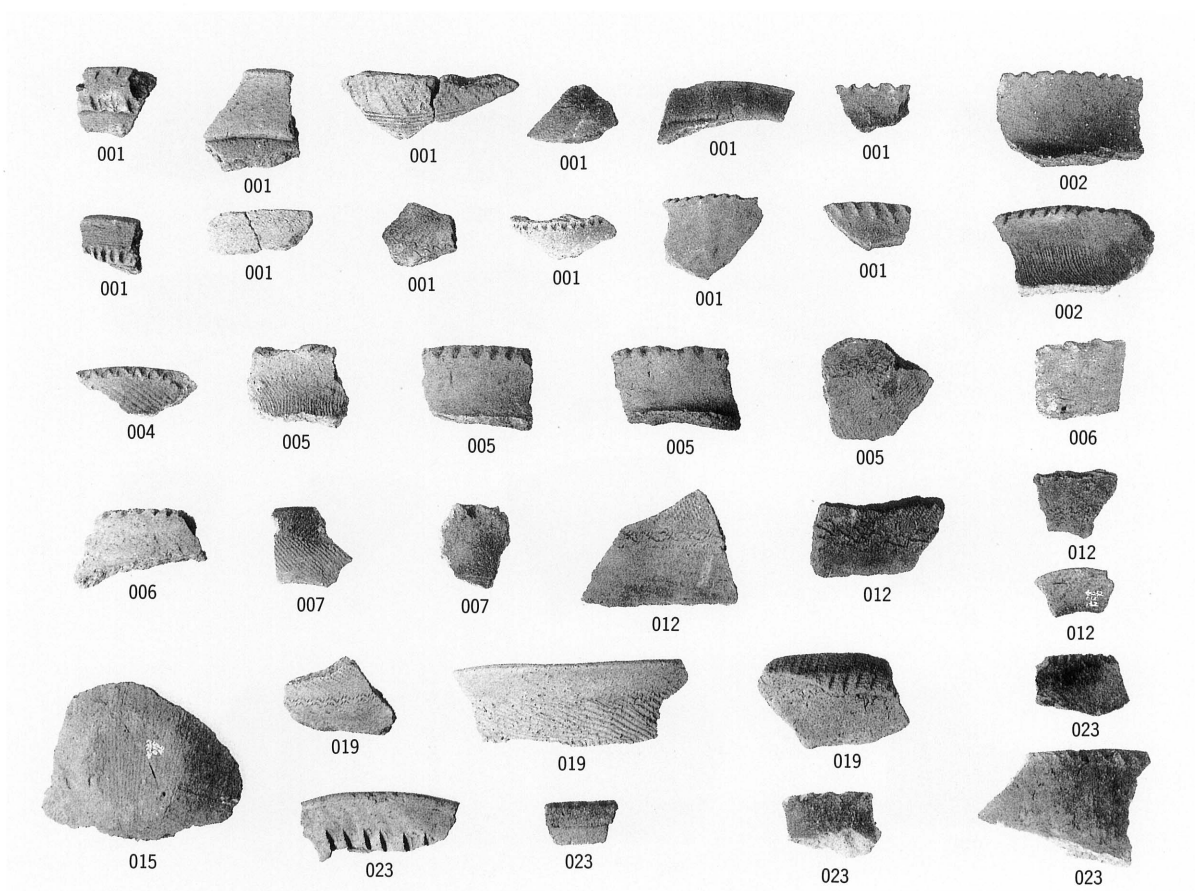
石器



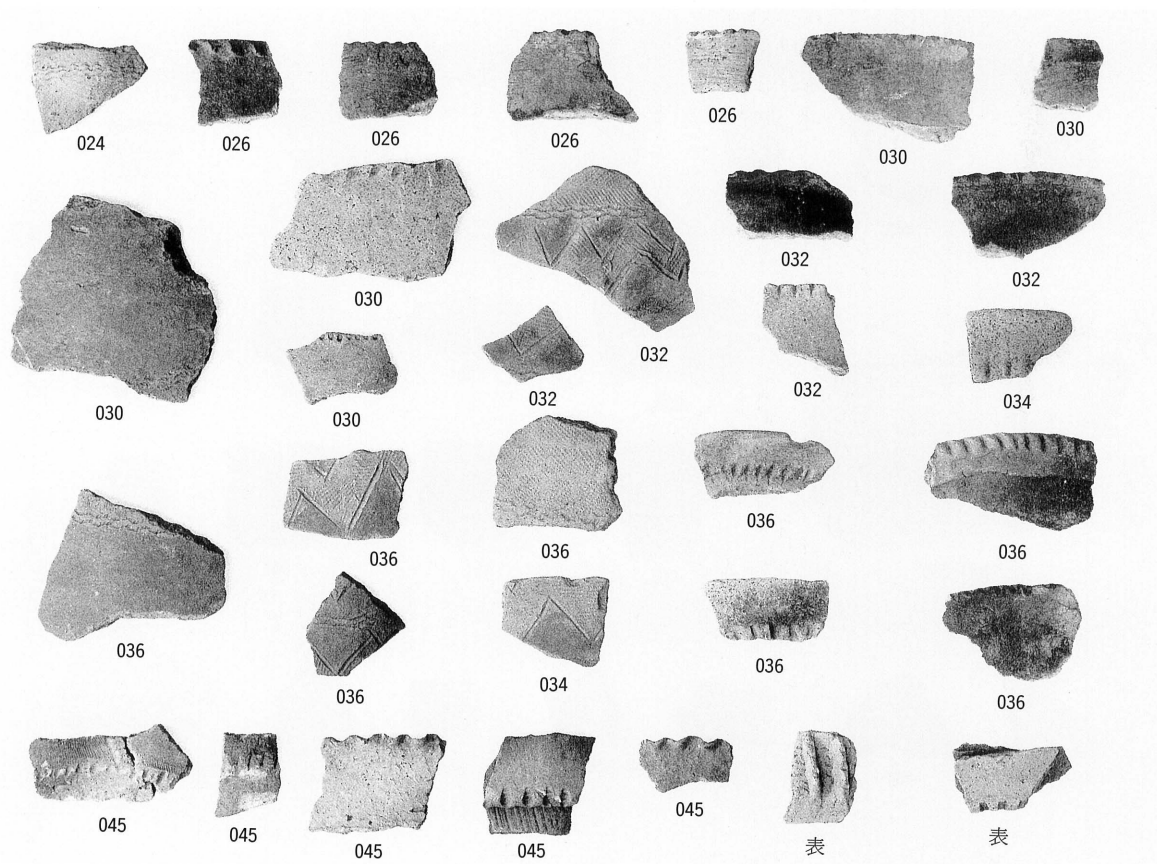
土錘



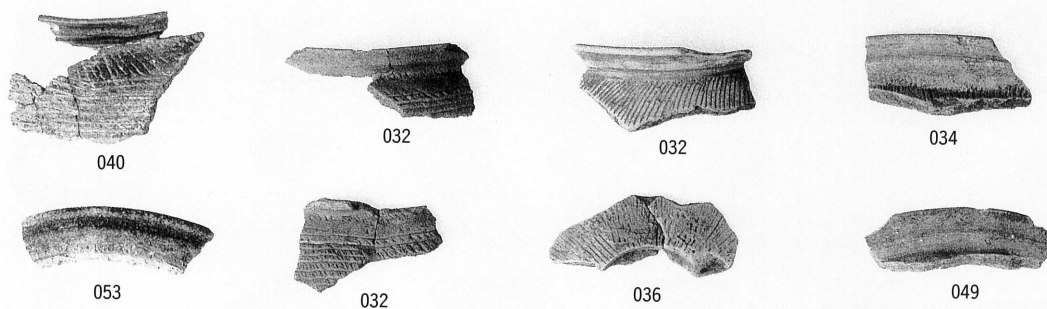
縄文土器



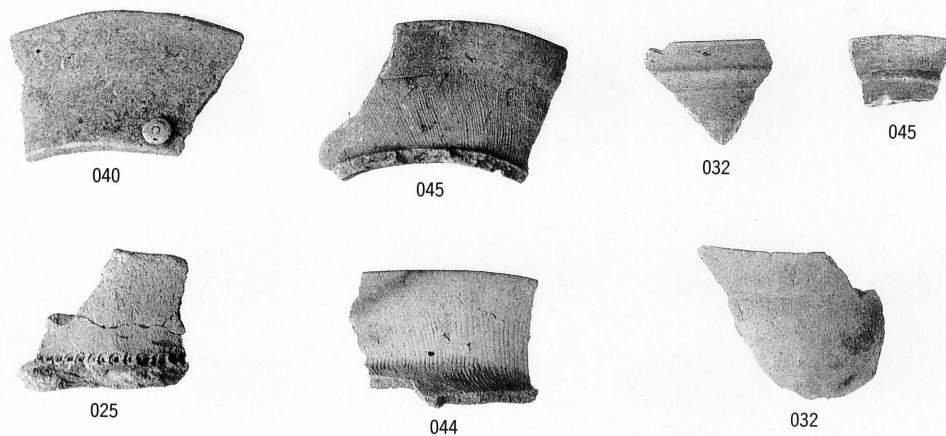
拓影遺物



拓影遺物



S字甕



土師器

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いちはらしごりょうだいせい
書 名	市原市五霊台遺跡
副 書 名	
差 次	
シ リ ーズ 名	財団法人 市原市文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第64集
編 集 者 名	高 橋 康 男
編 集 機 関	財団法人 市原市文化財センター
所 在 地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 TEL 0436 (41) 7300
発 行 年 月 日	1998年 3 月31日

ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ごりょうだい い せき 五 霊 台 遺 跡	ち ば け ん い ち は ら し し い つ 千葉県市原市椎津662ノ663	12219	セ232	35° 27′ 59″	140° 2′ 21″	19960708) 19961021	2977	宅地造成
ごりょうだい び い せき 五 霊 台 (B) 遺 跡	ち ば け ん い ち は ら し し い つ 千葉県市原市椎津 660-1の一部、 660-4の一部	12219	セ240	35° 27′ 57″	140° 2′ 21″	19970109) 19970124	162	宅地造成

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特 記 事 項
五 霊 台 遺 跡	集落跡	古墳時代) 中 世	堅穴住居跡	42軒	縄文土器	
			古墳	5基	土師器、須恵器	
			土坑・土壇	6基	円筒埴輪	
			方形堅穴状遺構	1基	和鏡、渡来銭	
			ピット群	1群	中世陶器	
			溝	2基		
	城郭跡	中 世	堀跡	1条	中世陶器	椎津城に伴う堀跡
五 霊 台 (B) 遺 跡	城郭跡	中 世	堀跡	1条	中世陶器	椎津城に伴う敵堀が検出される
			土坑	3基		

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第64集

市 原 市 五 霊 台 遺 跡

平成10年 3 月20日印刷

平成10年 3 月31日発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 細 田 哲 平

東 日 本 建 設 株 式 会 社

財団法人 市原市文化財センター

千葉県市原市能満1489番地

TEL 0436 (41) 7300

印 刷 株 式 会 社 正 文 社

千葉市中央区都町2-5-5

TEL 043 (233) 2235